(001)

唱法華題目抄

文応元年('60)5月28日　39歳

ある人、予に問うて云わく、世間の道俗、させる法華経の文義を弁えずとも、一部・一巻・四要品・自我偈・一句等を受持し、あるいは自らもよみかき、もしは人をしてもよみかかせ、あるいは我とよみかかざれども経に向かい奉り合掌・礼拝をなし香華を供養し、あるいは上のごとく行ずることなき人も、他の行ずるを見てわずかに随喜の心をおこし国中にこの経の弘まれることを悦ばん。これ体のわずかのことによりて、世間の罪にも引かれず、彼の功徳に引かれて、小乗の初果の聖人の度々人天に生まれてしかも悪道に堕ちざるがごとく、常に人天の生を受け、終に法華経を心得るものと成って、十方浄土にも往生し、またこの土においても即身成仏することあるべきや。委細にこれを聞かん。

答えて云わく、させる文義を弁えたる身にはあらざれども、法華経・涅槃経ならびに天台・妙楽の釈の心をもって推し量るに、かりそめにも法華経を信じていささかも謗を生ぜざらん人は、余の悪に引かれて悪道に堕つべしとはおぼえず。ただし、悪知識と申して、わずかに権教を知れる人智者の由をして法華経を我らが機に叶い難き由を和らげ申さんを、誠と思って、法華経を随喜せし心を打ち捨

て余教へうつりはてて、一生さて法華経へ帰り入らざらん人は、悪道に堕つべきこともありなん。

仰せについて疑わしきこと侍り。実にてや侍るらん、「法華経に説かれて候」とて智者の語らせ給いしは、「昔、三千塵点劫の当初、大通智勝仏と申す仏います。その仏の凡夫にていましける時、十六人の王子おわします。彼の父の王、仏にならせ給いて一代聖教を説き給いき。十六人の王子もまた出家して、その仏の御弟子とならせ給いけり。大通智勝仏、法華経を説き畢わらせ給いて定に入らせ給いしかば、十六人の王子の沙弥、その前にして、かわるがわる法華経を講じ給いけり。その所説を聴聞せし人、幾千万ということをしらず。当座に悟りをえし人は不退の位に入りにき。また法華経をおろかに心得る結縁の衆もあり。その人々、当座・中間に不退の位に入らずして三千塵点劫をへたり。その間、またつぶさに六道四生に輪回し、今日、釈迦如来の法華経を説き給うに、不退の位に入る。いわゆる舎利弗・目連・迦葉・阿難等これなり。なおなお信心薄き者は、当時も覚らずして未来無数劫を経べきか。知らず、我らも大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん。

この結縁の衆をば、天台・妙楽は名字・観行の位にかないたる人なりと定め給えり。名字・観行の位は、一念三千の義理を弁え、十法成乗の観を凝らし、能く能く義理を弁えたる人なり。『一念随喜』『五十展転』と申すも、天台・妙楽の釈のごときは、皆、観行五品の初随喜の位と定め給えり。博地の凡夫のことにはあらず。

しかるに、我らは末代の一字一句等の結縁の衆、一分の義理をも知らざらんは、あに無量の世界の塵点劫を経ざらんや。これひとえに、理深解微の故に、教は至って深く機は実に浅きがいたすところ

なり。ただ弥陀の名号のみを唱えて順次生に西方極楽世界に往生し、永く不退の無生忍を得て、阿弥陀如来・観音・勢至等の法華経を説き給わん時、聞いて悟りを得んにはしかじ。しかるに、弥陀の本願は、有智・無智、善人・悪人、持戒・破戒等をも択ばず、ただ一念唱うれば、臨終に必ず弥陀如来、本願の故に来迎し給う。

これをもって思うに、この土にして法華経の結縁を捨てて浄土に往生せんとおもうは、億千世界の塵点を経ずして疾く法華経を悟らんがためなり。法華経の根機にあたわざる人の、この穢土にて法華経に暇入れて一向に念仏を申さざるは、法華経の証は取り難く、極楽の業は定まらず、中間になりて、中々法華経をおろそかにする人にてやおわしますらん」と申し侍るはいかに。

その上、只今承り候えば、わずかに法華経の結縁ばかりならば、三悪道に堕ちざるばかりにてこそ候え、六道の生死を出ずるにはあらず。念仏の法門は、なにと義理を知らざれども弥陀の名号を唱え奉れば浄土に往生する由を申すは、遥かに法華経よりも弥陀の名号はいみじくこそ聞こえ侍れ。

答えて云わく、誠に仰せめでたき上、智者の御物語にて侍るなれば、さこそと存じ候えども、ただし、もし御物語のごとく侍らば、すこし不審なること侍り。

大通結縁の者をあらあらうちあてがい申すには名字・観行の者とは釈せられて侍れども、正しくは名字即の位の者と定められ侍る上、退大取小の者とて、法華経をすてて権教にうつり後には悪道に堕ちたりと見えたる上、正しく法華経を誹謗してこれを捨てし者なり。たとい義理を知るようなる者なりとも、謗法の人にあらん上は、三千塵点・無量塵点も経べく侍るか。「五十展転」「一念随喜」の人々

を観行初随喜の位の者と釈せられたるは、末代の我らが随喜等は彼の随喜の中には入るべからずと仰せ候か。これを「天台・妙楽、初随喜の位と釈せられたり」と申さるるほどにては、また名字即と釈せられて侍る釈はすてらるべきか。

詮ずるところ、仰せの御義を委しく案ずれば、恐おそれにては候えども、謗法の一分にやあらんずらん。その故は、法華経を我ら末代の機に叶い難き由を仰せ候は、末代の一切衆生は穢土にして法華経を行じて詮無きことなりと仰せらるるにや。もし、さように侍らば、末代の一切衆生の中に、この御詞を聞いて、既に法華経を信ずる者も打ち捨てて、いまだ行ぜざる者も行ぜんと思うべからず。随喜の心も留め侍らば、謗法の分にやあるべかるらん。もし謗法の者に一切衆生なるならば、いかに念仏を申させ給うとも、御往生は不定にこそ侍らんずらめ。

また、弥陀の名号を唱え極楽世界に往生をとぐべきよしを仰せられ侍るは、いかなる経論を証拠としてこの心はつき給いけるやらん。正しくつよき証文候か。もしなくば、その義たのもしからず。

前に申し候いつるがごとく、法華経を信じ侍るは、させる解なけれども三悪道には堕つべからず候。六道を出ずることは、一分のさとりなからん人は有り難く侍るか。ただし、悪知識に値って法華経随喜の心を云いやぶられて候わんは、力及ばざるか。

また、仰せについて驚き覚え侍り。その故は、法華経は末代の凡夫の機に叶い難き由を智者申されしかば、さかと思い侍るところに、只今の仰せのごとくならば、弥陀の名号を唱うとも、法華経をいうとむるとがによりて、往生をも遂げざる上悪道に堕つべきよし承るは、ゆゆしき大事にこそ侍れ。

そもそも、「大通結縁の者は、謗法の故に六道に回るも、また名字即の浅位の者なり。また『一念随喜』『五十展転』の者もまた名字・観行即の位」と申す釈は、いずれの処に候やらん。委しく承り候わばや。また、義理をも知らざる者の、わずかに法華経を信じ侍るが、悪知識の教えによって法華経を捨てて権教に移るより外の世間の悪業に引かれては、悪道に堕つべからざる由申さるるは、証拠あるか。また、無智の者の念仏申して往生するといずれに見えてあるやらんと申し給うこそ、よに事新あたらしく侍れ。双観経等の浄土の三部経、善導和尚等の経釈に明らかに見えて侍らん上は、なにとか疑い給うべき。

答えて曰わく、大通結縁の者を、退大取小の謗法、名字即の者と申すは、私の義にあらず。天台大師、文句の第三の巻に云わく「法を聞いていまだ度せずして世々に相値って今に声聞地に住する者有り。即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給いて侍るを、妙楽大師、疏記の第三に重ねてこの釈の心を述べ給いて云わく「ただ、いまだ品に入らざるを、ともに結縁と名づくるが故に」文。文の心は、大通結縁の者は名字即の者となり。また、天台大師、玄義の第六に大通結縁の者を釈して云わく「もしは信、もしは謗。因って倒れ、因って起く。喜根をば謗ずといえども、後に要ず度を得るがごとし」文。文の心は、大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり、例せば、勝意比丘が喜根菩薩を謗ぜしがごとしと釈す。「『五十展転』の人は五品の初めの初随喜の位」と申す釈もあり。また「初随喜の位の先の名字即」と申す釈もあり。疏記の第十に云わく「初めに法会にして聞く。容にこれ初品なるべし。第五十人は必ず随喜の位の初めに在る人なり」文。文の心は、初会聞法の人は必ず初随喜

の位の内、第五十人は初随喜の位の先の名字即と申す釈なり。

その上、「五種法師にも、受持・読・誦・書写の四人は自行の人、大経の九人の先の四人は解無き者なり。解説は化他、後の五人は解有る人」と証し給えり。疏記の第十に五種法師を釈するには、「あるいは全くいまだ品に入らず」、また云わく「一向いまだ凡位に入らず」文。文の心は、五種法師は観行五品と釈すれども、また五品已前の名字即の位とも釈するなり。これらの釈のごとくんば、義理を知らざる名字即の凡夫が随喜等の功徳も、経文の「一偈一句、一念随喜の者」「五十展転」等の内に入るかと覚え候。

いかにいわんや、この経を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委しくとかれたり。持経者を謗ずる罪は法師品にとかれたり。この経を信ずる者の功徳は分別功徳品・随喜功徳品に説けり。謗法と申すは違背の義なり。随喜と申すは随順の義なり。させる義理を知らざれども一念も貴き由申すは、違背・随順の中にはいずれにか取られ候べき。また末代無智の者のわずかの供養・随喜の功徳は経文に説は載せられざるか、いかん。

その上、天台・妙楽の釈の心は、他の人師ありて法華経の「乃至、童子の戯れに」「一偈一句」「五十展転」の者を爾前の諸経のごとく上聖の行儀と釈せられたるをば、謗法の者と定め給えり。しかるに、我が釈を作る時、機を高く取って末代造悪の凡夫を迷わし給わんは、自語相違にあらずや。故に、妙楽大師、「五十展転」の人を釈して云わく「恐らくは、人謬って解せる者、初心の功徳の大なることを測らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、も

って経力を顕す」文。文の心は、謬って法華経を説かん人の、この経は利智精進・上根上智の人のたまといわんことを、仏おそれて、下根下智・末代の無智の者のわずかに浅き随喜の功徳を四十余年の諸経の大人・上聖の功徳に勝れたることを顕さんとして、「五十展転」の随喜は説かれたり。故に、天台の釈には、外道・小乗・権大乗までたくらべ来って、法華経の最下の功徳が勝れたる由を釈せり。ゆえに、阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め、耆兔仙人は一日の中に大海の水をすいほす。かくのごとき得通の仙人は、小乗の阿含経の三賢の浅位の一通もなき凡夫には、百千万倍劣れり。三明六通を得たりし小乗の舎利弗・目連等は、華厳・方等・般若等の諸大乗経の未断三惑の一通もなき「一偈一句」の凡夫には、百千万倍劣れり。華厳・方等・般若経を習い極めたる等覚の大菩薩は、法華経をわずかに結縁をなせる未断三惑・無悪不造の末代の凡夫には百千万倍劣れる由、釈の文顕然なり。

しかるを、当世の念仏宗等の人、我が身の権教の機にて実経を信ぜざる者は、方等・般若の時の二乗のごとく自身をはじしめてあるべきところに、あえてその義なし。あまつさえ、世間の道俗の中に、わずかに観音品・自我偈なんどを読み、たまたま父母孝養なんどのために一日経等を書くことあれば、いいさまたげて云わく「善導和尚は、念仏に法華経をまじうるを雑行と申し、百の時は希に一・二を得、千の時は希に三・五を得ん、乃至、千中無一と仰せられたり。いかにいわんや、智慧第一の法然上人は、法華経等を行ずる者をば、祖父の履あるいは群賊等にたとえられたり」なんどいいうとめ侍るは、かくのごとく申す師も弟子も阿鼻の焔をや招かんずらんと申す。

問うて云わく、いかなるすがた、ならびに語をもってか、法華経を世間にいいうとむる者には侍る

や。世恐よにおそろしくこそおぼえ候え。覚

答えて云わく、始めに「智者の申され候」と御物語り候いつるこそ、法華経をいいうとむる悪知識の語にて侍れ。末代に法華経を失うべき者は、心には一代聖教を知りたりと思って、しかも心には権実二経を弁えず、身には三衣一鉢を帯し、あるいは阿練若に身をかくし、あるいは世間の人にいみじき智者と思われて、しかも法華経をよくよく知る由を人に知られなんとして、世間の道俗には三明六通の阿羅漢のごとく貴ばれて法華経を失うべしと見えて候。言疎

問うて云わく、その証拠いかん。

答えて云わく、法華経勧持品に云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし」文。妙楽大師、この文の心を釈して云わく「初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり」文。文の心は、この一行は在家の俗男・俗女が権教の比丘等にかたらわれて敵をすべしとなり。語

経に云わく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん」文。妙楽大師、この文の心を釈して云わく「次に一行は道門増上慢の者を明かす」文。文の心は、悪世末法の権教の諸の比丘、我法を得たりと慢じて、法華経を行ずるものの敵となるべしということなり。者

経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂って、人間を軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、

六通の羅漢のごとくならん。この人は悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん。しかもかくのごとき言を作さん。『この諸の比丘等は、利養を貪らんがための故に、外道の論議を説く。自らこの経典を作って、世間の人を誑惑す。名聞を求めんがための故に、分別してこの経を説く』と。常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん」已上。

妙楽大師、この文を釈して云わく「三に七行は僭聖増上慢の者を明かす」文。経ならびに釈の心は、悪世の中に多くの比丘有って、身には三衣一鉢を帯し、阿練若に居して、行儀は大迦葉等の三明六通の羅漢のごとく、在家の諸人にあおがれて、一言を吐けば如来の金言のごとくおもわれて、法華経を行ずる人をいいやぶらんがために、国王・大臣等に向かい奉って「この人は邪見の者なり。法門は邪法なり」なんどいいうとむるなり。

上の三人の中に、第一の俗衆の毀りよりも第二の邪智の比丘の毀りはなおしのびがたし。また第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の僧は甚だし。

この三人は、当世の権教を手本とする文字の法師、ならびに諸経論の「言語の道断ゆ」の文を信ずる暗禅の法師、ならびに彼らを信ずる在俗等、四十余年の諸経と法華経との権実の文義を弁えざる故に、華厳・方等・般若等の「心と仏と衆生」「即心是仏」「即ち十方・西方に往く」等の文と、法華経の「諸法実相」「即ち十方・西方に往く」の文と、語の同じきをもって義理のかわれるを知らず。

あるいは諸経の「言語の道断え、心行の所滅す」の文を見て、一代聖教には如来の実事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす。故に、悪鬼、この三人に入って末代の諸人を損じ、国土をも破るなり。

故に、経文に云わく「濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん乃至仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず」文。文の心は、濁悪世の時、比丘、我が信ずるところの教えは仏の方便随宜の法門ともしらずして、権実を弁えたる人出来すれば罵り破しなんどすべし、これひとえに悪鬼の身に入りたるをしらずと云うなり。されば、末代の愚人の恐るべきことは、刀杖・虎狼・十悪五逆等よりも、三衣一鉢を帯せる暗禅の比丘と、ならびに権経の比丘を貴しと見て実経の人をにくまん俗侶等なり。

故に、涅槃経二十二に云わく「悪象等においては心に恐怖なく、悪知識においては怖畏の心を生ず。何をもっての故に。この悪象等はただ能く身を壊るのみにして、心を壊ること能わず。悪知識は二つともに壊るが故に。乃至悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る」文。この文の心を章安大師宣べて云わく「諸の悪象等は、ただこれ悪縁なるのみにして、人の悪心を生ずること能わず。悪知識は甘談・詐媚・巧言・令色もて人を牽いて悪を作さしむ。悪を作すをもってのの故に人の善心を破る。これを名づけて殺となす。即ち地獄に堕つ」文。文の心は、悪知識と申すは、甘くかたらい、詐り媚び、言を巧みにして、愚癡の人の心を取って善心を破るということなり。総じて、涅槃経の心は、十悪五逆の者よりも謗法・闡提のものをおそるべしと誡めたり。闡提の人

と申すは、法華経・涅槃経を云いうとむる者と見えたり。当世の念仏者等、法華経を知り極めたる由をいうに、因縁・譬喩をもって釈し、よくよく知る由を人にしられて、しかして後には、この経のいみじき故に末代の機のおろかなる者及ばざる由をのべ、強き弓・重き鎧、かいなき人の用にたたざる由を申せば、無智の道俗さもと思って、実には叶うまじき権教に心を移して、わずかに法華経に結縁しぬるをも翻し、また人の法華経を行ずるをも随喜せざる故に、師弟ともに謗法の者となる。

これによって、謗法の衆生、国中に充満して、たまたま仏事をいとなみ法華経を供養し追善を修するにも、念仏等を行ずる謗法の邪師の僧来って、法華経は末代の機に叶い難き由を示す。故に、施主もその説を実と信じてあるあいだ、訪わるる過去の父母・夫婦・兄弟等はいよいよ地獄の苦を増し、孝子は不孝・謗法の者となり、聴聞の諸人は邪法を随喜し、悪魔の眷属となる。

日本国中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず、たまたま仏法を知る智者は国の人に捨てられ、守護の善神は法味をなめざる故に威光を失い利生を止め、この国をすて他方に去り給い、悪鬼は便りを得て国中に入り替わり、大地を動かし、悪風を興し、一天を悩まし、五穀を損ず。故に、飢渇出来し、人の五根には鬼神入って精気を奪う。これを疫病と名づく。一切の諸人、善心無く、多分は悪道に堕つること、ひとえに悪知識の教えを信ずる故なり。

仁王経に云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前においても、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、横しまに法制を作って仏戒に依らず。これを破仏・破国の因縁となす」文。文の心は、末法の諸の悪比丘、国王・大臣の御前にして、

国を安穏ならしむるようにして終に国を損じ、仏法を弘むるようにして還って仏法を失うべし、国王・大臣、この由を深く知ろしめさずしてこの言を信受する故に、国を破り仏教を失うという文なり。この時、日月度を失い、時節もたがいて夏はさむく冬はあたたかに、秋は悪風吹き、赤き日月出で、望朔にあらずして日月蝕し、あるいは二・三等の日出来せん。大火・大風・彗星等おこり、飢饉・疫病等あらんと見えたり。国を損じ人を悪道におとす者は、悪知識に過ぎたることなきか。

問うて云わく、始めに智者の御物語とて申しつるは、詮ずるところ、後世のことの疑わしき故に善悪を申して承らんためなり。彼の義等は恐ろしきことにあるにこそ侍るなれ。一文不通の我らがごとくなる者は、いかにしてか法華経に信をとり候べき。また心ねをば、いかように思い定め侍らん。

答えて云わく、この身の申すことをも一定とおぼしめさるまじきにや。その故は、かように申すも天魔波旬・悪鬼等の身に入って人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候わん。一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云わく、もしかように疑い候わば、我が身は愚者にて侍り、万の智者の御語をば疑い、さて信ずる方も無くして空しく一期過ごし侍るべきにや。

答えて云わく、仏の遺言に「法に依って人に依らざれ」と説かせ給いて候えば、経のごとくに説かざるをば、いかにいみじき人なりとも御信用あるべからず候か。また「了義経に依って不了義経に依らざれ」と説かれて候えば、愚癡の身にして一代聖教の前後・浅深を弁えざらんほどは、了義経に付かせ給い候え。

了義経・不了義経も多く候。阿含の小乗経は不了義経、華厳・方等・般若・浄土の観経等は了義経。また、四十余年の諸経を法華経に対すれば不了義経、法華経は了義経。涅槃経を法華経に対すれば、法華経は了義経、涅槃経は不了義経。大日経を法華経に対すれば、大日経は不了義経、法華経は了義経なり。故に、四十余年の諸経ならびに涅槃経を打ち捨てさせ給いて、法華経を師匠と御憑み候え。法華経をば、国王・父母、日月・大海・須弥山・天地のごとくおぼしめせ。諸経をば、関白・大臣・公卿乃至万民、衆星・江河・諸山・草木等のごとくおぼしめすべし。

我らが身は、末代造悪の愚者、鈍者、法器にあらざるの者。国王は臣下よりも人をたすくる人、父母は他人よりも子をあわれむ者、日月は衆星より暗を照らす者、法華経は機に叶わずんば、いわんや余経は助け難しとおぼしめせ。また釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・観音・勢至・普賢・文殊等の一切の諸の仏菩薩は我らが慈悲の父母、この仏菩薩の衆生を教化する慈悲の極理はただ法華経にのみとどまれりとおぼしめせ。諸経は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救う秘術をば、いまだ説き顕さずとおぼしめせ。法華経の一切経に勝れ候故は、ただこのことに侍り。

しかるを、当世の学者、法華経をば一切経に勝れたりと讃めて、しかも末代の機に叶わずと申すを皆信ずること、あに謗法の人に侍らずや。ただ一口におぼしめし切らせ給い候え。詮ずるところ、法華経の文字を破りさきなんどせんには、法華経の心やぶるべからず。また世間の悪業に対して云いうとむるとも、人々用いるべからず。ただ、相似たる権経の義理をもって云いうとむるにこそ、人はたぼらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云わく、ある智者の申され候いしは「四十余年の諸経と八箇年の法華経とは、成仏の方こそ、爾前は難行道、法華経は易行道にて候え。往生の方にては、同じきことにして、易行道に侍り。法華経を書き読んでも、十方の浄土、阿弥陀仏の国へも生まるべし。観経等の諸経に付いて弥陀の名号を唱えん人も、往生を遂ぐべし。ただ機縁の有無に随って、いずれをも諍うべからず。ただし、弥陀の名号は、人ごとに行じ易しと思って日本国中に行じつけたることなれば、法華経等の余行よりも易きにこそ」と申されしはいかん。

答えて云わく、仰せの法門は、さも侍るらん。また世間の人も多くは道理と思いたりげに侍り。ただし、身にはこの義に不審あり。その故は、前に申せしがごとく、末代の凡夫は、智者というともたのみなし、世こぞりて上代の智者には及ぶべからざるが故に。愚者と申すともいやしむべからず、経論の証文顕然ならんには。

そもそも、無量義経は法華経を説かんがための序分なり。しかるに、始め寂滅道場より今の常在霊山の無量義経に至るまで、その年月日数を委しく計え挙ぐれば四十余年なり。その間の説くところの経を挙ぐるに、華厳・阿含・方等・般若なり。談ずるところの法門は三乗・五乗の習うところの法門なり。修行の時節を定むるには「菩薩の歴劫修行を宣説す」と云い、随自意・随他意を分かつにはこれを随他意と宣べ、四十余年の諸経と八箇年の所説との語同じく義替われることを定むるには「文辞は一つなりといえども、義は各異なり」ととけり。成仏の方は別にして往生の方は一つなるべしとも覚おぼえず。華厳・方等・般若、究竟最上の大乗経、頓悟・漸悟の法門、皆「未顕真実」と説かれたり。

この大部の諸経すら未顕真実なり。いかにいわんや、浄土の三部経等の往生極楽ばかり未顕真実の内にもれんや。その上、経々ばかりを出だすのみにあらず、既に年月日数を出だすをや。しかれば、華厳・方等・般若等の弥陀往生、すでに未顕真実なること疑いなし。観経の弥陀往生に限って、あに「留難多きが故なり」の内に入らざらんや。

もし、随自意の法華経の往生極楽を随他意の観経の往生極楽に同じて易行道と定めて、しかも易行の中に取ってもなお観経の念仏往生は易行なりとこれを立てらるれば、権実雑乱の失、大謗法たる上、一滴の水漸々に流れて大海となり、一塵積もって須弥山となるがごとく、漸く権経の人も実経にすすまず、実経の人も権経に堕ち、権経の人次第に国中に充満せば、法華経随喜の心も留まり、国中に王なきがごとく、人の神を失えるがごとく、法華・真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等一切の聖人国を捨てて去れば、悪鬼便りを得て乱れ入り、悪風吹いて五穀も成らしめず、疫病流行して人民を亡ぼさんずらん。

この七・八年が前までは「諸行は永く往生すべからず。善導和尚の『千中無一』と定めさせ給いたる上、選択には『諸行を抛てよ。行ずる者は群賊』と見えたり」なんど放語を申し立てしが、またこの四・五年の後は「選択集のごとく人を勧めん者は、謗法の罪によって師檀共に無間地獄に堕つべしと経に見えたり」と申す法門出来したりげにありしを、始めは念仏者こぞりて不思議の思いをなす上、「『念仏を申す者、無間地獄に堕つべし』と申す悪人・外道あり」なんどののしり候いしが、「念仏者、無間地獄に堕つべし」と申す語に智慧つきて、各選択集を委しく披見するほどに、げにも謗

法の書とや見なしけん、千中無一の悪義を留めて諸行往生の由を念仏者ごとにこれを立つ。しかりといえども、ただ口にのみ許ゆるして心の中はなお本の千中無一の思いなり。

在家の愚人は、内心の謗法なるをば知らずして諸行往生の口にばかされて、「念仏者は法華経をば謗ぜざりけるを、法華経を謗ずる由を聖道門の人の申されしは僻事なり」と思えるにや、一向「諸行は千中無一」と申す人よりも謗法の心は勝まさりて候なり。失なき由を人に知らせて、しかも念仏ばかりをまた弘めんとたばかるなり。ひとえに天魔の謀計りごとなり。

問うて云わく、天台宗の中の人の立つることあり。「天台大師、爾前と法華と相対して爾前を嫌うに二義あり。一には約部。四十余年の部と法華経の部と相対して『爾前は麤なり、法華は妙なり』とこれを立つ。二には約教。教えに麤・妙を立て、華厳・方等・般若等の円頓速疾の法門をば妙と歎じ、華厳・方等・般若等の三乗歴別の修行の法門をば前三教と名づけて麤なりと嫌えり。円頓速疾の方を嫌わず、法華経に同じて一味の法門とせり」と申すはいかん。

答えて云わく、このことは不審にもすること侍るらん。しかるべしと覚おぼゆ。天台・妙楽より已来、今に論有ることに侍り。天台の三大部六十巻、総じて五大部の章疏の中にも、約教の時は、爾前の円を嫌う文無し。ただ約部の時ばかり、爾前の円を押しふさねて嫌えり。

日本に二義あり。園城寺には智証大師の釈より起こって爾前の円を嫌うと云い、山門には嫌わずと云う。互いに文釈あり。ともに料簡あり。しかれども今に事ゆかず。

ただし、予が流の義には不審晴れておぼえ候。その故は、天台大師、四教を立て給うに四つの筋

目あり。一には、爾前の経に四教を立つ。二には、法華経と爾前と相対して爾前の円を法華の円に同じて前三教を嫌うことあり。三には、爾前の円をば別教に摂して前三教と嫌い、法華の円をば純円と立つ。四には、爾前の円をば法華に同ずれども、ただ法華経の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず。この四つの道理を相対して六十巻をかんがうれば、狐疑の氷解けたり。一々の証文は、かつは秘し、かつは繁き故に、これを載せず。

また、法華経の本門にしては、爾前の円と迹門の円とを嫌うこと不審なきものなり。爾前の円をば別教に摂して、約教の時は「前の三つを麤となし、後の一つを妙となす」と云うなり。この時は、爾前の円は無量義経の歴劫修行の内に入りぬ。また、伝教大師の註釈の中に、爾前の八教を挙げて「四十余年未顕真実」の内に入れ、あるいは前三教をば迂回と立て、爾前の円をば直道と云い、無量義経をば大直道と云う。委細に見るべし。

問うて云わく、法華経を信ぜん人は、本尊ならびに行儀、ならびに常の所行はいかにてか候べき。

答えて云わく、第一に本尊は法華経八巻・一巻・一品、あるいは題目を書いて本尊と定むべしと法師品ならびに神力品に見えたり。また、たえたらん人は釈迦如来・多宝仏を書いても造っても法華経の左右にこれを立て奉るべし。また、たえたらんは十方の諸仏・普賢菩薩等をもつくりかきたてまつるべし。

行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし。道場を出でては行住坐臥をえらぶべからず。常の所行は題目を南無妙法蓮華経と唱うべし。たえたらん人は一偈一句をも読み奉るべし。助縁には南無

釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏・一切の諸の菩薩・二乗・天人・竜神八部等、心に随うべし。愚者多き世となれば、一念三千の観を先とせず。その志あらん人は、必ず習学してこれを観ずべし。

問うて云わく、ただ題目ばかりを唱うる功徳いかん。

答えて云わく、釈迦如来、法華経をとかんとおぼしめして世に出でましましかども、四十余年のほどは法華経の御名を秘しおぼしめして、御年三十の比より七十余に至るまで法華経の方便をもうけ、七十二にして始めて題目を呼び出ださせ給えば、諸経の題目にこれを比ぶべからず。その上、法華経の肝心たる方便・寿量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれり。

天台大師、玄義十巻を造り給う。第一の巻には略して妙法蓮華経の五字の意を宣べ給う。第二の巻より七の巻に至るまではまた広く妙の一字を宣べ、八の巻より九の巻に至るまでは法蓮華の三字を釈し、第十の巻には経の一字を宣べ給えり。経の一字に華厳・阿含・方等・般若・涅槃経を収めたり。妙法の二字は、玄義の心は百界千如・心仏衆生の法門なり。止観十巻の心は一念三千・百界千如・三千世間・心仏衆生三無差別と立て給う。一切の諸の仏菩薩、十界の因果、十方の草木・瓦礫等、妙法の二字にあらずということなし。

華厳・阿含等の四十余年の経々、小乗経の題目には大乗経の功徳を収めず。また王にてはあれども王中の王にてなき経も有り。仏もまた説く経の題目には成仏の功徳をおさめず。また大乗経にも往生を平等意趣をもって他仏自仏とおなじといい、あるいは法身平等をもって自仏他仏同じという。実には一仏に一切仏の功徳をおさめず。

今、法華経は四十余年の諸経を一経に収めて、十方世界の三身円満の諸仏をあつめて釈迦一仏の分身の諸仏と談ずる故に、一仏一切仏にして、妙法の二字に諸仏皆収まれり。故に、妙法蓮華経の五字を唱うる功徳莫大なり。「諸仏・諸経の題目は法華経の所開なり。妙法は能開なり」としりて、法華経の題目を唱うべし。

問うて云わく、この法門を承ってまた智者に尋ね申し候えば「法華経のいみじきことは左右に及ばず候。ただし、器量ならん人は、ただ我が身ばかりはしかるべし。末代の凡夫に向かって、ただちに、機をも知らず、爾前の教を云いうとめ法華経を行ぜよと申すは、とし(年)ごろ(来)の念仏なんどをば打ち捨て、また法華経にはいまだ功も入れず、有にも無にもつかぬようにてあらんずらん。また、機も知らず法華経を説かせ給わば、信ずる者は左右に及ばず、もし謗ずる者あらば定めて地獄に堕ち候わんずらん。その上、仏も四十余年の間法華経を説き給わざることは『もしただ仏乗を讃むるのみならば、衆生は苦に没す』の故なりと。在世の機すら、なおしかなり。いかにいわんや末代の凡夫をや。されば、譬喩品には、仏舎利弗に告げて言わく『無智の人の中にして、この経を説くことなかれ』と」云々。これらの道理を申すは、いかんが候べき。

答えて云わく、智者の御物語と仰せ承り候えば、詮ずるところ「末代の凡夫には機をかがみて説け。左右なく説いて人に謗ぜさすることなかれ」とこそ候なれ。彼の人さように申され候わば、御返事候べきようは「そもそも『もしただ仏乗を讃むるのみならば』乃至『無智の人の中にして』等の文を出だし給わば、また一経の内に『およそ見るところ有る。我は深く汝等を敬う』等と説いて、不

軽菩薩の杖木・瓦石をもってうちはられさせ給いしをば顧みさせ給わざりしはいかん」と申させ給え。打張

問うて云わく、一経の内に相違の候なることこそ、よに心得がたく侍れば、くわしく承り候わん。世二ろえ

答えて云わく、方便品等には機をかがみてこの経を説くべしと見え、不軽品には謗ずともただ強いて鑑これを説くべしと見え侍り。一経の前後、水火のごとし。

しかるを、天台大師会して云わく「本すでに善有れば、釈迦は小をもってこれを将護し、本いまだ善有らざれば、不軽は大をもってこれを強毒す」文。文の心は、本善根ありて今生の内に得解すべき者のためには、直ちに法華経を説くべし。しかるに、その中になお聞いて謗ずべき機あらば、しばらく権経をもってこしらえて、後に法華経を説くべし。本大の善根もなく、今も法華経を信ずべからず、なにとなくとも悪道に堕ちぬべき故に、ただ押して法華経を説いてこれを謗ぜしめて逆縁ともなせと会する文なり。拵

この釈のごときは、末代には善無き者は多く善有る者は少なし。故に悪道に堕ちんこと疑いなし。同じくは法華経を強いて説き聞かせて毒鼓の縁と成すべきか。しかれば、法華経を説いて謗縁を結ぶべき時節なること諍い無きものをや。

また、法華経の方便品に五千の上慢あり。略開三顕一を聞いて広開三顕一の時、仏の御力をもって立座をたたしめ給う。後に涅槃経ならびに四依の辺にして今生に悟りを得せしめ給うと、諸法無行経に、喜根菩薩、勝意比丘に向かって大乗の法門を強いて説ききかせて謗ぜさせしと、この二つの相違をば聞天台大師会して云わく「如来は悲をもっての故に発遣し、喜根は慈をもっての故に強説す」文。

文の心は、仏は悲の故に、後のたのしみをば閣いて、当時法華経を謗じて地獄に堕遭
きを悲しみ給いて座をたたしめ給いき。譬えば、母の子に病あると知れども、当時の苦を悲しんで左立
右なく灸を加えざるがごとし。喜根菩薩は、慈の故に、当時の苦をばかえりみず後の楽を思って強い
てこれを説き聞かしむ。譬えば、父は、慈の故に、子に病あるを見て当時の苦をかえりみず後を思う
故に灸を加うるがごとし。

また、仏の在世には、仏法華経を秘し給いしかば、四十余年の間、等覚・不退の菩薩、名をしらず。
その上、寿量品は法華経八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかしめ給いき。末代の凡夫には左右
なくいかんがきかしむべきとおぼゆるところを、妙楽大師釈して云わく「仏世は当機の故に簡ぶ。末
代は結縁の故に聞かしむ」と釈し給えり。

文の心は、仏の在世には、仏、一期の間多くの人不退の位にのぼりぬべき故に、法華経の名義を出
だして謗ぜしめず、機をこしらえてこれを説く。仏の滅後には、当機の衆は少なく結縁の衆多きが故
に、多分に就いて左右なく法華経を説くべしという文なり。

これ体の多くの品あり。また末代の師は多くは機を知らず。機を知らざらんには、強いて、ただ実
教を説くべきか。されば、天台大師、釈して云わく「等しくこれ見ざれば、ただ大のみを説くに咎無
し」文。文の心は、機をも知らざれば大を説くに失なしという文なり。また時の機を見て説法する方
もあり。皆国中の諸人、権経を信じて実経を謗じあながちに用いざれば、弾呵の心をもって説くべき
か。時によって用否あるべし。

問うて云わく、唐土の人師の中に一分、一向に権大乗に留まって実経に入らざる者は、いかなる故か候。

答えて云わく、仏世に出でましまして、先に四十余年の権大乗・小乗の経を説き、後には法華経を説いて言わく「もし小乗をもって乃至一人をも化せば、我は則ち慳貪に堕せん。この事は不可となす」文。

文の心は、仏ただ爾前の経ばかりを説いて法華経を説き給わずば、仏慳貪の失ありと説かれたり。後に嘱累品にいたりて、仏、右の御手をのべて三たび諫めをなして、三千大千世界の外八方四百万億那由他の国土の諸の菩薩の頂をなでて、未来には必ず法華経を説くべし、もし機たえずば余の深法の四十余年の経を説いて機をこしらえて法華経を説くべしと見えたり。後に涅槃経に重ねてこのことを説いて、仏の滅後に四依の菩薩ありて法を説くにまた法の四依あり、実経をついに弘めずんば天魔としるべきよしを説かれたり。

故に、如来の滅後、後の五百年・九百年の間に出で給いし竜樹菩薩・天親菩薩等、あまねく如来の聖教を弘め給うに、天親菩薩は、先に小乗の説一切有部の人、倶舎論を造って阿含十二年の経の心を宣べて、一向に大乗の義理を明かさず。次に十地論・摂大乗論釈論等を造って四十余年の権大乗の心を宣べ、後に仏性論・法華論等を造りてほぼ実大乗の義を宣べたり。竜樹菩薩またしかなり。

天台大師、唐土の人師として、一代を分かつに大小・権実顕然なり。余の人師は、わずかに義理を説けども分明ならず。また証文たしかならず。ただし、末の論師ならびに訳者、唐土の人師の中に、

大小をば分かちて大において権実を分かたず、あるいは語には分かつといえども心は権大乗のおもむきを出でず。これらは「不退の諸の菩薩は、その数恒沙のごとくして、また知ること能わじ」とおぼえて候なり。

疑って云わく、唐土の人師の中に、慈恩大師は十一面観音の化身、牙より光を放つ。善導和尚は弥陀の化身、口より仏をいだす。この外の人師、通を現じ徳をほどこし三昧を発得する人、世に多し。なんぞ権実二経を弁えて法華経を詮とせざるや。

答えて云わく、阿竭多仙人外道は、十二年の間、耳の中に恒河の水をとどむ。婆籔仙人は自在天となりて三目を現ず。唐土の道士の中にも、張階は霧をいだし、欒巴は雲をはく。第六天の魔王は仏の滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形を現じて四十余年の経を説くべしと見えたり。通力をもって智者・愚者をばしるべからざるか。ただ仏の遺言のごとく、一向に権経を弘めて実経をついに弘めざる人師は、権経に宿習ありて実経に入らざらん者は、あるいは魔にたぼらかされて通を現ずるか。

ただ法門をもって邪正をただすべし。利根と通力とにはよるべからず。

文応元年太歳庚申五月二十八日

鎌倉名越において書き畢わんぬ。

日蓮　花押

(002)

立正安国論

文応元年(’60)7月16日　39歳
北条時頼

旅客来って嘆いて曰わく、近年より近日に至るまで、天変地夭・飢饉疫癘、あまねく天下に満ち、広く地上に迸る。牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩既に大半に超え、悲しまざるの族あえて一人も無し。

しかるあいだ、あるいは「利剣即是（利剣は即ちこれなり）」の文を専らにして西土教主の名を唱え、あるいは「衆病悉除（衆病ことごとく除こる）」の願を持って東方如来の経を誦し、あるいは「病即消滅、不老不死（病は即ち消滅して、不老不死ならん）」の詞を仰いで法華真実の妙文を崇め、あるいは「七難即滅、七福即生（七難は即ち滅し、七福は即ち生ぜん）」の句を信じて百座百講の儀を調え、あるは秘密真言の教に因って五瓶の水を灑ぎ、あるは坐禅入定の儀を全うして空観の月を澄まし、もしは七鬼神の号を書して千門に押し、もしは五大力の形を図して万戸に懸け、もしは天神地祇を拝して四角四堺の祭祀を企て、もしは万民百姓を哀れんで国主・国宰の徳政を行う。

しかりといえども、ただ肝胆を摧くのみにして、いよいよ飢疫に逼められ、乞客目に溢れ、死人眼に満てり。臥せる屍を観となし、並べる尸を橋と作す。観んみれば、夫れ、二離璧を合わせ、五緯珠

を連ぬ。三宝世に在し、百王いまだ窮まらざるに、この世早く衰え、その法何ぞ廃れたる。これいかなる禍いに依り、これいかなる誤りに由るや。

主人曰わく、独りこのことを愁いて胸臆に憤悱す。客来って共に嘆く。しばしば談話を致さん。夫れ、出家して道に入る者は、法に依って仏を期するなり。しかるに、今、神術も協わず仏威も験なし。つぶさに当世の体を覩るに、愚かにして後生の疑いを発す。しからば則ち、円覆を仰いで恨みを呑み、方載に俯して慮いを深くす。

つらつら微管を傾け、いささか経文を披きたるに、世皆正に背き、人ことごとく悪に帰す。故に、善神は国を捨てて相去り、聖人は所を辞して還りたまわず。ここをもって、魔来り、鬼来り、災起こり、難起こる。言わずんばあるべからず、恐れずんばあるべからず。

客曰わく、天下の災い、国中の難、余独り嘆くのみにあらず、衆皆悲しむ。今蘭室に入って初めて芳詞を承るに、神聖去り辞し災難並び起こるとは、いずれの経に出でたるや。その証拠を聞かん。

主人曰わく、その文繁多にしてその証弘博なり。

金光明経に云わく「その国土において、この経有りといえども、いまだかつて流布せしめず、捨離の心を生じて聴聞せんことを楽わず、また供養・尊重・讃歎せず。四部の衆・持経の人を見て、また尊重乃至供養すること能わず。ついに、我らおよび余の眷属の無量の諸天をして、この甚深の妙法を聞くことを得ず、甘露の味に背き、正法の流れを失い、威光および勢力有ることなからしむ。悪趣を増長して人天を損減し、生死の河に墜ちて、涅槃の路に乖かん。世尊よ。我ら四王ならびに諸の眷

属および薬叉等、かくのごとき事を見て、その国土を捨てて擁護の心無けん。ただ我らのみこの王を捨棄するにあらず、必ず無量の国土を守護する諸大善神有らんも、みな捨て去らん。既に捨離し已われば、その国、当に種々の災禍有って国位を喪失すべし。一切の人衆、皆善心無く、ただ繋縛・殺害・瞋諍のみ有って、たがいに讒諂し、枉げて辜無きに及ぼさん。疫病流行し、彗星しばしば出で、両日並び現じ、薄蝕恒無く、黒白の二虹不祥の相を表し、星流れ地動き、井の内に声を発し、暴雨・悪風、時節に依らず、常に飢饉に遭って苗実成らず、多く他方の怨賊有って国内を侵掠し、人民は諸の苦悩を受け、土地に楽しむところの処有ることなけん」已上。

大集経に云わく「仏法実に隠没せば、鬚・髪・爪皆長く、諸法もまた忘失せん。その時、虚空の中に大なる声あって地を震い、一切皆あまねく動かんこと、なお水上輪のごとくならん。城壁破れ落ち下り、屋宇ことごとく圮れ坼け、樹林の根・枝・葉・華葉・菓・薬尽きん。ただ浄居天を除いて、欲界の一切処の七味三精気損滅して余り有ることなけん。解脱の諸の善論、その時一切尽きん。生ずるところの華菓の味わい希少にして、また美からず。あらゆる井・泉・池、一切ことごとく枯涸し、土地ことごとく鹹鹵し、敵裂して丘澗と成らん。諸山皆燋燃して天竜雨を降らさず。苗稼も皆枯死し、生ずるもの皆死れ尽きて余草さらに生ぜず。土を雨らし、皆昏闇にして、日月も明を現ぜず、四方皆亢旱してしばしば諸の悪瑞を現じ、十不善業の道、貪・瞋・癡倍増して、衆生の、父母においてこれを観ること獐鹿のごとくならん。衆生および寿命・色力・威楽減じ、人天の楽を遠離し、みな悪道に堕ちん。かくのごとき不善業の悪王・悪比丘、我が正法を毀壊し、天人の道を損減し、諸天善神、王

にして衆生を悲愍する者、この濁悪の国を棄ててみな余方に向かわん」已上。

仁王経に云わく「国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る。賊来って国を劫かし、百姓亡喪し、臣・君・太子・王子・百官、共に是非を生ぜん。天地に怪異あり。二十八宿・星道・日月、時を失い、度を失い、多く賊起こること有らん」。また云わく「我、今五眼もて明らかに三世を見るに、一切の国王は皆過去の世に五百の仏に侍うるによって帝王主となることを得たり。ここをもって、一切の聖人・羅漢、しがもために彼の国土の中に来生して大利益を作さん。もし王の福尽きん時は、一切の聖人、皆、ために捨て去らん。もし一切の聖人去らん時は、七難必ず起こらん」已上。

薬師経に云わく「もし刹帝利・灌頂王等、災難起こらん時、いわゆる人衆疾疫の難、他国侵逼の難、自界叛逆の難、星宿変怪の難、日月薄蝕の難、非時風雨の難、過時不雨の難なり」已上。

仁王経に云わく「大王よ。吾が今化するところ、百億の須弥、百億の日月あり。一々の須弥に四天下有り。その南閻浮提に十六の大国、五百の中国、十千の小国有り。その国土の中に七つの畏るべき難有り。一切の国王、これを難となすが故に。いかなるを難となす。日月度を失い、時節返逆し、あるいは赤日出で、黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現ずるを一の難となすなり。二十八宿度を失い、金星・彗星・輪星・鬼星・火星・水星・風星・刀星・南斗・北斗・五鎮の大星・一切の国主星・三公星・百官星、かくのごとき諸星、各々変現するを二の難となすなり。大火国を焼き、万姓焼尽せん。あるいは鬼火・竜火・天火・山神火・人火・樹木火・賊火あらん。かくのごとき変怪を三の難となすなり。大水百姓を漂没し、時節返逆して、

冬雨り、夏雪ふり、冬時に雷電辟靂あり。六月に氷・霜・雹を雨らし、赤水・黒水・青水を雨らし、土山・石山を雨らし、沙・礫・石を雨らす。江河逆さまに流れ、山を浮かべ、石を流す。かくのごとき変の時を四の難となすなり。大風万姓を吹き殺し、国土の山河・樹木、一時に滅没し、非時の大風・黒風・赤風・青風・天風・地風・火風・水風あらん。かくのごとき変を五の難となすなり。天地・国土亢陽し、炎火洞然して百草亢旱し、五穀登らず、土地赫燃して万姓滅尽せん。かくのごとき変の時を六の難となすなり。四方の賊来って国を侵し、内外の賊起こり、火賊・水賊・風賊・鬼賊あって百姓荒乱し、刀兵の劫起こらん。かくのごとき怪の時を七の難となすなり」。

大集経に云わく「もし国王有って、無量世において施・戒・慧を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、かくのごとく種うるところの無量の善根ことごとく滅失して、その国当に三つの不祥のこと有るべし。一には穀貴、二には兵革、三には疫病なり。一切の善神ことごとくこれを捨離せば、その王教令すとも、人随従せず。常に隣国の侵嬈するところとならん。暴火横しまに起こり、悪風雨多く、暴水増長して人民を吹き漂わし、内外の親戚それ共に謀叛せん。その王久しからずして当に重病に遇い、寿終わるの後、大地獄の中に生ずべし乃至王のごとく、夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官もまたかくのごとくならん」已上。

夫れ、四経の文朗らかなり。万人誰か疑わん。しかるに、盲瞽の輩、迷惑の人、みだりに邪説を信じて正教を弁えず。故に、天下世上、諸仏・衆経において捨離の心を生じて擁護の志無し。よって、善神・聖人、国を捨て所を去る。ここをもって、悪鬼・外道、災いを成し、難を致す。

客色を作して曰わく、後漢の明帝は金人の夢を悟って白馬の教を得、上宮太子は守屋の逆を誅して寺塔の構えを成す。それより来、上一人より下万民に至るまで、仏像を崇め経巻を専らにす。しからば則ち、叡山・南都・園城・東寺、四海一州・五畿七道、仏経は星のごとく羅なり、堂宇は雲のごとく布けり。鷲子の族は則ち鷲頭の月を観じ、鶴勒の流れはまた鶏足の風を伝う。誰か一代の教を褊し三宝の跡を廃すと謂わんや。もしその証有らば、委しくその故を聞かん。

主人喩して曰わく、仏閣甍を連ね、経蔵軒を並べ、僧は竹葦のごとく、侶は稲麻に似たり。崇重年旧り尊貴日に新たなり。ただし、法師は諂曲にして人倫を迷惑わせ、王臣は不覚にして邪正を弁うることなし。

仁王経に云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴し、横しまに法制を作って仏戒に依らず。これを破仏・破国の因縁となす」已上。

涅槃経に云わく「菩薩は、悪象等においては心に恐怖なく、悪知識においては怖畏の心を生ず。悪象に殺されては三趣に至らず、悪友に殺されては必ず三趣に至る」已上。

法華経に云わく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん。あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂って、人間を軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん乃至常に大衆の中に在って我らの過を毀らんと欲して、国王・大臣・

婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん。濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん。濁世の悪比丘は、仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」已上。

涅槃経に云わく「我涅槃して後、無量百歳、四道の聖人ことごとくまた涅槃せん。正法滅して後、像法の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく経を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養し、袈裟を着るといえども、なお猟師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、羅漢を得たり』と。外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。啞法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」已上。

文に就いて世を見るに、誠にもってしかなり。悪侶を誡めずんば、あに善事を成さんや。

客なお憤って曰わく、明王は天地に因って化を成し、聖人は理非を察らかにして世を治む。世上の僧侶は天下の帰するところなり。悪侶においては明王は信ずべからず。聖人にあらずんば賢哲は仰ぐべからず。今、賢聖の尊重せるをもって、則ち竜象の軽からざるを知んぬ。何ぞ妄言を吐いてあながちに誹謗を成し、誰人をもって悪比丘と謂うや。委細に聞かんと欲す。

主人曰わく、後鳥羽院の御宇に法然というもの有って選択集を作る。則ち一代の聖教を破し、あまねく十方の衆生を迷わす。その選択に云わく「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨て正

しく浄土に帰するの文。初めに聖道門とは、これについて二つ有り乃至これに準じてこれを思うに、応に密大および実大をも存すべし。しからば則ち、今の真言・仏心・天台・華厳・三論・法相・地論・摂論、これらの八家の意、正しくここに在るなり。曇鸞法師、往生論註に云わく『謹んで竜樹菩薩の十住毘婆沙を案ずるに云わく、菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道有り。一には難行道、二には易行道なり』。この中、難行道とは、即ちこれ聖道門なり。易行道とは、即ちこれ浄土門なり。浄土宗の学者、まず、すべからくこの旨を知るべし。たとい先より聖道門を学ぶ人なりといえども、もし浄土門においてその志有らば、すべからく聖道を棄てて浄土に帰すべし」。

また云わく「善導和尚、正・雑の二行を立てて、雑行を捨て正行に帰するの文。第一に読誦雑行とは、上の観経等の往生浄土の経を除いてより已外、大小乗・顕密の諸経において受持・読誦するを、ことごとく読誦雑行と名づく。第三に礼拝雑行とは、上の弥陀を礼拝するを除いてより已外、一切の諸の仏菩薩等および諸の世天等において礼拝・恭敬するを、ことごとく礼拝雑行と名づく。私に云わく、この文を見るに、すべからく雑を捨てて専を修すべし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。行者能くこれを思量せよ」。

また云わく「貞元入蔵録の中に、始め大般若経六百巻より法常住経に終わるまでの顕密の大乗経、総じて六百三十七部二千八百八十三巻なり。皆すべからく『大乗を読誦す』の一句に摂むべし。当に知るべし、随他の前にはしばらく定散の門を開くといえども、随自の後には還って定散の門を閉ず。たび開いてより以後永く閉じざるは、ただこれ念仏の一門のみなり」。

また云わく「念仏の行者必ず三心を具足すべきの文。観無量寿経に云わく、同経の疏に云わく『問うて曰わく、もし解行不同にして邪雑の人等有らん。外邪異見の難を防がん。あるいは行くこと一分二分にして群賊等喚び廻すとは、即ち別解・別行・悪見の人等に喩う』。私に云わく、またこの中に一切の別解・別行・異学・異見等と言うは、これ聖道門を指す」已上。

また最後結句の文に云わく「夫れ、速やかに生死を離れんと欲せば、二種の勝法の中に、しばらく聖道門を閣いて、選んで浄土門に入れ。浄土門に入らんと欲せば、正・雑の二行の中に、しばらく諸の雑行を抛って、選んで応に正行に帰すべし」已上。

これに就いてこれを見るに、曇鸞・道綽・善導の謬釈を引いて、聖道・浄土、難行・易行の旨を建て、法華・真言、総じて一代の大乗六百三十七部二千八百八十三巻、一切の諸の仏菩薩および諸の世天等をもって皆聖道・難行・雑行等に摂めて、あるいは捨て、あるいは閉じ、あるいは閣き、あるいは抛つ。この四字をもって多く一切を迷わし、あまつさえ、三国の聖僧、十方の仏弟をもって皆群賊と号し、しかしながら罵詈せしむ。近くは、依るところの浄土三部経の「ただ五逆と誹謗正法とのみを除く」の誓文に背き、遠くは、一代五時の肝心たる法華経の第二の「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」の誡文に迷う者なり。

ここにおいて、代は末代に及び、人は聖人にあらず。各冥衢に容ってならびに直道を忘る。悲しいかな、瞳矇を樹てず。痛ましいかな、いたずらに邪信を催す。故に、上国王より下土民に至るまで、皆、経は浄土三部の外の経無く、仏は弥陀三尊の外の仏無しと謂えり。

よって、伝教・義真・慈覚・智証等、あるいは万里の波濤を渉って渡せしところの聖教、あるいは一朝の山川を廻って崇むるところの仏像、もしは高山の巓に華界を建てて、もって安置し、もしは深谷の底に蓮宮を起てて、もって崇重す。釈迦・薬師の光を並ぶるや、威を現当に施し、虚空・地蔵の化を成すや、益を生後に被らしむ。故に、国主は郡郷を寄せて、もって灯燭を明るくし、地頭は田園を充てて、もって供養に備う。しかるに、法然の選択に依って、則ち教主を忘れて西土の仏駄を貴び、付嘱を抛って東方の如来を閣き、ただ四巻三部の経典のみを専らにして空しく一代五時の妙典を抛つ。ここをもって、弥陀の堂にあらざれば皆供仏の志を止め、念仏の者にあらざれば早く施僧の懐いを忘る。故に、仏堂零落して瓦松の煙老い、僧房荒廃して庭草の露深し。しかりといえども、各各護惜の心を捨て、ならびに建立の思いを廃す。ここをもって、住持の聖僧行って帰らず、守護の善神去って来ることなし。これひとえに法然の選択に依るなり。

悲しいかな、数十年の間、百千万の人、魔縁に蕩かされて多く仏教に迷えり。謗を好んで正を忘る。善神怒りをなさざらんや。円を捨てて偏を好む。悪鬼便りを得ざらんや。

しかず、彼の万祈を修せんよりは、この一凶を禁ぜんには。

客殊に色を作して曰わく、我が本師・釈迦文、浄土三部経を説きたまいてより以来、曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に帰し、道綽禅師は涅槃の広業を閣いてひとえに西方の行を弘め、善導和尚は雑行を抛って専修を立て、恵心僧都は諸経の要文を集めて念仏の一行を宗とす。弥陀を貴重すること、誠にもってしかなり。また往生の人、それいくばくぞや。

なかんずく法然聖人は、幼少にして天台山に昇り、十七にして六十巻に渉り、ならびに八宗を究め、つぶさに大意を得たり。その外、一切の経論七遍反覆し、章疏伝記究め看ざることなく、智は日月に斉しく、徳は先師に越えたり。しかりといえども、なお出離の趣に迷って涅槃の旨を弁えず。故に、あまねく覩、ことごとく鑑み、深く思い、遠く慮り、ついに諸経を抛って専ら念仏を修す。その上、一夢の霊応を蒙り、四裔の親疎に弘む。故に、あるいは勢至の化身と号し、あるいは善導の再誕と仰ぐ。しからば則ち、十方の貴賤頭を低れ、一朝の男女歩みを運ぶ。しかしより来、春秋推し移り、星霜相積もれり。

しかるに、忝くも釈尊の教えを疎かにし、ほしいままに弥陀の文を譏る。何ぞ、近年の災いをもって聖代の時に課せ、あながちに先師を毀り、さらに聖人を罵るや。毛を吹いて疵を求め、皮を剪って血を出だす。昔より今に至るまで、かくのごとき悪言いまだ見ず。惶るべく、慎むべし。罪業至って重し。科条いかでか遁れん。対座なおもって恐れ有り。杖を携えて則ち帰らんと欲す。

主人咲み、止めて曰わく、辛きことを蓼の葉に習い、臭きことを溷廁に忘る。善言を聞いて悪言と思い、謗者を指して聖人と謂い、正師を疑って悪侶に擬す。その迷い誠に深く、その罪浅からず。事の起こりを聞け。委しくその趣を談ぜん。

釈尊説法の内、一代五時の間に先後を立てて権実を弁ず。しかるに、曇鸞・道綽・善導、既に権に就いて実を忘れ、先に依って後を捨つ。いまだ仏教の淵底を探らざる者なり。なかんずく法然は、その流れを酌むといえども、その源を知らず。所以はいかん。大乗経六百三十七部二千八百八十三巻、

ならびに一切の諸の仏菩薩および諸の世天等をもって、捨閉閣抛の字を置いて、一切衆生の心を薄んず。これひとえに私曲の詞を展べて全く仏経の説を見ず。妄語の至り悪口の科、言っても比い無く、責めても余り有り。

人皆その妄語を信じ、ことごとく彼の選択を貴ぶ。故に、浄土の三経を崇めて衆経を抛ち、極楽の一仏を仰いで諸仏を忘る。誠にこれ諸仏・諸経の怨敵、聖僧・衆人の讐敵なり。この邪教、広く八荒に弘まり、あまねく十方に遍す。

そもそも、近年の災いをもって往代を難ずるの由、あながちにこれを恐る。いささか先例を引いて汝が迷いを悟すべし。

止観の第二に史記を引いて云わく「周の末に被髪・袒身にして、礼度に依らざる者有り」。弘決の第二にこの文を釈するに、左伝を引いて曰わく「初め平王の東に遷るや、伊川に被髪の者の野において祭るを見る。識者曰わく『百年に及ばじ。その礼まず亡びぬ』と」。ここに知んぬ、徴前に顕れ、災い後に致ることを。また「阮籍は逸才なりしに蓬頭・散帯す。後に、公卿の子孫、皆これに教って、奴狗相辱しむる者を方に自然に達すといい、撙節・兢持する者を呼んで田舎となす。司馬氏の滅ぶる相となす」已上。

また慈覚大師の入唐巡礼記を案ずるに云わく「唐の武宗皇帝、会昌元年、勅して章敬寺の鏡霜法師をして諸寺において弥陀念仏の教えを伝えしむ。寺ごとに三日巡輪すること絶えず。同二年、回鶻国の軍兵等、唐の堺を侵す。同三年、河北の節度使たちまち乱を起こす。その後、大蕃国また命を拒み、

回鶻国重ねて地を奪う。およそ兵乱は秦項の代に同じく、災火は邑里の際に起こる。いかにいわんや、武宗大いに仏法を破し、多く寺塔を滅す。乱を撥むること能わずして、ついにもって事有り」已上取意。

これをもってこれを惟うに、法然は後鳥羽院の御宇、建仁年中の者なり。彼の院の御事既に眼前に在り。しからば則ち、大唐に例を残し、吾が朝に証を顕す。汝疑うことなかれ、汝怪しむことなかれ。ただすべからく凶を捨てて善に帰し、源を塞ぎ根を截つべし。

客、いささか和らいで曰わく、いまだ淵底を究めざるに、しばしばその趣を知る。ただし、華洛より柳営に至るまで、釈門に枢楗在り、仏家に棟梁在り。しかるに、いまだ勘状を進らせず、上奏に及ばず。汝、賤しき身をもってたやすく莠言を吐く。その義余り有り、その理謂れ無し。

主人曰わく、予、少量たりといえども、忝くも大乗を学す。蒼蠅、驥尾に附して万里を渡り、碧羅、松頭に懸かって千尋を延ぶ。弟子、一仏の子と生まれて、諸経の王に事う。何ぞ仏法の衰微を見て心情の哀惜を起こさざらんや。

その上、涅槃経に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」。余、善比丘の身ならずといえども、「仏法の中の怨」の責めを遁れんがために、ただ大綱を撮ってほぼ一端を示すのみ。

その上、去ぬる元仁年中に延暦・興福の両寺より度々奏聞を経、勅宣・御教書を申し下して法然の選択の印板を大講堂に取り上げ、三世の仏恩を報ぜんがためにこれを焼失せしむ。法然の墓所におい

ては、感神院の犬神人に仰せ付けて破却せしむ。その門弟、隆寛・聖光・成覚・薩生等は遠国に配流せられ、その後いまだ御勘気を許されず。あに「いまだ勘状を進らせず」と云わんや。

客則ち和らいで曰わく、経を下し僧を謗ずること、一人には論じ難し。しかれども、大乗経六百三十七部二千八百八十三巻、ならびに一切の諸の仏菩薩および諸の世天等をもって、捨閉閣抛の四字に載す。その詞勿論なり、その文顕然なり。この瑕瑾を守ってその誹謗を成せども、迷って言うか、覚って語るか、賢愚弁ぜず、是非定め難し。

ただし、災難の起こりは選択に因るの由、その詞を盛んにし、いよいよその旨を談ず。詮ずるところ、天下泰平・国土安穏は君臣の楽うところ、土民の思うところなり。夫れ、国は法に依って昌え、法は人に因って貴し。国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや。まず国家を祈って、すべからく仏法を立つべし。もし災いを消し難を止むるに術有らば、聞かんと欲ず。

主人曰わく、余はこれ頑愚にしてあえて賢を存せず。ただ経文に就いていささか所存を述べん。そもそも治術の旨、内外の間、その文幾多ぞや。つぶさに挙ぐべきこと難し。ただし、仏道に入ってしばしば愚案を廻らすに、謗法の人を禁めて正道の侶を重んぜば、国中安穏にして天下泰平ならん。

即ち、涅槃経に云わく「仏言わく『ただ一人のみを除いて余の一切に施さば、皆、讃歎すべし』。純陀問うて言わく『いかなるをか名づけて、ただ一人のみを除くとなす』。仏言わく『この経の中に説くところのごときは破戒なり』。純陀また言わく『我今いまだ解せず。ただ願わくはこれを説きたまえ』。仏、純陀に語って言わく『波羅とは、一闡提を謂う。その余のあらゆる一切に布施するは、

皆、讃歎すべし。大果報を獲ん』。純陀また問う『一闡提とは、その義いかん』。仏言わく『純陀よ。もし比丘および比丘尼・優婆塞・優婆夷有って、麤悪の言を発し、正法を誹謗し、この重業を造って永く改悔せず、心に懺悔無くんば、かくのごとき等の人をば名づけて一闡提の道に趣向すとなす。もし四重を犯し五逆罪を作り、自ら定めてかくのごとき重事を犯すと知れども、心に初めより怖畏・懺悔無く、あえて発露せず、彼の正法において永く護惜建立の心無く、毀呰・軽賤して言に過咎多からば、かくのごとき等の人をばまた一闡提の道に趣向すと名づく。ただかくのごとき一闡提の輩のみを除いてその余に施さば、一切讃歎せん』と」。

また云わく「我往昔を念うに、閻浮提において大国の王と作り、名づけて仙予と曰いき。大乗経典を愛念し敬重し、その心純善にして、麤悪・嫉悋有ることなし。善男子よ。我はその時において心に大乗を重んず。婆羅門の方等を誹謗するを聞き、聞き已わって即時にその命根を断ず。善男子よ。この因縁をもって、これより已来、地獄に堕ちず」。

また云わく「如来は、昔、国王となって菩薩の道を行ぜし時、そこばくの婆羅門の命を断絶す」。

また云わく「殺に三つ有り。謂わく下・中・上なり。下とは、蟻子乃至一切の畜生なり。ただ菩薩の示現生の者のみを除く。下殺の因縁をもって地獄・畜生・餓鬼に堕ちて、つぶさに下の苦を受く。何をもっての故に。この諸の畜生に微かの善根有り。この故に、殺す者はつぶさに罪報を受く。中殺とは、凡夫人より阿那含に至るまで、これを名づけて中となす。この業因をもって地獄・畜生・餓鬼に堕ちて、つぶさに中の苦を受く。上殺とは、父母乃至阿羅漢・辟支仏・畢定の菩薩なり。阿鼻大

地獄の中に堕つ。善男子よ。もし能く一闡提を殺すことあらば、則ちこの三種の殺の中に堕ちず。善男子よ。彼の諸の婆羅門等は、一切皆これ一闡提なり」已上。

仁王経に云わく「仏、波斯匿王に告げたまわく『この故に、諸の国王に付嘱して、比丘・比丘尼に付嘱せず。何をもっての故に。王の威力無ければなり』と」已上。

涅槃経に云わく「今、無上の正法をもって、諸王・大臣・宰相および四部の衆に付嘱す。正法を毀る者をば、大臣・四部の衆、応当に苦治すべし」。

また云わく「仏言わく『迦葉よ。能く正法を護持する因縁をもっての故に、この金剛身を成就することを得たり。善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修せず、応に刀剣・弓箭・鉾槊を持すべし』と」。

また云わく「もし五戒を受持するの者有らば、名づけて大乗の人となすことを得ざるなり。五戒を受けざれども、ために正法を護るを乃ち大乗と名づく。正法を護る者は、応当に刀剣器仗を執持すべし。刀杖を持すといえども、我はこれらを説いて名づけて持戒と曰わん」。

また云わく「善男子よ。過去の世にこの拘尸那城において仏の世に出でたもうことありき。歓喜増益如来と号したてまつる。仏涅槃して後、正法世に住すること無量億歳なり。余の四十年、仏法いまだ滅せず。その時、一りの持戒の比丘有り、名づけて覚徳と曰う。その時、多く破戒の比丘有り。この説を作すを聞いて皆悪心を生じ、刀杖を執持し、この法師を逼む。この時の国王は、名づけて有徳と曰う。このことを聞き已わって、護法のための故に即便ち説法者の所に往至して、この破戒の諸

の悪比丘と極めて共に戦闘す。その時、説法者は厄害を免ることを得たり。王、その時において身に刀剣箭槊の瘡を被り、体に完き処は芥子のごときばかりも無し。その時、覚徳はついで王を讃めて言わく『善きかな、善きかな。王、今真にこれ正法を護る者なり。当来の世に、この身当に無量の法器となるべし』。王、この時において法を聞くことを得已わって、心大いに歓喜し、ついで即ち命終して阿閦仏の国に生じて、彼の仏のために第一の弟子と作る。その王の将従・人民・眷属、戦闘有りし者、歓喜有りし者は、一切、菩提の心を退せず、命終してことごとく阿閦仏の国に生ず。覚徳比丘、却って後、寿終わってまた阿閦仏の国に往生することを得て、彼の仏のために声聞衆の中の第二の弟子と作る。もし正法尽きんと欲することあらん時、応当にかくのごとく受持し擁護すべし。

迦葉よ。その時の王とは則ち我が身これなり。説法の比丘は迦葉仏これなり。迦葉よ。正法を護る者は、かくのごとき等の無量の果報を得ん。この因縁をもって、我、今日において種々の相を得て、もって自ら荘厳し、法身不可壊の身を成ず。

仏、迦葉菩薩に告げたまわく、この故に、法を護らん優婆塞等は、応に刀杖を執持して擁護すること、かくのごとくなるべし。善男子よ。我涅槃して後の濁悪の世に、国土荒乱し、たがいに抄掠し、人民飢餓せん。その時、多く飢餓のための故に発心・出家するもの有らん。かくのごときの人を名づけて禿人となす。この禿人の輩、正法を護持するものを見て、駆逐して出ださしめ、もしは殺し、もしは害せん。この故に、我は今、持戒の人、諸の白衣の刀杖を持する者に依って、もって伴侶となすことを聴す。刀杖を持すといえども、我はこれらを説いて名づけて持戒と曰わん。刀杖を持すとい

えども、応に命を断ずべからず」。

法華経に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」已上。

夫れ、経文は顕然なり。私の詞何ぞ加えん。およそ法華経のごとくんば、大乗経典を謗ずる者は、無量の五逆に勝れるが故に、阿鼻大城に堕ちて永く出ずる期無けん。涅槃経のごとくんば、たとい五逆の供を許すとも、謗法の施を許さず。蟻子を殺す者は、必ず三悪道に落つ。謗法を禁ずる者は、不退の位に登る。いわゆる、覚徳とはこれ迦葉仏なり、有徳とは則ち釈迦文なり。

法華・涅槃の経教は一代五時の肝心なり。その禁め実に重し。誰か帰仰せざらんや。しかるに、謗法の族、正道を忘るるの人、あまつさえ法然の選択に依って、いよいよ愚癡の盲瞽を増す。ここをもって、あるいは彼の遺体を忍んで木画の像に露し、あるいはその妄説を信じて莠言の模を彫り、これを海内に弘め、これを郭外に翫ぶ。仰ぐところは則ちその家風、施すところは則ちその門弟なり。しかるあいだ、あるいは釈迦の手の指を切って弥陀の印相に結び、あるいは東方如来の脇宇を改めて西土教主の鵝王を居え、あるいは四百余回の如法経を止めて西方浄土の三部経と成し、あるいは天台大師の講を停めて善導の講となす。かくのごとき群類、それ誠に尽くし難し。これ破仏にあらずや。これ破法にあらずや。これ破僧にあらずや。この邪義は、則ち選択に依るなり。

ああ悲しいかな、如来の誠諦の禁言に背くこと。哀れなるかな、愚侶の迷惑の麤語に随うこと。早く天下の静謐を思わば、すべからく国中の謗法を断つべし。

客曰わく、もし謗法の輩を断じ、もし仏禁の違を絶せんには、彼の経文のごとく斬罪に行うべきか。もししからば、殺害相加わって、罪業いかんがせんや。

則ち大集経に云わく「頭を剃り袈裟を着れば、持戒および毀戒をも、天人彼を供養すべし。則ち我を供養するとなす。これ我が子なり。もし彼を撾打することあらば、則ち我が子を打つとなす。もし彼を罵辱せば、則ち我を毀辱するとなす」。

料り知んぬ。善悪を論ぜず、是非を択ぶことなく、僧侶たらんにおいては供養を展ぶべし。何ぞ、その子を打辱して忝くもその父を悲哀せしめん。彼の竹杖の目連尊者を害せしや、永く無間の底に沈み、提婆達多の蓮華比丘尼を殺せしや、久しく阿鼻の焔に咽ぶ。先証これ明らかなり、後昆最も恐れあり。謗法を誡むるには似たれども、既に禁言を破る。このこと信じ難し。いかんが意得んや。

主人曰わく、客明らかに経文を見て、なおこの言を成す。心の及ばざるか、理の通ぜざるか。全く仏子を禁むるにはあらず、ただひとえに謗法を悪むなり。

夫れ、釈迦の以前、仏教はその罪を斬るといえども、能忍の以後、経説は則ちその施を止む。しからば則ち、四海万邦、一切の四衆、その悪に施さず、皆この善に帰せば、いかなる難か並び起こり、いかなる災いか競い来らん。

客則ち席を避け、襟を刷って曰わく、仏教かく区にして旨趣窮め難く、不審多端にして理非明らかならず。ただし法然聖人の選択、現に在るなり。諸仏・諸経・諸菩薩・諸天等をもって捨閉閣抛に載す。その文顕然なり。これに因って、聖人国を去り善神所を捨てて、天下飢渇し世上疫病すと、今、

主人、広く経文を引いて明らかに理非を示す。故に、妄執既に翻り、耳目しばしば朗らかなり。詮ずるところ、国土泰平・天下安穏は、一人より万民に至るまで好むところなり、楽うところなり。早く一闡提の施を止め、永く衆僧尼の供を致し、仏海の白浪を収め、法山の緑林を截らば、世は義農の世と成り、国は唐虞の国とならん。しかして後、法水の浅深を斟酌し、仏家の棟梁を崇重せん。

主人悦んで曰わく、鳩化して鷹となり、雀変じて蛤となる。悦ばしいかな、汝、蘭室の友に交わって麻畝の性と成る。誠にその難を顧みて専らこの言を信ぜば、風和らぎ浪静かにして不日に豊年ならん。ただし、人の心は時に随って移り、物の性は境に依って改まる。譬えば、なお、水中の月の波に動き、陣前の軍の剣に靡くがごとし。汝、当座に信ずといえども、後定めて永く忘れん。もし、まず国土を安んじて現当を祈らんと欲せば、速やかに情慮を廻らし恩いで対治を加えよ。

所以はいかん。薬師経の七難の内、五難たちまち起こり、二難なお残れり。いわゆる他国侵逼の難・自界叛逆の難なり。大集経の三災の内、二災早く顕れ、一災いまだ起こらず。いわゆる兵革の災なり。金光明経の内の種々の災禍一々起こるといえども、他方の怨賊国内を侵掠する、この災いまだ露れず、この難いまだ来らず。仁王経の七難の内、六難今盛んにして、一難いまだ現ぜず。いわゆる、四方の賊来って国を侵すの難なり。しかのみならず、「国土乱れん時はまず鬼神乱る。鬼神乱るるが故に万民乱る」と。今この文に就いてつぶさに事の情を案ずるに、百鬼早く乱れ、万民多く亡ぶ。先難これ明らかなり、後災何ぞ疑わん。もし残るところの難、悪法の科によって並び起こり競い来らば、その時いかんがせんや。

帝王は国家を基として天下を治め、人臣は田園を領して世上を保つ。しかるに、他方の賊来ってその国を侵逼し、自界叛逆してその地を掠領せば、あに驚かざらんや、あに騒がざらんや。国を失い家を滅ぼさば、いずれの所にか世を遁れん。

汝、すべからく一身の安堵を思わば、まず四表の静謐を禱るべきものか。

なかんずく、人の世に在るや、各後生を恐る。ここをもって、あるいは邪教を信じ、あるいは謗法を貴ぶ。各是非に迷うことを悪むといえども、なお仏法に帰することを哀しむ。何ぞ同じく信心の力をもってみだりに邪議の詞を宗めんや。もし執心翻らず、また曲意なお存せば、早く有為の郷を辞して必ず無間の獄に堕ちなん。

所以はいかん。大集経に云わく「もし国王有って、無量世において施・戒・慧を修すとも、我が法の滅せんを見て、捨てて擁護せずんば、かくのごとく種うるところの無量の善根ことごとく滅失して乃至その王久しからずして当に重病に遇い、寿終わるの後、大地獄に生ずべし。王のごとく、夫人・太子・大臣・城主・柱師・郡守・宰官もまたかくのごとくならん」。

仁王経に云わく「人、仏教を壊らば、また孝子無く、六親不和にして天神も祐けず、疾疫・悪鬼、日に来って侵害し、災怪首尾し、連禍縦横し、死して地獄・餓鬼・畜生に入らん。もし出でて人とならば、兵奴の果報あらん。響きのごとく、影のごとく、人の夜書くに火は滅すれども字は存するがごとく、三界の果報もまたかくのごとし」。

法華経の第二に云わく「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば乃至その人は命終して、阿鼻獄に入

らん」。また同第七の巻の不軽品に云わく「千劫、阿鼻地獄において、大苦悩を受く」。涅槃経に云わく「善友を遠離し、正法を聞かず、悪法に住せば、この因縁の故に沈没して阿鼻地獄に在って、受くるところの身形、縦横八万四千ならん」。

広く衆経を披きたるに、専ら謗法を重んず。悲しいかな、皆正法の門を出でて深く邪法の獄に入る。愚かなるかな、各悪教の網に懸かって鎮に謗教の網に纏わる。この朦霧の迷い、彼の盛焔の底に沈む。あに愁えざらんや、あに苦しまざらんや。

汝、早く信仰の寸心を改めて、速やかに実乗の一善に帰せよ。しからば則ち、三界は皆仏国なり。仏国それ衰えんや。十方はことごとく宝土なり。宝土何ぞ壊れんや。国に衰微無く土に破壊無くんば、身はこれ安全、心はこれ禅定ならん。この詞、この言、信ずべく、崇むべし。

客曰わく、今生・後生、誰か慎まざらん。誰か和わざらん。この経文を披いてつぶさに仏語を承るに、誹謗の科至って重く、毀法の罪誠に深し。我一仏を信じて諸仏を抛ち、三部経を仰いで諸経を閣きしは、これ私曲の思いにあらず、則ち先達の詞に随いしなり。十方の諸人もまたまたかくのごとくなるべし。今世には性心を労し、来生には阿鼻に堕ちんこと、文明らかに理詳らかなり。疑うべからず。いよいよ貴公の慈誨を仰ぎ、ますます愚客の癡心を開けり。速やかに対治を廻らして早く泰平を致し、まず生前を安んじてさらに没後を扶けん。ただ我が信ずるのみにあらず、また他の誤りをも誡めんのみ。

(003)

安国論奥書

文永6年('69)12月8日　48歳

文応元年 太歳庚申 これを勘う。正嘉にこれを始めてより、文応元年に勘え畢わんぬ。去ぬる正嘉元年 太歳丁巳 八月二十三日、戌亥剋の大地震を見てこれを勘う。その後、文応元年 太歳庚申七月十六日をもって、宿屋禅門に付して故最明寺入道殿に奉れり。その後、文永元年 太歳甲子 七月五日、大明星の時、いよいよこの災いの根源を知る。文応元年 太歳庚申 より文永五年 太歳戊辰 後正月十八日に至るまで、九箇年を経て、西方の大蒙古国より我が朝を襲うべきの由、牒状これを渡す。また同六年、重ねて牒状これを渡す。既に勘文これに叶う。これに準じてこれを思うに、未来もまたしかるべきか。この書は徴有る文なり。これひとえに日蓮が力にあらず、法華経の真文の至すところの感応か。

文永六年 太歳己巳 十二月八日、これを写す。

(004)

安国論御勘由来

文永5年('68)4月5日　47歳

法鑑房

正嘉元年 太歳丁巳 八月二十三日戌亥時、前代に超え大いに地振るう。同二年 戊午 八月一日、大風。

同三年己未、大飢饉。正元元年己未、大疫病。同二年庚申、四季に亘って大疫已まず、万民既に大半に超えて死を招き了わんぬ。しかるあいだ、国主これに驚き、内外典に仰せ付けて種々の御祈禱有り。しかりといえども、一分の験も無く、還って飢疫等を増長す。

日蓮、世間の体を見て、ほぼ一切経を勘うるに、御祈請験無く還って凶悪を増長するの由、道理・文証これを得了わんぬ。終に止むことなく、勘文一通を造作し、その名を立正安国論と号す。文応元年庚申七月十六日辰時、宿屋入道に付けて故最明寺入道殿に奏進し了わんぬ。これひとえに国土の恩を報ぜんがためなり。

その勘文の意は、日本国天神七代・地神五代・百王百代の人王第三十代欽明天皇の御宇に始めて百済国より仏法この国に渡りしより、桓武天皇の御宇に至るまで、その中間五十余代、二百六十余年なり。その間、一切経ならびに六宗これ有りといえども、天台・真言の二宗いまだこれ有らず。桓武の御宇に山階寺の行表僧正の御弟子に最澄という小僧有り〈後に伝教大師と号す〉。已前に渡るところの六宗ならびに禅宗これを極むといえども、いまだ我が意に叶わず。聖武天皇の御宇に大唐の鑑真和尚渡すところの天台の章疏、四十余年を経てより已後、始めて最澄これを披見し、ほぼ仏法の玄旨を覚りおわんぬ。最澄、天長地久のために延暦四年、叡山を建立す。桓武皇帝これを崇めて、天子本命の道場と号し、六宗の御帰依を捨てて、一向に天台円宗に帰伏し給う。

同延暦十三年に長岡京より遷って平安城を建つ。同延暦二十一年正月十九日、高雄寺において南都七大寺の六宗の碩学、勤操・玄耀等の十四人を召し合わせ、決断して勝負を談ず。六宗の明匠、一問

答にも及ばず、口を閉ずること鼻のごとし。華厳宗の五教、法相宗の三時、三論宗の二蔵三時の所立を破し了わんぬ。ただ自宗を破らるるのみにあらず、皆謗法の者なることを知る。同二十九日、皇帝勅宣を下してこれを詰る。十四人、謝表を作って帝皇に捧げ奉る。その後、代々の皇帝、叡山の御帰依は孝子の父母に仕うるに超え、黎民の王威を恐るるに勝れり。ある御時は宣命を捧げ、ある御時は非をもって理に処す等云々。殊に清和天皇は叡山の恵亮和尚の法威に依って位に即き、帝皇の外祖父・九条右丞相は誓状を叡山に捧ぐ。源右将軍は清和の末葉なり。鎌倉の御成敗、是非を論ぜず叡山に違背せば、天命恐れ有るものか。

しかるに、後鳥羽院の御字、建仁年中に法然・大日とて二人の増上慢の者有り。悪鬼その身に入って国中の上下を狂惑し、代を挙げて念仏者と成り、人ごとに禅宗に趣く。存外に山門の御帰依浅薄なり。国中の法華・真言の学者、棄て置かれ了わんぬ。故に、叡山守護の天照太神・正八幡宮・山王七社、国中守護の諸大善神、法味を餐わずして威光を失い、国土を捨て去り了わんぬ。悪鬼便りを得て災難を至し、結句、他国よりこの国を破るべき先相、勘うるところなり。

また、その後、文永元年甲子七月五日、彗星東方に出で、余光大体一国等に及ぶ。これまた世始まってより已来無きところの凶瑞なり。内外典の学者も、その凶瑞の根源を知らず。予、いよいよ悲歎を増長す。しかるに、勘文を捧げてより已後九箇年を経て、今年後正月、大蒙古国の国書を見るに、日蓮が勘文に相叶うこと、あたかも符契のごとし。

仏、記して云わく「我滅度して後一百余年を経て、阿育大王世に出で、我が舎利を弘めん」。周の

第四昭王の御宇、太史蘇由、記して云わく「一千年の外、声教この土に被らしめん」。聖徳太子、記して云わく「我滅度して後二百余年を経て、山城国に平安城を立つべし」。天台大師、記して云わく「我が滅後二百余年已後、東国に生まれて我が正法を弘めん」等云々。皆、果たして記の文のごとし。日蓮、正嘉の大地震、同じく大風、同じく飢饉、正元元年の大疫等を見て記して云わく「他国よりこの国を破るべき先相なり」と。自讃に似たりといえども、もしこの国土を毀壊せば、また仏法の破滅疑いなきものなり。

しかるに、当世の高僧等、謗法の者と同意の者なり。また自宗の玄底を知らざる者なり。定めて勅宣・御教書を給わってこの凶悪を祈請せんか。仏神いよいよ瞋恚を作し、国土を破壊せんこと疑いなきものなり。日蓮、また対治の方、これを知る。叡山を除いて日本国にはただ一人なり。譬えば、日月の二つ無きがごとし。聖人肩を並べざるが故なり。もしこのこと妄言ならば、日蓮が持つところの法華経守護の十羅刹の治罰、これを蒙らん。

ただひとえに、国のため、法のためにして、人のためにこれを申さず。また禅門に対面を遂ぐ。故にこれを告ぐ。これを用いざれば、定めて後悔有るべし。恐々謹言。

文永五年太歳戊辰四月五日　　日蓮　花押

法鑑御房

(005)

開目抄 上

文永9年(’72)2月　51歳
門下一同

夫れ、一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主・師・親これなり。また習学すべき物三つあり。いわゆる儒・外・内これなり。

儒家には、三皇・五帝・三王、これらを天尊と号す。諸臣の頭目、万民の橋梁なり。三皇已前は父をしらず、人皆禽獣に同じ。五帝已後は父母を弁えて孝をいたす。いわゆる、重華はかたくなわしき父をうやまい、沛公は帝となって太公を拝す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形をきざめり。これらは孝の手本なり。

比干は殷の世のほろぶべきを見て、しいて帝をいさめ、頭をはねらる。弘演といいし者は、懿公の肝をとって我が腹をさき肝を入れて死しぬ。これらは忠の手本なり。

尹寿は尭王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。これらを四聖とごうす。天尊頭をかたぶけ、万民掌をあわす。

これらの聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。その所詮は三玄をいでず。三玄とは、一には有の玄、周公等これを立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、荘子が玄これなり。玄

とは黒なり。父母未生已前をたずぬれば、あるいは元気よりして生じ、あるいは貴賤・苦楽・是非・得失等は皆自然なり等云々。

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり、かるがゆえに玄という。ただ現在ばかりしれるにたり。現在において仁・義を制して、身をまぼり、国を安んず。これに相違すれば族をほろぼし家を亡ぼす等いう。これらの賢聖の人々は、聖人なりといえども、過去をしらざること凡夫の背をみず、未来をかがみざること盲人の前をみざるがごとし。ただ現在に家を治め孝をいたし堅く五常を行ずれば、傍輩もうやまい、名も国にきこえ、賢王もこれを召してあるいは臣となし、あるいは師とたのみ、あるいは位をゆずり、天も来って守りつかう。いわゆる、周の武王には五老きたりつかえ、後漢の光武には二十八宿来って二十八将となりし、これなり。しかりといえども、過去・未来をしらざれば、父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。

孔子が「この土に賢聖なし。西方に仏図という者あり。これ聖人なり」といいて、外典を仏法の初門となせし、これなり。礼楽等を教えて、内典わたらば戒・定・慧をしりやすからせんがため、王臣を教えて尊卑をさだめ、父母を教えて孝の高きことをしらしめ、師匠を教えて帰依をしらしむ。妙楽大師云わく「仏教の流化、実にここに頼る。礼楽前に駆せて、真道後に啓く」等云々。

天台云わく「金光明経に云わく『一切世間のあらゆる善論は、皆この経に因る。もし深く世法を識らば、即ちこれ仏法なり』と」等云々。止観に云わく「我、三聖を遣わして、彼の真丹を化す」等云々。

弘決に云わく「清浄法行経に云わく『月光菩薩は、かしこに顔回と称し、光浄菩薩は、かしこに仲尼と称し、迦葉菩薩は、かしこに老子と称す』。天竺よりこの震旦を指して、かしことなす」等云々。

二には月氏の外道。三目八臂の摩醯首羅天、毘紐天、この二天をば、一切衆生の慈父・悲母、また天尊・主君と号す。迦毘羅・漚楼僧佉・勒娑婆、この三人をば、三仙となづく。これらは仏前八百年已前已後の仙人なり。

この三仙の所説を四韋陀と号す。六万蔵あり。乃至、仏出世に当たって、六師外道この外経を習伝して、五天竺の王の師となる。支流九十五・六等にもなれり。一々に流々多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心の堅きこと金石にも超えたり。その見の深きこと、巧みなるさま、儒家にはにるべくもなし。あるいは過去二生三生乃至七生、八万劫を照見し、また兼ねて未来八万劫を知る。その説くところの法門の極理は、あるいは「因の中に果有り」、あるいは「因の中に果無し」、あるいは「因の中に、また果有りまた果無し」等云々。これ外道の極理なり。

いわゆる、善き外道は、五戒十善戒等を持って有漏の禅定を修し、上、色・無色をきわめ、上界を涅槃と立てて屈歩虫のごとくせめのぼれども、非想天より返って三悪道に堕つ。一人として天に留まるものなし。しかれども、天を極むる者は永くかえらずとおもえり。

各々自師の義をうけて堅く執するゆえに、あるいは冬の寒きに一日に三度恒河に浴し、あるいは髪をぬき、あるいは厳に身をなげ、あるいは身を火にあぶり、あるいは五処をやく。あるいは裸形。あるいは馬を多く殺せば福をう。あるいは草木をやき、あるいは一切の木を礼す。これらの邪義、その

数をしらず。師を恭敬すること、諸天の帝釈をうやまい、諸臣の皇帝を拝するがごとし。しかれども、外道の法九十五種、善悪につけて一人も生死をはなれず。善師につかえては二生三生等に悪道に堕ち、悪師につかえては順次生に悪道に堕つ。

外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。ある外道云わく「千年已後、仏世に出ず」等云々。ある外道云わく「百年已後、仏世に出ず」等云々。大涅槃経に云わく「一切世間の外道の経書は、皆これ仏説にして外道の説にあらず」等云々。法華経に云わく「衆に三毒有りと示し、また邪見の相を現ず。我が弟子はかくのごとく、方便もて衆生を度す」等云々。

三には、大覚世尊はこれ一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。外典・外道の四聖・三仙、その名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、その名は賢なりといえども実には因果を弁えざること嬰児のごとし。彼を船として生死の大海をわたるべしや。彼を橋として六道の巷こえがたし。我が大師は、変易すらなおわたり給えり、いわんや分段の生死をや。元品の無明の根本なおかたぶけ給えり、いわんや見思の枝葉の麤惑をや。

この仏陀は、三十成道より八十御入滅にいたるまで五十年が間、一代の聖教を説き給えり。一字一句、皆真言なり。一文一偈、妄語にあらず。外典・外道の中の聖賢の言すら、いうことあやまりなし。事と心と相符えり。いわんや、仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人。されば、一代五十余年の説教は、外典・外道に対すれば大乗なり、大人の実語なるべし。初成道の始めより泥洹の夕べにいたるまで、説くところの所説、皆真実なり。

ただし、仏教に入って五十余年の経々、八万法蔵を勘えたるに、小乗あり大乗あり、権経あり実経あり。顕教・密教、軟語・麤語、実語・妄語、正見・邪見等の種々の差別あり。ただ法華経ばかり教主釈尊の正言なり、三世十方の諸仏の真言なり。大覚世尊は、四十余年の年限を指して、その内の恒河の諸経を「いまだ真実を顕さず」、八年の法華は「要ず当に真実を説きたもうべし」と定め給いしかば、多宝仏大地より出現して「皆これ真実なり」と証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く。この言、赫々たり、明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし。仰いで信ぜよ。伏して懐おもうべし。

ただし、この経に二箇の大事あり。倶舎宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもし知らず。華厳宗と真言宗との二宗はひそかに盗んで自宗の骨目とせり。一念三千の法門は、ただ法華経の本門寿量の品の文の底にしずめたり。竜樹・天親、知ってしかもいまだ拾い出ださず。ただ我が天台智者の懐みこれをいだけり。

一念三千は十界互具より事始ことはじまれり。法相と三論とは、八界を立てて十界をしらず。いわんや互具をしるべしや。倶舎・成実・律宗等は、阿含経によれり。六界を明らめて四界をしらず。「十方にただ一仏のみ有り」とて「一方に仏有り」とだにもあかさず。「一切の有情、ことごとく仏性有り」とこそとかざらめ。一人の仏性なおゆるさず。しかるを、律宗・成実宗等の「十方に仏有り」「仏性有り」なんど申すは、仏の滅後の人師等の、大乗の義を自宗に盗み入れたるなるべし。

例せば、外典・外道等は、仏前の外道は、仏教をききみて自宗の非を聞見浅

り、巧みの心出現して仏教を盗み取り自宗に入れて邪見もっともふかし。附仏教・学仏法成等これなり。外典もまたまたかくのごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家は、悠々ゆうゆうとして嬰児のごとくはかなかりしが、後漢已後に釈教わたりて対論の後、釈教漸く流布するほどに、釈教の僧侶、破戒のゆえに、あるいは還俗して家にかえり、あるいは俗に心をあわせ、儒道の内に釈教を盗み入れたり。止観の第五に云わく「今の世に多く悪魔の比丘有って、戒を退き家に還り、駆策を懼畏して、さらに道士に越済し、また名利を邀めて荘・老を誇談し、仏法の義をもって偸んで邪典に安き、高きを押して下きに就け、尊きを摧いて卑しきに入れ、概して平等ならしむ」云々。弘に云わく「比丘の身と作って仏法を破滅す。もしは『戒を退き家に還る』は衛元嵩等がごとし。即ち在家の身をもって仏法を破壊す。この人、正教を偸窃して邪典に助添す。『高きを押す』等とは、道士の心をもって二教の概となし、邪正をして等しからしむ。義としてこの理無し。かつて仏法に入って正を偸んで邪を助け、八万・十二の高きを押して五千・二篇の下きに就け、もって彼の典の邪鄙の教えを釈するを『尊きを摧いて卑しきに入る』と名づく」等云々。この釈を見るべし。次上の心なり。

仏教またかくのごとし。後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典立つ。内典に南三北七の異執おこりて蘭菊なりしかども、陳・隋の智者大師に打ちやぶられて、仏法二たび群類をすくう。その後、法相宗・真言宗、天竺よりわたり、華厳宗また出来せり。これらの宗々の中に、法相宗は一向天台宗に敵を成す宗、法門水火なり。しかれども、玄奘三蔵・慈恩大師、委細に天台の御釈を見るほどに、自宗の邪見ひるがえるかのゆえに、自宗をばすてねども、その心天台に帰伏すと

見えたり。

華厳宗と真言宗とは、本は権経・権宗なり。善無畏三蔵、金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗みとって自宗の肝心とし、その上に印と真言とを加えて超過の心をおこす。その子細をしらぬ学者等は、「天竺より大日経に一念三千の法門ありけり」とうちおもう。華厳宗は、澄観が時、華厳経の「心は工みなる画師のごとし」の文に天台の一念三千の法門を偸み入れたり。人これをしらず。

日本、我が朝には、華厳等の六宗、天台・真言已前にわたりけり。華厳・三論・法相、諍論水火なりけり。伝教大師この国にいでて六宗の邪見をやぶるのみならず、真言宗が天台の法華経の理を盗み取って自宗の極とすることあらわれおわんぬ。

伝教大師、宗々の人師の異執をすてて、専ら経文を前として責めさせ給いしかば、六宗の高徳八人・十二人・十四人・三百余人ならびに弘法大師等せめおとされて、日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州の山寺、皆、叡山の末寺となりぬ。また漢土の諸宗の元祖の、天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたることもあらわれぬ。

また、その後ようやく世おとろえ、人の智あさくなるほどに、天台の深義は習いうしないぬ。他宗の執心は強盛になるほどに、ようやく六宗・七宗に天台宗おとされてよわりゆくかのゆえに、結句は六宗・七宗等にもおよばずいうにかいなき禅宗・浄土宗におとされて、始めは檀那ようやくかの邪宗にうつる。結句は、天台宗の碩徳と仰がるる人々、みなおちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに、六宗・八宗の田畠・所領みなたおされ、正法失せはてぬ。天照太神・正八幡・山王等、諸の守護の諸

大善神も、法味をなめざるか、国中を去り給うかの故に、悪鬼便りを得て国すでに破れなんとす。

ここに、予、愚見をもって前四十余年と後八年との相違をかんがえみるに、その相違多しといえども、まず世間の学者もゆるし我が身にもさもやとうちおぼうることは、二乗作仏・久遠実成なるべし。

法華経の現文を拝見するに、舎利弗は華光如来、迦葉は光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、目連は多摩羅跋梅檀香仏、富楼那は法明如来、阿難は山海慧自在通王仏、羅睺羅は蹈七宝華如来、五百・七百は普明如来、学・無学二千人は宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼等は一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり。これらの人々は、法華経を拝見したてまつるには尊きようなれども、爾前の経々を披見の時は、きょうさむることどもおおし。

その故は、仏世尊は実語の人なり。故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙なんど申すは、実語につけたる名なるべし。これらの人々に勝れて第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。この大人、「ただ一大事の因縁をもっての故に、世に出現したもう」となのらせ給いて、「いまだ真実を顕さず」「世尊は法久しくしくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「正直に方便を捨つ」等云々。多宝仏証明を加え、分身舌を出だす等は、舎利弗が未来の華光如来、迦葉が光明如来等の説をば、誰の人か疑網をなすべき。

しかれども、爾前の諸経もまた仏陀の実語なり。大方広仏華厳経に云わく「如来の智慧・大薬王樹はただ二処においてのみ生長の利益をなすこと能わず。いわゆる二乗の無為広大の深坑に堕つると、および善根を壊る非器の衆生の大邪見・貪愛の水に溺るるとなり」等云々。この経文の心は、雪山に

大樹あり、無尽根となづく。これを大薬王樹と号す。閻浮提の諸木の中の大王なり。この木の高さは十六万八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は、この木の根ざし・枝葉・花菓の次第に随って花菓なるなるべし。この木をば仏の仏性に譬えたり。一切衆生をば一切の草木にたとう。ただし、この大樹は火坑と水輪の中に生長せず。二乗の心中をば火坑にたとえ、一闡提人の心中をば水輪にたとえたり。この二類は永く仏になるべからずと申す経文なり。

大集経に云わく「二種の人有り、必ず死して活きず。畢竟して恩を知り恩を報ずること能わず。一には声聞、二には縁覚なり。譬えば、人有って深坑に堕墜するに、この人自ら利し他を利すること能わざるがごとし。声聞・縁覚もまたかくのごとし。解脱の坑に堕ちて、自ら利しおよび他を利すること能わず」等云々。

外典三千余巻の所詮に二つあり。いわゆる、孝と忠となり。忠もまた孝の家よりいでたり。孝と申すは高なり。天高けれども、孝よりも高からず。また孝とは厚なり。地あつけれども、孝よりは厚からず。聖賢の二類は孝の家よりいでたり。いかにいわんや、仏法を学せん人、知恩・報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をしって知恩・報恩をいたすべし。

その上、舎利弗・迦葉等の二乗は、二百五十戒・三千の威儀を持整して、味・浄・無漏の三静慮、阿含経をきわめ、三界の見思を尽くせり。知恩・報恩の人の手本なるべし。しかるを、不知恩の人なりと世尊定め給いぬ。その故は、父母の家を出でて出家の身となるは、必ず父母をすくわんがためなり。二乗は、自身は解脱とおもえども、利他の行かけぬ。たとい分々の利他ありといえども、父母等

を永不成仏の道に入るれば、かえりて不知恩の者となる。

維摩経に云わく「維摩詰、また文殊師利に問う。何らをか如来の種となす。答えて曰わく〇一切の塵労の疇は如来の種となる。五無間をもって具すといえども、なお能くこの大道意を発す」等云々。また云わく「譬えば、族姓の子よ、高原陸土には青蓮・芙蓉・衡華を生ぜず、卑湿汚田には乃ちこの華を生ずるがごとし」等云々。また云わく「すでに阿羅漢を得て応真となる者は、終にまた道意を起こして仏法を具すること能わざるなり。根敗の士は、それ五楽においてまた利すること能わざるがごとし」等云々。文の心は、貪・瞋・癡等の三毒は仏の種となるべし、父を殺す等の五逆罪は仏種となるべし、高原陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず。

いう心は、二乗の諸善と凡夫の悪と相対するに、凡夫の悪は仏になるとも二乗の善は仏にならじとなり。諸の小乗経には、悪をいましめ、善をほむ。この経には、二乗の善をそしり、凡夫の悪をほめたり。かえって仏経ともおぼえず、外道の法門のようなれども、詮ずるところは二乗の永不成仏を強つよく定めさせ給うにや。

方等陀羅尼経に云わく「文殊、舎利弗に語らく『なお枯樹のごときは、さらに花を生ずるや不や。また山水のごときは、本の処に還るや不や。折石還って合うや不や。燋種芽を生ずるや不や』。舎利弗言わく『不なり』。文殊言わく『もし得べからずんば、いかんぞ我に菩提の記を得ることを問うて歓喜を生ずるや』と」等云々。文の心は、枯れたる木花さかず、山水山にかえらず、破れたる石あわず、いれる種おいず。二乗またかくのごとし。仏種をいれり等となん。

大品般若経に云わく「諸の天子よ。今いまだ三菩提心を発さざる者は応当に発すべし。もし声聞の正位に入らば、この人は三菩提心を発すこと能わざるなり。何をもっての故に。生死のために障隔を作すが故なり」等云々。文の心は、二乗は菩提心をおこさざれば、我随喜せじ。諸天は菩提心をおこせば、我随喜せん。

首楞厳経に云わく「五逆罪の人、この首楞厳三昧を聞いて阿耨菩提心を発せば、還って仏と作ることを得。世尊よ。漏尽の阿羅漢はなお破器のごとく、永くこの三昧を受くるに堪忍せず」等云々。

浄名経に云わく「それ汝に施さば、福田と名づけず。汝を供養せば、三悪道に堕つ」等云々。文の心は、迦葉・舎利弗等の聖僧を供養せん人天等は必ず三悪道に堕つべしとなり。

これらの聖僧は、仏陀を除きたてまつりては人天の眼目・一切衆生の導師とこそ思いしに、いくばくの人天大会の中にして、こう度々仰せられしは本意なかりしことなり。ただ詮ずるところは我が御弟子を責めころさんとにや。この外、牛驢の二乳、瓦器・金器、蛍火・日光等の無量の譬えをとって二乗を呵責せさせ給いき。一言二言ならず、一日二日ならず、一月二月ならず、一年二年ならず、一経二経ならず、四十余年が間、無量無辺の経々に、無量の大会の諸人に対して一言もゆるし給うこともなくそしり給いしかば、世尊の不妄語なり。我もしる、人もしる、天もしる、地もしる。一人二人ならず百千万人、三界の諸天・竜神・阿修羅、五天・四洲、六欲・色・無色、十方世界より雲集せる人天・二乗・大菩薩等、皆これをしる、また皆これをきく。各々国々へ還って、娑婆世界の釈尊の説法を彼々の国々にして一々にかたるに、十方無辺の世界の一切衆生一人もなく、迦葉・舎利弗等は永

不成仏の者、供養してはあしかりぬべしとしりぬ。

しかるを、後八年の法華経にたちまちに悔い還して、二乗作仏すべしと仏陀とかせ給わんに、人天大会、信仰をなすべしや。用いるべからざる上、先後の経々に疑網をなし、五十余年の説教、皆虚妄の説となりなん。されば、「四十余年にはいまだ真実を顕さず」等の経文はあらまさせか、「天魔の仏陀と現じて、後八年の経をばとかせ給うか」と疑網するところに、げにげにしげに劫・国・名号と申して二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、所化の弟子なんどを定めさせ給えば、教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲いしことこれなり。

人天大会きょうさめてありしほどに、その時に東方宝浄世界の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の大七宝塔に乗じて、教主釈尊の、人天大会に自語相違をせめられて、とのべ、こうのべ、さまざまに宣べさせ給いしかども、不審なおはるべしとも見えず、もてあつかいておわせし時、仏前に大地より涌現して虚空にのぼり給う。例せば、暗夜に満月の東山より出ずるがごとし。七宝の塔、大虚にかからせ給いて、大地にもつかず、大虚にも付かせ給わず、天中に懸かって、宝塔の中より梵音声を出だして証明して云わく「その時、宝塔の中より大音声を出だして、歎めて言わく『善きかな、善きかな。釈迦牟尼世尊は、能く平等大慧、菩薩を教うる法にして、仏の護念したもうところの妙法華経をもって、大衆のために説きたもう。かくのごとし、かくのごとし。釈迦牟尼世尊の説きたもうところのごときは、皆これ真実なり』と」等云々。また云わく「その時、世尊は、文殊師利等、無量百千万億の旧より娑婆世界に住せる菩薩乃至人・非人等、一切の衆の前において、大神力を現じたも

う。広長舌を出だして、上梵世に至らしめ、一切の毛孔より乃至十方の世界の衆の宝樹の下、師子座の上の諸仏もまたかくのごとく、広長舌を出だし、無量の光を放ちたもう」等云々。また云わく「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして、各本土に還らしめんとして乃至多宝仏の塔は、還って故のごとくしたもうべし」等云々。

大覚世尊初成道の時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭し給う上、諸の大菩薩を遣わしき。般若経の御時は、釈尊長舌を三千におおい、千仏十方に現じ給う。金光明経には四方の四仏現ぜり。阿弥陀経には六方の諸仏、舌を三千におおう。大集経には十方の諸の仏菩薩、大宝坊にあつまれり。

これらを法華経に引き合わせてかんがうるに、黄石と黄金と、白雲と白山と、白氷と銀鏡と、黒色と青色とをば、翳眼の者、眇目の者、一眼の者、邪眼の者は見たがえつべし。

華厳経には、先後の経なければ仏語相違なし。なににつけてか大疑いで来べき。大集経・大品経・金光明経・阿弥陀経等は、諸小乗経の二乗を弾呵せんがために十方に浄土をとき、凡夫・菩薩を欣慕せしめ、二乗をわずらわす。小乗経と諸大乗経と一分の相違あるゆえに、あるいは十方に仏現じ給い、あるいは十方より大菩薩をつかわし、あるいは十方世界にもこの経をとくよしをしめし、あるいは十方より諸仏あつまり給う。あるいは釈尊舌を三千におおい、あるいは諸仏の舌をいだすよしをとかせ給う。これひとえに、諸小乗経の「十方世界にただ一仏のみ有り」ととかせ給いしおもいをやぶるなるべし。法華経のごとくに先後の諸大乗経と相違出来して、舎利弗等の諸の声聞・大菩薩・人天等に「はた、魔の仏と作るにあらずや」とおもわれさせ給う大事にはあらず。

しかるを、華厳・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼々の経々と法華経とは同じとうちおもえるは、つたなき眼なるべし。

ただし、在世は四十余年をすてて法華経につき候ものもやありけん。仏の滅後にこの経文を開見して信受せんことかたかるべし。

まず一には、爾前の経々は多言なり、法華経は一言なり。爾前の経々は多経なり、この経は一経なり。彼々の経々は多年なり、この経は八年なり。仏は大妄語の人、永く信ずべからず。不信の上に信を立てば、爾前の経々は信ずることもありなん。法華経は永く信ずべからず。当世も、法華経をば皆信じたるようなれども、法華経にてはなきなり。その故は、法華経と大日経と、法華経と華厳経と、法華経と阿弥陀経と一なるようをとく人をば悦んで帰依し、別々なるなんど申す人をば用いず。たとい用いれども、本意なきこととおもえり。

日蓮云わく「日本に仏法わたりてすでに七百余年、ただ伝教大師一人ばかり法華経をよめり」と申すをば、諸人これを用いず。ただし、法華経に云わく「もし須弥を接って、他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず乃至もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの経を説かば、これは則ち難しとなす」等云々。日蓮が強義、経文には符合せり。法華経の流通たる涅槃経に「末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとし」ととかれて候は、いかんがし候べき。日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく思惟あるべし。賢王の世には道理かつべし、愚主の世に非道先をすべし、聖人の世に法華経の実義顕るべし等と心

得うべし。

この法門は、迹門と爾前と相対して爾前の強きようにおぼゆ。もし爾前つよるならば、舎利弗等の諸の二乗は永不成仏の者なるべし。いかんがなげかせ給うらん。

二には、教主釈尊は、住劫第九の減・人寿百歳の時、師子頬王には孫、浄飯王には嫡子、童子悉達太子、一切義成就菩薩これなり。御年十九の御出家、三十成道の世尊、始め寂滅道場にして実報華王の儀式を示現して、十玄・六相・法界円融・頓極微妙の大法を説き給い、十方の諸仏も顕現し、一切の菩薩も雲集せり。土といい、機といい、諸仏といい、始めといい、何事につけてか大法を秘し給うべき。されば、経文には「自在力を顕現し、円満なる経を演説す」等云々。一部六十巻は一字一点もなく円満なる経なり。譬えば、如意宝珠は一珠も無量珠も共に同じ、一珠も万宝を尽くして雨らし、万珠も万宝を尽くすがごとし。華厳経は一字も万字もただ同じき事なるべし。「心、仏および衆生」の文は、華厳宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候え。

これら程いみじき御経に何事をか隠すべきなれども、「二乗と闡提とは成仏せず」ととかれしは珠のきずとみゆる上、三処まで「始めて正覚を成ず」となのらせ給いて、久遠実成の寿量品を説きかくさせ給いき。珠の破れたると、月に雲のかかれると、日の蝕したるがごとし。不思議なりしことなり。阿含・方等・般若・大日経等は、仏説なればいみじきことなれども、華厳経にたいすればいうにかいなし。彼の経に秘せんこと、これらの経々にとかるべからず。されば、諸の阿含経に云わく「初めて成道す」等云々。大集経に云わく「如来成道してより始めて十六年なり」等云々。浄名経に云わ

く「始め仏樹に坐して、力めて魔を降す」等云々。大日経に云わく「我は昔道場に坐す」等云々。般若・仁王経に云わく「二十九年」等云々。

これらは言うにたらず。ただ耳目をおどろかすことは、無量義経に華厳経の唯心法界、方等・般若経の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて、あるいは「いまだ真実を顕さず」、あるいは「歴劫修行」等と下す程の御経に、「我は先に道場菩提樹の下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と、初成道の華厳経の始成の文に同ぜられし、不思議と打ち思うところに、これは法華経の序分なれば、正宗のことをいわずもあるべし。法華経の正宗、略開三・広開三の御時、「ただ仏と仏とのみ、いまし能く諸法の実相を究尽したまえり」等、「世尊は法久しくして後」等、「正直に方便を捨つ」等、多宝仏、迹門八品を指して「皆これ真実なり」と証明せられしに、何事をか隠すべきなれども、久遠寿量をば秘せさせ給いて、「我は始め道場に坐し、樹を観じまた経行す」等云々。最第一の大不思議なり。

されば、弥勒菩薩、涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を仏「しかして乃ちこれを教化して、初めて道心を発さしむ」等ととかせ給いしを、疑って云わく「如来は太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。これより已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊よ。いかんぞこの少時において、大いに仏事を作したまえる」等云々。

教主釈尊、これらの疑いを晴らさんがために寿量品をとかんとして、爾前・迹門のききを挙げて云

わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。正しくこの疑いを答えて云わく「しかるに、善男子よ、我は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。

華厳乃至般若、大日経等は、二乗作仏を隠すのみならず、久遠実成を説きかくさせ給えり。

これらの経々に二つの失あり。一には、「行布を存するが故に、なおいまだ権を開せず」とて、迹門の一念三千をかくせり。二には、「始成を言うが故に、かつていまだ迹を発かず」とて、本門の久遠をかくせり。これらの二つの大法は、一代の綱骨、一切経の心髄なり。

迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて、爾前二種の失一つを脱れたり。しかりといえども、いまだ発迹顕本せざれば、まことの一念三千もあらわれず、二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし。根なし草の波の上に浮かべるににたり。

本門にいたりて始成正覚をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。爾前・迹門の十界の因果を打ちやぶって、本門の十界の因果をとき顕す。これ即ち本因本果の法門なり。九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備わって、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

こうてかえりみれば、華厳経の台上十方、阿含経の小釈迦、方等・般若の、金光明経の、阿弥陀経の、大日経等の権仏等は、この寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮かべ給うを、諸宗の学

者等、近くは自宗に迷い、遠くは法華経の寿量品をしらず、水中の月に実月の想いをなし、あるいは入って取らんとおもい、あるいは縄をつけてつなぎとどめんとす。天台云わく「天月を識らず、ただ池月のみを観ず」等云々。

日蓮案じて云わく、二乗作仏すらなお爾前づよにおぼゆ。久遠実成はまたにるべくもなき爾前づりなり。その故は、爾前・法華相対するに、なお爾前こわき上、爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除いては皆始成を存せり。双林最後の大般涅槃経四十巻、その外の法華前後の諸大乗経に一字一句もなく法身の無始無終はとけども応身・報身の顕本はとかれず。いかんが、広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乗経をばすてて、ただ涌出・寿量の二品には付くべき。

されば、法相宗と申す宗は、西天に仏の滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に対面して一代聖教の不審をひらき、昼は阿輸舎国にして法相の法門を弘め給う。彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王頭をかたぶけ、五天幢を倒してこれに帰依す。尸那国の玄奘三蔵、月氏にいたりて十七年、印度百三十余の国々を見ききて諸宗をばふりすて、この宗を漢土にわたして太宗皇帝と申す賢王にさずけ給い、昉・尚・光・基を弟子として大慈恩寺ならびに三百六十余箇国に弘め給う。日本国には人王三十七代孝徳天皇の御宇に道慈・道昭等ならいわたして山階寺にあがめ給えり。三国第一の宗なるべし。

この宗云わく「始め華厳経より終わり法華・涅槃経にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず。仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給いぬる上は、日月は地に落ち給うとも、

大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。されば、法華経・涅槃経の中にも爾前の経々に嫌いし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとはとかれず。まず眼を閉じて案ぜよ。法華経・涅槃経に、決定性・無性有情、正しく仏になるならば、無著・世親ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの三蔵・人師、これをみざるべしや、これをのせざるべしや、これを信じて伝えざるべしや、弥勒菩薩に問いたてまつらざるべしや。汝は法華経の文に依るようなれども、天台・妙楽・伝教の僻見を信受して、その見をもって経文をみるゆえに、爾前に法華経は水火なりと見るなり」。

華厳宗と真言宗は、法相・三論にはにるべくもなき超過の宗なり。「二乗作仏・久遠実成は法華経に限らず、華厳経・大日経に分明なり。華厳宗の杜順・智儼・法蔵・澄観、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は、天台・伝教にはにるべくもなき高位の人なり。その上、善無畏等は大日如来より糸みだれざる相承あり。これらの権化の人、いかでか誤りあるべき。したがって、華厳経には『我は一切の本初なり』等云々。大日経には『我は一切の本初なり』等云々。何ぞ、ただ久遠実成、寿量品に限らん。譬えば、井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝、ただ寿量の一品を見て、華厳・大日経等の諸経をしらざるか。その上、月氏・尸那・新羅・百済等にも一同に二乗作仏・久遠実成は法華経に限るというか」。

されば、八箇年の経は四十余年の経々には相違せりというとも、先判・後判の中には後判につくべしというとも、なお爾前づりにこそおぼうれ。また、ただ在世ばかりならばさもあるべきに、滅後に居せる論師・人師、多くは爾前づりにこそ候え。

こう法華経は信じがたき上、世もようやく末になれば、聖賢はようやく隠れ、迷者はようやく多し。世間の浅きことすら、なおあやまりやすし。いかにいわんや、出世の深法誤りなかるべしや。犢子・方広が聡敏なりし、なお大小乗経にあやまてり。無垢・摩沓が利根なりし、権実二教を弁えず。正法一千年の内、在世も近く月氏の内なりし、すでにかくのごとし。いわんや、尸那・日本等は、国隔もへだて、音もかわれり。人の根も鈍なり。寿命も日あさし。貪・瞋・癡も倍増せり。仏世を去って年とし久し。仏経みなあやまれり。誰の智解か直かるべき。

仏涅槃経に記して云わく「末法には正法の者は爪上の土、謗法の者は十方の土」と見えぬ。法滅尽経に云わく「謗法の者は恒河沙、正法の者は一・二の小石」と記しおき給う。千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたからん。世間の罪によって悪道に堕つる者は爪上の土、仏法によって悪道に堕つる者は十方の土。俗より僧、女より尼、多く悪道に堕つべし。

ここに日蓮案じて云わく、世すでに末代に入って二百余年、辺土に生をうく。その上下賤、その上貧道の身なり。輪廻六趣の間、人天の大王と生まれて万民をなびかすこと、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にならず。大小乗経の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり、一劫二劫無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も、強盛の悪縁におとされて仏にもならず。しらず、大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転して今に来れるか。法華経を行ぜしほどに、世間の悪縁・王難・外道の難・小乗経の難なんどは忍びしほどに、権大乗・実大乗経を極めたるような道綽・善導・法然等がごとくなる悪魔の身に入りたる者、法華経をつよくほめあげ機をあながちに

下し、「理は深く解は微かなり」と立て、「いまだ一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」等とすかししものに、無量生が間、恒河沙の度すかされて権経に堕ちぬ。権経より小乗経に堕ちぬ。外道・外典に堕ちぬ。結句は悪道に堕ちけりと、深くこれをしれり。

日本国にこれをしれる者、ただ日蓮一人なり。

これを一言も申し出だすならば、父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず来るべし、いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華経・涅槃経等にこの二辺を合わせ見るに、いわずば今生は事なくとも後生は必ず無間地獄に堕つべし、いうならば三障四魔必ず競い起こるべしとしんぬ。二辺の中にはいうべし。王難等出来の時は退転すべくば一度に思い止まるべしと、しばらくやすらいしほどに、宝塔品の六難九易これなり。我ら程の小力の者、須弥山はなぐとも、我ら程の無通の者、乾ける草を負って劫火にはやけずとも、我ら程の無智の者、恒沙の経々をばよみおぼうとも、法華経は一句一偈も末代に持ちがたしととかるるは、これなるべし。今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願じぬ。

既に二十余年が間この法門を申すに、日々・月々・年々に難かさなる。少々の難はかずしらず、大事の難四度なり。二度はしばらくおく。王難すでに二度におよぶ。今度はすでに我が身命に及ぶ。その上、弟子といい、檀那といい、わずかの聴聞の俗人なんど来って重科に行わる。謀反なんどの者のごとし。

法華経の第四に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」等云々。第二に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐か

ん」等云々。第五に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」等云々。また云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等するもの有らん」。また云わく「国王・大臣・婆羅門・居士に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人』と謂わん」。また云わく「しばしば擯出せられん」等云々。また云わく「杖木・瓦石もて、これを打擲せん」等云々。涅槃経に云わく「その時、多く無量の外道有って、和合して共に摩訶陀国の王・阿闍世の所に往きぬ○『今、ただ一りの大悪人有り、瞿曇沙門なり○一切の世間の悪人は、利養のための故に、その所に往き集まって眷属となり、善を修すること能わず。呪術の力の故に、迦葉および舎利弗・目犍連等を調伏す』と」云々。天台云わく「いかにいわんや未来をや。理、化し難きに在るなり」等云々。妙楽云わく「障りいまだ除かざる者を怨となし、聞くことを喜ばざる者を嫉と名づく」等云々。

南三北七の十師、漢土の無量の学者、天台を怨敵とす。得一云わく「咄いかな智公よ。汝はこれ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根をもって、覆面舌の所説を謗ず」等云々。東春に云わく「問う。在世の時そこばくの怨嫉あり。仏滅度の後この経を説く時、何が故ぞまた留難多きや。答えて曰わく、俗に良薬口に苦しと云うがごとく、この経は五乗の異執を廃して一極の玄宗を立つ。故に、凡を斥け聖を呵し、大を排し小を破し、天魔を銘じて毒虫となし、外道を説いて悪鬼となし、執小を貶って貧賤となし、菩薩を拙めて新学となす。故に、天魔は聞くことを悪み、外道は耳に逆らい、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す。かくのごときの徒、ことごとく留難をなす。『怨嫉多し』の言、あに唐しからんや」等云々。顕戒論に云わく「僧統奏して曰わく『西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く禿頭沙門あ

り。これ乃ち物類冥召して世間を誑惑す』等云々。論じて曰わく○昔は斉朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。実なるかな、法華の『いかにいわんや』は」等云々。秀句に云わく「代を語れば則ち像の終わり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・闘諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るなり」等云々。

夫れ、小児に灸治を加うれば、必ず父母をあだむ。重病の者に良薬をあたうれば、定めて口に苦し憂とうれう。在世なおしかり、乃至像末辺土をや。山に山をかさね、波に波をたたみ、難に難を加え、非に非をますべし。

像法の中には天台一人、法華経・一切経をよめり。南北これをあだみしかども、陳・隋二代の聖主、眼前に是非を明らめしかば、敵ついに尽きぬ。像の末に伝教一人、法華経・一切経を仏説のごとく読み給えり。南都七大寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の賢主、我と明らめ給いしかば、また事なし。今、末法の始め二百余年なり。「いわんや滅度して後をや」のしるしに、闘諍の序となるべきゆえに、非理を前として、濁世のしるしに、召し合わせられずして、流罪乃至寿にもおよばんとするなり。

されば、日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶことなけれども、難を忍び慈悲のすぐれたることはおそれをもいだきぬべし。定めて天の御計らいにもあずかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。還ってこのことを計りみれば、我が身の法華経の行者にあらざるか、また諸天善神等のこの国をすてて去り給えるか、かたがた疑わし。

しかるに、法華経の第五の巻の勧持品の二十行の偈は、日蓮だにもこの国に生まれずば、ほとう

世尊は大妄語の人、八十万億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし。

経に云わく「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、刀杖・瓦石を加うるもの有らん」等云々。今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、誰れの人か、法華経につけて諸人に悪口・罵詈せられ、刀杖等を加えらるる者ある。日蓮なくば、この一偈の未来記は妄語となりぬ。「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲なり」。また云わく「白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん」。これらの経文は、今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師なくば、世尊はまた大妄語の人。「常に大衆の中に在って乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向かって」等。今の世の僧等、日蓮を讒奏して流罪せずば、この経文むなし（虚）。また云わく「数々見擯出（しばしば擯出せられん）」等云々。日蓮、法華経のゆえに度々ながされずば、「数々」の二字いかんがせん。この二字は天台・伝教もいまだよみ給わず（読）。いわんや余人をや。末法の始めのしるし（証）「恐怖悪世の中」の金言のあうゆえに、ただ日蓮一人これをよめり（合）。

例せば、世尊、付法蔵経に記して云わく「我が滅後一百年に阿育大王という王あるべし」。摩耶経に云わく「我が滅後六百年に竜樹菩薩という人、南天竺に出ずべし」。大悲経に云わく「我が滅後六十年に末田地という者、地を竜宮につく（築）べし」。これら、皆、仏記のごとくなりき（読）。しからずば、誰か仏教を信受すべき。しかるに、仏、「恐怖悪世」「しかる後の未来世」「末世の法滅せん時」「後の五百歳」なんど、正・妙の二本に正しく時を定めたもう。当世、法華の三類の強敵なくば、誰か仏説を信受せん。日蓮なくば、誰をか法華経の行者として仏語をたすけん（助）。南三北七・七大寺等、なお像法

の法華経の敵の内、いかにいわんや、当世の禅・律・念仏者等は脱るべしや。

経文に我が身符合せり。御勘気をかほれば、いよいよ悦びをますべし。例せば、小乗の菩薩の未断惑なるが、願兼於業と申して、つくりたくなき罪なれども、父母等の地獄に堕ちて大苦をうくるを見て、かたのごとくその業を造って、願って地獄に堕ちて苦しむに、同じ苦に代われるを悦びとするがごとし。これもまたかくのごとし。当時の責めはたうべくもなけれども、未来の悪道を脱すらんとおもえば悦びなり。

ただし、世間の疑いといい、自心の疑いと申し、いかでか天扶け給わざるらん。諸天等の守護神は仏前の御誓言あり。法華経の行者には、さるになりとも法華経の行者とごうして、早々に仏前の御誓言をとげんとこそおぼすべきに、その義なきは我が身法華経の行者にあらざるか。この疑いはこの書の肝心、一期の大事なれば、処々にこれをかく上、疑いを強くして答えをかまうべし。

季札といいし者は、心のやくそくをたがえじと、王の重宝たる剣を徐君が墓にかく。王寿といいし人は河の水を飲んで金の鵝目を水に入れ、弘演といいし人は腹をさいて主君の肝を入る。これらは賢人なり。恩をほうずるなるべし。

いわんや、舎利弗・迦葉等の大聖は、二百五十戒・三千の威儀一つもかけず、見思を断じ三界を離れたる聖人なり。梵帝諸天の導師、一切衆生の眼目なり。しかるに、四十余年が間「永不成仏」と嫌いすてはてられてありしが、法華経の不死の良薬をなめて、燋れる種の生い、破れる石の合い、枯れたる木の花菓なんどせるがごとく、仏になるべしと許されて、いまだ八相をとなえず。いかでか、こ

の経の重恩をばほうぜざらん。もしほうぜずば、彼々の賢人にもおとりて、不知恩の畜生なるべし。毛宝が亀はあおの恩をわすれず、昆明池の大魚は命の恩をほうぜんと明珠を夜中にささげたり。畜生すらなお恩をほうず。いかにいわんや大聖をや。阿難尊者は斛飯王の次男、羅睺羅尊者は浄飯王の孫なり。人中に家高き上、証果の身となって成仏をおさえられたりしに、八年の霊山の席にて山海慧・蹈七宝華なんど如来の号をさずけられ給う。もし法華経ましまさずば、いかにいえたかく大聖なりとも、誰か恭敬したてまつるべき。

夏の桀・殷の紂と申すは、万乗の主・土民の帰依なり。しかれども、政あしくして世をほろぼせしかば、今にわるきものの手本には「桀紂、桀紂」とこそ申せ。下賤の者、癩病の者も「桀紂のごとし」といわれぬれば、のられたりと腹たつなり。千二百・無量の声聞は、法華経ましまさずば、誰か名をもきくべき、その音をも習うべき。一千の声聞、一切経を結集せりとも、見る人もよもあらじ。ましてこれらの人々を絵像・木像にあらわして本尊と仰ぐべしや。これひとえに、法華経の御力によって一切の羅漢帰依せられさせ給うなるべし。

諸の声聞、法華をはなれさせ給いなば、魚の水をはなれ、猿の木をはなれ、小児の乳をはなれ、民の王をはなれたるがごとし。いかでか法華経の行者をすて給うべき。諸の声聞は爾前の経々にては肉眼の上に天眼・慧眼をう。法華経にして法眼・仏眼備われり。十方世界すらなお照見し給うらん。いかにいわんや、この娑婆世界の中、法華経の行者を知見せられざるべしや。たとい、日蓮、悪人にて、一言二言、一年二年、一劫二劫乃至百千万億劫、これらの声聞を悪口・罵詈し奉り、刀杖を加

えまいらする色なりとも、法華経をだにも信仰したる行者ならば、捨て給うべからず。譬えば、幼稚の父母をのる、父母これをすつるや。梟鳥母を食らう、母これをすてず。破鏡父をがいす、父これに従したがう。畜生すら、なおかくのごとし。大聖、法華経の行者を捨つべしや。

されば、四大声聞の領解の文に云わく「我らは今、真にこれ声聞なり。仏道の声をもって、一切を聞かしめん。我らは今、真に阿羅漢なり。諸の世間、天・人・魔・梵において、あまねくその中において、応に供養を受くべし。世尊は大恩まします。希有の事をもって、憐愍・教化して、我らを利益したもう。無量億劫にも、誰か能く報ずる者あらん。手足もて供給し、頭頂もて礼敬し、一切もて供養すとも、皆報ずること能わじ。もしもって頂戴し、両肩に荷負して、恒沙劫において、心を尽くして恭敬し、また美膳・無量の宝衣および諸の臥具、種々の湯薬をもってし、牛頭栴檀および諸の珍宝、もって塔廟を起て、宝衣を地に布き、かくのごとき等の事、もって供養すること恒沙劫においてすとも、また報ずること能わじ」等云々。

諸の声聞等は、前四味の経々にいくそばくぞの呵責を蒙り、人天大会の中にして恥辱がましきこと、その数をしらず。しかれば、迦葉尊者の涕泣の音は三千をひびかし、須菩提尊者は茫然として手の一鉢をすつ。舎利弗は飯食をはき、富楼那は画瓶に糞を入ると嫌わる。世尊、鹿野苑にしては阿含経を讃歎し、二百五十戒を師とせよなんど慇懃にほめさせ給いて、今またいつのまに我が所説をばこうはそしらせ給うと、二言相違の失とも申しぬべし。

例せば、世尊、提婆達多を「汝愚人、人の唾を嘗らう」と罵詈せさせ給いしかば、毒箭の胸に入っ

がごとくおもいて、恨うらみて云わく「瞿曇は仏陀にはあらず。我は斛飯王の嫡子、阿難尊者が兄、瞿曇が一類なり。いかにあしきことありとも、悪内々教訓すべし。これら程の人天大会に、これ程の大禍を現に向かって申すもの、大人・仏陀の中にあるべしや。されば、先々は妻のかたき、今は一座のかたき、今日よりは生々世々に大怨敵となるべし」と誓いしぞかし。

これをもって思うに、今諸の大声聞は、本、外道・婆羅門の家より出でたり。また諸の外道の長者なりしかば、諸王に帰依せられ、諸の檀那にたっとまる。あるいは種姓高貴の人もあり、あるいは富福充満のやからもあり。しかるに、彼々の栄官等をうちすてて一鉢を手ににぎり、貧人・乞丐なんどのごとくして世尊につき奉り、風雨を防ぐ宅もなく、身命をつぐ衣食乏少なりしありさまなるに、五天四海、皆外道の弟子檀那なれば、仏すら九横の大難にあい給う。いわゆる、提婆が大石をとばせし、阿闍世王の酔象を放ちし、阿耆多王の馬麦、婆羅門城のこんず、せんしゃ婆羅門女が鉢を腹にふせし。いかにいわんや、所化の弟子の数難申すばかりなし。無量の釈子は波瑠璃王に殺され、千万の眷属は酔象に踏まれ、華色比丘尼は提婆にがいせられ、迦盧提尊者は馬糞にうずまれ、目捷尊者は竹杖にがいせらる。

その上、六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云わく「瞿曇は閻浮第一の大悪人なり。彼が至いたる処は三災七難を前とす。大海の衆流をあつめ、大山の衆木をあつめたるがごとし。瞿曇がところには衆悪をあつめたり。いわゆる迦葉・舎利弗・目連・須菩提等なり。人身を受けたる者は忠孝を先とすべし。彼らは瞿曇にすかされて、父母の教訓をも用いず家をいで、王法の宣をもそむいて山

林にいたる。一国に跡をとどむべき者にはあらず。されば、天には日月・衆星、変をなす。地には衆天さかんなり」なんどうったう。堪うべしともおぼえざりしに、またうちそうわざわいと、仏陀にもうちそいがたくてありしなり。人天大会の衆会の砌にて時々呵責の音をききしかば、いかにあるべしともおぼえず。ただあわつる心のみなり。

その上、大の大難の第一なりしは、浄名経の「それ汝に施さば、福田と名づけず。汝を供養せば、三悪道に堕つ」等云々。文の心は、仏菴羅苑と申すところにおわせしに、梵天・帝釈・日月・四天・三界の諸天・地神・竜神等、無数恒沙の大会の中にして云わく「須菩提等の比丘等を供養せん天人は三悪道に堕つべし」。これらをうちきく天人、これらの声聞を供養すべしや。詮ずるところは、仏の御言をもって諸の二乗を殺害せさせ給うかと見ゆ。心あらん人々は仏をもうとみぬべし。されば、これらの人々は、仏を供養したてまつりしついでにこそ、わずかの身命をも扶けさせ給いしか。されば、事の心を案ずるに、四十余年の経々のみとかれて、法華八箇年の所説なくて御入滅ならせ給いたらましかば、誰の人かこれらの尊者をば供養し奉るべき。現身に餓鬼道にこそおわすべけれ。

しかるに、四十余年の経々をば、東春の大日輪、寒氷を消滅するがごとく、無量の草露を大風の零落するがごとく、一言一時に「いまだ真実を顕さず」と打ちけし、大風の黒雲をまき、大虚に満月の処するがごとく、青天に日輪の懸かり給うがごとく、「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」と照らさせ給いて、華光如来・光明如来等と、舎利弗・迦葉等を赫々たる日輪、明々たる月輪のごとく鳳文にしるし、亀鏡に浮かべられて候えばこそ、如来の滅後の人天の諸檀那等には仏

陀のごとくは仰がれ給いしか。

水すまば、月影をおしむべからず。風ふかば、草木なびかざるべしや。法華経の行者あるならば、これらの聖者は、大火の中をすぎても、大石の中をとおりても、とぶらわせ給うべし。迦葉の入定もことにこそよれ、いかにとなりぬるぞ。いぶかしとも申すばかりなし。「後の五百歳」のあたらざるか、「広宣流布」の妄語となるべきか、日蓮が法華経の行者ならざるか。法華経を教内と下して別伝と称する大妄語の者をまぼり給うべきか。捨閉閣抛と定めて「法華経の門をとじよ、巻をなげすてよ」とえりつけて法華堂を失える者を守護し給うべきか。仏前の誓いはありしかども、濁世の大難のはげしさをみて、諸天下り給わざるか。日月、天にまします。須弥山いまもくずれず。海の潮も増減す。四季もかたのごとくたがわず。いかになりぬるやらんと、大疑いよいよつもり候。

また諸大菩薩・天人等のごときは、爾前の経々にして記別をうるようなれども、水中の月を取らんとするがごとく、影を体とおもうがごとく、いろかたちのみあって実義もなし。また仏の御恩も深くて深からず。

世尊初成道の時は、いまだ説教もなかりしに、法慧菩薩・功徳林菩薩・金剛幢菩薩・金剛蔵菩薩等なんど申せし六十余の大菩薩、十方の諸仏の国土より教主釈尊の御前に来り給いて、賢首菩薩・解脱月等の菩薩の請いにおもむいて、十住・十行・十回向・十地等の法門を説き給いき。これらの大菩薩の説くところの法門は、釈尊に習いたてまつるにあらず。十方世界の諸の梵天等も来って法をとく、また釈尊にならいたてまつらず。総じて華厳会座の大菩薩・天竜等は、釈尊已前に不思議解脱に住せ

る大菩薩なり。釈尊の過去、因位の御弟子にやあるらん、十方世界の先仏の御弟子にやあるらん、一代教主、始成正覚の仏の弟子にはあらず。

阿含・方等・般若の時、四教を仏の説き給いし時こそ、ようやく御弟子は出来して候え。これもまた、仏の自説なれども正説にはあらず。ゆえいかんとなれば、方等・般若の別・円二教は華厳経の別・円二教の義趣をいでず。彼の別・円二教は教主釈尊の別・円二教にはあらず、法慧等の大菩薩の別・円二教なり。これらの大菩薩は、人目には仏の御弟子かとは見ゆれども、仏の御師ともいいぬべし。世尊、彼の菩薩の所説を聴聞して智発して後、重ねて方等・般若の別・円をとけり。色もかわらぬ華厳経の別・円二教なり。されば、これらの大菩薩は釈尊の師なり。

華厳経にこれらの菩薩をかずえて善知識ととかれしはこれなり。善知識と申すは、一向師にもあらず一向弟子にもあらずあることなり。蔵・通二教はまた別・円の枝流なり。別・円二教をしる人、必ず蔵・通二教をしるべし。人の師と申すは、弟子のしらぬ事を教えたるが師にては候なり。例せば、仏より前の一切の人天・外道は二天三仙の弟子なり。九十五種まで流派したりしかども、三仙の見を出でず。教主釈尊も、かれに習い伝えて外道の弟子にてましませしが、苦行・楽行十二年の時、苦・空・無常・無我の理をさとり出だしてこそ外道の弟子の名をば離れさせ給いて、無師智とはなのらせ給いしか。また人天も大師とは仰ぎまいらせしか。されば、前四味の間は、教主釈尊、法慧菩薩等の御弟子なり。例せば、文殊は釈尊九代の御師と申すがごとし。つねは諸経に「一字も説かず」ととかせ給うもこれなり。

仏御年七十二の年、摩竭提国霊鷲山と申す山にして無量義経をとかせ給いしに、四十余年の経々をあげて、枝葉をばその中におさめて「四十余年にはいまだ真実を顕さず」と打ち消し給うはこれなり。この時こそ諸大菩薩・諸天人等はあわてて実義を請ぜんとは申せしか。無量義経にて実義とおぼしきこと一言ありしかども、いまだまことなし。譬えば、月の出でんとして、その体東山にかくれて光西山に及べども、諸人月の体を見ざるがごとし。

法華経方便品の略開三顕一の時、仏略して一念三千、心中の本懐を宣べ給う。始めのことなれば、ほととぎすの音をねおびれたる者の一音ききたるがように、月の山の半ばをば出でたれども薄雲のおおえるがごとくかそかなりしを、舎利弗等驚いて諸の天・竜神・大菩薩等をもよおして、「諸の天・竜神等は、その数恒沙のごとし。仏を求むる諸の菩薩は、大数八万有り。また諸の万億国の転輪聖王は至れり。合掌し敬心をもって、具足の道を聞きたてまつらんと欲す」等とは請ぜしなり。文の心は、四味三教、四十余年の間、いまだきかざる法門うけたまわらんと請ぜしなり。

この文に「具足の道を聞きたてまつらんと欲す」と申すは、大経に云わく「薩とは具足の義に名づく」等云々。無依無得大乗四論玄義記に云わく「沙とは翻じて具足となす」等云々。吉蔵の疏に云わく「沙とは翻じて具足の義となすなり」等云々。付法蔵の第十三、真言・華厳・諸宗の元祖、天台、玄義の八に云わく「薩とは梵語、ここには妙と翻ずるなり」等云々。本地は法雲自在王如来、迹に竜猛菩薩、初地の大聖、大智度論千巻の肝心に云わく「薩とは六なり」等云々。妙法蓮華経と申すは漢語なり。月支には薩達磨分陀利迦蘇多攬と申す。善無畏三蔵の法華経

の肝心真言に云わく「曩謨三曼陀没駄南〈帰命普仏陀〉、唵〈三身如来〉、阿阿暗悪〈開示悟入〉、薩縛勃陀〈一切仏〉、枳攘〈知〉、娑乞芻毘耶〈見〉、誐々曩三娑縛〈如虚空性〉、羅乞叉儞〈離塵相なり〉、薩哩達磨〈正法なり〉、浮陀哩迦〈白蓮華〉、蘇駄覧〈経〉、惹〈入〉、吽〈遍〉、鑁〈作〉、発〈歓喜〉、縛曰羅〈堅固〉、羅乞叉轮〈擁護〉、吽〈空無相無願〉、娑婆訶〈決定成就〉」。この真言は南天竺の鉄塔の中の法華経の肝心の真言なり。この真言の中に「薩哩達磨」と申すは正法なり。薩と申すは正なり。正は妙なり、妙は正なり。正法華、妙法華これなり。また妙法蓮華経の上に南無の二字をおけり。南無妙法蓮華経これなり。

妙とは具足、六とは六度万行、諸の菩薩の六度万行を具足するようをきかんとおもう。具とは十界互具、足と申すは一界に十界あれば当位に余界あり、満足の義なり。この経一部八巻二十八品六万九千三百八十四字、一々に皆妙の一字を備えて三十二相八十種好の仏陀なり。十界に皆己界の仏界を顕す。妙楽云わく「なお仏果を具す。余果もまたしかり」等云々。

仏これを答えて云わく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。衆生と申すは舎利弗、衆生と申すは一闡提、衆生と申すは九法界。衆生無辺誓願度、ここに満足す。「我は本誓願を立てて、一切の衆をして、我がごとく等しくして異なることなからしめんと欲しき。我が昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ」等云々。

諸大菩薩・諸天等、この法門をきいて領解して云わく「我らは昔より来、しばしば世尊の説を聞きたてまつるに、いまだかつてかくのごとき深妙の上法を聞かず」等云々。

伝教大師云わく「『我らは昔より来、しばしば世尊の説を聞きたてまつるに』とは、昔法華経の前

に華厳等の大法を説くを聞けども、と謂うなり。『いまだかつてかくのごとき深妙の上法を聞かず』とは、いまだ法華経の唯一仏乗の教えを聞かざるを謂うなり」等云々。華厳・方等・般若・深密・大日等の恒河沙の諸大乗経は、いまだ一代の肝心たる一念三千の大綱・骨髄たる二乗作仏・久遠実成等をい聞まだきかずと領解せり。

開目抄 下

また今よりこそ、諸の大菩薩も梵帝・日月・四天等も教主釈尊の御弟子にては候え。されば、宝塔品には、これらの大菩薩を仏我が御弟子等とおぼすゆえに、諫暁して云わく「諸の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け」とはしたたかに仰せ下せしか。また諸の大菩薩も「譬えば大風の小樹の枝を吹くがごとし」等と、吉祥草の大風に随い、河水の大海へ引くがごとく、仏には随いまいらせしか。

しかれども、霊山日浅くして夢のごとく、うつつならずありしに、証前の宝塔の上に起後の宝塔あって、十方の諸仏来集せる、皆我が分身なりとなのらせ給い、宝塔は虚空に、釈迦・多宝坐を並べ、日月の青天に並出せるがごとし。人天大会は星をつらね、分身の諸仏は大地の上、宝樹の下の師子の床にましまします。

華厳経の蓮華蔵世界は、十方・此土の報仏、各々に国々にして、彼の界の仏この土に来って分身と名乗なのらず、この界の仏彼の界へゆかず、ただ法慧等の大菩薩のみ互いに来会せり。大日経・金剛頂経等の八葉九尊・三十七尊等、大日如来の化身とはみゆれども、その化身、三身円満の古仏にあらず。大品経の千仏、阿弥陀経の六方の諸仏、いまだ来集の仏にあらず。大集経の来集の仏また分身ならず。金光明経の四方の四仏は化身なり。総じて一切経の中に各修各行の三身円満の諸仏を集めて我が分身説とはとかれず。

これ寿量品の遠序なり。始成四十余年の釈尊、一劫・十劫等已前の諸仏を集めて分身ととかる。さすが平等意趣にもにず、おびただしくおどろかし。また始成の仏ならば所化十方に充満すべからざれば、分身の徳は備わりたりとも示現してえきなし。天台云わく「分身既に多ければ、当に知るべし、成仏の久しきことを」等云々。大会のおどろきし意をかかれたり。

その上に、地涌千界の大菩薩、大地より出来せり。釈尊に第一の御弟子とおぼしき普賢・文殊等にもにるべくもなし。華厳・方等・般若・法華経の宝塔品に来集せる大菩薩、大日経等の金剛薩埵等の十六大菩薩なんども、この菩薩に対当すれば、猟猴の群がる中に帝釈の来り給うがごとし。山人に月卿等のまじわれるにことならず。補処の弥勒すら、なお迷惑せり。いかにいわんや、その已下をや。

この千世界の大菩薩の中に四人の大聖まします。いわゆる上行・無辺行・浄行・安立行なり。この四人は虚空・霊山の諸大菩薩等、眼もあわせ、心もおよばず。華厳経の四菩薩、大日経の四菩薩、金剛頂経の十六大菩薩等も、この菩薩に対すれば、翳眼のものの日輪を見るがごとく、海人が皇帝に向

かい奉るがごとし。太公等の四聖の衆中にありしににたり。商山の四皓が恵帝に仕えしにことならず。巍々堂々として尊高なり。釈迦・多宝・十方の分身を除いては、一切衆生の善知識ともたのみ奉りぬべし。

弥勒菩薩、心に念言すらく「我は、仏の太子の御時より、三十成道、今の霊山まで四十二年が間、この界の菩薩、十方世界より来集せし諸の大菩薩、皆しりたり。また十方の浄穢土に、あるいは御使い、あるいは我と遊戯して、その国々に大菩薩を見聞せり。この大菩薩の御師なんどは、いかなる仏にてやあるらん。よも、この釈迦・多宝・十方の分身の仏陀にはにるべくもなき仏にてこそおわすらめ。雨の猛きを見て竜の大なることをしり、華の大なるを見て池のふかきことはしんぬべし。これらの大菩薩の来れる国、また誰と申す仏にあいたてまつり、いかなる大法をか習い修し給うらん」と疑わし。

あまりの不審しさに音をもいだすべくもなけれども、仏力にやありけん、弥勒菩薩疑って云わく「無量千万億大衆の諸の菩薩は、昔よりいまだかつて見ざるところなり。この諸の大威徳・精進の菩薩衆は、誰かそれがために法を説き、教化して成就せる。誰に従ってか初めて発心し、いずれの仏法を称揚せる○世尊よ。我は昔より来、いまだかつてこの事を見ず。願わくは、その従るところの国土の名号を説きたまえ。我は常に諸国に遊べども、いまだかつてこの事を見ず。我はこの衆の中にいて、いまし一人をも識らず。忽然に地より出でたり。願わくは、その因縁を説きたまえ」等云々。

天台云わく「寂場より已降、今座より已往、十方の大士来会して絶えず。限るべからずといえど

も、我は補処の智力をもって、ことごとく見、ことごとく知る。しかるに、この衆においては一人をも識らず。しかるに、我は十方に遊戯して諸仏に覲奉し、大衆は快く識知するところなり」等云々。妙楽云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。

経釈の心分明なり。詮ずるところは、初成道よりこのかた、此土・十方にて、これらの菩薩を見たてまつらず、きかずと申すなり。

仏この疑いを答えて云わく「阿逸多よ○汝等が昔よりいまだ見ざるところの者は、我はこの娑婆世界において阿耨多羅三藐三菩提を得已わって、この諸の菩薩を教化・示導し、その心を調伏して、道の意を発さしめたり」等。また云わく「我は伽耶城菩提樹の下において坐して、最正覚を成ずることを得て、無上の法輪を転じ、しかして乃ちこれを教化して、初めて道心を発さしむ。今、皆不退に住せり乃至我は久遠より来、これらの衆を教化せり」等云々。

ここに弥勒等の大菩薩、大いに疑い思う。華厳経の時、法慧等の無量の大菩薩集まる。いかなる人々なるらんとおもえば、「我が善知識なり」とおおせられしかば、さもやとうちおもいき。その後の大宝坊・白鷺池等の来会の大菩薩もしかのごとし。この大菩薩は彼らにはにるべくもなき、ふりたりげにまします。定めて釈尊の御師匠かなんどおぼしきを、「初めて道心を発さしむ」とて、「幼稚者のものどもなりしを教化して弟子となせり」なんどおおせあれば、大いなる疑いなるべし。日本の聖徳太子は、人王第三十二代用明天皇の御子なり。御年六歳の時、百済・高麗・唐土より老人どものわたりたりしを、六歳の太子「我が弟子なり」とおおせありしかば、彼の老人どもまた合掌して「我が

師なり」等云々。不思議なりしことなり。外典に申す「ある者道をゆけば、路のほとりに年三十ばかりなるわかもの（若者）が八十ばかりなる老人をとらえて（捕）打ちけり。『いかなることぞ』ととえば（問）、『この老翁は我が子なり』なんど申す」とかたるにもにたり（似）。

されば、弥勒菩薩等疑って云わく（語）「世尊よ。如来は太子たりし時、釈の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまえり。これより已来、始めて四十余年を過ぎたり。世尊よ。いかんぞこの少時において、大いに仏事を作したまえる」等云々。

一切の菩薩、始め華厳経より四十余年、会々に疑いをもうけて（設）一切衆生の疑網をはらす中に、この疑い第一の疑いなるべし。無量義経の大荘厳等の八万の大士、四十余年と今との歴劫・疾成の疑いにも超過せり。

観無量寿経に、韋提希夫人の子・阿闍世王の、提婆にすかされて（賺）父の王をいましめ（禁）母を殺さんとせしが耆婆・月光におどされて（威）母をはなちたりし時（放）、仏を請じたてまつって、まず第一の問いに云わく「我、宿、何の罪あってか、この悪子を生める。世尊はまた何らの因縁有ってか提婆達多とともに眷属となりたまえる」等云々。この疑いの中に「世尊はまた何らの因縁有ってか」等の疑いは大いなる大事なり。輪王は敵とともに生まれず、帝釈は鬼とともならず（共）。仏は無量劫の慈悲者なり。いかに大怨とともにはまします（在）。還って仏にはましまさざるかと疑うなるべし。しかれども、仏答え給わず。されば、観経を読誦せん人、法華経の提婆品へ入らずば、いたずらごと（徒事）となるべし。大涅槃経に迦葉菩薩の三十六の問いもこれには及ばず。されば、仏この疑いを晴らさせ給わずば、一代の聖教は泡沫にど（同）

うじ、一切衆生は疑網にかかるべし。寿量の一品の大切なる、これなり。

その後、仏、寿量品を説いて云わく「一切世間の天・人および阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと謂えり」等云々。この経文は、始め寂滅道場より終わり法華経の安楽行品にいたるまでの一切の大菩薩等の所知をあげたるなり。

「しかるに、善男子よ、我は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。この文は、華厳経の三処の「始めて正覚を成ず」、阿含経に云わく「初めて成ず」、浄名経の「始め仏樹に坐す」、大集経に云わく「始めて十六年」、大日経の「我は昔道場に坐す」、仁王経の「二十九年」、無量義経の「我は先に道場」、法華経の方便品に云わく「我は始め道場に坐す」等を、一言に大虚妄なりとやぶるもんなり。

破文

この過去常顕るる時、諸仏、皆、釈尊の分身なり。

爾前・迹門の時は、諸仏、釈尊に肩を並べて各修各行の仏なり。かるがゆえに、諸仏を本尊とする者、釈尊等を下す。今、華厳の台上、方等・般若・大日経等の諸仏は皆、釈尊の眷属なり。仏、三十成道の御時は、大梵天王・第六天等の知行の娑婆世界を奪い取り給いき。今、爾前・迹門にして十方を浄土とごうしてこの土を穢土ととかれしを打ちかえして、この土は本土となり、十方の浄土は垂迹の穢土となる。

故

説

返

号

仏は久遠の仏なれば、迹化・他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。一切経の中にこの寿量品まし

まさずば、天に日月の無く、国に大王の無く、山河に珠の無く、人に神のなからんがごとくしてあるべきを、華厳・真言等の権宗の智者とおぼしき澄観・嘉祥・慈恩・弘法等の一往権宗の人々、かつは自らの依経を讃歎せんために、あるいは云わく「華厳経の教主は報身、法華経は応身」、あるいは云わく「法華寿量品の仏は無明の辺域、大日経の仏は明の分位」等云々。雲は月をかくし、讒臣は賢人をかくす。人讒すれば、黄石も玉とみえ、諛臣も賢人かとおぼゆ。今、濁世の学者等、彼らの讒義に隠されて、寿量品の玉を翫ばず。また天台宗の人々もたぼらかされて、金石一同のおもいをなせる人々もあり。

仏久成にましまさずば所化の少なかるべきことを弁うべきなり。月は影を慳しまざれども、水なくば映うつるべからず。仏、衆生を化せんとおぼせども、結縁うすければ八相を現ぜず。例せば、諸の声聞が初地・初住にはのぼれども、爾前にして自調自度なりしかば、未来の八相をごするなるべし。しかれば、教主釈尊始成ならば、今この世界の梵帝・日月・四天等は、劫初よりこの土を領すれども、四十余年の仏弟子なり。霊山八年の法華結縁の衆、今まいりの主君におもいつかず、久住の者にへだてらるるがごとし。

今、久遠実成あらわれぬれば、東方の薬師如来の日光・月光、西方の阿弥陀如来の観音・勢至、乃至十方世界の諸仏の御弟子、大日・金剛頂等の両部の大日如来の御弟子の諸大菩薩、なお教主釈尊の御弟子なり。諸仏、釈迦如来の分身たる上は、諸仏の所化申すにおよばず。いかにいわんや、この土の劫初よりこのかたの日月・衆星等、教主釈尊の御弟子にあらずや。

しかるを、天台宗より外の諸宗は本尊にまどえり。惑倶舎・成実・律宗は三十四心断結成道の釈尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我が身は民の子とおもうがごとし。思華厳宗・真言宗・三論宗・法相宗等の四宗は大乗の宗なり。法相・三論は勝応身ににたる仏を本尊とす。似大王の太子、我が父は侍とおもうがごとし。華厳宗・真言宗は、釈尊を下げて盧舎那・大日等を本尊と定む。天子たる父を下げて、種姓もなき者の法王のごとくなるにつけり。付浄土宗は釈迦の分身の阿弥陀仏を有縁の仏とおもって教主をすてたり。捨禅宗は下賤の者一分の徳あって父母をさぐるがごとし。下仏をさげ、経を下す。これ皆、本尊に迷えり。例せば、三皇已前に父をしらず、人皆禽獣に同ぜしがごとし。

寿量品をしらざる諸宗の者は畜に同じ。不知恩の者なり。故に、妙楽云わく「一代の教えの中に、いまだかつて遠を顕さず。父母の寿は〇もし父の寿の遠きを知らずんば、また父統の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全く人の子にあらず」等云々。妙楽大師は唐の末、天宝年中の者なり。三論・華厳・法相・真言等の諸宗ならびに依経を、深くみ、見広く勘えて、寿量品の仏をしらざる者は父統の邦に迷える才能ある畜生とかけるなり。書「いたずらに才能と謂うとも」とは、華厳宗の法蔵・澄観乃至真言宗の善無畏三蔵等は才能の人師なれども、子の父を知らざるがごとし。

伝教大師は日本顕密の元祖。秀句に云わく「他宗の依るところの経は一分仏母の義有りといえども、しかもただ愛のみ有って厳の義を闕く。天台法華宗は厳・愛の義を具す。一切の賢聖、学・無学および菩提心を発せる者の父なり」等云々。

真言・華厳等の経々には種・熟・脱の三義、名字すらなおなし。無いかにいわんや、その義をや。

厳・真言経等の一生初地の即身成仏等は、経は権経にして過去をかくせり。種をしらざる脱なれば、趙高が位にのぼり、道鏡が王位に居せんとせしがごとし。

宗々互いに権を諍う。予これをあらそわず、ただ経に任すべし。法華経の種に依って天親菩薩は種子無上を立てたり。天台の一念三千これなり。華厳経乃至諸大乗経、大日経等の諸尊の種子、皆一念三千なり。天台智者大師一人、この法門を得給えり。

華厳宗の澄観、この義を盗んで華厳経の「心は工みなる画師のごとし」の文の神とす。真言・大日経等には二乗作仏・久遠実成・一念三千の法門これなし。善無畏三蔵、震旦に来って後、天台の止観を見て智発し、大日経の「心の実相」「我は一切の本初なり」の文の神に、天台の一念三千を盗み入れて真言宗の肝心として、その上に印と真言とをかざり、法華経と大日経との勝劣を判ずる時、理同事勝の釈をつくれり。

両界の曼陀羅の二乗作仏・十界互具は、一定、大日経にありや。第一の誑惑なり。故に、伝教大師云わく「新来の真言家は則ち筆受の相承を泯ぼし、旧到の華厳家は則ち影響の軌模を隠す」等云々。俘囚の島なんどにわたって「ほのぼのというたは、われよみたり」なんど申さば、えぞていの者はさこそとおもうべし。漢土・日本の学者またかくのごとし。良諝和尚云わく「真言・禅門・華厳・三論乃至もし法華等に望まば、これ接引門なり」等云々。

善無畏三蔵の閻魔の責めにあずからせ給いしは、この邪見による。後に心をひるがえし、法華経に帰伏してこそ、このせめをば脱れさせ給いしか。その後、善無畏・不空等、法華経を両界の中央にお

きて大王のごとくし、胎蔵の大日経、金剛頂経をば左右の臣下のごとくせし、これなり。日本の弘法も、教相の時は華厳宗に心をよせて法華経をば第八におきしかども、事相の時には実慧・真雅・円澄・光定等の人々に伝え給いし時、両界の中央に上のごとくおかれたり。

例せば、三論の嘉祥は、法華玄十巻に法華経を第四時、会二破二と定むれども、天台に帰伏して七年つかえ、講を廃し衆を散じて身を肉橋となせり。法相の慈恩は法苑林七巻十二巻に「一乗は方便なり、三乗は真実なり」等の妄言多し。しかれども、玄賛の第四には「故に、また両つながら存す」等と我が宗を不定になせり。言は両方なれども、心は天台に帰伏せり。華厳の澄観は、華厳の疏を造って華厳・法華相対して、法華を方便とかけるに似たれども、「彼の宗にはこれをもって実となす。この宗の立義、理として通ぜざることなし」等とかけるは、悔い還すにあらずや。弘法もまたかくのごとし。亀鏡なければ我が面をみず、敵なければ我が非をしらず。真言等の諸宗の学者等、我が非をしらざりしほどに、伝教大師にあいたてまつって自宗の失をしるなるべし。

されば、諸経の諸の仏菩薩・人天等は、彼々の経々にして仏にならせ給うようなれども、実には法華経にして正覚なり給えり。釈迦・諸仏の衆生無辺の総願は、皆この経において満足す。「今、すでに満足しぬ」の文これなり。

予、事の由をおし計るに、華厳・観経・大日経等をよみ修行する人をば、その経々の仏・菩薩・天等守護し給うらん。疑いあるべからず。ただし、大日経・観経等をよむ行者等、法華経の行者に敵対をなさば、彼の行者をすてて法華経の行者を守護すべし。例せば、孝子、慈父の王敵となれば、父をす

てて王にまいる、孝の至りなり。仏法もまたかくのごとし。法華経の諸の仏菩薩・十羅刹、日蓮を守護し給う上、浄土宗の六方の諸仏・二十五の菩薩、真言宗の千二百等、七宗の諸尊、守護の善神、日蓮を守護し給うべし。例せば、七宗の守護神、伝教大師をまぼり給いしがごとしとおもう。

日蓮案じて云わく、法華経の二処三会の座にましまし日月等の諸天は、法華経の行者出来せば、磁石の鉄を吸うがごとく、月の水に遷るがごとく、須臾に来って行者に代わり仏前の御誓いをはたさせ給うべしとこそおぼえ候に、いままで日蓮をとぶらい給わぬは、日蓮、法華経の行者にあらざるか。されば、重ねて経文を勘えて、我が身にあてて身の失をしるべし。

疑って云わく、当世の念仏宗・禅宗等をば、いかなる智眼をもって法華経の敵人、一切衆生の悪知識とはしるべきや。

答えて云わく、私の言を出だすべからず。経釈の明鏡を出だして謗法の醜面をうかべ、その失を見せしめん。生盲は力およばず。法華経の第四の宝塔品に云わく「その時、多宝仏は宝塔の中において、半座を分かちて、釈迦牟尼仏に与えたもう○その時、大衆は、二如来の七宝塔の中の師子座の上に在して結跏趺坐したもうを見たてまつる○大音声をもって、あまねく四衆に告げたまわく『誰か能くこの娑婆国土において、広く妙法華経を説かん。今正しくこれ時なり。如来は久しからずして、当に涅槃に入るべし。仏はこの妙法華経をもって、付嘱して在ること有らしめんと欲す』と」等云々。第一の勅宣なり。

また云わく「その時、世尊は重ねてこの義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく『聖主世尊は、久

しく滅度したもうといえども、宝塔の中に在して、なお法のために来りたまえり。諸人はいかんぞ勤めて法のためにせざらん○また我が分身、無量の諸仏は、恒沙等のごとく、来り法を聴かんと欲して○各妙土および弟子衆、天・人・竜神、諸の供養の事を捨てて、法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり○譬えば大風の小樹の枝を吹くがごとし。この方便をもって、法をして久しく住せしむ。諸の大衆に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け』と」。第二の鳳詔なり。

「多宝如来、および我が身の集むるところの化仏は、当にこの意を知るべし○諸の善男子よ。各諦らかに思惟せよ。これはこれ難事なり。よろしく大願を発すべし。諸余の経典は、数恒沙のごとし。これらを説くといえども、いまだ難しとなすに足らず。もし須弥を接って、他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず○もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの経を説かば、これは則ち難しとなす○たとい劫焼に、乾ける草を担い負って、中に入って焼けざらんも、またいまだ難しとなさず。我滅度して後に、もしこの経を持って、一人のためにも説かば、これは則ち難しとなす○諸の善男子よ。我滅して後において、誰か能くこの経を護持し読誦せん。今、仏前において、自ら誓言を説け」等云々。第三の諫勅なり。第四・第五の二箇の諫暁、提婆品にあり。下にかくべし。

この経文の心は眼前なり。青天に大日輪の懸かれるがごとし、白面に靨のあるにたり。しかれども、生盲の者と邪眼の者と一眼のものと、「各自らを師と謂う」の者、辺執家の者はみがたし。万難をすてて道心あらん者にしるしとどめてみせん。西王母がそののもも、輪王出世の優曇華よりもあい

がたく、沛公が項羽と八年漢土をあらそいし、頼朝と宗盛が七年秋津島にたたかいし、修羅と帝釈と、金翅鳥と竜王と阿耨池に諍えるも、これにはすぐべからずとしるべし。

日本国にこの法顕るること二度なり。伝教大師と日蓮となりとしれ。無眼のものは疑うべし。力及ぶべからず。この経文は、日本・漢土・月氏・竜宮・天上・十方世界の一切経の勝劣を、釈迦・多宝・十方の仏来集して定め給うなるべし。

問うて云わく、華厳経・方等経・般若経・深密経・楞伽経・大日経・涅槃経等は、九易の内か六難の内か。

答えて云わく、華厳宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等の三蔵大師、読んで云わく「華厳経と法華経とは六難の内。名は二経なれども、所説乃至理、これ同じ。『四門の観は別なるも、真諦を見ることは同じ』のごとし」。法相の玄奘三蔵・慈恩大師等、読んで云わく「深密経と法華経とは同じく唯識の法門にして第三時の教、六難の内なり」。三論の吉蔵等、読んで云わく「般若経と法華経とは名異なるも体は同じ。二経は一法なり」。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等、読んで云わく「大日経と法華経とは理同じ。おなじく六難の内の経なり」。日本の弘法、読んで云わく「大日経は六難九易の内にあらず。大日経は釈迦の説くところの一切経の外、法身大日如来の所説なり」。またある人云わく「華厳経は報身如来の所説、六難九易の内にはあらず」。この四宗の元祖等かように読みければ、その流れをくむ数千の学徒等もまたこの見をいでず。

日蓮なげいて云わく、上の諸人の義を左右なく非なりといわば、当世の諸人面を向くべからず。非

に非をかさね、結句は国主に讒奏して命に及ぶべし。ただし、我らが慈父、双林最後の御遺言に云わく「法に依って人に依らざれ」等云々。「人に依らざれ」等とは、初依・二依・三依・第四依、普賢・文殊等の等覚の菩薩、法門を説き給うとも、経を手ににぎらざらんをば用いるべからず。「了義経に依って不了義経に依らざれ」と定めて、経の中にも了義・不了義経を糾明して信受すべきこそ候いぬれ。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云わく「修多羅に依らざるは黒論なり。修多羅に依るは白論なり」等云々。天台大師云わく「修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」等云々。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」等云々。円珍智証大師云わく「文に依って伝うべし」等云々。

上にあぐるところの諸師の釈、皆一分一分、経論に依って勝劣を弁うるようなれども、皆自宗を堅く信受し先師の謬義をただざるゆえに、「曲げて私情に会す」の勝劣なり、「己義を荘厳す」の法門なり。仏の滅後の犢子・方広、後漢已後の外典は、仏法外の外道の見よりも、三皇五帝の儒書よりも、邪見強盛なり、邪法巧みなり。華厳・法相・真言等の人師、天台宗の正義を嫉むゆえに、実経の文を会して権義に順ぜしむること強盛なり。しかれども、道心あらん人、偏党をすて、自他宗をあらそわず、人をあなずることなかれ。

法華経に云わく「已今当」等云々。妙楽云わく「たとい経有って『諸経の王なり』と云うとも、『已今当の説に最もこれ第一なり』とは云わず」等云々。また云わく「已今当の妙、ここにおいて固く迷えり。謗法の罪は、苦長劫に流る」等云々。この経釈におどろいて、一切経ならびに人師の疏釈を見

るに、狐疑の氷とけぬ。今、真言の愚者等、印・真言のあるをたのみて「真言宗は法華経にすぐれたり」とおもい、「慈覚大師等の真言勝れたりとおおせられぬれば」なんどおもえるは、いうにかいなきことなり。

密厳経に云わく「十地・華厳等の大樹と神通と、勝鬘および余経とは、皆この経より出でたり。かくのごときの密厳経は、一切経の中に勝れたり」等云々。

大雲経に云わく「この経は即ちこれ諸経の転輪聖王なり。何をもっての故に。この経典の中に衆生の実性・仏性・常住の法蔵を宣説するが故に」等云々。

六波羅蜜経に云わく「いわゆる過去無量の諸仏の説くところの正法、および我が今説くところのいわゆる八万四千の諸の妙法蘊〇摂めて五分となす。一には索呾纜、二には毘奈耶、三には阿毘達磨、四には般若波羅蜜、五には陀羅尼門なり。この五種の蔵もて有情を教化す〇もし彼の有情、契経・調伏・対法・般若を受持すること能わず、あるいはまた有情、諸の悪業・四重・八重・五無間罪・謗方等経・一闡提等の種々の重罪を造るに、消滅して速疾に解脱し、頓に涅槃を悟ることを得せしめ、彼がために諸の陀羅尼蔵を説く。この五つの法蔵は、譬えば乳・酪・生蘇・熟蘇および妙なる醍醐のごとし〇総持門は、譬えば醍醐のごとし。醍醐の味は、乳・酪・蘇の中に微妙第一にして、能く諸の病を除き、諸の有情をして身心安楽ならしむ。総持門は、契経等の中に最も第一となす。能く重罪を除く」等云々。

解深密経に云わく「その時に、勝義生菩薩また仏に白して言さく『世尊、初め一時において波羅痆

斯の仙人堕処の施鹿林の中に在して、ただ声聞乗を発趣する者のためにのみ、四諦の相をもって正法輪を転じたまいき。これはなはだ奇、はなはだこれ希有にして、一切世間の諸の天人等、先より能く法のごとく転ずる者有ることなしといえども、彼の時において転じたもうところの法輪は有上なり、有容なり、これいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足の処所なり。世尊、在昔第二時の中に、ただ発趣して大乗を修する者のためにのみ、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂静・自性涅槃なるによって、隠密の相をもって正法輪を転じたまいき。さらにはなはだ奇にして、はなはだこれ希有なりといえども、彼の時において転じたもうところの法輪、またこれ有上なり、容受するところあり、なおいまだ了義ならず、これ諸の諍論安足の処所なり。世尊、今第三時の中において、あまねく一切乗を発趣する者のために、一切の法は皆無自性・無生無滅・本来寂静・自性涅槃にして無自性の性なるによって、顕了の相をもって正法輪を転じたもう。第一はなはだ奇にして、最もこれ希有なり。今世尊転じたもうところの法輪、無上・無容にして、これ真の了義なり。諸の諍論安足の処所にあらず』と」等云々。

大般若経に云わく「聴聞するところの世・出世の法に随って、皆能く方便もて般若甚深の理趣に会入し、諸の造作するところの世間の事業もまた般若をもって法性に会入し、一事として法性を出ずる者を見ず」等云々。

大日経第一に云わく「秘密主よ。大乗行あり。無縁乗の心を発す。法に我性無し。何をもっての故に。彼の往昔かくのごとく修行せし者のごとく、蘊の阿頼耶を観察して、自性は幻のごとしと知る」

等云々。また云わく「秘密主よ。彼はかくのごとく無我を捨て、心主自在にして、自心の本不生を覚る」等云々。また云わく「いわゆる空性は根境を離れ、無相にして境界無く、諸の戯論に越えて虚空に等同なり乃至極無自性」等云々。また云わく「大日尊は、秘密主に告げて言わく『秘密主よ。いかんが菩提。謂わく、実のごとく自心を知る』と」等云々。

華厳経に云わく「一切世界の諸の群生、声聞道を求めんと欲すること有ること尠し。縁覚を求むる者は転たまた少なし。大乗を求むる者ははなはだ希有なり。大乗を求むることはなお易しとなし、能くこの法を信ずることははなはだ難しとなす。いわんや、能く受持し、正憶念し、説のごとく修行し、真実に解せんをや。もし三千大千界をもって頂戴すること一劫、身動ぜざらんも、彼の所作いまだ難しとなさず。この法を信ずるははなはだ難しとなす。大千塵数の衆生の類いに一劫諸の楽具を供養するも、彼の功徳いまだ勝れたりとなさず。この法を信ずるは殊に勝れたりとなす。もし掌をもって十仏刹を持ち、虚空の中において住すること一劫なるも、彼の所作いまだ難しとなさず。この法を信ずることははなはだ難しとなす。十仏刹塵の衆生の類いに一劫諸の楽具を供養せんも、彼の功徳いまだ勝れたりとなさず。この法を信ずることは殊に勝れたりとなす。十仏刹塵の諸の如来を一劫恭敬して供養せんに、もし能くこの品を受持せば、功徳は彼よりも最も勝れたりとなす」等云々。

涅槃経に云わく「この諸の大乗方等経典も、また無量の功徳を成就すといえども、この経に比せんと欲するに、喩えとなすことを得ず。百倍千倍百千万、乃至算数・譬喩も及ぶこと能わざるところなり。善男子よ。譬えば、牛より乳を出だし、乳より酪を出だし、酪より生蘇を出だし、生蘇より熟蘇

を出だし、熟蘇より醍醐を出だすに、醍醐は最上にして、もし服することあらば、衆病皆除こり、あらゆる諸の薬もことごとくその中に入るがごとし。善男子よ。仏もまたかくのごとし。仏より十二部経を出だし、十二部経より修多羅を出だし、修多羅より方等経を出だし、方等経より般若波羅蜜を出だし、般若波羅蜜より大涅槃を出だす。なお醍醐のごとし。醍醐と言うは、仏性を喩う」等云々。

これらの経文を法華経の已今当・六難九易に相対すれば、月に星をならべ、九山に須弥を合わせたるににたり。しかれども、華厳宗の澄観、法相・三論・真言等の慈恩・嘉祥・弘法等の仏眼のごとくなる人、なおこの文にまどえり。いかにいわんや、盲眼のごとくなる当世の学者等、勝劣を弁うべしや。黒白のごとくあきらかに、須弥・芥子のごとくなる勝劣なおまどえり。いわんや、虚空のごとくなる理に迷わざるべしや。教の浅深をしらざれば、理の浅深を弁うるものなし。

巻をへだて文前後すれば、教門の色弁えがたければ、文を出だして愚者を扶けんとおもう。王に小王・大王、一切に少分・全分、五乳に全喩・分喩を弁うべし。六波羅蜜経は有情の成仏あって無性の成仏なし。いかにいわんや久遠実成をあかさず。なお涅槃経の五味におよばず。いかにいわんや、法華経の迹門・本門にたいすべしや。しかるに、日本の弘法大師、この経文にまどい給いて、法華経を第四の熟蘇味に入れ給えり。第五の総持門の醍醐味すら涅槃経に及ばず。いかにし給いけるやらん。しかるを「震旦の人師、諍って醍醐を盗む」と天台等を盗人とかき給えり。「惜しいかな、古賢醍醐を嘗めず」等と自歎せられたり。

これらはさておく。我が一門の者のためにしるす。他人は信ぜざれば、逆縁なるべし。一滴なりとも嘗

て大海のしおをしり、一花を見て春を推せよ。万里をわたって宋に入らずとも、三箇年を経て霊山にいたらずとも、竜樹のごとく竜宮に入らずとも、無著菩薩のごとく弥勒菩薩にあわずとも、二所三会に値わずとも、一代の勝劣はこれをしれるなるべし。蛇は七日が内の洪水をしる、竜の眷属なるゆえ。烏は年中の吉凶をしれり、過去に陰陽師なりしゆえ。鳥はとぶ徳、人にすぐれたり。日蓮は諸経の勝劣をしること、華厳の澄観、三論の嘉祥、法相の慈恩、真言の弘法にすぐれたり。天台・伝教の跡をしのぶゆえなり。彼の人々は天台・伝教に帰せさせ給わずば、謗法の失脱れさせ給うべしや。

当世日本国に第一に富める者は日蓮なるべし。命は法華経にたてまつり、名をば後代に留むべし。大海の主となれば、諸の河神皆したがう。須弥山の王に諸の山神したがわざるべしや。法華経の六難九易を弁うれば、一切経よまざるにしたがうべし。

宝塔品の三箇の勅宣の上に、提婆品に二箇の諫暁あり。提婆達多は一闡提なり。天王如来と記せらる。涅槃経四十巻の現証は、この品にあり。善星・阿闍世等の無量の五逆・謗法の者の一りをあげ、頭をあげ、万をおさめ、枝をしたがう。一切の五逆・七逆・謗法・闡提、天王如来にあらわれ了わんぬ。毒薬変じて甘露となる。衆味にすぐれたり。竜女が成仏、これ一人にはあらず。一切の女人の成仏をあらわす。法華経已前の諸の小乗経には女人の成仏をゆるさず。諸の大乗経には成仏・往生をゆるすようなれども、あるいは改転の成仏にして一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏・往生なり。「一を挙げて諸に例す」と申して、竜女が成仏は末代の女人の成仏・往生の道をふみあけたるなるべし。

儒家の孝養は今生にかぎる。未来の父母を扶けざれば、外家の聖賢は有名無実なり。外道は過・未をしれども父母を扶くる道なし。仏道こそ父母の後世を扶くれば、聖賢の名はあるべけれ。しかれども、法華経已前等の大小乗の経宗は、自身の得道なおかないがたし。いかにいわんや父母をや。ただ文のみあって義なし。今、法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏も顕れ、達多の悪人成仏の時慈父の成仏も顕るれ。この経は内典の孝経なり。二箇のいさめ了わんぬ。

已上、五箇の鳳詔におどろきて、勧持品の弘経あり。明鏡の経文を出だして当世の禅・律・念仏者ならびに諸檀那の謗法をしらしめん。

日蓮といいし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられぬ。これは魂魄、佐土国にいたりて、返る年の二月、雪中にしるして有縁の弟子へ送おくれば、おそろしくておそろしからず。みん人いかにおじぬらん。これは釈迦・多宝・十方の諸仏の未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。かたみともみるべし。

勧持品に云わく「ただ願わくは慮いをなしたまわざれ。仏滅度して後、恐怖悪世の中において、我らは当に広く説くべし。諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん。我らは皆当に忍ぶべし。悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん。あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って、自ら真の道を行ずと謂って、人間を軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん。この人は悪心を懐き、常に世俗の事を念い、名を阿練若に仮りて、

好んで我らが過を出ださん○常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて『これ邪見の人、外道の論議を説く』と謂わん○濁劫悪世の中には、多く諸の恐怖有らん。悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん○濁世の悪比丘は、仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」等云々。

記の八に云わく「文に三つあり。初めに一行は通じて邪人を明かす。即ち俗衆なり。次に一行は道門増上慢の者を明かす。三に七行は僭聖増上慢の者を明かす。この三つの中、初めは忍ぶべし。次は前に過ぐ。第三は最も甚だし。後々の者は転た識り難きをもっての故に」等云々。東春に智度法師云わく「初めに『諸の』より下の五行は○第一に一偈は三業の悪を忍ぶ。これ外の悪人なり。次に『悪世』より下の一偈は、これ上慢の出家の人なり。第三に『あるいは阿練若に』より下の三偈は、即ちこれ出家の処に一切の悪人を摂む」等云々。また云わく「『常に大衆の中に在って』より下の両行は、公処に向かって法を毀り人を謗ず」等云々。

涅槃経の九に云わく「善男子よ。一闡提有って、羅漢の像を作して空処に住し、方等大乗経典を誹謗す。諸の凡夫人見已わって、皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩なり』と謂わん」等云々。また云わく「その時、この経、閻浮提において当に広く流布すべし。この時、当に諸の悪比丘有って、この経を抄略し、分かちて多分と作し、能く正法の色香美味を滅すべし。この諸の悪人、またかくのごとき経典を読誦すといえども、如来の深密の要義を滅除して世間の荘厳の文飾・無義の語を安置す。前

を抄って後に著け、後を抄って前に著け、前後を中に著け、中を前後に著けん。当に知るべし、かくのごとき諸の悪比丘は、これ魔の伴侶なり」等云々。

六巻の般泥洹経に云わく「阿羅漢に似たる一闡提にして悪業を行ずるものと、一闡提に似たる阿羅漢にして慈心を作すものと有らん。羅漢に似たる一闡提有りとは、この諸の衆生の方等を誹謗せるなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、声聞を毀呰して広く方等を説き、衆生に語って言わく『我、汝等とともにこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、如来の性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闡提なりと謂わん」等云々。

涅槃経に云わく「我涅槃して後乃至正法滅して後、像法の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく経を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す○袈裟を服るといえども、なお猟師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、羅漢を得たり』と○外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。唖法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云々。

夫れ、鷲峰・双林の日月、毘湛・東春の明鏡に当世の諸宗ならびに国中の禅・律・念仏者が醜面を浮べたるに、一分もくもりなし。

妙法華経に云わく「仏滅度して後、恐怖悪世の中において」。また云わく「後の末世の法滅せんと欲せん時において」。分別功徳品に云わく「悪世末法の時」。薬王品に云わく「後の五百歳」等云々。正法華経の勧説品に云わ

く「しかして後、末世に」。また云わく「しかして後来の末世に」等云々。添品法華経に云わく等。天台云わく「像法の中、南三北七は法華経の怨敵なり」。伝教云わく「像法の末、南都六宗の学者は法華の怨敵なり」等云々。彼らの時は、いまだ分明ならず。

これは、教主釈尊・多宝仏、宝塔の中に日月の並ぶがごとく、十方分身の諸仏、樹下に星を列ねたりし中にして、正法一千年・像法一千年、二千年すぎて末法の始めに法華経の怨敵三類あるべしと八十万億那由他の諸の菩薩の定め給いし、虚妄となるべしや。当世は如来の滅後二千二百余年なり。大地は指さばはずるとも、春は花はさかずとも、三類の敵人必ず日本国にあるべし。さるにては、誰々たれたれの人々か三類の内なるらん、また誰人か法華経の行者なりとさされたるらん、おぼつかなし。彼の三類の怨敵に我ら入りてやあるらん、また法華経の行者の内にてやあるらん、おぼつかなし。

周の第四昭王の御宇二十四年甲寅四月八日の夜中に、天に五色の光気南北に亘って昼のごとし。大地六種に震動し、雨ふらずして江河・井池の水まさり、一切の草木に花さき菓なりたりけり。不思議なりしことなり。昭王大いに驚き、太史蘇由占って云わく「西方に聖人生まれたり」。昭王問うて云わく「この国いかん」。答えて云わく「事なし。一千年の後に、彼の聖言この国にわたって衆生を利すべし」。彼のわずかの外典の、一毫もいまだ見思を断ぜざる者、しかれども一千年のことをしる。はたして、仏教、一千一十五年と申せし後漢の第二明帝の永平十年丁卯年、仏法漢土にわたる。

これは似るべくもなき釈迦・多宝・十方分身の仏の御前の諸の菩薩の未来記なり。当世日本国に三類の法華経の敵人なかるべしや。

されば、仏、付法蔵経等に記して云わく「我が滅後に正法一千年が間、我が正法を弘むべき人二十四人、次第に相続すべし」。迦葉・阿難等はさておきぬ、一百年の脇比丘、六百年の馬鳴、七百年の竜樹菩薩等、一分もたがわず既に出で給いぬ。このこと、いかんがむなしかるべき。このこと相違せば、一経皆相違すべし。いわゆる、舎利弗が未来の華光如来、迦葉の光明如来も、皆妄説となるべし。爾前返って一定となって、永不成仏の諸声聞なり。犬・野干をば供養すとも、阿難等をば供養すべからずとなん。いかんがせん、いかんがせん。

第一の「諸の無智の人有らん」と云うは、経文の第二の「悪世の中の比丘」と第三の「納衣の比丘」の大檀那等と見えたり。したがって妙楽大師は「俗衆」等云々。東春に云わく「公処に向かって」等云々。第二の法華経の怨敵は、経に云わく「悪世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、いまだ得ざるを謂って得たりとなし、我慢の心は充満せん」等云々。涅槃経に云わく「この時、当に諸の悪比丘有るべし乃至この諸の悪人、またかくのごとき経典を読誦すといえども、如来の深密の要義を滅除せん」等云々。止観に云わく「もし信無くば、高く聖境を推して、己が智分にあらずとす。もし智無くば、増上慢を起こし、己仏に均しと謂う」等云々。

道綽禅師が云わく「二に理は深く解は微かなるに由る」等云々。法然云わく「諸行は機にあらず、時を失う」等云々。記の十に云わく「恐らくは、人謬って解せる者、初心の功徳の大なることを識らずして、功を上位に推り、この初心を蔑る。故に、今、彼の行浅く功深きことを示して、もって経力を顕す」等云々。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の

機、今正しくその時なり。何をもってか知ることを得る。安楽行品に云わく『末世の法滅せん時』となり」等云々。恵心云わく「日本一州、円機純一なり」等云々。

道綽と伝教と、法然と恵心と、いずれこれを信ずべしや。彼は一切経に証文なし。これは正しく法華経によれり。その上、日本国一同に叡山の大師は受戒の師なり。何ぞ、天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげすつるや。法然智者ならば、何ぞこの釈を選択に載せて和会せざる。人の理をかくせる者なり。第二の「悪世の中の比丘」と指さるるは、法然等の無戒・邪見の者なり。涅槃経に云わく「我らことごとく邪見の人と名づく」等云々。妙楽云わく「自ら三教を指して、皆邪見と名づく」等云々。止観に云わく「大経に云わく『これよりの前は我ら皆邪見の人と名づく』となり。邪あに悪にあらずや」等云々。弘決に云わく「邪は即ちこれ悪なり。この故に当に知るべし、ただ円を善となす。また二つの意有り。一には順うをもって善となし、背くをもって悪となす。相待の意なり○著するをもって悪となし、達するをもって善となす。相待・絶待ともにすべからく悪を離るべし。円に著するすら、なお悪なり。いわんやまた余をや」等云々。

外道の善悪は、小乗経に対すれば皆悪道。小乗の善道、乃至四味三教は、法華経に対すれば皆悪。ただ法華のみ正善なり。爾前の円は相待妙。絶待妙に対すればなお悪なり。前三教に摂すればなお悪道なり。爾前のごとく彼の経の極理を行ずる、なお悪道なり。いわんや、観経等の、なお華厳・般若経等に及ばざる小法を本として法華経を観経に取り入れて、還って念仏に対して閣抛閉捨せるは、法然ならびに所化の弟子等・檀那等は誹謗正法の者にあらずや。

釈迦・多宝・十方の諸仏は、法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり。法然なら びに日本国の念仏者等は、法華経は末法に念仏より前に滅尽すべしと。あに三聖の怨敵にあらずや。

第三は法華経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って乃至白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごときもの有らん」等云々。六巻の般泥洹経に云わく「羅漢に似たる一闡提にして悪業を行ずるものと、一闡提に似たる阿羅漢にして慈心を作すものと有らん。羅漢に似たる一闡提有りとは、この諸の衆生の方等を誹謗せるなり。一闡提に似たる阿羅漢とは、声聞を毀呰して広く方等を説き、衆生に語って言わく『我、汝等とともにこれ菩薩なり。所以はいかん。一切皆、如来の性有るが故に』。しかるに、彼の衆生は、一闡提なりと謂わん」等云々。涅槃経に云わく「我涅槃して後〇像法の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく経典を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す〇袈裟を服るといえども、なお猟師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。常にこの言を唱えん、『我、羅漢を得たり』と〇外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。唖法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云々。妙楽云わく「第三は最も甚だし。後々の者は転た識り難きをもっての故に」等云々。東春に云わく「第三に『あるいは阿練若に』より下の三偈は、即ちこれ出家の処に一切の悪人を摂む」等とは、当世日本国には、いずれの処ぞや。叡山か、園城か、東寺か、南都か、建仁寺か、寿福寺か、建長寺か、よくよくたずぬべし。延暦寺の出家

東春に「即ちこれ出家の処に一切の悪人を摂む」等とは、当世日本国には、いずれの処ぞや。叡山か、園城か、東寺か、南都か、建仁寺か、寿福寺か、建長寺か、よくよくたずぬべし。延暦寺の出家

の頭に甲冑をよろうをさすべきか。園城寺の五分法身の膚に鎧杖を帯せるか。彼らは、経文に「納衣にして空閑に在り」と指すにはにず、「世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごとくならん」と人おもわず、また「転た識り難きが故に」というべしや。華洛には聖一等、鎌倉には良観等にたり。人をあだむことなかれ。眼あらば、経文に我が身をあわせよ。

止観の第一に云わく「止観の明静なることは、前代にいまだ聞かず」等云々。弘の一に云わく「漢の明帝、夜夢みしより陳朝に泊ぶまで○禅門に予かり廁わって、衣鉢伝授する者」等云々。補注に云わく「衣鉢伝授とは、達磨を指す」等云々。止の五に云わく「また一種の禅人乃至盲・跛の師・徒、二りともに堕落す」等云々。止の七に云わく「九つの意、世間の文字の法師と共ならず。また事相の禅師と共ならず。一種の禅師はただ観心の一意のみ有り。あるいは浅く、あるいは偽る。余の九つは全く無し。これ虚言にあらず。後賢、眼有らん者は、当に証知すべきなり」。弘の七に云わく「『文字の法師』とは、内に観解無くしてただ法相のみを構う。『事相の禅師』とは、境智を閑わずして鼻隔に心を止む乃至根本有漏定等なり。『一師はただ観心の一意のみ有り』等とは、これはしばらく与えて論をなす。奪えば則ち観解ともに闕く。世間の禅人はひとえに理観を尚ぶ。既に教を諳んぜざれば、観をもって経を消し、八邪八風を数えて丈六の仏となし、五陰三毒を合して名づけて八邪となし、六入をもって六通となし、四大をもって四諦となす。かくのごとく経を解するは偽の中の偽なり。何の浅きをか論ずべけん」等云々。止観の七に云わく「昔、鄴・洛の禅師、名は河海に播き、住するときんば四方雲のごとくに仰ぎ、去るときんば阡陌群を成し、隠々轟々たり。また何の利益か有る。臨終

に皆悔ゆ」等云々。弘の七に云わく「『鄴・洛の禅師』とは、『鄴』は相州に在り。即ち斉・魏の都する所なり。大いに仏法を興す。禅祖の一めなり、その地を王化す。時の人の意を護って、その名を出ださず。『洛』は即ち洛陽なり」等云々。六巻の般泥洹経に云わく「究竟の処を見ずとは、彼の一闡提の輩の究竟の悪業を見ざるなり」等云々。妙楽云わく「第三は最も甚だし。転た識り難きが故に」等。無眼の者・一眼の者・邪見の者は、末法の始めの三類を見るべからず。一分の仏眼を得るもの、これをしるべし。「国王・大臣・婆羅門・居士に向かって」等云々。東春に云わく「公処に向かって法を毀り人を謗ず」等云々。夫れ、昔、像法の末には護命・修円等、奏状をささげて伝教大師を讒奏す。今、末法の始めには良観・然阿等、偽書を注して将軍家にささぐ。あに三類の怨敵にあらずや。

当世の念仏者等、天台法華宗の檀那の国王・大臣・婆羅門・居士等に向かって云わく「法華経は理深く、我らは解微かなり。法は至って深く、機は至って浅し」等と申しうとむるは、「高く聖境を推して、己が智分にあらずとす」の者にあらずや。禅宗云わく「法華経は月をさす指、禅宗は月なり。月をえて、指なにかせん。禅は仏の心、法華経は仏の言なり。仏、法華経等の一切経をとかせ給いて後、最後に一ふさの華をもって迦葉一人にさずく。そのしるしに、仏の御袈裟を迦葉に付嘱し、乃至、付法蔵の二十八・六祖までに伝う」等云々。これらの大妄語、国中を誑酔せしめてとしひさし。

また、天台真言の高僧等、名はその家にえたれども、我が宗にくらし。貪欲は深く、公家・武家をおそれて、この義を証伏し讃歎す。昔の多宝・分身の諸仏は、法華経の令法久住を証明す。今の天台宗の碩徳は、理深解微を証伏せり。かるがゆえに、日本国にただ法華経の名のみあって、得道の人一

人もなし。誰をか法華経の行者とせん。寺塔を焼いて流罪せらるる僧侶はかずをしらず。公家・武家に諛ってにくまるる高僧これ多し。これらを法華経の行者というべきか。仏語むなしからざれば、三類の怨敵すでに国中に充満せり。金言のやぶるべきかのゆえに、法華経の行者なし。いかんがせん、いかんがせん。

そもそも、たれやの人か衆俗に悪口・罵詈せらるる。誰の僧か刀杖を加えらるる。誰の僧をか法華経のゆえに公家・武家に奏する。誰の僧か「しばしば擯出せられん」と度々ながさるる。日蓮より外に日本国に取り出ださんとするに人なし。

日蓮は法華経の行者にあらず。天これをすて給うゆえに。誰をか当世の法華経の行者として仏語を実語とせん。仏と提婆とは身と影とのごとし。生々には離れず。聖徳太子と守屋とは蓮華の華菓同時なるがごとし。法華経の行者あらば、必ず三類の怨敵あるべし。三類はすでにあり。法華経の行者は誰なるらん。求めて師とすべし。一眼の亀の浮き木に値うなるべし。

ある人云わく、当世の三類はほぼ有るににたり。ただし法華経の行者なし。汝を法華経の行者といわんとすれば、大いなる相違あり。この経に云わく「天の諸の童子は、もって給使をなさん。刀杖も加えず、毒も害すること能わじ」。また云わく「もし人、悪み罵らば、口は則ち閉塞せん」等。また云わく「現世安穏にして、後に善処に生ぜん」等云々。また「頭破れて七分に作ること、阿梨樹の枝のごとくならん」。また云わく「また現世においてその福報を得ん」等。また云わく「もしまた

この経典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん」等云々。

答えて云わく、汝が疑い大いに吉し。ついでに不審を晴らさん。不軽品に云わく「悪口・罵詈」等。また云わく「あるいは杖木・瓦石をもって、これを打擲す」等云々。涅槃経に云わく「もしは殺し、もしは害せん」等云々。法華経に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し」等云々。

仏は小指を提婆にやぶられ、九横の大難に値い給う。これは法華経の行者にあらずや。不軽菩薩は一乗の行者といわれまじきか。目連は竹杖に殺さる。法華経記別の後なり。付法蔵の第十四の提婆菩薩、第二十五の師子尊者の二人は人に殺されぬ。これらは法華経の行者にはあらざるか。竺の道生は蘇山に流されぬ。法道は火印を面にやいて江南にうつさる。北野天神、白居易これらは法華経の行者ならざるか。

事の心を案ずるに、前生に法華経誹謗の罪なきもの今生に法華経を行ず、これを世間の失によせ、あるいは罪なきをあだすれば、たちまちに現罰あるか。修羅が帝釈をいる、金翅鳥の阿耨池に入る等、必ず返って一時に損ずるがごとし。天台云わく「今の我が疾苦は皆過去に由る。今生の修福は報、将来に在り」等云々。心地観経に云わく「過去の因を知らんと欲せば、その現在の果を見よ。未来の果を知らんと欲せば、その現在の因を見よ」等云々。不軽品に云わく「その罪は畢え已わって」等云々。

不軽菩薩は、過去に法華経を謗じ給う罪身に有るゆえに、瓦石をかぼるとみえたり。

また、順次生に必ず地獄に堕つべき者は、重罪を造るとも現罰なし。一闡提人これなり。涅槃経に

云わく「迦葉菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、仏の所説のごとく、大涅槃の光、一切衆生の毛孔に入る』と」等云々。また云わく「迦葉菩薩、仏に白して言さく『世尊よ、いかんぞ、いまだ菩提心を発さざる者、菩提の因を得ん』と」等云々。仏この問いを答えて云わく「仏、迦葉に告げたまわく『もしこの大涅槃経を聞くことあって、我は菩提心を発すことを用いずと言って正法を誹謗せん。この人、即時に夜の夢の中において羅刹の像を見て心中に怖畏す。羅刹語って言わく、咄いかな、善男子よ。汝今もし菩提心を発さずんば、当に汝が命を断つべしと。この人惶怖し、寤め已わって、即ち菩提の心を発す○当に知るべし、この人はこれ大菩薩なり』と」等云々。いとうの大悪人ならざる者の正法を誹謗すれば、即時に夢みてひるがえる心生ず。

また云わく「枯木・石山」等。また云わく「燋れる種甘雨に遇うといえども」等。また「明珠淤泥」等。また云わく「人の手に創あるに、毒薬を捉るがごとし」等。また云わく「大雨、空に住せず」等云々。これらの多くの譬えあり。詮ずるところは、上品の一闡提人になりぬれば、順次生に必ず無間獄に堕つべきゆえに現罰なし。例せば、夏の桀・殷の紂の世には天変なし。重科有って必ず世ほろぶべきゆえか。

また守護神この国をすつるゆえに現罰なきか。謗法の世をば守護神すてて去り、諸天まぼるべからず。かるがゆえに、正法を行ずるものにしるしなし。還って大難に値うべし。金光明経に云わく「善業を修する者は日々に衰滅す」等云々。悪国・悪時これなり。つぶさには立正安国論にかんがえたるがごとし。

詮ずるところは、天もすて給え、諸難にもあえ、身命を期とせん。身子が六十劫の菩薩の行を退せし、乞眼の婆羅門の責めを堪えざるゆえ。久遠・大通の者の三・五の塵をふる、悪知識に値うゆえなり。善に付け悪につけ、法華経をすてつるは地獄の業なるべし。大願を立てん。日本国の位をゆずらん、法華経をすてて観経等について後生をごせよ、父母の頸を刎ねん、念仏申さずばなんどの種々の大難出来すとも、智者に我が義やぶられずば用いじとなり。その外の大難、風の前の塵なるべし。我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん、我日本の大船とならん等とちかいし願いやぶるべからず。疑って云わく、いかにとして汝が流罪・死罪等を過去の宿習と知らん。

答えて云わく、銅鏡は色形を顕す。秦王験偽の鏡は現在の罪を顕す。仏法の鏡は過去の業因を現す。般泥洹経に云わく「善男子よ。過去にかつて無量の諸罪、種々の悪業を作るに、この諸の罪報は〇あるいは軽易せられ、あるいは形状醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利あらず、貧賤の家・邪見の家に生まれ、あるいは王難に遭い、および余の種々の人間の苦報あらん。現世に軽く受くるは、これ護法の功徳力に由るが故なり」等云々。

この経文、日蓮が身にあたかも符契のごとし。狐疑の氷とけぬ。千万の難も由なし。一々の句を我が身にあわせん。「あるいは軽易せらる」等云々。法華経に云わく「軽賤憎嫉」等云々。二十余年が間の軽慢せらる。「あるいは形状醜陋」、また云わく「衣服足らず」、予が身なり。「飲食麤疎」、予が身なり。「財を求むるに利あらず」、予が身なり。「貧賤の家に生まる」、予が身なり。「あるいは王難に遭う」等、この経文、人疑うべしや。法華経に云わく「しばしば擯出せられん」。この経文に云わく

「種々」等云々。「これ護法の功徳力に由るが故なり」等とは、摩訶止観の第五に云わく「散善微弱なるは動ぜしむること能わず。今、止観を修して健病虧けざれば、生死の輪を動ず」等云々。また云わく「三障四魔、紛然として競い起こる」等云々。

我、無始よりこのかた、悪王と生まれて、法華経の行者の衣食・田畠等を奪い取りせしこと、数知らず。当世日本国の諸人の、法華経の山寺をたおすがごとし。また法華経の行者の頸を刎ぬること、その数をしらず。これらの重罪、果はたせるもあり、いまだ果はたさざるもあるらん。果たすも、余残いまだ尽きず。生死を離るる時は、必ずこの重罪を消果してて出離すべし。功徳は浅軽なり、これらの罪は深重なり。権経を行ぜしには、この重罪いまだ起こらず。鉄を熱くにいとうきたわざれば、甚鍛きず隠れてみえず。度々せむれば、きず現あらわる。麻の子をしぼるに、つよくせめざれば、油少なきがごとし。

今、日蓮、強盛に国土の謗法を責むればこの大難の来るは、過去の重罪の今生の護法に招き出だせるなるべし。鉄の火に値わざれば黒し、火と合いぬれば赤し。木をもって急流をかけば、波山のごとし。睡れる師子に手をつくれば大いに吼ゆ。

涅槃経に云わく「譬えば貧女のごとし。居家、救護の者有ることなく、加うるにまた、病苦・飢渇の逼むるところとなって、遊行・乞丐す。他の客舎に止まり、寄って一子を生ず。この客舎の主、駆逐して去らしむ。その産していまだ久しからず、この児を携え抱いて他国に至らんと欲し、その中路において、悪風雨に遇って、寒苦並び至り、多く蚊・虻・蜂・蠆・毒虫の啖い食うところとなる。恒

河に逕由し児を抱いて渡る。その水漂疾なれども、放ち捨てず。ここにおいて、母子ついにともに没しぬ。かくのごとき女人は慈念の功徳もて命終の後梵天に生ず。文殊師利よ。もし善男子有って正法を護らんと欲せば○彼の貧女の恒河に在って子を愛念するがために身命を捨つるがごとくせよ。善男子よ。護法の菩薩もまた応にかくのごとくなるべし。むしろ身命を捨てよ○かくのごときの人、解脱を求めずといえども、解脱に自ずから至ること、彼の貧女の梵天を求めざれども、梵天に自ずから至るがごとし」等云々。

この経文は、章安大師、三障をもって釈し給えり。それをみるべし。「貧人」とは、法財のなきなり。「女人」とは、一分の慈ある者なり。「客舎」とは、穢土なり。「一子」とは、法華経の信心、了因の子なり。「舎の主、駆逐す」とは、流罪せらる。「その産していまだ久しからず」とは、いまだ信じてひさしからず。「悪風」とは、流罪の勅宣なり。「蚊・虻」等とは、「諸の無智の人の、悪口・罵詈等するもの有らん」なり。「母子共に没す」とは、終に法華経の信心をやぶらずして頭を刎ねらるるなり。「梵天」とは、仏界に生まるるをいうなり。

引業と申すは、仏界までかわらず。日本・漢土の万国の諸人を殺すとも、五逆・謗法なければ、無間地獄には堕ちず。余の悪道にして多歳をふべし。色天に生まること、万戒を持てども万善を修すれども、散善にては生まれず。また梵天王となること、有漏の引業の上に慈悲を加えて生ずべし。今この貧女が子を念うゆえに梵天に生まるるは、常の性相には相違せり。章安の二はあれども、詮ずるところは子を念う慈念より外のことなし。念を一境にするは、定に似たり。専ら子を思うは、また慈

悲にもにたり。かるがゆえに、他事なけれども天に生まるるか。

また仏になる道は、華厳の唯心法界、三論の八不、法相の唯識、真言の五輪観等も実には叶うべしともみえず。ただ天台の一念三千こそ仏になるべき道とみゆれ。この一念三千も我ら一分の慧解もなし。しかれども、一代経々の中にはこの経ばかり一念三千の玉をいだけり。余経の理は玉ににたる黄石なり。沙をしぼるに油なし、石女に子のなきがごとし。諸経は智者なお仏にならず、この経は愚人も仏因を種うべし。「解脱を求めずとも、解脱に自ずから至る」等云々。

我ならびに我が弟子、諸難ありとも疑う心なくば、自然に仏界にいたるべし。天の加護なきことを疑わざれ。現世の安穏ならざることをなげかざれ。我が弟子に朝夕教えしかども、疑いをおこして皆すてけん。つたなき者のならいは、約束せし事をまことの時はわするるなるべし。

妻子を不便とおもうゆえ、現身にわかれんことをなげくらん。多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか、仏道のためにはなれしか。いつも同じわかれなるべし。我、法華経の信心をやぶらずしては、霊山にまいりて返ってみちびけかし。

て、霊山にまいりて返ってみちびけかし。

疑って云わく、念仏者と禅宗等を無間と申すは、諍う心あり。修羅道にや堕つべかるらん。また法華経の安楽行品に云わく「楽って人および経典の過を説かざれ。また諸余の法師を軽慢せざれ」等云々。汝この経文に相違するゆえに、天にすてられたるか。

答えて云わく、止観に云わく「夫れ、仏に両説あり。一には摂、二には折なり。安楽行に『長短を称せざれ』というがごときは、これ摂の義なり。大経に『刀杖を執持し乃至首を斬れ』というは、こ

れ折の義なり。与奪途を殊にすといえども、ともに利益せしむ」等云々。

弘決に云わく「『夫れ、仏に両説あり』等とは○『大経に刀杖を執持す』とは、第三に云わく『正法を護る者は、五戒を受けず、威儀を修せず』○『乃至』より下の文は、仙予国王等の文なり。また『新医禁めて云わく、もしさらになすことあらば、当にその首を断つべし』と、かくのごとき等の文、ならびにこれ破法の人を折伏す。一切の経論この二つを出でず」等云々。

文句に云わく「問う。大経には、国王に親付し弓を持し箭を帯し悪人を摧伏せよと明かす。この経は、『豪勢を遠離し、謙下し慈善せよ』と。剛柔碩いに乖けり。いかんぞ異ならざらん。答う。大経はひとえに折伏を論ずれども、『一子地に住す』と。何ぞかつて摂受無からん。この経はひとえに摂受を明かせども、『頭破れて七分に作る』と。折伏無きにあらず。各一端を挙げて、時に適うのみ」等云々。

涅槃経の疏に云わく「出家・在家、法を護らんには、その元心の所為を取り、事を棄て理を存して大教を匡け弘む。故に『正法を護持せんには』と言う。小節に拘らず。故に『威儀を修せず』と言う○昔の時は平らかにして法弘まる。応に戒を持つべし。杖を持つことなかれ。今の時は嶮にして法翳くる。応に杖を持つべし。戒を持つことなかれ。今昔ともに嶮ならば、応にともに戒を持つべし。ともに杖を持つべし。今昔ともに平らかならば、応にともに戒を持つべし。取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等云々。

汝が不審をば、世間の学者、多分は道理とおもう。いかに諫暁すれども、日蓮が弟子等もこのおもいをすてず。一闡提人のごとくなるゆえに、まず天台・妙楽等の釈をいだして、かれが邪難をふせぐ。

夫れ、摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう。水は火をにくむ。摂受の者は折

伏をわらう。折伏の者は摂受をかなしむ。

無智・悪人の国土に充満の時は、摂受を前とす。安楽行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は、折伏を前とす。常不軽品のごとし。譬えば、熱き時に寒水を用い、寒き時に火をこのむがごとし。草木は日輪の眷属、寒き月に苦をう。諸水は月輪の所従、熱き時に本性を失う。

末法に摂受・折伏あるべし。いわゆる悪国・破法の両国あるべきゆえなり。日本国の当世は悪国か破法の国かとしるべし。

問うて云わく、摂受の時折伏を行ずると、折伏の時摂受を行ずると、利益あるべしや。

答えて云わく、涅槃経に云わく「迦葉菩薩、仏に白して言さく○『如来の法身は金剛不壊なり。しかるにいまだ所因を知ること能わず、いかん』。仏言わく『迦葉よ。能く正法を護持する因縁をもっての故に、この金剛身を成就することを得たり。迦葉よ。我、正法を護持する因縁もて、今この金剛身を成就することを得たり。常住にして壊れず。善男子よ。正法を護持せん者は、五戒を受けず、威儀を修せず、応に刀剣・弓箭を持すべし○かくのごとく種々に法を説くも、しかもなお師子吼すること能わず○非法の悪人を降伏すること能わず、かくのごとき比丘、自利しおよび衆生を利すること能わず。当に知るべし、この輩は懈怠・懶惰なり。能く戒を持ち浄行を守護すといえども、当に知るべし、この人は能くなすところなからん乃至時に破戒の者有ってこの語を聞き已わって、みな共に瞋恚してこの法師を害せん。この説法の者、たといまた命終すとも、なお持戒・自利利他と名づく』と」等云々。章安云わく「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等。天台云わく「時に適うのみ」等云々。

譬えば、秋の終わりに種子を下ろし田畠をかえさんに、稲米をうること得難かたし。

建仁年中に法然・大日の二人出来して、念仏宗・禅宗を興行す。法然云わく「法華経は末法に入っては、いまだ一人も得る者有らず、千の中に一りも無し」等云々。大日云わく「教外に別伝す」等云々。この両義、国土に充満せり。天台真言の学者等、念仏・禅の檀那をへつらい恐おそるること、犬の主に尾振をふり、ねずみの猫を恐おそるがごとし。国王・将軍にみやづかい、破仏法の因縁、破国の因縁を能く説き、能くかたるなり。天台真言の学者等、今生には餓鬼道に堕ち、後生には阿鼻を招くべし。たとい山林にまじわって一念三千の観を凝らすとも、空閑にして三密の油をこぼさずとも、時機をしらず摂折の二門を弁えずば、いかでか生死を離るべき。

問うて云わく、念仏者・禅宗等を責めて彼らにあだまれたる、いかなる利益かあるや。

答えて云わく、涅槃経に云わく「もし善比丘あって、法を壊る者を見て、置いて、呵責し駆遣し挙処せずんば、当に知るべし、この人は仏法の中の怨なり。もし能く駆遣し呵責し挙処せば、これ我が弟子、真の声聞なり」等云々。「仏法を壊乱するは、仏法の中の怨なり。慈無くして詐り親しむは、これ我が弟子、真の声聞なり」等云々。能く呵責せんは、これ我が弟子なり。駆遣せざらんは、仏法の中の怨なり」等云々。これ彼が親なり。能く糾治せんは、これ護法の声聞、真の我が弟子なり。彼がために悪を除くは、即ち彼が怨なり。

夫れ、法華経の宝塔品を拝見するに、釈迦・多宝・十方分身の諸仏の来集はなに心ぞ。「法をして久しく住せしめんが故に、ここに来至したまえり」等云々。三仏の未来に法華経を弘めて未来の一切の仏子にあたえんとおぼしめす御心の中を推すいするに、父母の一子の大苦に値うを見るよりも強盛にこ

そみえたるを、法然いたわしともおもわで、末法には法華経の門を堅く閉じて人を入れじとせき、狂児をたぼらかして宝をすてさするように、法華経を抛てさせける心こそ無慙に見え候え。我が父母を人の殺さんに、父母につげざるべしや。悪子の酔狂して父母を殺すを、せいせざるべしや。悪人、寺塔に火を放たんに、せいせざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。日本の禅と念仏者とを見てせいせざるものは、かくのごとし。「慈無くして詐り親しむは、これ彼が怨なり」等云々。

日蓮は日本国の諸人にしゅうし父母なり。一切の天台宗の人は彼らが大怨敵なり。「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。無道心の者、生死をはなるることはなきなり。教主釈尊の一切の外道に大悪人と罵詈せられさせ給い、天台大師の南北ならびに得一に「三寸の舌もて五尺の身をたつ」と、伝教大師の南京の諸人に「最澄いまだ唐都を見ず」等といわれさせ給いし、皆、法華経のゆえなればはじならず。愚人にほめられたるは第一のはじなり。日蓮が御勘気をかほれば、天台真言の法師等、悦ばしくやおもうらん。かつはむざんなり、かつはきかいなり。

夫れ、釈尊は娑婆に入り、羅什は秦に入り、伝教は尸那に入り、提婆・師子は身をすつ。薬王は臂をやく。上宮は手の皮をはぐ。釈迦菩薩は肉をうる。楽法は骨を筆とす。天台云わく「時に適うのみ」等云々。仏法は時によるべし。日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかしからず。後生には大楽をうくべければ大いに悦ばし。

(006)

如来滅後五五百歳始観心本尊抄

（観心本尊抄）

文永10年（73）4月25日　52歳

本朝沙門日蓮撰す。

摩訶止観第五に云わく〈世間と如是と一なり。開合の異なり〉

「夫れ、一心に十法界を具す。一法界にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の世間を具す。この三千、一念の心に在り。もし心無くんば已みなん。介爾も心有らば、即ち三千を具す乃至ゆえに称して不可思議境となす。意ここに在り」等云々

〈ある本に云わく「一界に三種の世間を具す」〉。

問うて曰わく、玄義に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

問うて曰わく、文句に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

問うて曰わく、その妙楽の釈いかん。

答えて曰わく、「ならびにいまだ一念三千と云わず」等云々。

問うて曰わく、止観の一・二・三・四等に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰わく、これ無し。

問うて曰わく、その証いかん。

答えて曰わく、妙楽云わく「故に、止観の『正しく観法を明かす』に至って、ならびに三千をもって指南となす」等云々。

疑って云わく、玄義第二に云わく「また一法界に九法界を具すれば、百法界・千如是あり」等云々。文句第一に云わく「一入に十法界を具すれば、一界また十界なり。十界に各十如是あれば、即ちこれ一千なり」等云々。観音玄に云わく「十法界交互なれば、即ち百法界有り。千種の性相、冥伏して心に在り。現前せずといえども、宛然として具足す」等云々。

問うて曰わく、止観の前の四に一念三千の名目を明かすや。

答えて曰わく、妙楽云わく「明かさず」。

問うて曰わく、その釈いかん。

答う。弘決第五に云わく「もし正観に望めば、全くいまだ行を論ぜず。また二十五法に歴て事に約して解を生ず。方に能く正修の方便となすに堪えたり。この故に、前の六は皆解に属す」等云々。また云わく「故に、止観の『正しく観法を明かす』に至って、ならびに三千をもって指南となす。乃ちこれ終窮究竟の極説なり。故に、序の中に『己心の中に行ずるところの法門を説く』と云えり。良に以有るなり。請う、尋ね読まん者、心に異縁無かれ」等云々。

夫れ、智者の弘法三十年、二十九年の間は玄・文等の諸義を説いて五時八教・百界千如を明かし、前の五百余年の間の諸非を責め、ならびに天竺の論師いまだ述べざるを顕す。章安大師云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず。震旦の人師、何ぞ労わしく語るに及ばん。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ」等云々。はかないかな、天台の末学等、華厳・真言の元祖の盗人に一念三千の重宝を盗み取られて、還って彼らが門家と成りぬ。章安大師、兼ねてこのことを知って、歎いて言わく「この言もし墜ちなば、将来悲しむべし」云々。

問うて曰わく、百界千如と一念三千と差別いかん。

答えて曰わく、百界千如は有情界に限り、一念三千は情・非情に亘る。

不審して云わく、非情に十如是亘るならば、草木に心有って有情のごとく成仏すとなすべしや、いかん。

答えて曰わく、このこと難信難解なり。天台の難信難解に二つ有り。一には教門の難信難解、二には観門の難信難解なり。その教門の難信難解とは、一仏の所説において、爾前の諸経には二乗と闡提とは未来に永く成仏せず、教主釈尊は始めて正覚を成ず。法華経迹本二門に来至したまい、彼の二説を壊る。一仏二言、水火なり。誰人かこれを信ぜん。これは教門の難信難解なり。

観門の難信難解とは、百界千如・一念三千、非情の上の色心二法・十如是これなり。しかりといえども、木画の二像においては外典・内典共にこれを許して本尊となす。その義においては天台一家より出でたり。草木の上に色心の因果を置かずんば、木画の像を本尊に恃み奉ること無益なり。

疑って云わく、草木国土の上の十如是の因果の二法は、いずれの文に出でたるや。

答えて曰わく、止観第五に云わく「国土世間、また十種の法を具す。ゆえに悪国土の相・性・体・力等あり」云々。釈籤第六に云わく「相はただ色のみに在り。性はただ心のみに在り。体・力・作・縁は、義、色心を兼ね、因果はただ心のみ、報はただ色のみに在り」等云々。金錍論に云わく「乃ちこれ一草・一木・一礫・一塵、各一仏性、各一因果あり。縁・了を具足す」等云々。

問うて曰わく、出処既にこれを聞く。観心の心いかん。

答えて曰わく、観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、これを観心と云うなり。譬えば、他人の六根を見るといえども、いまだ自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向かうの時、始めて自具の六根を見るがごとし。たとい諸経の中に所々に六道ならびに四聖を載すといえども、法華経ならびに天台大師述ぶるところの摩訶止観等の明鏡を見ざれば、自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり。

問うて曰わく、法華経はいずれの文ぞ。天台の釈はいかん。

答えて曰わく、法華経第一の方便品に云わく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。これ九界所具の仏界なり。寿量品に云わく「かくのごとく我は成仏してより已来、はなはだ大いに久遠なり。寿命は無量阿僧祇劫にして、常住にして滅せず。諸の善男子よ。我は本菩薩の道を行じて、成ぜしところの寿命は、今なおいまだ尽きず、また上の数に倍せり」等云々。この経文は仏界所具の九界なり。経に云わく「一に藍婆と名づけ乃至汝等はただ能く法華の名を持つ者を護らんすら、福は量るべからず」等云々。これ餓鬼界所

具の十界なり。経に云わく「竜女乃至等正覚を成ず」等云々。これ畜生界所具の十界なり。経に云わく「婆稚阿修羅王乃至一偈一句を聞いて、阿耨多羅三藐三菩提を得べし」等云々。修羅界所具の十界なり。経に云わく「もし人、仏のための故に乃至皆すでに仏道を成じたり」等云々。これ人界所具の十界なり。経に云わく「大梵天王乃至我らもまたかくのごとく、必ず当に作仏することを得べし」等云々。これ天界所具の十界なり。経に云わく「舎利弗乃至華光如来」等云々。これ声聞界所具の十界なり。経に云わく「その縁覚を求むる者、比丘比丘尼乃至合掌し敬心をもって、具足の道を聞きたてまつらんと欲す」等云々。これ即ち縁覚界所具の十界なり。経に云わく「地涌千界乃至真浄の大法」等云々。これ即ち菩薩所具の十界なり。経に云わく「あるいは己身を説き、あるいは他身を説く」等云々。即ち仏界所具の十界なり。

問うて曰わく、自他面の六根は共にこれを見る。彼此の十界においてはいまだこれを見ず。いかんがこれを信ぜん。

答えて曰わく、法華経法師品に云わく「難信難解」。宝塔品に云わく「六難九易」等云々。天台大師云わく「二門ことごとく昔と反すれば、難信難解なり」。章安大師云わく「仏これをもって大事となす。何ぞ解し易きことを得べけんや」等云々。伝教大師云わく「この法華経は最もこれ難信難解なり。随自意の故に」等云々。

夫れ、在世の正機は過去の宿習厚きの上、教主釈尊・多宝仏・十方分身の諸仏、地涌千界、文殊・弥勒等、これを扶けて諫暁せしむるに、なお信ぜざる者これ有り。五千席を去り、人天移さる。いわ

んや正像をや。いかにいわんや末法の初めをや。汝これを信ぜば、正法にあらじ。

問うて曰わく、経文ならびに天台・章安等の解釈は疑網無し。ただし、火をもって水と云い、墨をもって白しと云う。たとい仏説たりといえども、信を取り難し。今しばしば他面を見るに、ただ人界のみに限って余界を見ず。自面もまたまたかくのごとし。いかんが信心を立てんや。

答う。しばしば他面を見るに、ある時は喜び、ある時は瞋り、ある時は平らかに、ある時は貪り現じ、ある時は癡か現じ、ある時は諂曲なり。瞋るは地獄、貪るは餓鬼、癡かは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平らかなるは人なり。他面の色法においては六道共にこれ有り。四聖は冥伏して現ぜざれども、委細にこれを尋ねばこれ有るべし。

問うて曰わく、六道においては、分明ならずといえども、ほぼこれを聞くに、これを備うるに似たり。四聖は全く見えざるはいかん。

答えて曰わく、前には人界の六道これを疑う。しかりといえども、強いてこれを言って相似の言を出だせしなり。四聖もまたしかるべきか。試みに道理を添加して万が一これを宣べん。いわゆる、世間の無常は眼前に有り。あに人界に二乗界無からんや。無顧の悪人もなお妻子を慈愛す。菩薩界の一分なり。ただ仏界ばかり現じ難し。九界を具するをもって、強いてこれを信じ、疑惑せしむることなかれ。法華経の文に人界を説いて云わく「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」。涅槃経に云わく「大乗を学する者は、肉眼有りといえども、名づけて仏眼となす」等云々。末代の凡夫、出生して法華経を信ずるは、人界に仏界を具足するが故なり。

問うて曰わく、十界互具の仏語分明なり。しかりといえども、我らが劣心に仏法界を具すること、信を取り難きものなり。今時これを信ぜずんば、必ず一闡提と成らん。願わくは、大慈悲を起こしてこれを信ぜしめ、阿鼻の苦を救護したまえ。

答えて曰わく、汝既に「ただ一大事の因縁」の経文を見聞してこれを信ぜずんば、釈尊より已下、四依の菩薩ならびに末代の理即の我ら、いかんが汝が不信を救護せんや。しかりといえども、試みにこれを言わん。仏に値いたてまつって覚らざる者の、阿難等の辺にして得道する者これ有ればなり。

それ、機に二つ有り。一には、仏を見たてまつり、法華にて得道す。二には、仏を見たてまつらざれども、法華にて得道するなり。その上、仏教已前は、漢土の道士、月支の外道の、儒教・四韋陀等をもって縁となして正見に入る者これ有り。また利根の菩薩・凡夫等の、華厳・方等・般若等の諸大乗経を聞きし縁をもって大通・久遠の下種を顕示する者多々なり。例せば、独覚の飛花落葉のごとし。教外の得道これなり。過去の下種結縁無き者にして権小に執著する者は、たとい法華経に値い奉れども、小権の見を出でず。自見をもって正義となすが故に、還って法華経をもって、あるいは小乗経に同じ、あるいは華厳・大日経等に同じ、あるいはこれを下す。これらの諸師は儒家・外道の賢聖より劣れる者なり。これらはしばらくこれを置く。

十界互具、これを立つるは、石中の火・木中の花、信じ難けれども、縁に値って出生すればこれを信ず。人界所具の仏界は水中の火・火中の水、最もはなはだ信じ難し。しかりといえども、竜火は水より出で、竜水は火より生ず。心得られざれども、現証有ればこれを用いる。既に人界の八界これを信

ず。仏界何ぞこれを用いざらん。尭・舜等の聖人のごときは、万民において偏頗無し。人界の仏界の一分なり。不軽菩薩は見るところの人において仏身を見る。悉達太子は人界より仏身を成ず。これらの現証をもってこれを信ずべきなり。

問うて曰わく、教主釈尊は〈これより堅固にこれを秘す〉三惑已断の仏なり。また十方世界の国主、一切の菩薩・二乗・人天等の主君なり。行の時は梵天左に在り、帝釈右に侍り、四衆八部後に従い、金剛前に導き、八万法蔵を演説して、一切衆生を得脱せしむ。かくのごとき仏陀、何をもって我ら凡夫の己心に住せしめんや。

また迹門・爾前の意をもってこれを論ずれば、教主釈尊は始成正覚の仏なり。過去の因行を尋ね求むれば、あるいは能施太子、あるいは儒童菩薩、あるいは尸毘王、あるいは薩埵王子、あるいは三祇百劫、あるいは動逾塵劫、あるいは無量阿僧祇劫、あるいは初発心時、あるいは三千塵点等の間、七万・五千・六千・七千等の仏を供養し、劫を積み行満じて、今、教主釈尊と成りたもう。かくのごとき因位の諸行は皆、我らが己心所具の菩薩界の功徳なるか。

果位をもってこれを論ずれば、教主釈尊は始成正覚の仏、四十余年の間、四教の色身を示現し、爾前・迹門・涅槃経等を演説して、一切衆生を利益したもう。いわゆる、華蔵の時の十方台上の盧舎那、阿含経の三十四心断結成道の仏、方等・般若の千仏等、大日・金剛頂等の千二百余尊、ならびに迹門宝塔品の四土色身。涅槃経の、あるいは丈六と見、あるいは小身・大身と現じ、あるいは盧舎那と見、あるいは身虚空に同じと見るとの四種の身。乃至八十御入滅したまいて舎利を留めて正像末を

利益したもう。

本門をもってこれを疑わば、教主釈尊は五百塵点已前の仏なり。因位もまたかくのごとし。それより已来、十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化したもう。本門の所化をもって迹門の所化に比校すれば、一滴と大海と、一塵と大山となり。本門の一菩薩を迹門の十方世界の文殊・観音等に対向すれば、猿猴をもって帝釈に比するになお及ばず。その外、十方世界の断惑証果の二乗、ならびに梵天・帝釈・日月・四天・四輪王、乃至無間大城の大火炎等、これらは皆、我が一念の十界なるか、己心の三千なるか。仏説たりといえども、これを信ずべからず。

これをもってこれを思うに、爾前の諸経は実事なり実語なり。華厳経に云わく「究竟して虚妄を離れ、染無きこと虚空のごとし」。仁王経に云わく「源を窮め性を尽くして、妙智存せり」。金剛般若経に云わく「清浄の善のみ有り」。馬鳴菩薩、起信論に云わく「如来蔵の中に清浄の功徳のみ有り」。天親菩薩、唯識論に云わく「謂わく、余の有漏と劣の無漏との種は、金剛喩定の現在前する時、極円明純浄の本識を引く。彼の依にあらざるが故に、皆、永く棄捨す」等云々。爾前の経々と法華経とこれを校量するに、彼の経々は無数なり。時説既に長し。一仏二言、彼に付くべし。馬鳴菩薩は付法蔵第十一にして仏記これ有り。天親は千部の論師にして四依の大士なり。天台大師は辺鄙の小僧にして一論をも宣べず。誰かこれを信ぜん。

その上、多を捨て少に付くとも、法華経の文分明ならば少し恃怙有らんも、法華経の文にいずれの所にか十界互具・百界千如・一念三千の分明なる証文これ有りや。したがって経文を開拓するに、「諸

法の中の悪を断じたまえり」等云々。天親菩薩の法華論、堅慧菩薩の宝性論に十界互具これ無く、漢土南北の諸大人師、日本七寺の末師の中にもこの義無し。ただ天台一人のみの僻見なり。伝教一人のみの謬伝なり。故に、清涼国師云わく「天台の謬りなり」。慧苑法師云わく「しかるに、天台は小乗を呼んで三蔵教となし、その名謬濫するをもって」等云々。了洪云わく「天台独りいまだ華厳の意を尽くさず」等云々。得一云わく「咄いかな智公よ。汝はこれ誰が弟子ぞ。三寸に足らざる舌根をもって、覆面舌の所説の教時を謗ず」等云々。弘法大師云わく「震旦の人師等、諍って醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云々。

夫れ、一念三千の法門は、一代の権実に名目を削り、四依の諸論師その義を載せず。漢土・日域の人師もこれを用いず。いかんがこれを信ぜん。

答えて曰わく、この難、最も甚だし、最も甚だし。ただし、諸経と法華との相違は経文より事起こって分明なり。未顕と已顕と、証明と舌相と、二乗の成・不、始成と久成と等、これを顕す。諸論師のことは、天台大師云わく「天親・竜樹、内に鑑みるに冷然にして、外には時の宜しきに適い、各権に拠るところあり。しかるに、人師はひとえに解し、学者はいやしくも執し、ついに矢石を興し、各一辺を保って、大いに聖道に乖けり」等云々。章安大師云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず。真旦の人師、何ぞ労わしく語るに及ばん。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ」等云々。天親・竜樹・馬鳴・堅慧等は内鑑冷然たり。しかりといえども、時いまだ至らざるが故にこれを宣べざるか。人師においては、天台已前は、あるいは珠を含み、あるいは一向にこれを知らず。已後

の人師は、あるいは初めにこれを破して後に帰伏する人有り。あるいは一向用いざる者もこれ有り。ただし、「諸法の中の悪を断じたまえり」の経文を会すべきなり。彼は法華経に爾前を載せたる経文なり。往ってこれを見るに、経文分明に十界互具これを説く。いわゆる「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云々。天台この経文を承けて云わく「もし衆生に仏知見無くんば、何ぞ開を論ずるところあらん。当に知るべし、仏の知見、衆生に蘊在することを」云々。章安大師云わく「衆生にもし仏の知見無くんば、何ぞ開悟するところあらん。もし貧女に蔵無くんば、何ぞ示すところあらんや」等云々。ただし、会し難きところは、上の教主釈尊等の大難なり。このことを仏遮会して云わく「已今当の説に最もこれ難信難解なり」。次下の「六難九易」これなり。天台大師云わく「二門ことごとく昔と反すれば、難信難解なり。鋒に当たる難事なり」。章安大師云わく「仏これをもって大事となす。何ぞ解し易きことを得べけんや」。伝教大師云わく「この法華経は最もこれ難信難解なり。随自意の故に」等云々。

夫れ、仏より滅後一千八百余年に至るまで、三国に経歴して、ただ三人のみ有って始めてこの正法を覚知せり。いわゆる、竜樹・天親等はいかん。

問うて曰わく、竜樹・天親等はいかん。

答えて曰わく、これらの聖人は知って言わざるの仁なり。あるいは迹門の一分これを宣べて、本門と観心とを云わず。あるいは機有って時無きか、あるいは機と時と共にこれ無きか。天台・伝教已後はこれを知る者多々なり。二聖の智を用いるが故なり。いわゆる、三論の嘉祥、南三北七の百余人、華厳宗の法蔵・清涼等、法相宗の玄奘三蔵・慈恩大師等、真言宗の善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵

等、律宗の道宣等、初めには反逆を存し、後には一向に帰伏せしなり。

ただし、初めの大難を遮せば、無量義経に云わく「譬えば、国王と夫人の新たに王子を生ぜんがごとし。もしは一日、もしは二日、もしは七日に至り、もしは一月、もしは二月、もしは七月に至り、もしは一歳、もしは二歳、もしは七歳に至り、また国事を領理すること能わずといえども、すでに臣民の宗敬するところとなり、諸の大王の子をば、もって伴侶となさん。王および夫人は、愛心ひとえに重くして、常にともに語らん。所以はいかん。稚小なるをもっての故なり。善男子よ。この持経者もまたかくのごとく、諸仏の国王とこの経の夫人と和合して、共にこの菩薩の子を生ず。もし菩薩、この経のもしは一句、もしは一偈、もしは一転、もしは二転、もしは十、もしは百、もしは千、もしは万、もしは億万恒河沙無量無数転ずるを聞くことを得ば、また真理の極を体ること能わずといえども乃至すでに一切の四衆八部の宗仰するところとなり、諸の大菩薩をば、もって眷属となさん乃至常に諸仏の護念するところとなり、慈愛にひとえに覆われん。新学なるをもっての故なり」等云々。

普賢経に云わく「この大乗経典は、諸仏の宝蔵なり。十方三世の諸仏の眼目なり。乃至、三世の諸の如来を出生する種なり乃至汝は大乗を行じて、仏種を断たざれ」等云々。また云わく「この方等経は、これ諸仏の眼なり。諸仏はこれに因って五眼を具することを得たまえり。仏の三種の身は、方等より生ず。これ大法印なり。涅槃海を印す。かくのごとき海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。この三種の身は、人天の福田なり」等云々。

夫れ以んみれば、釈迦如来一代の顕密・大小の二教、華厳・真言等の諸宗の依経、往ってこれを勘

うるに、あるいは十方台葉の毘盧遮那仏、大集の雲集の諸仏如来、般若の染浄の千仏示現、大日・金剛頂等の千二百尊、ただその近因近果のみを演説して、その遠因果を顕さず。速疾頓成これを説けども、三・五の遠化を亡失し、化導の始終跡を削って見えず。華厳経・大日経等は、一往これを見るに別・円・四蔵等に似たれども、再往これを勘うれば蔵・通二教に同じていまだ別・円にも及ばず。本有の三因これ無し。何をもってか仏の種子を定めん。

しかるに、新訳の訳者等、漢土に来入するの日、天台の一念三千の法門を見聞して、あるいは自ら持つところの経々に添加し、あるいは天竺より受持するの由これを称す。天台の学者等、あるいは自宗に同ずるを悦び、あるいは遠きを貴んで近きを蔑み、あるいは旧きを捨てて新しきを取り、魔心・愚心出来す。しかりといえども、詮ずるところは、一念三千の仏種にあらずんば、有情の成仏、木画二像の本尊は有名無実なり。

問うて曰わく、上の大難いまだその会通を聞かず、いかん。

答えて曰わく、無量義経に云わく「いまだ六波羅蜜を修行することを得ずといえども、六波羅蜜は自然に在前す」等云々。法華経に云わく「具足の道を聞きたてまつらんと欲す」等云々。涅槃経に云わく「薩とは具足に名づく」等云々。竜樹菩薩云わく「薩とは六なり」等云々。無依無得大乗四論玄義記に云わく「沙とは訳して六と云う。胡法には六をもって具足の義となすなり」。吉蔵の疏に云く「沙とは翻じて具足となす」。天台大師云わく「薩とは梵語、ここには妙と翻ず」等云々。私に会通を加えば本文を黷すがごとし。しかりといえども、文の心は、釈尊の因行果徳の二法は妙

法蓮華経の五字に具足す、我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたもう。四大声聞の領解に云わく「無上の宝珠は、求めざるに自ずから得たり」云々。我らが己心の声聞界なり。「我がごとく等しくして異なることなからしめん。我が昔の願いしところのごときは、今、すでに満足しぬ。一切衆生を化して、皆仏道に入らしむ」。妙覚の釈尊は我らが血肉なり。因果の功徳は骨髄にあらずや。

宝塔品に云わく「それ能くこの経法を護ることあらば、則ちこれ我および多宝を供養す乃至また諸の来りたまえる化仏の諸の世界を荘厳し光飾したもう者を供養す」等云々。釈迦・多宝・十方の諸仏は我が仏界なり。その跡を紹継して、その功徳を受得す。「須臾もこれを聞かば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を究竟することを得」とは、これなり。

寿量品に云わく「しかるに、我は実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云々。我らが己心の釈尊は、五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり。経に云わく「我は本菩薩の道を行じて、成ぜしところの寿命は、今なおいまだ尽きず、また上の数に倍せり」等云々。我らが己心の菩薩等なり。地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり。例せば、太公・周公旦等は周武の臣下、成王幼稚の眷属、武内大臣は神功皇后の棟梁、仁徳王子の臣下なるがごとし。上行・無辺行・浄行・安立行等は我らが己心の菩薩なり。

妙楽大師云わく「当に知るべし、身土は一念の三千なり。故に、成道の時、この本理に称って、一身一念法界に遍し」等云々。

夫れ、始め寂滅道場・華蔵世界より沙羅林に終わるまで五十余年の間、華蔵・密厳・三変・四見等の三土・四土は、皆、成劫の上の無常の土に変化するところの方便・実報・寂光、安養・浄瑠璃・密厳等なり。能変の教主涅槃に入りぬれば、所変の諸仏随って滅尽す。土もまたもってかくのごとし。

今、本時の娑婆世界は、三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏、既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化もって同体なり。これは即ち己心の三千具足、三種の世間なり。迹門十四品には いまだこれを説かず。法華経の内においても時機未熟の故なるか。

この本門の肝心・南無妙法蓮華経の五字においては、仏なお文殊・薬王等にもこれを付嘱したまわず。いかにいわんや、その已下をや。ただ地涌千界を召して、八品を説いてこれを付嘱したもう。

その本尊の為体は、本師の娑婆の上に宝塔空に居し、塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏、釈尊の脇士たる上行等の四菩薩、文殊・弥勒等は四菩薩の眷属として末座に居し、迹化・他方の大小の諸の菩薩は万民の大地に処して雲客月卿を見るがごとく、十方の諸仏は大地の上に処したもう。迹仏・迹土を表する故なり。

かくのごとき本尊は在世五十余年にこれ無し。八年の間にもただ八品に限る。正像二千年の間は、小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇士となし、権大乗ならびに涅槃・法華経の迹門等の釈尊は文殊・普賢等をもって脇士となす。これらの仏をば正像に造り画けども、いまだ寿量の仏有さず。末法に来入して始めてこの仏像出現せしむべきか。

問う。正像二千余年の間は四依の菩薩ならびに人師等、余仏、小乗・権大乗・爾前・迹門の釈尊等

の寺塔を建立すれども、本門寿量品の本尊ならびに四大菩薩をば三国の王臣ともにいまだ崇重せざるの由、これを申す。このことほぼこれを聞くといえども、前代未聞の故に耳目を驚動し心意を迷惑す。請う、重ねてこれを説け。委細にこれを聞かん。

答えて曰わく、法華経一部八巻二十八品、進んでは前四味、退いては涅槃経等の一代の諸経、総じてこれを括るにただ一経なり。始め寂滅道場より終わり般若経に至るまでは序分なり。無量義経・法華経・普賢経の十巻は正宗なり。涅槃経等は流通分なり。

正宗十巻の中において、また序・正・流通有り。無量義経ならびに序品は序分なり。方便品より分別功徳品の十九行の偈に至るまでの十五品半は正宗分なり。分別功徳品の現在の四信より普賢経に至るまでの十一品半と一巻は流通分なり。

また法華経等の十巻においても二経有り。各、序・正・流通を具するなり。無量義経と序品は序分なり。方便品より人記品に至るまでの八品は正宗分なり。法師品より安楽行品に至るまでの五品は流通分なり。その教主を論ずれば、始成正覚の仏にして、本無今有の百界千如を説く。已今当に超過せる随自意、難信難解の正法なり。過去の結縁を尋ぬれば、大通十六の時、仏果の下種を下し、進んでは華厳経等の前四味をもって助縁となして、大通の種子を覚知せしむ。これは仏の本意にあらず。ただ毒発等の一分なり。二乗・凡夫等は、前四味を縁となし漸々に法華に来至して種子を顕し、開顕を遂ぐる機これなり。また、在世において始めて八品を聞く人天等、あるいは一句一偈等を聞いて下種となし、あるいは熟し、あるいは脱し、あるいは普賢・涅槃等に至り、あるいは正像末等に小・権

等をもって縁となして法華に入る。例せば、在世の前四味の者のごとし。

また、本門十四品の一経に序・正・流通有り。涌出品の半品を序分となし、寿量品と前後の二半と、これを正宗となす。その余は流通分なり。その教主を論ずれば、始成正覚の釈尊にあらず。説くところの法門もまた天地のごとし。十界久遠の上に国土世間既に顕れ、一念三千ほとんど竹膜を隔つ。また迹門ならびに前四味・無量義経・涅槃経等の三説はことごとく随他意の易信易解、本門は三説の外の難信難解・随自意なり。

また、本門において序・正・流通有り。過去大通仏の法華経より、乃至現在の華厳経、乃至迹門十四品、涅槃経等の一代五十余年の諸経、十方三世の諸仏の微塵の経々は皆、寿量の序分なり。一品二半よりの外は小乗教・邪教・未得道教・覆相教と名づく。その機を論ずれば、徳薄・垢重・幼稚・貧窮・孤露にして禽獣に同ずるなり。

爾前・迹門の円教なお仏因にあらず。いかにいわんや大日経等の諸小乗経をや。いかにいわんや華厳・真言等の七宗等の論師・人師の宗をや。与えてこれを論ずれば、前三教を出でず。奪ってこれを云わば、蔵・通に同じ。たとい法は甚深と称すとも、いまだ種・熟・脱を論ぜず。「還って灰断に同じ。化に始終無し」とは、これなり。譬えば、王女たりといえども、畜種を懐妊すれば、その子なお旃陀羅に劣れるがごとし。これらはしばらくこれを閣く。

迹門十四品の正宗の八品は、一往これを見るに、二乗をもって正となし、菩薩・凡夫をもって傍となす。再往これを勘うれば、凡夫・正像末をもって正となす。正像末の三時の中にも、末法の始め、

もって正が中の正となす。

問うて曰わく、その証いかん。

答えて曰わく、法師品に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。宝塔品に云わく「法をして久しく住せしむ乃至来れるところの化仏は当にこの意を知るべし」等。勧持・安楽等これを見るべし。迹門かくのごとし。

本門をもってこれを論ずれば、一向に末法の初めをもって正機となす。いわゆる、一往これを見る時は、久種をもって下種となし、大通・前四味・迹門を熟となして、本門に至って等・妙に登らしむ。再往これを見れば、迹門には似ず、本門は序・正・流通ともに末法の始めをもって詮となす。

在世の本門と末法の初めは一同に純円なり。ただし、彼は脱、これは種なり。彼は一品二半、これはただ題目の五字なり。

問うて曰わく、その証文いかん。

答えて云わく、涌出品に云わく「その時、他方の国土の諸の来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたるは、大衆の中において起立し、合掌し礼を作して、仏に白して言さく『世尊よ。もし我らに仏滅して後において、娑婆世界に在って、勤加精進して、この経典を護持・読誦・書写・供養せんことを聴したまわば、当にこの土において広くこれを説きたてまつるべし』。その時、仏は諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく『止みね。善男子よ。汝等がこの経を護持せんことを須いじ』と」等云々。

法師より已下の五品の経文、前後水火なり。宝塔品の末に云わく「大音声をもって、あまねく四衆に

告げたまわく『誰か能くこの娑婆国土において、広く妙法華経を説かん』と」等云々。たとい教主一仏たりといえども、これを奨勧したまわば、薬王等の大菩薩、梵帝・日月・四天等は重んずべきのところに、多宝仏・十方の諸仏、客仏となってこれを諫暁したもう。諸の菩薩等は、この慇懃の付嘱を聞いて「我は身命を愛せず」の誓言を立つ。これらはひとえに仏意に叶わんがためなり。しかるに、須臾の間に仏語相違して、過八恒沙のこの土の弘経を制止したもう。進退これ谷まれり。凡智には及ばず。

天台智者大師、前三後三の六釈を作ってこれを会す。詮ずるところ、迹化・他方の大菩薩等に我が内証の寿量品をもって授与すべからず。末法の初めは謗法の国にして悪機なるが故にこれを止め、地涌千界の大菩薩を召して、寿量品の肝心たる妙法蓮華経の五字をもって閻浮の衆生に授与せしめたもうなり。また迹化の大衆は釈尊初発心の弟子にあらず等の故なり。天台大師云わく「これ我が弟子、応に我が法を弘むべし」。妙楽云わく「子、父の法を弘む。世界の益有り」。輔正記に云わく「法これ久成の法なるをもっての故に、久成の人に付す」等云々。

また弥勒菩薩疑請して云わく、経に云わく「我らは、また『仏の宜しきに随って説きたもうところ、仏の出だしたもうところの言はいまだかつて虚妄ならず。仏は、知ろしめすところをば、みな通達す』と信ずといえども、しかも諸の新発意の菩薩は、仏滅して後において、もしこの語を聞かば、あるいは信受せずして、法を破する罪業の因縁を起こさん。しかり、世尊よ。願わくは、ために解説して、我らが疑いを除きたまえ。および未来世の諸の善男子は、このことを聞き已わりなば、また疑いを生ぜじ」等云々。文の意は、寿量の法門は滅後のためにこれを請うなり。

寿量品に云わく「あるいは本心を失えるもの、あるいは失わざる者あり乃至心を失わざる者は、この良薬の色・香ともに好きを見て、即便ちこれを服するに、病はことごとく除こり癒えぬ」等云々。久遠下種・大通結縁、乃至前四味・迹門等の一切の菩薩・二乗・人天等の本門において得道するものこれなり。経に云わく「余の心を失える者は、その父の来れるを見て、また歓喜し問訊して、病を治せんことを求索むといえども、しかもその薬を与うれども、あえて服せず。所以はいかん。毒気は深く入って、本心を失えるが故に、この好き色・香ある薬において、しかも美からずと謂えばなり乃至『我は今当に方便を設けて、この薬を服せしむべし』乃至『この好き良薬を、今留めてここに在く。汝は取って服すべし。差えじと憂うることなかれ』。この教えを作し已わって、また他国に至り、使いを遣わして還って告ぐ」等云々。分別功徳品に云わく「悪世末法の時」等云々。

問うて曰わく、この経文の「使いを遣わして還って告ぐ」はいかん。

答えて曰わく、四依なり。四依に四類有り。小乗の四依は、多分は正法の前の五百年に出現す。大乗の四依は、多分は正法の後の五百年に出現す。三に迹門の四依は、多分は像法一千年、少分は末法の初めなり。四に本門の四依の地涌千界は、末法の始めに必ず出現すべし。今の「使いを遣わして還って告ぐ」は地涌なり。「この好き良薬」とは寿量品の肝要たる名・体・宗・用・教の南無妙法蓮華経これなり。この良薬をば仏なお迹化に授与したまわず。いかにいわんや他方をや。

神力品に云わく「その時、千世界微塵等の菩薩摩訶薩の地より涌出せる者は、皆仏前において、一心に合掌して、尊顔を瞻仰して、仏に白して言さく『世尊よ。我らは仏滅して後、世尊の分身の在す

ところの国土・滅度の処において、当に広くこの経を説くべし』と」等云々。天台云わく「ただ下方の発誓のみを見たり」等云々。道暹云わく「付嘱とは、この経をば、ただ下方踊出の菩薩のみに付す。何が故にしかる。法これ久成の法なるに由るが故に、久成の人に付す」等云々。夫れ、文殊師利菩薩は東方金色世界の不動仏の弟子、観音は西方無量寿仏の弟子、薬王菩薩は日月浄明徳仏の弟子、普賢菩薩は宝威仏の弟子なり。一往、釈尊の行化を扶けんがために娑婆世界に来入す。また爾前・迹門の菩薩なり。本法所持の人にあらざれば、末法の弘法に足らざるものか。

経に云わく「その時、世尊は乃至一切の衆の前に、大神力を現じたもう。広長舌を出だして、上梵世に至らしむ乃至十方の世界の衆の宝樹の下、師子座の上の諸仏もまたかくのごとく、広長舌を出だしたもう」等云々。夫れ、顕密二道、一切の大・小乗経の中に、釈迦・諸仏並び坐し舌相梵天に至る文これ無し。阿弥陀経の広長舌相三千を覆うは有名無実なり。般若経の舌相三千、光を放って般若を説きしも全く証明にあらず。これは、皆、兼・帯の故に久遠を覆相するが故なり。

かくのごとく十神力を現じて、地涌の菩薩に妙法の五字を嘱累して云わく、経に云わく「その時、仏は上行等の菩薩大衆に告げたまわく『諸仏の神力は、かくのごとく無量無辺、不可思議なり。もし我この神力をもって、無量無辺百千万億阿僧祇劫において、嘱累のための故に、この経の功徳を説かんに、なお尽くすこと能わじ。要をもってこれを言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事は、皆この経において宣示顕説す』と」等云々。天台云わく「『その時、仏は上行に告げたまわく』より下は、第三に結要付嘱なり」云々。

伝教云わく「また神力品に云わく『要をもってこれを言わば、如来の一切の所有の法乃至宣示顕説す』〈已上、経文〉。明らかに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の秘要の蔵、果分の一切の甚深の事は、皆法華において宣示顕説するなり」等云々。

この十神力は、妙法蓮華経の五字をもって上行・安立行・浄行・無辺行等の四大菩薩に授与したもうなり。前の五神力は在世のため、後の五神力は滅後のためなり。しかりといえども、再往これを論ずれば、一向に滅後のためなり。故に、次下の文に云わく「仏滅度して後に、能くこの経を持たんをもっての故に、諸仏は皆歓喜して、無量の神力を現じたもう」等云々。

次下の嘱累品に云わく「その時、釈迦牟尼仏は法座より起って、大神力を現じたもう。右の手をもって、無量の菩薩摩訶薩の頂を摩でて乃至『今もって汝等に付嘱す』と」等云々。地涌の菩薩をもって頭となして、迹化・他方、乃至梵釈・四天等にこの経を嘱累したもう。「十方より来りたまえる諸の分身の仏をして、各本土に還らしめんとして乃至『多宝仏の塔は、還って故のごとくしたもうべし』と」等云々。薬王品已下乃至涅槃経等は、地涌の菩薩去り了わって、迹化の衆、他方の菩薩等のために重ねてこれを付嘱したもう。捃拾遺嘱これなり。

疑って云わく、正像二千年の間に地涌千界、閻浮提に出現してこの経を流通するや。

答えて曰わく、しからず。

驚いて云わく、法華経ならびに本門は、仏の滅後をもって本となして、まず地涌千界にこれを授与す。何ぞ正像に出現してこの経を弘通せざるや。

答えて云わく、宣べず。

重ねて問うて云わく、いかん。

答う。これを宣べず。

また重ねて問う。いかん。

答えて曰わく、これを宣ぶれば、一切世間の諸人、威音王仏の末法のごとし。また我が弟子の中にも、ほぼこれを説かば、皆誹謗をなすべし。黙止せんのみ。

求めて云わく、説かずんば、汝、慳貪に堕せん。

答えて曰わく、進退これ谷まれり。試みにほぼこれを説かん。

法師品に云わく「いわんや滅度して後をや」。寿量品に云わく「今留めてここに在く」。分別功徳品に云わく「悪世末法の時」。薬王品に云わく「後の五百歳、閻浮提に広宣流布せん」。涅槃経に云わく「譬えば、七子あり、父母平等ならざるにあらざれども、しかも病者において心則ちひとえに重きがごとし」等云々。

已前の明鏡をもって仏意を推知するに、仏の世に出ずるは霊山八年の諸人のためにあらず、正像末の人のためなり。また正像二千年の人のためにあらず、末法の始め予がごとき者のためなり。「しかも病者において」と云うは、滅後の法華経誹謗の者を指すなり。「今留めてここに在く」とは、「この好き色・香ある薬において、しかも美からずと謂う」の者を指すなり。地涌千界正像に出でざることは、正法一千年の間は小乗・権大乗なり。機・時共にこれ無く、四依

の大士、小・権をもって縁となして、在世の下種これを脱せしむ。謗多くして熟益を破るべきが故にこれを説かず。例せば、在世の前四味の機根のごとし。像法の中・末に、観音・薬王、南岳・天台等と示現し出現して、迹門をもって面となし本門をもって裏となして、百界千如・一念三千その義を尽くせり。ただ理具のみを論じて、事行の南無妙法蓮華経の五字ならびに本門の本尊、いまだ広くこれを行わず。詮ずるところ、円機有って円時無きが故なり。

今、末法の初め、小をもって大を打ち、権をもって実を破し、東西共にこれを失い、天地顛倒せり。迹化の四依は隠れて現前せず。諸天その国を棄ててこれを守護せず。この時、地涌の菩薩始めて世に出現し、ただ妙法蓮華経の五字のみをもって幼稚に服せしむ。「謗に因って悪に堕つれば、必ず因って益を得」とは、これなり。我が弟子、これを惟え。地涌千界は教主釈尊の初発心の弟子なり。寂滅道場にも来らず、双林最後にも訪わず。不孝の失これ有り。迹門の十四品にも来らず、本門の六品には座を立つ。ただ八品の間にのみ来還せり。かくのごとき高貴の大菩薩、三仏に約束してこれを受持す。末法の初めに出でたまわざるべきか。当に知るべし、この四菩薩、折伏を現ずる時は賢王と成って愚王を誡責し、摂受を行ずる時は僧と成って正法を弘持す。

問うて曰わく、仏の記文はいかん。

答えて曰わく、「後の五百歳、閻浮提に広宣流布せん」と。天台大師、記して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。妙楽、記して云わく「末法の初め、冥利無きにあらず」。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。「末法はなはだ近きに有り」の釈は、我が時

は正しき時にあらずという意なり。伝教大師、日本にして末法の始めを記して云わく「代を語れば像の終わり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・闘諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るなり」。

この釈に「闘諍の時」云々。今の自界叛逆・西海侵逼の二難を指すなり。この時、地涌千界出現して、本門の釈尊を脇士となす一閻浮提第一の本尊この国に立つべし。月支・震旦にいまだこの本尊有さず。日本国の上宮、四天王寺を建立して、いまだ時来らざれば阿弥陀・他方をもって本尊となす。聖武天皇、東大寺を建立す。華厳経の教主なり。いまだ法華経の実義を顕さず。伝教大師ほぼ法華経の実義を顕示す。しかりといえども、時いまだ来らざるの故に、東方の鵝王を建立して本門の四菩薩を顕さず。詮ずるところ、地涌千界のためにこれを譲り与えたもう故なり。この菩薩、仏勅を蒙って近く大地の下に在り。正像にいまだ出現せず、末法にもまた出で来りたまわずんば、大妄語の大士なり。三仏の未来記もまた泡沫に同じ。

これをもってこれを惟うに、正像に無き大地震・大彗星等出来す。これらは金翅鳥・修羅・竜神等の動変にあらず。ひとえに四大菩薩出現せしむべき先兆なるか。天台云わく「雨の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の深きを知る」等云々。妙楽云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。天晴れぬれば地明らかなり。法華を識る者は世法を得べきか。

一念三千を識らざる者には、仏、大慈悲を起こし、五字の内にこの珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたもう。四大菩薩のこの人を守護したまわんこと、太公・周公の文王を摂扶し、四皓が恵帝に侍

奉せしに異ならざるものなり。

文永十年 太歳癸酉 卯月二十五日　　日蓮これを註す。

(007)

観心本尊抄送状

文永10年('73)4月26日　52歳
富木常忍

富木殿　　日蓮

帷一つ・墨三挺・筆五管、給び候い了わんぬ。観心の法門少々これを注して、太田殿・教信御房等に奉る。このこと、日蓮が身に当たる大事なり。これを秘す。無二の志を見ば、これを開拓せらるべきか。

この書は難多く答え少なし。未聞のことなれば、人の耳目これを驚動すべきか。たとい他見に及ぶとも、三人四人座を並べてこれを読むことなかれ。仏の滅後二千二百二十余年、いまだこの書の心有らず。国難を顧みず、五の五百歳を期してこれを演説す。乞い願わくは、一見を歴来る輩は、師弟共に霊山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん。恐々謹言。

文永十年 太歳癸酉 卯月二十六日　　日蓮　花押

富木殿御返事

(008)

法華取要抄

文永11年('74)5月24日　53歳
富木常忍

扶桑沙門日蓮これを述ぶ。

夫れ以んみれば、月支西天より漢土・日本に渡来するところの経論、五千・七千余巻なり。その中の諸経論の勝劣・浅深・難易・先後は、自見に任せてこれを弁ぜんとすれば、その分に及ばず。人に随い宗に依ってこれを知らんとすれば、その義紛紜す。

いわゆる、華厳宗云わく「一切経の中にこの経第一」。法相宗云わく「一切経の中に深密経第一」。三論宗云わく「一切経の中に般若経第一」。真言宗云わく「一切経の中に大日の三部経第一」。禅宗云わく、あるいは云わく「教内には楞伽経第一」、あるいは云わく「首楞厳経第一」、あるいは云わく「教外別伝の宗なり」。浄土宗云わく「一切経の中に浄土三部経、末法に入っては機教相応して第一」。倶舎宗・成実宗・律宗云わく「四阿含ならびに律論は仏説なり。華厳経・法華経等は仏説にあらず、外道の経なり」。あるいは云わく、あるいは云わく。

しかるに、彼々の宗々の元祖等、杜順・智儼・法蔵・澄観、玄奘・慈恩、嘉祥・道朗、善無畏・金剛智・不空、道宣・鑑真、曇鸞・道綽・善導、達磨・慧可等なり。これらの三蔵・大師等は皆、聖人なり

賢人なり。智は日月に斉しく、徳は四海に弥れり。その上、各々、経・律・論に依り、たがいに証拠に至らず。

有り。したがって、王臣国を傾け、土民これを仰ぐ。末世の偏学たとい是非を加うとも、人信用する

しかりといえども、宝山に来り登って瓦石を採取し、栴檀に歩み入って伊蘭を懐き収めば、悔恨有らん。故に、万人の謗りを捨てて、みだりに取捨を加う。我が門弟、委細にこれを尋討せよ。

夫れ、諸宗の人師等、あるいは旧訳の経論を見て新訳の聖典を見ず、あるいは新訳の経論を見て旧訳を捨て置き、あるいは自宗に執著し、曲げて己義に随い、愚見を注し止めて後代にこれを加添す。株杭に驚き騒いで兎獣を尋ね求め、智、円扇に発して、仰いで天月を見る。非を捨て理を取るは智人なり。

今、末の論師・本の人師の邪義を捨て置いて、専ら本経・本論を引き見るに、五十余年の諸経の中に、法華経第四の法師品の中の「已今当」の三字、最も第一なり。諸の論師・諸の人師、定めてこの経文を見けるか。しかりといえども、あるいは相似の経文に狂い、あるいは本師の邪会に執し、あるいは王臣等の帰依を恐るるか。

いわゆる、金光明経の「これ諸経の王なり」、密厳経の「一切経の中に勝れたり」、六波羅蜜経の「総持第一」、大日経の「いかんが菩提」、華厳経の「能くこの経を信ずるは最もこれ難し」、般若経の「法性に会入し、一事をも見ず」、大智度論の「般若波羅蜜は最も第一なり」、涅槃論の「今日、涅槃の理は」等なり。

これらの諸文は法華経の「已今当」の三字に相似せる文なり。しかりといえども、あるいは梵帝・四天等の諸経に対当すればこれ諸経の王なり。あるいは小乗経に相対すれば諸経の中の王なり。あるいは華厳・勝鬘等の経に相対すれば一切経の中に勝れたり。全く五十余年の大小・権実・顕密の諸経に相対してこれ諸経の王なるにあらず。詮ずるところは、所対を見て経々の勝劣を弁うべきなり。強敵を臥せ伏して始めて大力を知見すとはこれなり。

その上、諸経の勝劣は、釈尊一仏の浅深なり、全く多宝・分身助言を加うるにあらず。私説をもって公事に混ずることなかれ。

諸経は、あるいは二乗・凡夫に対揚して小乗経を演説し、あるいは文殊・解脱月・金剛薩埵等に対向す。弘伝の菩薩は、全く地涌千界の上行等にはあらず。

今、法華経と諸経とを相対するに、一代に超過すること二十種これ有り。その中、最要二つ有り。いわゆる三・五の二法なり。

三とは三千塵点劫なり。諸経はあるいは釈尊の因位を明かすこと、あるいは三祇、あるいは動遠塵劫、あるいは無量劫なり。梵王云わく、この土には、二十九劫より已来、知行の主なり。第六天・帝釈・四天王等も、もってかくのごとし。釈尊と梵王等と、始めは知行の先後これを諍論す。しかりといえども、一指を挙げてこれを降伏してより已来、梵天頭を傾け魔王掌を合わせ、三界の衆生をして釈尊に帰伏せしむる、これなり。

また諸仏の因位と釈尊の因位とこれを糾明するに、諸仏の因位は、あるいは三祇、あるいは五劫等

なり。釈尊の因位は既に三千塵点劫より已来、娑婆世界の一切衆生の結縁の大士なり。この世界の六道の一切衆生は、他土の他の菩薩に有縁の者一人もこれ無し。法華経に云わく「その時法を聞きし者は、各諸仏の所に在り」等云々。天台云わく「西方は仏別にして縁異なり。故に子父の義成ぜず」等云々。妙楽云わく「弥陀・釈迦の二仏既に殊なり○いわんや、宿昔の縁別にして化導同じからざるをや。結縁は生のごとく、成熟は養のごとし。生・養の縁異なれば、父子成ぜず」等云々。当世日本国の一切衆生、弥陀の来迎を待つは、譬えば、牛の子に馬の乳を含め、瓦の鏡に天月を浮かべんがごとし。

また果位をもってこれを論ずれば、諸仏如来、あるいは十劫・百劫・千劫已来の過去の仏なり。教主釈尊は、既に五百塵点劫より已来、妙覚果満の仏なり。

大日如来・阿弥陀如来・薬師如来等の尽十方の諸仏は、我らが本師・教主釈尊の所従等なり。天月の万水に浮かぶとはこれなり。華厳経の十方の台上の毘盧遮那、大日経・金剛頂経の両界の大日如来は、宝塔品の多宝如来の左右の脇なり。例せば、世の王の両臣のごとし。この多宝仏も寿量品の教主釈尊の所従なり。この土の我ら衆生は、五百塵点劫より已来、教主釈尊の愛子なり。不孝の失によって今に覚知せずといえども、他方の衆生には似るべからず。有縁の仏と結縁の衆生とは、譬えば天月の清水に浮かぶがごとく、無縁の仏と衆生とは、譬えば聾者の雷の声を聞き、盲者の日月に向かうがごとし。

しかるに、ある人師は釈尊を下して大日如来を仰崇し、ある人師は世尊は無縁なり阿弥陀は有縁な

りと。ある人師云わく、小乗の釈尊と。あるいは華厳経の釈尊と。あるいは法華経迹門の釈尊と。これらの諸師ならびに檀那等、釈尊を忘れて諸仏を取ることは、例せば、阿闍世太子の頻婆沙羅王を殺し釈尊に背いて提婆達多に付きしがごときなり。二月十五日は釈尊御入滅の日、乃至十二月の十五日も三界の慈父の御遠忌なり。善導・法然・永観等の提婆達多に誑かされて、阿弥陀仏の日と定め了わんぬ。四月八日は世尊御誕生の日なり。薬師仏に取り了わんぬ。我が慈父の忌日を他仏に替うるは孝養の者なるか、いかん。寿量品に云わく「我もまたこれ世の父」「狂子を治せんがための故に」等云々。天台大師云わく「本この仏に従って初めて道心を発し、またこの仏に従って不退地に住す乃至なお百川の応須に海に潮ぐべきがごとく、縁に牽かれて応生すること、またかくのごとし」等云々。

問うて曰わく、法華経は誰人のためにこれを説くや。

答えて曰わく、方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り。上より下に向かって次第にこれを読まば、第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安楽行より勧持・提婆・宝塔・法師と逆次にこれを読まば、滅後の衆生をもって本となす。在世の衆生は傍なり。滅後をもってこれを論ぜば、正法一千年・像法一千年は傍なり。末法をもって正となす。末法の中には、日蓮をもって正となすなり。

問うて曰わく、その証拠いかん。

答えて曰わく、「いわんや滅度して後をや」の文これなり。

疑って云わく、日蓮を正となす正文いかん。

答えて云わく、「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん」等云々。

問うて云わく、自讃はいかん。

答えて曰わく、喜び身に余るが故に、堪え難くして自讃するなり。

問うて曰わく、本門の心いかん。

答えて曰わく、本門において二つの心有り。一には、涌出品の略開近顕遠は、前四味ならびに迹門の諸衆をして脱せしめんがためなり。二には、涌出品の動執生疑より一半、ならびに寿量品、分別功徳品の半品、已上一品二半を、広開近顕遠と名づく。一向に滅後のためなり。

問うて曰わく、略開近顕遠の心いかん。

答えて曰わく、文殊・弥勒等の諸大菩薩、梵天・帝釈・日月・衆星・竜王等、初成道の時より般若経に至る已来は、一人も釈尊の御弟子にあらず。これらの菩薩・天人は、初成道の時、仏いまだ説法したまわざるより已前に、不思議解脱に住して、我と別・円二教を演説す。釈尊その後に、阿含・方等・般若を宣説したもう。しかりといえども、全くこれらの諸人の得分にあらず。既に別・円二教を知りぬれば、蔵・通をもまた知れり。勝は劣を兼ぬる、これなり。委細にこれを論ぜば、あるいは釈尊の師匠なるか。善知識とはこれなり。釈尊に随うにあらず。法華経の迹門の八品に来至して、始めて未聞の法を聞いて、これらの人々は弟子と成りぬ。舎利弗・目連等は、鹿苑より已来、初発心の弟子なり。しかりといえども、権法のみを許せり。今、法華経に来至して実法を授与す。法華経本門の略開近顕遠に来至して、華厳よりの大菩薩・二乗・大梵天・帝釈・日月・四天・竜王等は、位妙覚に隣り、また妙覚の位に入るなり。もししかれば、今、我ら天に向かってこれを見れば、生身の妙覚の仏、

本位に居して衆生を利益する、これなり。

問うて曰わく、誰人のために広開近顕遠の寿量品を演説するや。

答えて曰わく、寿量品の一品二半は、始めより終わりに至るまで、正しく滅後の衆生のためなり。滅後の中には、末法今時の日蓮等がためなり。

疑って云わく、この法門、前代にいまだこれを聞かず。経文にこれ有りや。

答えて曰わく、予が智、前賢に超えず。たとい経文を引くといえども、誰人かこれを信ぜん。卞和が啼泣、伍子胥が悲傷これなり。

しかりといえども、略開近顕遠・動執生疑の文に云わく「しかも諸の新発意の菩薩は、仏滅して後において、もしこの語を聞かば、あるいは信受せずして、法を破する罪業の因縁を起こさん」等云々。文の心は、寿量品を説かずんば、末代の凡夫、皆、悪道に堕ちん等なり。寿量品に云わく「この好き良薬を、今留めてここに在く」等云々。文の心は、上は過去のことを説くに似たるようなれども、この文をもってこれを案ずるに、滅後をもって本となす。まず先例を引くなり。

分別功徳品に云わく「悪世末法の時」等云々。神力品に云わく「仏滅度して後に、能くこの経を持たんをもっての故に、諸仏は皆歓喜して、無量の神力を現じたもう」等云々。薬王品に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」等云々。また云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」等云々。涅槃経に云わく「譬えば、七子あり、父母平等ならざるにあらざれども、しかも病者において心即ちひとえに重きがごとし」等云々。七子の中

の第一・第二は、一闡提・謗法の衆生なり。諸病の中には法華経を謗ずるが第一の重病なり。諸薬の中には南無妙法蓮華経は第一の良薬なり。

この一閻浮提は縦広七千由善那、八万の国これ有り。正像二千年の間、いまだ広宣流布せざる法華経を当世に当たって流布せしめずんば、釈尊は大妄語の仏、多宝仏の証明は泡沫に同じく、十方分身の仏の助舌も芭蕉のごとくならん。

疑って云わく、多宝の証明、十方の助舌、地涌の涌出、これらは誰人のためぞや。

答えて曰わく、世間の情に云わく、在世のためと。日蓮云わく、舎利弗・目犍等は、現在をもってこれを論ぜば、智慧第一・神通第一の大聖なり。過去をもってこれを論ぜば、金竜陀仏・青竜陀仏なり。未来をもってこれを論ぜば華光如来、霊山をもってこれを論ぜば三惑頓尽の大菩薩、本をもってこれを論ぜば内秘外現の古菩薩なり。文殊・弥勒等の大菩薩は過去の古仏、現在の応生なり。梵帝・日月・四天等は初成已前の大聖なり。その上、前四味・四教、一言にこれを覚りぬ。仏の在世には一人においても無智の者これ無し。誰人の疑いを晴らさんがために多宝仏の証明を借り、諸仏舌を出だし、地涌の菩薩を召さんや。方々もって謂れなきことなり。したがって、経文に「いわんや滅度して後をや」「法をして久しく住せしむ」等云々。これらの経文をもってこれを案ずるに、ひとえに我らがためなり。したがって、天台大師当世を指して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。伝教大師当世を記して云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」等云々。「末法太有近（末法はなはだ近きに有り）」の五字は、我が世は法華経流布の世にあらずという釈なり。

問うて云わく、如来の滅後二千余年、竜樹・天親・天台・伝教の残したまえるところの秘法は何物ぞや。

答えて曰わく、本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。

問うて曰わく、正像等に何ぞ弘通せざるや。

答えて曰わく、正像にこれを弘通せば、小乗・権大乗・迹門の法門、一時に滅尽すべきなり。

問うて曰わく、仏法を滅尽するの法、何ぞこれを弘通せんや。

答えて曰わく、末法においては大小・権実・顕密共に教のみ有って得道無し。一閻浮提、皆、謗法となり了わんぬ。

逆縁のためには、ただ妙法蓮華経の五字に限るのみ。例せば不軽品のごとし。我が門弟は順縁なり。日本国は逆縁なり。

疑って云わく、何ぞ広・略を捨てて要を取るや。

答えて曰わく、玄奘三蔵は略を捨てて広を好み、四十巻の大品経を六百巻と成す。羅什三蔵は広を捨てて略を好み、千巻の大論を百巻と成せり。

日蓮は広・略を捨てて肝要を好む。いわゆる、上行菩薩所伝の妙法蓮華経の五字なり。「九方堙が馬を相するの法は玄黄を略して駿逸を取り、支道林が経を講ずるには細科を捨てて元意を取る」等云々。仏既に宝塔に入って二仏座を並べ、分身来集し、地涌を召し出だし、肝要を取って末代に当てて五字を授与せんこと、当世異義有るべからず。

疑って云わく、今世にこの法を流布せば、先相これ有りや。答えて曰わく、法華経に「如是相乃至本末究竟等」云々。天台云わく「蜘蛛掛かって喜び事来り、鴛鵲鳴いて客人来る。小事すらなおもってかくのごとし。いかにいわんや大事をや」取意。

問うて曰わく、もししからば、その相これ有りや。

答えて曰わく、去ぬる正嘉年中の大地震、文永の大彗星、それより已後、今に種々の大いなる天変地夭、これらはこの先相なり。仁王経の七難・二十九難・無量の難、金光明経・大集経・守護経・薬師経等の諸経に挙ぐるところの諸難、皆これ有り。ただし、無きところは二・三・四・五の日出ずる大難なり。しかるを、今年、佐渡国の土民口に云わく「今年正月二十三日の申時、西の方に二つの日出現す」。あるいは云わく「三つの日出現す」等云々。「二月五日には東方に明星二つ並び出ず。その中間は三寸ばかり」等云々。この大難は日本国先代にもいまだこれ有らざるか。

最勝王経の王法正論品に云わく「変化の流星堕ち、二つの日倶時に出で、他方の怨賊来って、国人喪乱に遭わん」等云々。首楞厳経に云わく「あるいは二つの日を見、あるいは両つの月を見る」等。薬師経に云わく「日月薄蝕の難」等云々。金光明経に云わく「彗星しばしば出で、両つの日並び現じ、薄蝕恒無し」。大集経に云わく「仏法実に隠没すれば乃至日月も明を現ぜず」等。仁王経に云わく「日月度を失い、時節返逆し、あるいは赤日出で、黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重の輪現ず」等云々。この日月等の難は、七難・二十九難・無量の諸難の中に第一の大悪難なり。

問うて曰わく、これらの大中小の諸難は、何に因ってこれを起こすや。

答えて曰わく、最勝王経に云わく「非法を行ずる者を見て当に愛敬を生ずべし。善法を行ずる人において苦楚して治罰せん」等云々。法華経に云わく、涅槃経に云わく。金光明経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿および風雨、皆、時をもって行われず」等云々。大集経に云わく「仏法実に隠没すれば乃至かくのごとき不善業の悪王・悪比丘、我が正法を毀壊す」等。仁王経に云わく「聖人去らん時は、七難必ず起こらん」等。また云わく「法にあらず律にあらずして比丘を繋縛すること、獄囚の法のごとくす。その時に当たって、法滅せんこと久しからず」等。また云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴せん」等云々。これらの明鏡を齎って当時の日本国を引き向かうるに、天地を浮かぶること、あたかも符契のごとし。眼有らん我が門弟はこれを見よ。当に知るべし、この国に悪比丘等有って、天子・王子・将軍等に向かって讒訴を企て、聖人を失う世なり。

問うて曰わく、弗舎蜜多羅王・会昌天子・守屋等は月支・真旦・日本の仏法を滅失し、提婆菩薩・師子尊者等を殺害す。その時、何ぞこの大難を出ださざるや。

答えて曰わく、災難は人に随って大小有るべし。正像二千年の間の悪王・悪比丘等は、あるいは外道を用い、あるいは道士を語らい、あるいは邪神を信ず。仏法を滅失すること大なるに似たれども、その科なお浅きか。今、当世の悪王・悪比丘の仏法を滅失するは、小をもって大を打ち、権をもって実を失う。人心を削って身を失わず、寺塔を焼き尽くさずして自然にこれを喪ぼす。その失、前代に

超過せるなり。

我が門弟これを見て法華経を信用せよ。目を瞋らして鏡に向かえ。天瞋るは人に失有ればなり。二つの日並び出ずるは、一国に二りの国王並ぶ相なり。王と王との闘諍なり。星の日月を犯すは、臣の王を犯す相なり。日と日と競い出ずるは、四天下一同の諍論なり。明星並び出ずるは、太子と太子との諍論なり。

かくのごとく国土乱れて後に上行等の聖人出現し、本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に妙法蓮華経の広宣流布疑いなきものか。

(009)

撰時抄

建治元年('75)　54歳
西山由比殿

釈子日蓮述ぶ。

夫れ、仏法を学せん法は、必ずまず時を習うべし。過去の大通智勝仏は出世し給いて十小劫が間一経も説き給わず。経に云わく「一たび坐して十小劫」。また云わく「仏は時いまだ至らずと知ろしめして、請を受けて黙然として坐したまえり」等云々。今の教主釈尊は四十余年のほど法華経を説き給わず。経に云わく「説時のいまだ至らざるが故なり」と云々。老子は母の胎に処して八十年、弥勒菩薩は兜率の内院に籠もらせ給いて五十六億七千万歳をまち給うべし。彼の時鳥は春をおくり、鶏鳥は暁をまつ。畜生すら、なおかくのごとし。いかにいわんや、仏法を修行せんに時を糾さざるべしや。

寂滅道場の砌には、十方の諸仏示現し、一切の大菩薩集会し給い、梵帝・四天は衣をひるがえし、竜神八部は掌を合わせ、凡夫大根性の者は耳をそばだて、生身得忍の諸の菩薩・解脱月等請をなし給いしかども、世尊は二乗作仏・久遠実成をば名字をかくし、即身成仏・一念三千の肝心、その義を宣べ給わず。これらはひとえにこれ、機は有りしかども時の来らざれば、のべさせ給わず。経に云わく「説時のいまだ至らざるが故なり」等云々。

霊山会上の砌には、閻浮第一の不孝の人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさずけ、五障の竜女は蛇身をあらためずして仏になる。決定性の成仏は燋れる種の花咲き果なり、久遠実成は、百歳の叟、二十五の子となれるかとうたがう。一念三千は九界即仏界・仏界即九界と談ず。されば、この経の一字は如意宝珠なり。一句は諸仏の種子となる。これらは、機の熟・不熟はさておきぬ、時の至れるゆえなり。経に云わく「今正しくこれその時なり。決定して大乗を説く」等云々。

問うて云わく、機にあらざるに大法を授けられれば、愚人は定めて誹謗をなして悪道に堕つるならば、あに説く者の罪にあらずや。

答えて云わく、人路をつくる。路に迷う者あり。作る者の罪となるべしや。良医薬を病人にあたう。病人嫌って服せずして死せば、良医の失となるか。

尋ねて云わく、法華経の第二に云わく「無智の人の中にして、この経を説くことなかれ」。同じき第四に云わく「分布してみだりに人に授与すべからず」。同じき第五に云わく「この法華経は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸経の中において最もその上に在り。長夜に守護して、みだりに宣説せず」等云々。これらの経文は、機にあらずば説かざれというか、いかん。

今、反詰して云わく、不軽品に云わく「しかもこの言を作さく『我は深く汝等を敬う』と」等云々。「四衆の中に、瞋恚を生じて心不浄なる者有って、悪口・罵詈して言わく『この無智の比丘』と」。また云わく「衆人はあるいは杖木・瓦石をもって、これを打擲す」等云々。勧持品に云わく

「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖を加うる者有らん」云々。これらの経文は、悪口・罵詈乃至打擲すれどもととかれて候は、説く人の失となりけるか。

求めて云わく、この両説は水火なり。いかんが心うべき。

答えて云わく、天台云わく「時に適うのみ」。章安云わく「取捨宜しきを得て、一向にすべからず」等云々。釈の心は、ある時は謗じぬべきにはしばらくとかず、ある時は謗ずとも強いて説くべし、ある時は一機は信ずべくとも万機謗ずべくばとくべからず、ある時は万機一同に謗ずとも強いて説くべし。

初成道の時は、法慧・功徳林・金剛幢・金剛蔵・文殊・普賢・弥勒・解脱月等の大菩薩、梵帝・四天等の凡夫大根性の者かずをしらず。鹿野苑の苑には、倶隣等の五人、迦葉等の二百五十人、舎利弗等の二百五十人、八万の諸天。方等大会の儀式には、世尊の慈父の浄飯大王ねんごろに恋いせさせ給いしかば、仏、宮に入らせ給いて観仏三昧経をとかせ給い、悲母の御ために忉利天に九十日が間籠もらせ給いしには、摩耶経をとかせ給う。慈父・悲母なんどには、いかなる秘法か惜しませ給うべきなれども、法華経をば説かせ給わず。せんずるところ、機にはよらず、時いたらざれば、いかにもとかせ給わぬにや。

問うて云わく、いかなる時にか小乗・権経をとき、いかなる時にか法華経を説くべきや。

答えて云わく、十信の菩薩より等覚の大士にいたるまで、時と機とをば相知りがたきことなり。いかにいわんや、我らは凡夫なり。いかでか時機をしるべき。

求めて云わく、すこしも知ることあるべからざるか。答えて云わく、仏眼をかって時機をかんがえよ。仏日をもって国をてらせ。

問うて云わく、その心いかん。

答えて云わく、大集経に、大覚世尊、月蔵菩薩に対して未来の時を定め給えり。いわゆる、我滅度して後の五百歳の中には解脱堅固、次の五百年には禅定堅固〈已上、一千年〉、次の五百年には読誦多聞堅固、次の五百年には多造塔寺堅固〈已上、二千年〉、次の五百年には「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」等云々。

この五の五百歳、二千五百余年に人々の料簡さまざまなり。漢土の道綽禅師が云わく「正像二千、四箇の五百歳には、小乗と大乗との白法盛んなるべし。末法に入っては、彼らの白法皆消滅して、浄土の法門、念仏の白法を修行せん人ばかり生死をはなるべし」。日本国の法然が料簡して云わく「今日本国に流布する法華経・華厳経ならびに大日経、諸の小乗経、天台・真言・律等の諸宗は、大集経の記文の正像二千年の白法なり。末法に入っては彼らの白法は皆滅尽すべし。たとい行ずる人ありとも、一人も生死をはなるべからず。十住毘婆沙論と曇鸞法師の『難行道』、道綽の『いまだ一人も得る者有らず』、善導の『千の中に一りも無し』、これなり。彼らの白法隠没の次には、浄土三部経、弥陀称名の一行ばかり大白法として出現すべし。これを行ぜん人々は、いかなる悪人・愚人なりとも、『十は即ち十生じ、百は即ち百生ず』『ただ浄土の一門のみ有って通入すべき路なり』とは、これなり。されば、後世を願わん人々は、叡山・東寺・園城・七大寺等の日本一州の諸寺諸山の御帰依をとどめ

て、彼の寺山によせおける田畠・郡郷をうばいとって念仏堂につけば、決定して往生せん。南無阿弥陀仏」とすすめければ、我が朝一同にその義になりて今に五十余年なり。日蓮これらの悪義を難じやぶることは、事ふり候いぬ。

彼の大集経の白法隠没の時は、第五の五百歳、当世なることは疑いなし。ただし、彼の白法隠没の次には、法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の内八万の国あり、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

問うて云わく、その証文いかん。

答えて云わく、法華経の第七に云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなかれ」等云々。経文は、大集経の白法隠没の次の時をとかせ給うに、「広宣流布」と云々。同第六の巻に云わく「悪世末法の時、能くこの経を持たば」等云々。また第五の巻に云わく「後の末世の法滅せんと欲せん時において」等。また第四の巻に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。また第五の巻に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」。また第七の巻に、第五の五百歳・闘諍堅固の時を説いて云わく「悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等、その便りを得ん」。大集経に云わく「我が法の中において闘諍言訟せん」等云々。法華経の第五に云わく「悪世の中の比丘」。また云わく「あるいは阿練若に有り」等云々。また云わく「悪鬼はその身に入る」等云々。

文の心は、第五の五百歳の時、悪鬼の身に入る大僧等、国中に充満せん。その時に智人一人出現せん。彼の悪鬼の入る大僧等、時の王臣・万民等を語らって悪口・罵詈、杖木・瓦礫、流罪・死罪に行わん時、釈迦・多宝・十方の諸仏、地涌の大菩薩らに仰せつけ付ければ、大菩薩は梵帝・日月・四天等に申しく下されて、その時、天変地夭盛んなるべし。国主等そのいさめを用いずば、隣国におおせつけて彼々の国々の悪王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の大闘諍、一閻浮提に起こるべし。その時、日月の照らすところの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、あるいは身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地につけ掌を合わせて、一同に南無妙法蓮華経ととなうべし。例せば、神力品の十神力の時、十方世界の一切衆生、一人もなく娑婆世界に向かって大音声をはなちて、「南無釈迦牟尼仏・南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経」と一同にさけびしがごとし。

問うて云わく、経文は分明に候。天台・妙楽・伝教等の未来記の言はありや。

答えて云わく、汝が不審逆さまなり。釈を引かん時こそ経論はいかにとは不審せられたれ。経文に分明ならば釈を尋ぬべからず。さて、釈の文経に相違せば、経をすてて釈につくべきか、いかん。

彼云わく、道理至極せり。しかれども、凡夫の習い、経は遠し釈は近し。近き釈分明ならば、いますこし信心をますべし。

今云わく、汝が不審ねんごろなれば、少々釈をいだすべし。天台大師云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」。妙楽大師云わく「末法の初め、冥利無きにあらず」。伝教大師云わく「正像やや過ぎ已

わって、末法はなはだ近きに有り。法華一乗の機、今正しくこれその時なり。何をもってか知ることを得る。安楽行品に云わく『末世の法滅せん時』となり」。また云わく「代を語れば則ち像の終わり末の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生・闘諍の時なり。経に云わく『なお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや』。この言、良に以有るなり」云々。

夫れ、釈尊の出世は住劫第九の減、人寿百歳の時なり。百歳と十歳との中間、在世五十年、滅後二千年と一万年となり。その中間に、法華経の流布の時二度あるべし。いわゆる、在世の八年、滅後には末法の始めの五百年なり。しかるに、天台・妙楽・伝教等は、すすんでは在世法華経の時にももれさせ給いぬ。退いては滅後末法の時にも生まれさせ給わず。中間なることをなげかせ給いて、末法の始めをこいさせ給う御筆なり。例せば、阿私陀仙人が悉達太子の生まれさせ給いしを見て、悲しんで云わく「現生には九十にあまれり。太子の成道を見るべからず。後生には無色界に生まれて五十年の説法の坐にもつらなるべからず。正像末にも生まるべからず」となげきしがごとし。

道心あらん人々は、これを見ききて悦ばせ給え。正像二千年の大王よりも、後世をおもわん人々は末法の今の民にてこそあるべけれ。これを信ぜざらんや。彼の天台座主よりも、南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし。梁の武帝の願に云わく「むしろ提婆達多となって無間地獄には沈むとも、鬱頭羅弗とはならじ」と云々。

問うて云わく、竜樹・天親等の論師の中にこの義ありや。

答えて云わく、竜樹・天親等は内心には存ぜさせ給うとはいえども、言にはこの義を宣べ給わず。

求めて云わく、いかなる故にか宣べ給わざるや。答えて云わく、多くの故あり。一には彼の時には機なし。二には時なし。三には迹化なれば付嘱せられ給わず。

求めて云わく、願わくは、このこと、よくよくきかんとおもう。

答えて云わく、夫れ、仏の滅後二月十六日よりは正法の始めなり。迦葉尊者、仏の付嘱をうけて二十年。次に阿難尊者二十年。次に商那和修二十年。次に優婆崛多二十年。次に提多迦二十年。已上一百年が間は、ただ小乗経の法門をのみ弘通して、諸大乗経は名字もなし。いかにいわんや、法華経をひろむべしや。次には弥遮迦・仏陀難提・仏駄蜜多・脇比丘・富那奢等の四・五人。前の五百余年が間は大乗経の法門少々出来せしかども、とりたてて弘通し給わず。ただ小乗経を面としてやみぬ。已上、大集経の先の五百年、解脱堅固の時なり。

正法の後の六百年已後一千年が前、その中間に馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧佉難提・僧佉耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子等の十余人の人々、始めには外道の家に入り、次には小乗経をきわめ、後には諸大乗経をもって諸小乗経をさんざんに破し失い給いき。これらの大士等は、諸大乗経をもって諸小乗経をば破せさせ給いしかども、諸大乗経と法華経の勝劣をば分明にかかせ給わず。たとい勝劣をすこしかかせ給いたるようなれども、本迹の十妙、二乗作仏、久遠実成、已今当の妙、百界千如・一念三千の肝要の法門は分明ならず。ただ、あるいは指をもって月をさすがごとくし、あるいは文にあたりてひとはしばかりかかせ給いて、化導の始終・

師弟の遠近・得道の有無はすべて一分もみえず。これらは正法の後の五百年、大集経の禅定堅固の時にあたれり。

正法一千年の後は、月氏に仏法充満せしかども、あるいは小をもって大を破し、あるいは権経をもって実経を隠没し、仏法さまざまに乱れしかば、得道の人ようやくすくなく、仏法につけて悪道に堕つる者かずをしらず。

正法一千年の後、像法に入って一十五年と申せしに、仏法東に流れて漢土に入りにき。像法の前の五百年の内、始めの一百余年が間は漢土の道士と月氏の仏法と諍論して、いまだ事さだまらず。たとい定まりたりしかども、仏法を信ずる人の心いまだふかからず。しかるに、仏法の中に大小・権実・顕密をわかつならば、聖教一同ならざる故、疑いおこりて、かえりて外典とともなう者もありぬべし。これらのおそれあるかのゆえに、摩騰・竺蘭は、自らは知ってしかも大小を分けず権実をいわずしてやみぬ。

その後、魏・晋・宋・斉・梁の五代が間、仏法の内に大小・権実・顕密をあらそいしほどに、いずれこそ道理ともきこえずして、上一人より下万民にいたるまで不審すくなからず。南三北七と申して仏法十流にわかれぬ。いわゆる、南には三時・四時・五時、北には五時・半満・四宗・五宗・六宗・二宗の大乗・一音等、各々義を立てて、辺執水火なり。しかれども、大綱は一同なり。いわゆる「一代聖教の中には華厳経第一、涅槃経第二、法華経第三なり。法華経は、阿含・般若・浄名・思益等の経々に対すれば真実なり、了義経、正見なり。しかりといえども、涅槃経に対すれば無常教、不了義経、

邪見の経」等云々。

漢より四百余年の末、五百年に入って、陳・隋二代に智顗と申す小僧一人あり。後には天台智者大師と号したてまつる。南北の邪義をやぶりて、「一代聖教の中には法華経第一、涅槃経第二、華厳経は第三なり」等云々。これ像法の前の五百歳、大集経の読誦多聞堅固の時にあいあたれり。像法の後の五百歳は、唐の始め太宗皇帝の御宇に、玄奘三蔵、月支に入って十九年が間、百三十箇国の寺塔を見聞して多くの論師に値いたてまつりて、八万聖教・十二部経の淵底を習いきわめしに、その中に二宗あり。いわゆる法相宗・三論宗なり。この二宗の中に法相大乗は、遠くは弥勒・無著、近くは戒賢論師に伝えて、漢土にかえりて太宗皇帝にさずけさせ給う。この宗の心は「仏教は機に随うべし。一乗の機のためには三乗方便・一乗真実なり。いわゆる法華経等なり。三乗の機のためには三乗真実・一乗方便なり。いわゆる深密経・勝鬘経等これなり。天台智者等はこの旨を弁えず」等云々。しかも太宗は賢王なり。当時、名を一天にひびかすのみならず、三皇にもこえ五帝にも勝れたるよし四海にひびき、漢土を手ににぎるのみならず、高昌・高麗等の一千八百余国をなびかし、内外を極めたる王ときこえし賢王の第一の御帰依の僧なり。天台宗の学者の中にも頸をさしいだす人一人もなし。しかれば、法華経の実義すでに一国に隠没しぬ。

同じき太宗の太子・高宗、高宗の継母・則天皇后の御宇に、法蔵法師という者あり。法相宗に天台宗のおそわるところを見て、前に天台の御時せめられし華厳経を取り出だして、一代の中には華厳第一、法華第二、涅槃第三と立てけり。

太宗より第四代の玄宗皇帝の御宇、開元四年・同八年に、西天印度より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を持って渡り、真言宗を立つ。この宗の立義に云わく「教に二種あり。一には釈迦の顕教。いわゆる華厳・法華等なり。二には大日の密教。いわゆる大日経等なり。法華経は顕教の第一なり。この経は大日の密教に対すれば極理は少し同じけれども、事相の印契と真言とはたえてみえず。三密相応せざれば、不了義経」等云々。

已上、法相・華厳・真言の三宗一同に天台法華宗をやぶれども、天台大師程の智人、法華宗の中になかりけるかのあいだ、内々はゆわれなき由は存じけれども、天台のごとく公場にして論ぜられざりければ、上国王・大臣、下一切の人民にいたるまで、皆仏法に迷って衆生の得道みなとどまりけり。これらは像法の後の五百年の前の二百余年が内なり。

像法に入って四百余年と申しけるに、百済国より一切経ならびに教主釈尊の木像・僧尼等、日本国にわたる。漢土の梁の末、陳の始めにあいあたる。日本には神武天皇よりは第三十代、欽明天皇の御宇なり。欽明の御子、用明の太子に上宮王子、仏法を弘通し給うのみならず、ならびに法華経・浄名経・勝鬘経を鎮護国家の法と定めさせ給いぬ。

その後、人王第三十七代に孝徳天皇の御宇に、三論宗・成実宗を、観勒僧正、百済国よりわたす。同じき御代に道昭法師、漢土より法相宗・倶舎宗をわたす。人王第四十四代元正天皇の御宇に、天竺より大日経をわたしてありしかども、しかも弘通せずして漢土へかえる。この僧をば善無畏三蔵という。人王第四十五代に聖武天皇の御宇に、審祥大徳、新羅国より華厳宗をわたして、良弁僧正・聖武

天皇にさずけたてまつりて、東大寺の大仏を立てさせ給えり。同じき御代に、大唐の鑑真和尚、天台宗と律宗をわたす。その中に律宗をば弘通し、小乗の戒場を東大寺に建立せしかども、法華宗のことをば名字をも申し出ださせ給わずして入滅し了わんぬ。

その後、人王第五十代、像法八百年に相当たって、桓武天皇の御宇に、最澄と申す小僧出来せり。後には伝教大師と号したてまつる。始めには三論・法相・華厳・倶舎・成実・律の六宗ならびに禅宗等を行表僧正等に習学せさせ給いしほどに、我と立て給える国昌寺、後には比叡山と号す、ここにして六宗の本経・本論と宗々の人師の釈とを引き合わせ御らんありしかば、彼の宗々の人師の釈、依るところの経論に相違せること多き上、僻見多々にして、信受せん人、皆悪道に堕ちぬべしとかんがえさせ給う。その上、法華経の実義は、宗々の人々、我も得たり我も得たりと自讃ありしかども、その義なし。これを申すならば喧嘩出来すべし、もだして申さずば仏誓にそむきなんとおもいわずらわせ給いしかども、終に仏の誡めをおそれて桓武皇帝に奏し給いしかば、帝このことをおどろかせ給いて、六宗の碩学に召し合わさせ給う。

彼の学者等、始めは慢幢山のごとし。悪心毒蛇のようなりしかども、終に王の前にしてせめおとされ、六宗・七寺、一同に御弟子となりぬ。例せば、漢土の南北の諸師、陳殿にして天台大師にせめおとされて御弟子となりしがごとし。これはこれ円定・円慧ばかりなり。その上、天台大師のいまだせめ給わざりし小乗の別受戒をせめおとし、六宗の八大徳に梵網経の大乗別受戒をさずけ給うのみならず、法華経の円頓の別受戒を叡山に建立せしかば、延暦円頓の別受戒は日本第一たるのみならず、仏

の滅後一千八百余年が間、身毒・尸那・一閻浮提にいまだなかりし霊山の大戒、日本国に始まる。

されば、伝教大師は、その功を論ずれば、竜樹・天親にもこえ天台・妙楽にも勝れておわします聖人なり。されば、日本国の当世の東寺・園城・七大寺、諸国の八宗、浄土・禅宗・律等の諸僧等、誰人か伝教大師の円戒をそむくべき。かの漢土九国の諸僧等は、円定・円慧は天台の弟子ににたれども、円頓一同の戒場は漢土になければ、戒においては弟子とならぬ者もありけん。この日本国は、伝教大師の御弟子にあらざる者外道なり、悪人なり。

しかれども、漢土・日本の天台宗と真言の勝劣は、大師、心中には存知せさせ給いけれども、六宗と天台宗とのごとく公場にして勝負なかりけるゆえにや、伝教大師已後には、東寺・七寺・園城の諸寺、日本一州一同に、真言宗は天台宗に勝れたりと上一人より下万人にいたるまでおぼしめしおもえり。しかれば、天台法華宗は伝教大師の御時ばかりにぞありける。この伝教の御時は、像法の末、大集経の多造塔寺堅固の時なり。いまだ「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」の時にはあたらず。

今、末法に入って二百余歳、大集経の「我が法の中において闘諍言訟して白法隠没せん」の時にあたれり。仏語まことならば、定めて一閻浮提に闘諍起こるべき時節なり。伝え聞く、漢土は三百六十箇国二百六十余州はすでに蒙古国に打ちやぶられぬ。華洛すでにやぶられて、徽宗・欽宗の両帝、北蕃にいけどりにせられて、韃靼にして終にかくれさせ給いぬ。徽宗の孫・高宗皇帝は、長安をせめおとされて、田舎の臨安行在府におちさせ給いて、今に数年が間京を見ず。高麗六百余国も新羅・百済

等の諸国等も、皆、大蒙古国の皇帝に攻められぬ。今の日本国の壱岐・対馬ならびに九国のごとし。闘諍堅固の仏語、地に堕ちず。あたかも、これ大海の潮の時をたがえざるがごとし。

これをもって案ずるに、大集経の白法隠没の時に次いで、法華経の大白法の日本国ならびに一閻浮提に広宣流布せんことも疑うべからざるか。彼の大集経は仏説の中の権大乗ぞかし。生死をはなるる道には法華経の結縁なき者のためには未顕真実なれども、六道・四生・三世のことを記し給いけるは寸分もたがわざりけるにや。いかにいわんや、法華経は、釈尊は「要ず当に真実を説きたもうべし」となのらせ給い、多宝仏は「真実なり」と御判をそえ、十方の諸仏は広長舌を梵天につけて「誠諦」と指し示し、釈尊は重ねて無虚妄の舌を色究竟に付けさせ給いて、後の五百歳に一切の仏法の滅せん時、上行菩薩に妙法蓮華経の五字をもたしめて、謗法・一闡提の白癩病の輩の良薬とせんと、梵帝・日月・四天・竜神等に仰せつけられし金言、虚妄なるべしや。大地は反覆すとも、高山は頽落すとも、春の後に夏は来らずとも、日は東へかえるとも、月は地に落つとも、このことは一定なるべし。

このこと一定ならば、闘諍堅固の時、日本国の王臣とならびに万民等が、仏の御使いとして南無妙法蓮華経を流布せんとするを、あるいは罵詈し、あるいは悪口し、あるいは流罪し、あるいは打擲し、弟子・眷属等を種々の難にあわする人々、いかでか安穏にては候べき。これをば愚癡の者は呪詛すとおもいぬべし。法華経をひろむる者は、日本の一切衆生の父母なり。章安大師云わく「彼がために悪を除くは、即ちこれ彼が親なり」等云々。されば、日蓮は、当帝の父母、念仏者・禅衆・真言師等が師範なり、また主君なり。しかるを、上一人より下万民にいたるまであだをなすをば、日月いかで

か彼らの頂を照らし給うべき。地神いかでか彼らの足を載せ給うべき。

提婆達多は仏を打ちたてまつりしかば、大地揺動して火炎出でにき。檀弥羅王は師子尊者の頭を切りしかば、右の手、刀とともに落ちぬ。徽宗皇帝は法道が面にかなやきを焼印やきて江南に流せしかば、半年が内にえびすの手にかかり給いき。蒙古の責めもまたかくのごとくなるべし。たとい五天の兵を集めて鉄囲山を城とせりとも、かなうべからず。必ず日本国の一切衆生、敵ものをあつめて鉄囲山を城とせりとも、かなうべからず。必ず日本国の一切衆生、兵難に値うべし。されば、日蓮が法華経の行者にてあるなきかは、これにて見るべし。

教主釈尊、記して云わく「末代悪世に法華経を弘通するものを悪口・罵詈等せん人は、我を一劫が間あだせん者の罪にも百千万億倍すぎたるべし」ととかせ給えり。しかるを、今の日本国の国主・万民等、雅意任せにまかせて、父母・宿世の敵よりもいたくにくみ、謀反・殺害の者よりもつよく責めぬるは、現身にも大地われて入り、天雷も身をさかざるは不審なり。日蓮が法華経の行者にてあらざるか。もししからば、おおきになげかし。今生には万人に責められて片時もやすからず、後生には悪道に堕ちんことあさましとも申すばかりなし。

また、日蓮法華経の行者ならずば、いかなる者の一乗の持者にてはあるべきぞ。法然が「法華経を抛げすてよ」、善導が「千の中に一りも無し」、道綽が「いまだ一人も得る者あらず」と申すが法華経の行者にて候べきか。また弘法大師の云わく「法華経を行ずるは戯論なり」とかかれたるが法華経の行者なるべきか。経文には「能くこの経を持つ」「能くこの経を説く」なんどこそとかれて候え。「よくとく」と申すはいかなるぞと申すに、「諸経の中において最もその上に在り」と申して、「大日

経・華厳経・涅槃経・般若経等に法華経はすぐれて候なり」と申す者をこそ、経文には法華経の行者とはとかれて候え。もし経文のごとくならば、日本国に仏法わたって七百余年、伝教大師と日蓮とが外は一人も法華経の行者はなきぞかし。

いかにいかにとおもうところに、「頭破れて七分に作る」「口は則ち閉塞せん」のなかりけるは、道理にて候いけるなり。これらは浅き罰なり。ただ一人二人等のことなり。日蓮は閻浮第一の法華経の行者なり。これをそしり、これをあだむ人を結構せん人は、閻浮第一の大難にあうべし。これは日本国をふりゆるがす正嘉の大地震、一天を罰する文永の大彗星等なり。

これらをみよ。仏滅度の後、仏法を行ずる者にあだをなすといえども、今のごとくの大難は一度もなきなり。南無妙法蓮華経と一切衆生にすすめたる人一人もなし。この徳は、たれか一天に眼を合わせ、四海に肩をならぶべきや。

疑って云わく、たとい正法の時は仏の在世に対すれば根機劣なりとも、像・末に対すれば最上の上機なり。いかでか正法の始めに法華経をば用いざるべき。したがって、馬鳴・竜樹・提婆・無著等も正法一千年の内にこそ出現せさせ給え。天親菩薩は千部の論師、法華論を造って諸経の中に第一の義を存す。真諦三蔵の相伝に云わく「月支に法華経を弘通せる家、五十余家。天親はその一なり」。已上、正法なり。

像法に入っては、天台大師像法の半ばに漢土に出現して、玄と文と止との三十巻を造って、法華経の淵底を極めたり。像法の末に伝教大師日本に出現して、天台大師の円慧・円定の二法を我が朝に弘

通せしむるのみならず、円頓の大戒場を叡山に建立して日本一州皆同じく円戒の地になして、上一人より下万民まで延暦寺を師範と仰がせ給うは、あに像法の時、法華経の広宣流布にあらずや。

答えて云わく、如来の教法は必ず機に随うということは、世間の学者の存知なり。しかれども、仏の教えはしからず。上根・上智の人のために必ず大法を説くならば、初成道の時なんぞ法華経をとかせ給わざる。正法の先の五百余年に大乗経を弘通すべし。有縁の人に大法を説かせ給うならば、浄飯大王・摩耶夫人に観仏三昧経・摩耶経をとくべからず。無縁の悪人・謗法の者に秘法をあたえずば、覚徳比丘は無量の破戒の者に涅槃経をさずくべからず。不軽菩薩は誹謗の四衆に向かって、いかに法華経をば流通せさせ給いしぞ。されば、機に随って法を説くと申すは、大いなる僻見なり。

問うて云わく、竜樹・世親等は法華経の実義をば宣べ給わずや。

答えて云わく、宣べ給わず。

問うて云わく、いかなる教えをかのべ給いし。

答えて云わく、華厳・方等・般若・大日経等の権大乗、顕密の諸経をのべさせ給いて、法華経の法門をば宣べさせ給わず。

問うて云わく、何をもってこれをしるや。

答えて云わく、竜樹菩薩の造るところの論、三十万偈。しかれども、尽くして漢土・日本にわたらざれば、その心しりがたしといえども、漢土にわたれる十住毘婆沙論・中論・大論等をもって天竺の論をも比知してこれを知るなり。

疑って云わく、天竺に残る論の中に、渡わたれる論よりも勝れたる論やあるらん。

答えて云わく、竜樹菩薩のことは私に申すべからず。仏記し給う。「我が滅後に竜樹菩薩と申す人、南天竺に出ずべし。彼の人の所詮は中論という論に有るべし」と。仏記し給うに随って、竜樹菩薩の流れ天竺に七十家あり。七十人ともに大論師なり。彼の七十家の人々は、皆、中論を本とす。中論四巻二十七品の肝心は「因縁もて生ずるところの法」の四句の偈なり。この四句の偈は華厳・般若等の四教・三諦の法門なり。いまだ法華開会の三諦をば宣べ給わず。

疑って云わく、汝がごとくに料簡せる人ありや。

答えて云わく、天台云わく「中論をもって相比することなかれ」。また云わく「天親・竜樹、内に鑑みるに冷然にして、外には時の宜しきに適う」等云々。妙楽云わく「もし破会を論ぜば、いまだ法華にしかざるが故に」云々。従義云わく「竜樹・天親、いまだ天台にしかず」云々。

問うて云わく、唐の末に不空三蔵、一巻の論をわたす。その名を菩提心論となづく。竜猛菩薩の造なり云々。弘法大師云わく「この論は竜猛千部の中の第一肝心の論」と云々。

答えて云わく、この論、一部七丁あり。竜猛の言ならぬこと、処々に多し。故に、目録にも、あるいは竜猛、あるいは不空と両方なり。いまだ事定まらず。その上、この論文は一代を括れる論にもあらず。荒量なることこれ多し。まず「唯真言の法の中にのみ」の肝心の文あやまりなり。その故は、文証・現証ある法華経の即身成仏をば無きになして、文証も現証もあとかたもなき真言経に即身成仏を立てて候。また「唯」という「唯」の一字は第一のあやまりなり。事のていを見るに、不空三蔵

の私につくりて候を、時の人におもくせさせんがために事を竜猛によせたるか。

その上、不空三蔵は誤ること、かず多おおし。いわゆる、法華経の観智の儀軌に寿量品を阿弥陀仏とかける眼の前の大僻見、陀羅尼品を神力品の次における、嘱累品を経末に下せる、これらはいうかいなし。さるかと見れば、天台の大乗戒を盗んで代宗皇帝に宣旨を申し、五台山の五寺に立てたり。しかもまた、真言の教相には天台宗をすべしといえり。かたがた誑惑の事どもなり。他の人の訳ならば、用いることもありなん。この人の訳せる経論は信ぜられず。総じて月支より漢土に経論をわたす人、旧訳・新訳に一百八十六人なり。羅什三蔵一人を除いては、いずれの人々も誤らざるはなし。その中に不空三蔵は殊に誤り多き上、誑惑の心顕なり。

疑って云わく、何をもって知るぞや、羅什三蔵より外の人々はあやまりなりとは。汝が禅宗・念仏・真言等の七宗を破るのみならず、漢土・日本にわたる一切の訳者を用いざるか、いかん。

答えて云わく、このことは余が第一の秘事なり。委細には向かって問うべし。ただし、すこし申すべし。羅什三蔵の云わく「我漢土の一切経を見るに、皆梵語のごとくならず。いかでかこのことを顕すべき。ただし一つの大願あり。身を不浄になして妻をたいすべし。舌ばかり清浄になして仏法に妄語せじ。我死なば必ずやくべし。焼かん時、舌焼くるならば、我が経をすてよ」と、常に高座にして説とかせ給いしなり。上一人より下万民にいたるまで願じて云わく「願わくは羅什三蔵より後に死せん」と。終に死し給う後、焼きたてまつりしかば、不浄の身は皆灰となりぬ。御舌ばかり火中に青蓮華生じてその上にあり。五色の光明を放って夜は昼のごとく、昼は日輪の御光をうばい給いき。さて

こそ、一切の訳人の経々は軽くなりて、羅什三蔵の訳し給える経々、殊に法華経は、漢土にはやすやすとひろまり候いしか。

疑って云わく、羅什已前はしかるべし。已後の善無畏・不空等は、いかん。

答えて云わく、已後なりとも、訳者の舌の焼くるをば、誤りありけりとしるべし。されば、日本国に法相宗のはやりたりしを伝教大師責めさせ給いしには、「羅什三蔵は舌焼けず。玄奘・慈恩は舌焼けぬ」とせめさせ給いしかば、桓武天皇は道理とおぼして、天台法華宗へはうつらせ給いしなり。

涅槃経の第三・第九等をみまいらすれば、「我が仏法は月支より他国へわたらんの時、多くの謬誤出来して衆生の得道うすかるべし」ととかれて候。されば、妙楽大師は「ならびに進退は人に在り。何ぞ聖旨に関わらん」とこそあそばされて候え。今の人々、いかに経のままに後世をねがうとも、あやまれる経々のままにねがわば、得道もあるべからず。しかればとても仏の御とがにはあらじとかかれて候。仏教を習う法には、大小・権実・顕密はさておく、これこそ第一の大事にては候らめ。

疑って云わく、正法一千年の論師の、内心には法華経の実義の顕密の諸経に超過してあるよしはしろしめしながら、外には宣説せずしてただ権大乗ばかりを宣べさせ給うことは、しかるべしとはおぼえねども、その義はすこしきこえ候いぬ。像法一千年の半ばに天台智者大師出現して、題目の妙法蓮華経の五字を玄義十巻一千枚にかきつくし、文句十巻には始め「かくのごときを我聞きき」より終わり「礼を作して去りにき」にいたるまで、一字一句に因縁・約教・本迹・観心の四つの釈をならべて、また一千枚に尽くし給う。已上、玄義・文句の二十巻には、一切経の心を江河として法華経を大海に

譬
たとえ、十方界の仏法の露一滴も漏らさず妙法蓮華経の大海に入れさせ給いぬ。その上、天竺の大論の諸義一点ももらさず、漢土の南北の十師の義、破すべきをばこれをはし、取るべきをばこれを用いる。その上、止観十巻を注して一代の観門を一念にすべ、十界の依正を三千につづめたり。この書の文体は、遠くは月支一千年の間の論師にも超え、近くは尸那五百年の人師の釈にも勝れたり。

故に、三論宗の吉蔵大師、南北一百余人の先達と長者らをすすめて、天台大師の講経を聞かんとする状に云わく「千年と五百、実にまた今日に在り乃至南岳の叡聖、天台の明哲、昔は三業もて住持し、今は二尊紹係す。あにただ甘露を震旦に灑ぐのみならん。また当に法鼓を天竺に震うべし。生知の妙悟は、魏晋より以来にして、典籍・風謡にも、実に連類無し乃至禅衆一百余の僧とともに、智者大師を奉請す」等云々。終南山の道宣律師、天台大師を讃歎して云わく「法華を照了すること高輝の幽谷に臨むがごとく、摩訶衍を説くこと長風の大虚に遊ぶに似たり。たとい文字の師千群万衆あってしばしば彼の妙弁を尋ぬとも、能く窮むる者無きなり乃至義は月を指すに同じ乃至宗は一極に帰す」云々。華厳宗の法蔵法師、天台を讃して云わく「思禅師・智者等のごときは、神異・感通は、迹、登位に参じ、霊山の聴法は、憶い今に在り」等云々。

真言宗の不空三蔵・含光法師等、師弟共に真言宗をすてて天台大師に帰伏する物語に云わく、高僧伝に云わく「不空三蔵と親り天竺に遊びたるに、かしこに僧有り。問うて曰わく『大唐に天台の教迹有り。最も邪正を簡び偏円を暁らむるに堪えたり。能くこれを訳してこの土に将ち至らしむべきや』と」等云々。この物語は含光が妙楽大師にかたり給いしなり。妙楽大師、この物語を聞いて云わく

「あに中国に法を失ってこれを四維に求むるにあらずや。しかるにこの方に識ることある者少なし。魯人のごとし」等云々。身毒国の中に天台三十巻のごとくなる大論あるならば、南天の僧、いかでか漢土の天台の釈をねがうべき。これあに、像法の中に法華経の実義顕れて、南閻浮提に広宣流布するにあらずや。

答えて云わく、正法一千年、像法の前の四百年、已上仏の滅後一千四百余年にいまだ論師の弘通し給わざる一代超過の円定・円慧を漢土に弘通し給うのみならず、その声、月氏までもきこえぬ。法華経の広宣流布にはにたれども、いまだ円頓の戒壇を立てられず。小乗の威儀をもって円の慧・定に切りつけるは、すこし便りなきににたり。例せば、日輪の蝕するがごとし、月輪のかけたるににたり。いかにいおうや、天台大師の御時は大集経の読誦多聞堅固の時にあいあたって、いまだ広宣流布の時にあらず。

問うて云わく、伝教大師は日本国の士なり。桓武の御宇に出世して、欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり、天台大師の円慧・円定をせんじ給うのみならず、鑑真和尚の弘通せし日本の小乗の三処の戒壇をなんじやぶり、叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり。この大事は仏の滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑、乃至一閻浮提第一の奇事なり。内証は竜樹・天台等にはあるいは劣るにもや、あるいは同じくもやあるらん。仏法の人をすべて一法となせることは、竜樹・天親にもこえ、南岳・天台にもすぐれて見えさせ給うなり。総じては、如来御入滅の後一千八百年が間、この二人こそ法華経の行者にてはおわすれ。

故に、秀句に云わく「経に云わく『もし須弥を接って、他方の無数の仏土に擲げ置かんも、またいまだ難しとなさず乃至もし仏滅して後、悪世の中において、能くこの経を説かば、これは則ち難しとなす』と」等云々。この経を釈して云わく「浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは、丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」云々。釈の心は、賢劫第九の減、人寿百歳の時より、如来在世五十年、滅後一千八百余年が中間に、高さ十六万八千由旬・六百六十二万里の金山を、人有って五尺の小身の手をもって方一寸二寸等の瓦礫をにぎりて一丁二丁までなぐるがごとく、雀鳥のとぶよりもはやく鉄囲山の外へなぐる者はありとも、法華経を仏のとかせ給いしように説かん人は末法にはまれなるべし。天台大師・伝教大師こそ仏説に相似してとかせ給いたる人にておわすれとなり。天竺の論師は、いまだ法華経へゆきつき給わず。漢土の天台已前の人師は、あるいはすぎ、あるいはたらず。慈恩・法蔵・善無畏等は、東を西といい、天を地と申せる人々なり。

これらは伝教大師の自讃にはあらず。去ぬる延暦二十一年正月十九日、高雄山に桓武皇帝行幸なりて、六宗・七大寺の碩徳たる善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・観敏等の十有余人、最澄法師と召し合わせられて宗論ありしに、あるいは一言に舌を巻いて二言三言に及ばず、皆一同に頭をかたぶけ、手をあざう。三論の二蔵・三時・三転法輪、法相の三時・五性、華厳宗の四教・五教・根本枝末・六相・十玄、皆大綱をやぶらる。例せば、大屋の棟梁のおれたるがごとし。十大徳の慢幢も倒れにき。

その時、天子大いに驚かせ給いて、同じき二十九日に広世・国道の両吏を勅使として、重ねて七寺・六宗に仰せ下されしかば、各々帰伏の状を載せて云わく「ひそかに天台の玄疏を見れば、総じて釈迦一代の教えを括ってことごとくその趣を顕すに通ぜざるところ無く、独り諸宗に逸え、殊に一悉道を示す。その中の所説、甚深の妙理なり。七箇の大寺、六宗の学生、昔よりいまだ聞かざるところ、かつていまだ見ざるところなり。三論・法相の久年の諍い渙焉として氷のごとく釈け、照然として既に明らかなること、なお雲霧を披いて三光を見るがごとし。聖徳の弘化より以降、今に二百余年の間、講ずるところの経論その数多し。彼此、理を争えども、その疑いいまだ解けず。しかもこの最妙の円宗なおいまだ闡揚せず。けだしもって、この間の群生いまだ円味に応わざるか。伏して惟んみれば、聖朝久しく如来の付を受け、深く純円の機を結び、一妙の義理始めて乃ち興顕し、六宗の学者初めて至極を悟る。この界の含霊、今より後、ことごとく妙円の船に載り、早く彼岸に済ることを得と謂いつべし乃至善議等、牽かれて休運に逢い、乃ち奇詞を閲す。深く期するにあらざるよりは、何ぞ聖世に託せんや」等云々。

彼の漢土の嘉祥等は、一百余人をあつめて天台大師を聖人と定めたり。今、日本の七寺二百余人は、伝教大師を聖人とごうしたてまつる。仏の滅後二千余年に及んで、両国に聖人二人出現せり。その上、天台大師未弘の円頓大戒を叡山に建立し給う。これあに像法の末に法華経広宣流布するにあらずや。答えて云わく、迦葉・阿難等の弘通せざる大法を馬鳴・竜樹・提婆・天親等の弘通せること、前の難に顕れたり。また竜樹・天親等の流布し残し給える大法を天台大師の弘通し給うこと、また難にあら

われぬ。また天台智者大師の弘通し給わざる円頓の大戒を伝教大師の建立せさせ給うこと、また顕然なり。

ただし、詮と不審なることは、仏は説き尽くし給えども、仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の正法、経文の面に現前なり。この深法、今、末法の始め五の五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきやのこと、不審極まりなきなり。

問う。いかなる秘法ぞ。まず名をきき、次に義をきかんとおもう。このこともし実事ならば、釈尊の二度世に出現し給うか、上行菩薩の重ねて涌出せるか。いそぎいそぎ慈悲をたれられよ。彼の玄奘三蔵は六生を経て月氏に入って十九年、法華一乗は方便教、小乗阿含経は真実教。不空三蔵は身毒に返って寿量品を阿弥陀仏とかかれたり。これらは東を西という。日を月とあやまてり。身を苦しめてなにかせん。心に染めてようなし。幸いに我ら末法に生まれて、一歩をあゆまずして三祇をこえ、頭を虎にかわずして無見頂相をえん。

答えて云わく、この法門を申さんことは、経文に候えばやすかるべし。ただし、この法門にはまず三つの大事あり。大海は広けれども死骸をとどめず。大地は厚けれども不孝の者をば載せず。仏法には五逆をたすけ不孝をばすくう。ただし、誹謗一闡提の者、持戒にして大智なるをばゆるされず。

この三つのわざわいとは、いわゆる念仏宗と禅宗と真言宗となり。

一には、念仏宗は日本国に充満して四衆の口あそびとす。二に、禅宗は三衣一鉢の大慢の比丘の四海に充満して一天の明導とおもえり。三に、真言宗はまた彼らの二宗にはにるべくもなし。叡山・東

寺・七寺・園城、あるいは官主、あるいは御室、あるいは長吏、あるいは検校なり。かの内侍所の神鏡熾灰となししかども大日如来の宝印を仏鏡とたのみ、宝剣大海に入りしかども五大尊をもって国敵を切らんと思えり。これらの堅固の心は、たとい劫石はひすらぐとも、かたぶくべしとはみえず。大地は反覆すとも、疑心おこりがたし。彼の天台大師の南北をせめ給いし時も、この宗いまだわたらず。この伝教大師の六宗をしえたげ給いし時ももれぬ。かたがたの強敵をまぬかれて、かえって大法をかすめ失う。その上、伝教大師の御弟子・慈覚大師、この宗をとりたてて、叡山の天台宗をかすめおとして一向真言宗になししかば、この人には誰の人か敵をなすべき。かかる僻見のたよりをえて、弘法大師の邪義をもとがむる人もなし。安然和尚すこし弘法を難ぜんとせしかども、ただ華厳宗のところばかりとがむるにて、かえって法華経をば大日経に対して沈めはてぬ。ただ世間のたて入りの者のごとし。

問うて云わく、この三宗の謬誤、いかん。

答えて云わく、浄土宗は斉の世に曇鸞法師と申す者あり。本は三論宗の人。竜樹菩薩の十住毘婆沙論を見て、難行道・易行道を立てたり。道綽禅師という者あり。唐の世の者。本は涅槃経をこうじけるが、曇鸞法師が浄土にうつる筆を見て、涅槃経をすてて浄土にうつって、聖道・浄土の二門を立てたり。また道綽が弟子、善導という者あり。雑行・正行を立つ。

日本国に、末法に入って二百余年、後鳥羽院の御宇に法然というものあり。一切の道俗をすすめて云わく「仏法は時機を本とす。法華経・大日経、天台・真言等の八宗・九宗、一代の大小・顕密・権実

等の経宗等は、上根・上智の正像二千年の機のためなり。末法に入っては、いかに功をなして行ずるともその益あるべからず。その上、弥陀念仏にまじえて行ずるならば、念仏も往生すべからず。これ、わたくしに申すにはあらず。竜樹菩薩・曇鸞法師は『難行道』となづけ、道綽は『いまだ一人も得る者有らず』ときらい、善導は『千の中に一りも無し』となづけたり。これらは他宗なれば御不審もあるべし。恵心の先徳にすぎさせ給える天台・真言の智者は、末代におわすべきか。かれ往生要集にかかれたり。『顕密の教法は予が死生をはなるべき法にはあらず』と。また三論の永観が十因等をみよ。されば、法華・真言等をすてて一向に念仏せば『十は即ち十生じ、百は即ち百生ず』なり」とすすめければ、叡山・東寺・園城・七寺等、始めは諍論するようなれども、往生要集の序の詞、道理かとみえければ、顕真座主落ちさせ給いて法然が弟子となる。

その上、たとい法然が弟子とならぬ人々も、弥陀念仏は他仏ににるべくもなく口ずさみとし、心よせにおもいければ、日本国皆一同に法然房の弟子と見えけり。この五十年が間、一天四海、一人もなく法然が弟子となる。法然が弟子となりぬれば、日本国一人もなく謗法の者となりぬ。譬えば、千人の子が一同に一人の親を殺害せば、千人共に五逆の者なり。一人阿鼻に堕ちなば、余人堕ちざるべしや。結句は、法然、流罪をあだみて悪霊となって、我ならびに弟子等をとがせし国主・山寺の僧等が身に入って、あるいは謀反をおこし、あるいは悪事をなして、皆、関東にほろぼされぬ。わずかにのこれる叡山・東寺等の諸僧は、俗男・俗女にあなずらるること、猿猴の人にわらわれ、俘囚が童子に蔑如せらるるがごとし。

禅宗は、またこの便りを得て持斎等となって人の眼を迷わかし、尊たっとげなる気色なれば、いかに僻法門言狂ひがほうもんをいいくるえども失ともおぼえず。「禅宗と申す宗は『教外に別伝す』と申して、釈尊の一切経の外に迦葉尊者にひそかにささやかせ給えり。されば、禅宗をしらずして一切経を習うものは、犬の雷をかむがごとし。猿の月の影をとるににたり」云々。この故に、日本国の中に不孝にして父母にすてられ、無礼なる故に主君にかんどうせられ、あるいは若なる法師等の学文にものうき、遊女のものぐるわしき本性に叶える邪法なるゆえに、皆一同に持斎になりて国の百姓をくらう蝗虫となれり。しかれば、天は天眼をいからかし、地神は身をふるう。

真言宗と申すは、上の二つのわざわいにはにるべくもなき大僻見なり。あらあらこれを申すべし。いわゆる大唐の玄宗皇帝の御宇に、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経を月支よりわたす。この三経の説相分明なり。その極理を尋ぬれば会二破二の一乗、その相を論ずれば印と真言とばかりなり。なお華厳・般若の三一相対の一乗にも及ばず、天台宗の爾前の別・円程もなし。ただ蔵・通二教を面とす。しかるを、善無畏三蔵おもわく「この経文を顕にいい出だすほどならば、華厳・法相にもおこづかれ、天台宗にもわらわれなん。大事として月支よりは持ち来りぬ。さてもだせば本意にあらず」とやおもいけん。天台宗の中に一行禅師という僻人一人あり。これをかたらいて、漢土の法門をかたらせけり。

一行阿闍梨うちぬかれて、三論・法相・華厳等をあらかたるのみならず、天台宗の立てられけるようを申しければ、善無畏おもわく、天台宗は天竺にして聞きしにもなおうちすぐれて、かさむべ

きようもなかりければ、善無畏、一行をうちぬいて云わく「わ僧は漢土にはこざかしき者にてありけり。天台宗は神妙の宗なり。今、真言宗の天台宗にかさむところは、印と真言とばかりなり」といいければ、一行さもやとおもいければ、善無畏三蔵、一行にかたって云わく「天台大師の法華経に疏をつくらせ給えるごとく、大日経の疏を造って真言を弘通せんとおもう。汝かきなんや」といいければ、一行が云わく「やすう候。ただし、いかようにかき候べきぞ。天台宗はにくき宗なり。諸宗は我も我もとあらそいをなせども、一切に叶わざること一つあり。いわゆる法華経の序分に無量義経と申す経をもって前四十余年の経々をばその門を打ちふさぎ候いぬ。法華経の法師品・神力品をもって後の経々をばまたふせがせぬ。肩をならぶ経々をば今説の文をもってせめ候。大日経をば三説の中にはいずくにかおき候べき」と問いければ、その時に善無畏三蔵、大いに巧んで云わく「大日経に住心品という品あり。無量義経の四十余年の経々を打ちはらうがごとし。大日経の入曼陀羅已下の諸品は、漢土にては法華経・大日経とて二本なれども、天竺にては一経のごとし。釈迦仏は舎利弗・弥勒に向かって大日経を法華経となづけて印と真言とをすててただ理ばかりをとけるを、羅什三蔵これをわたす。天台大師これを見る。大日如来は法華経を大日経となづけて金剛薩埵に向かってとかせ給う。これを大日経となづく。我、まのあたり天竺にしてこれを見る。されば、汝がかくべきようは、大日経と法華経とをば水と乳とのように一味となすべし。もししからば、大日経は已今当の三説をば皆法華経のごとくうちおとすべし。さて印と真言とは、心法の一念三千に荘厳するならば、三密相応の秘法なるべし。三密相応するほどならば、天台宗は意密なり。真言は甲なる将軍の甲鎧を帯して弓箭を横

たえ、大刀を腰にはけるがごとし。天台宗は意密ばかりなれば、甲なる将軍の赤裸なるがごとくならん」といいければ、一行阿闍梨はこのようにかきけり。

漢土三百六十箇国には、このことを知る人なかりけるかのあいだ、始めには勝劣を諍論しけれども、善無畏等は人がら重し、天台宗の人々は軽かりけり。また天台大師ほどの智ある者もなかりければ、ただ日々に真言宗になりてさてやみにけり。年ひさしくなれば、いよいよ真言の誑惑の根、ふかくかくれて候いけり。

日本国の伝教大師、漢土にわたりて天台宗をわたし給いしついでに、真言宗をならべわたす。天台宗を日本の皇帝にさずけ、真言宗を六宗の大徳にならわせ給う。ただし、六宗と天台宗の勝劣は、入唐已前に定めさせ給う。入唐已後には円頓の戒場を立ちょう立てじの論が計りなかりけるかのあいだ、敵多くしては戒場の一事成じがたしとやおぼしめしけん、また末法にせめさせんとやおぼしけん、皇帝の御前にしても論ぜさせ給わず。弟子等にもはかばかしくかたらせ給わず。ただし、依憑集と申す一巻の秘書あり。七宗の人々の天台に落ちたるようをかかれて候文なり。かの文の序に真言宗の誑惑一筆みえて候。

弘法大師は、同じき延暦年中に御入唐、青竜寺の恵果に値い給いて真言宗をならわせ給えり。御帰朝の後、一代の勝劣を判じ給いけるには「第一真言、第二華厳、第三法華」とかかれて候。この大師は、世間の人々はもってのほかに重んずる人なり。ただし、仏法のことは、申すにおそれあれども、もってのほかにあらきことどもはんべり。

このことをあらあらかんがえたるに、漢土にわたらせ給いては、ただ真言の事相の印・真言ばかり習いつたえて、その義理をばくわしくもさばくらせ給わざりけるほどに、日本にわたりて後、大いに世間を見れば、天台宗もってのほかにかさみたりければ、我が重んずる真言宗ひろめがたかりけるかのゆえに、本、日本国にして習いたりし華厳宗をとりいだして、法華経にまされるよしを申しけり。それも常の華厳宗に申すように申すならば人信ずまじとやおぼしめしけん、すこしいろをかえて「これは、大日経、竜猛菩薩の菩提心論、善無畏等の実義なり」と大妄語をひきそえたりけれども、天台宗の人々いとうとがめ申すことなし。

問うて云わく、弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論に云わく「かくのごとき乗々は、自乗に名を得れども、後に望めば戯論と作る」。また云わく「無明の辺域にして明の分位にあらず」。また云わく「第四熟蘇味なり」。また云わく「震旦の人師等、諍って醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云々。これらの釈の心いかん。

答えて云わく、予この釈におどろいて一切経ならびに大日の三部経等をひらきみるに、華厳経と大日経とに対すれば法華経は戯論、六波羅蜜経に対すれば盗人、守護経に対すれば無明の辺域と申す経文は、一字一句も候わず。このことは、いとはかなきことなれども、この三、四百余年に日本国のそこばくの智者どもの用いさせ給えば、定めてゆえあるかとおもいぬべし。しばらくいとやすきひが事をばあげて、余事のはかなきことをしらすべし。

法華経を醍醐味と称することは、陳・隋の代なり。六波羅蜜経は唐の半ばに般若三蔵これをわたす。

六波羅蜜経の醍醐は陳・隋の世にはわたりてあらばこそ天台大師は真言の醍醐をば盗ませ給わめ。傍例あり。日本の得一が云わく「天台大師は深密経の三時教をやぶる。三寸の舌をもって五尺の身をたつべし」とののしりしを、伝教大師これをただして云わく「深密経は唐の始め玄奘これをわたす。天台は陳・隋の人、智者御入滅の後数箇年あって深密経わたれり、死して已後にわたれる経をば、いかでか破り給うべき」とせめさせ給いて候いしかば、得一はつまるのみならず、舌八つにさけて死し候いぬ。

これは彼にはにるべくもなき悪口なり。華厳の法蔵、三論の嘉祥、法相の玄奘、天台等、乃至南北の諸師、後漢より已下の三蔵・人師を皆おさえて、盗人とかかれて候なり。その上、また法華経を醍醐と称することは、天台等の私の言にはあらず。仏、涅槃経に法華経を醍醐ととかせ給い、天親菩薩は法華経・涅槃経を醍醐とかかれて候。竜樹菩薩は法華経を妙薬となづけさせ給う。されば、法華経等を醍醐と申す人盗人ならば、釈迦・多宝・十方の諸仏・竜樹・天親等は盗人にておわすべきか。

弘法の門人等、乃至日本の東寺の真言師、いかん。自眼の黒白はつたなくして弁えずとも、他の鏡をもって自禍をしれ。この外、法華経を戯論の法とかかること、大日経・金剛頂経等にたしかなる経文をいだされよ。たとい彼々の経々に法華経を戯論ととかれたりとも、訳者の誤ることもあるぞかし。よくよく思慮のあるべかりけるか。孔子は九思一言、周公旦は沐には三たびにぎり、食には三たびはかれけり。外書のはかなき世間の浅き事を習う人すら、智人はこう候ぞかし。いかにかかるあさましきことはありけるやらん。

かかる僻見の末なれば、彼の伝法院の本願とごうする正覚房が舎利講の式に云わく「尊高なるものは不二摩訶衍の仏なり。驢牛の三身は車を扶くること能わず。秘奥なるものは両部曼陀羅の教えなり。顕乗の四法は履を採るに堪えず」と云々。「顕乗の四法」と申すは法相・三論・華厳・法華の四人、「驢牛の三身」と申すは法華・華厳・般若・深密経の教主の四仏、これらの仏僧は、真言師に対すれば正覚・弘法の牛飼い・履物取者にもたらぬほどのことなりとかいて候。

彼の月氏の大慢婆羅門は生知の博学。顕密二道胸にうかべ、内外の典籍掌ににぎる。されば、王臣頭をかたぶけ、万民師範と仰ぐ。あまりの慢心に「世間に尊崇するものは大自在天・婆藪天・那羅延天・大覚世尊、この四聖なり。我が座の四足にせん」と、座の足につくりて坐して法門を申しけり。当時の真言師が釈迦仏等の一切の仏をかきあつめて、灌頂する時、敷まんだらとするがごとし。禅宗の法師等が云わく「この宗は仏の頂をふむ大法なり」というがごとし。しかるを、賢愛論師と申せし小僧あり。彼をただすべきよし申せしかども、王臣万民これをもちいず。結句は大慢が弟子等・檀那等に申しつけて、無量の妄語をかまえて悪口・打擲せしかども、すこしも命もおしまずのしりしかば、帝王、賢愛をにくみてつめさせんとし給いしほどに、かえりて大慢がせめられたりしかば、大王、天に仰ぎ地に伏してなげいてのたまわく「朕は、まのあたりこのことをきいて邪見をはらしぬ。先王は、いかにこの者にたぼらかされて阿鼻地獄におわすらん」と、賢愛論師の御足にとりつきて悲涙せさせ給いしかば、賢愛の御計らいとして大慢を驢にのせて五竺に面をさらし給いければ、いよいよ悪心盛んになりて現身に無間地獄に堕ちぬ。今の世の真言と禅宗等とはこれにかわれりや。

漢土の三階禅師云わく「教主釈尊の法華経は第一・第二階の正像の法門なり。末代のためには我がつくれる普経なり。法華経を今の世に行ぜん者は十方の大阿鼻獄に堕つべし。末法の根機にあたらざるゆえなり」と申して、六時の礼懺、四時の坐禅、生身の仏のごとくなりしかば、人多く尊んで弟子万余人ありしかども、わずかの小女の法華経をよみしにせめられて、当坐には音を失い、後には大蛇になりて、そこばくの檀那・弟子ならびに小女・処女等をのみ食らいしなり。今の善導・法然等が千中無一の悪義もこれにて候なり。

これらの三大事はすでに久しくなり候えば、いやしむべきにはあらねども、申さば信ずる人もやありなん。

これよりも百千万億倍信じがたき最大の悪事はんべり。慈覚大師は伝教大師の第三の御弟子なり。しかれども、上一人より下万民にいたるまで、伝教大師には勝れておわします人なりとおもえり。この人、真言宗と法華宗の奥義を極めさせ給いて候が、「真言は法華経に勝れたり」とかかせ給えり。しかるを、叡山三千人の大衆、日本一州の学者等、一同帰伏の宗義なり。弘法の門人等は、大師の法華経を華厳経に劣るとかかせ給えるは我がかたながらも少し強きようなれども、慈覚大師の釈をもっておもうに、真言宗の法華経に勝れたることは一定なり。日本国にして真言宗を法華経に勝ると立つるをば叡山こそ強がたきなりぬべかりつるに、慈覚をもって三千人の口をふさぎなば、真言宗はおもうごとし。されば、東寺第一のかとうど、慈覚大師にはすぐべからず。

例せば、浄土宗・禅宗は余国にてはひろまるとも、日本国にしては延暦寺のゆるされなからんには

無辺劫はふとも叶うまじかりしを、安然和尚と申す叡山第一の古徳、教時諍論と申す文に九宗の勝劣を立てられたるに、「第一真言宗、第二禅宗、第三天台法華宗、第四華厳宗」等云々。この大謬釈に付いて禅宗は日本国に充満して、すでに亡国とならんとはするなり。法然が念仏宗のはやりて一国を失わんとする因縁は、恵心の往生要集の序よりはじまれり。「師子の身の中の虫の師子を食む」と仏の記し給うはまことなるかなや。

伝教大師は、日本国にして十五年が間、天台・真言等を自見せさせ給う。生知の妙悟にて師なくしてさとらせ給いしかども、世間の不審をはらさんがために漢土に亘って天台・真言の二宗を伝え給いし時、彼の土の人々はようの義ありしかども、我が心には法華は真言にすぐれたりとおぼしめしゆえに、真言宗の宗の名字をば削らせ給いて「天台宗の止観・真言」等かかせ給う。十二年の年分得度者二人をおかせ給い、重ねて止観院に法華経・金光明経・仁王経の三部を鎮護国家の三部と定めて宣旨を申し下し、永代、日本国の第一の重宝、神璽・宝剣・内侍所とあがめさせ給いき。

叡山第一の座主・義真和尚、第二の座主・円澄大師まではこの義相違なし。第三の慈覚大師御入唐。漢土にわたりて十年が間、顕密二道の勝劣を八箇の大徳にならいつたう。また天台宗の人々、広修・維蠲等にならわせ給いしかども、心の内におぼしけるは「真言宗は天台宗には勝れたりけり。我が師・伝教大師は、いまだこのことをばくわしく習わせ給わざりけり。漢土に久しくもわたらせ給わざりける故に、この法門はあらうちにみおわしけるや」とおぼして、日本国に帰朝し叡山東塔の止観院の西に総持院と申す大講堂を立て、御本尊は金剛界の大日如来、この御前にして大日経の善無畏の疏

を本として、金剛頂経の疏七巻、蘇悉地経の疏七巻、已上十四巻をつくる。造

この疏の肝心の釈に云わく「教に二種有り。一は顕示教。謂わく三乗教なり。世俗と勝義といまだ円融せざるが故に。二は秘密教。謂わく一乗教なり。世俗と勝義と一体にして融ずるが故に。秘密教の中にまた二種有り。一には理秘密の教。謂わく華厳・般若・維摩・法華・涅槃等なり。ただ世俗と勝義との不二を説くのみにして、いまだ真言・密印の事を説かざるが故に。二には事理倶密の教。謂わく大日経・金剛頂経・蘇悉地経等なり。また世俗と勝義との不二を説き、また真言・密印の事を説くが故に」等云々。釈の心は、法華経と真言の三部との勝劣を定めさせ給うに、「真言の三部経と法華経とは、所詮の理は同じく一念三千の法門なり。しかれども、密印と真言等の事法は、法華経にはか欠けておわせず。法華経は理秘密、真言の三部経は事理倶密なれば、天地雲泥なり」とか書在かれたり。しかも、「この筆は私の釈にはあらず、善無畏三蔵の大日経の疏の心なり」とおぼせども、なおなお二思宗の勝劣不審にやありけん、はたまた他人の疑いをさんぜんとやおぼしけん、大師〈慈覚なり〉の伝に散云わく「大師、二経の疏を造り、功を成しおわって、中心に独り謂えらく『この疏、仏意に通ずるや否や。もし仏意に通ぜずんば、世に流伝せじ』。よって仏像の前に安置し、七日七夜、翹企すること深誠にして、勤修して祈請す。五日の五更に至って夢みらく、正午に当たって日輪を仰ぎ見て、弓をもってこれを射る。その箭、日輪に当たって、日輪即ち転動す。夢覚めての後、深く悟る。『仏意に通達せり。後世に伝うべし』と」等云々。

慈覚大師は、本朝にしては伝教・弘法の両家を習いきわめ、極異朝にしては八大徳ならびに南天の宝

月三蔵等に十年が間最大事の秘法をきわめさせ給える上、二経の疏をつくり了わんぬ。重ねて本尊に祈請をなすに、智慧の矢すでに中道の日輪にあたりてうちおどろかせ給い、歓喜のあまりに仁明天皇に宣旨を申しそえさせ給い、天台座主を真言の官主となし、真言の鎮護国家の三部とて、今に四百余年が間、碩学稲麻のごとし。渇仰竹葦に同じ。されば、桓武・伝教等の日本国建立の寺塔は、一宇もなく真言の寺となりぬ。公家も武家も一同に真言師を召して師匠とあおぎ、官をなし、寺をあずけたぶ。仏事の木画の開眼供養は、八宗一同に大日仏眼の印・真言なり。

疑って云わく、法華経を真言に勝ると申す人は、この釈をばいかんがせん。用いるべきか、またすつべきか。

答う。仏の未来を定めて云わく「法に依って人に依らざれ」。竜樹菩薩云わく「修多羅に依るは白論なり。修多羅に依らざるは黒論なり」。天台云わく「また修多羅と合わば、録してこれを用いる。文無く義無ければ信受すべからず」。伝教大師云わく「仏説に依憑せよ。口伝を信ずることなかれ」等云々。これらの経・論・釈のごときんば、夢を本にはすべからず。ただついさして法華経と大日経との勝劣を分明に説きたらん経・論の文こそたいせちに候わめ。

ただし、印・真言なくば木画の像の開眼のこと、これまたおこのことなり。真言のなかりし已前には、木画の開眼はなかりしか。天竺・漢土・日本には真言宗已前の木画の像は、あるいは行き、あるいは説法し、あるいは御物言いあり。印・真言をもって仏を供養せしよりこのかた、利生もかたがたは失せたるなり。これは常の論談の義なり。この一事においては、ただし、日蓮は分明の証拠を余所に

引くべからず。慈覚大師の御釈を仰いで信じて候なり。

問うて云わく、いかにと信ぜらるるや。

答えて云わく、この夢の根源は、真言は法華経に勝ると造り定めての御夢なり。この夢吉夢ならば、慈覚大師の合わせさせ給うがごとく真言勝るべし。ただし、日輪を射るとゆめにみたるは、吉夢なりというべきか。内典五千・七千余巻、外典三千余巻の中に、日を射るとゆめに見て吉夢なる証拠をうけたまわるべし。

少々これより出だし申さん。阿闍世王は天より月落つとゆめにみて、耆婆大臣に合わせさせ給いしかば、大臣合わせて云わく「仏の御入滅なり」。須抜多羅、天より日落つとゆめにみる。我とあわせて云わく「仏の御入滅なり」。修羅は帝釈と合戦の時、まず日月をいたてまつる。夏の桀・殷の紂と申せし悪王は、常に日をいて身をほろぼし国をやぶる。摩耶夫人は、日をはらむとゆめにみて悉達太子をうませ給う。かるがゆえに仏のわらわなをば日種という。日本国と申すは、天照太神の日天にしてましますゆえなり。されば、このゆめは天照太神・伝教大師・釈迦仏・法華経をいたてまつれる矢にてこそ二部の疏は候なれ。日蓮は愚癡の者なれば経論もしらず。ただ「この夢をもって法華経に真言すぐれたりと申す人は、今生には国をほろぼし家を失い、後生にはあび地獄に入るべし」とはしりて候。

今、現証あるべし。日本国と蒙古との合戦に一切の真言師の調伏を行い候えば、日本かちて候ならば、真言はいみじかりけりとおもい候いなん。ただし、承久の合戦にそこばくの真言師のいのり候

いしが、調伏せられ給いし権大夫殿はかたせ給い、後鳥羽院は隠岐国へ、御子の天子は佐渡の島々へ調伏しやりまいらせ候いぬ。結句は野干のなきの身におうなるように、「還って本人に著きなん」の経文にすこしもたがわず。叡山の三千人、かまくらにせめられて一同にしたがいはてぬ。

しかるに、今はかまくらの世さかんなるゆえに、東寺・天台・園城・七寺の真言師等と、ならびに自立をわすれたる法華宗の謗法の人々、関東におちくだりて、頭をかたぶけ、ひざをかがめ、ようようにに武士の心をとりて、諸寺諸山の別当となり長吏となりて、王位を失いし悪法をとりいだして国土安穏といのれば、将軍家ならびに所従の侍已下は国土の安穏なるべきことなんめりとうちおもいてあるほどに、法華経を失う大禍の僧どもを用いらるれば、国定めてほろびなん。

亡国のかなしさ、亡身のなげかしさに、身命をすててこのことをあらわすべし。国主世を持つべきならば、あやしとおもいてたずぬべきところに、ただざんげんのことばのみ用いて、ようようのあだをなす。しかるに、法華経守護の梵天・帝釈・日月・四天・地神等は、古の謗法をば不思議とはおぼせども、これをしれる人なければ、一子の悪事のごとくうちゆるしていつわりおろかなる時もあり、また、すこしつみしらする時もあり。今は謗法を用いたるだに不思議なるに、まれまれ諫暁する人を、かえりてあだをなす。一日二日、一月二月、一年二年ならず、数年に及ぶ。彼の不軽菩薩の杖木の難に値いしにもすぐれ、覚徳比丘の殺害に及びしにもこえたり。しかるあいだ、梵釈の二王・日月・四天・衆星・地神等、ようようにいかり、度々いさめらるれども、いよいよあだをなすゆえに、天の御計らいとして、隣国の聖人におおせつけられてこれをいましめ、大鬼神を国に入れて人の心をたぼら

かし、自界反逆せしむ。吉凶につけて瑞大なれば難多かるべきことわりにて、仏の滅後二千二百三十余年が間、いまだいでざる大長星、いまだふらざる大地しん出来せり。

漢土・日本に智慧すぐれ才能いみじき聖人は度々ありしかども、いまだ日蓮ほど法華経のかとうどして国土に強敵多くもうけたる者なきなり。まず眼前の事をもって日蓮は閻浮第一の者としるべし。

仏法、日本にわたって七百余年、一切経は五千・七千、宗は八宗・十宗、智人は稲麻のごとし、弘通は竹葦ににたり。しかれども、仏には阿弥陀仏、諸仏の名号には弥陀の名号ほどひろまりておわするは候わず。この名号を弘通する人は、恵心は往生要集をつくる。日本国三分が一は一同の弥陀念仏者。永観は十因と往生講の式をつくる。扶桑三分が二分は一同の念仏者。法然せんちゃくをつくる。本朝一同の念仏者。しかれば、今の弥陀の名号を唱うる人々は、一人が弟子にはあらず。この念仏と申すは、双観経・観経・阿弥陀経の題名なり。権大乗経の題目の広宣流布するは、実大乗経の題目の流布せんずる序にあらずや。心あらん人は、これをすいしぬべし。権経流布せば実経流布すべし。権経の題目流布せば、実経の題目また流布すべし。欽明より当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華経と唱えよと他人をすすめ、我と唱えたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来れば愚王ほろぶ。実経流布せば権経のとどまり、智人南無妙法蓮華経と唱えば愚人のこれに随わんこと、影と身と、声と響きとのごとくならん。

日蓮は日本第一の法華経の行者なること、あえて疑いなし。これをもってすいせよ。漢土・月支にも一閻浮提の内にも、肩をならぶる者は有るべからず。

問うて云わく、正嘉の大地震、文永の大彗星は、いかなることによって出来せるや。

答えて云わく、天台云わく「智人は起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。

問うて云わく、心いかん。

答えて云わく、上行菩薩の大地より出現し給いたりしをば、弥勒菩薩・文殊師利菩薩・観世音菩薩・薬王菩薩等の四十一品の無明を断ぜし人々も、元品の無明を断ぜざれば愚人といわれて、寿量品の南無妙法蓮華経の末法に流布せんずるゆえにこの菩薩を召し出だされたるとは、しらざりしということなり。

問うて云わく、日本・漢土・月支の中にこのことを知る人あるべしや。

答えて云わく、見思を断尽し四十一品の無明を尽くせる大菩薩だにも、このことをしらせ給わず。いかにいおうや、一毫の惑をも断ぜぬ者どもの、このことを知るべきか。

問うて云わく、智人なくば、いかでかこれを対治すべき。例せば、病の所起を知らぬ人の病人を治すれば、人必ず死す。この災いの根源を知らぬ人々がいのりをなさば、国まさに亡びんこと疑いなきか。あらあさましや、あらあさましや。

答えて云わく、蛇は七日が内の大雨をしり、烏は年中の吉凶をしる。これ則ち大竜の所従、また久学のゆえか。

日蓮は凡夫なり。このことをしるべからずといえども、汝等にほぼこれをさとさん。彼の周の平王の時、禿にして裸なる者出現せしを、辛有といいし者うらなって云わく「百年が内に世ほろびん」。

同じき幽王の時、山川くずれ、大地震ふるいき。白陽という者勘えていわく「十二年の内に、大王事に値わせ給うべし」。今の大地震・大長星等は、国主日蓮を憎にくみて亡国の法たる禅宗と念仏者と真言師をかたうどせらるれば、天いからせ給いていださせ給うところの災難なり。

問うて云わく、なにをもってかこれを信ぜん。

答えて云わく、最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、星宿および風雨、皆、時をもって行われず」等云々。この経文のごときんば、この国に悪人のあるを王臣これを帰依するということ疑いなし。また、この国に智人あり、国主これを憎にくみてあだすということもまた疑いなし。また云わく「三十三天の衆、みな忿怒の心を生ず。変怪あって、流星堕ち、二の日倶時に出で、他方の怨賊来って、国人喪乱に遭わん」等云々。すでにこの国に天変あり、地夭あり、他国よりこれを責めむ。三十三天の御いかりあること、また疑いなきか。仁王経に云わく「諸の悪比丘は、多く名利を求め、国王・太子・王子の前において、自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん。その王別えずしてこの語を信聴せん」等云々。また云わく「日月度を失い、時節反逆し、あるいは赤日出で、あるいは黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるいは日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二重、四・五重の輪現ず」等云々。

文の心は、悪比丘等国に充満して、国王・太子・王子等をたぼらかして、破仏法・破国の因縁をとかば、その国の王等この人にたぼらかされておぼすよう「この法こそ持仏法の因縁、持国の因縁」とおもい、この言をおさめて行うならば、日月に変あり、大風と大雨と大火等出来し、次には内賊と申

して親類より大兵乱起おこり、我がかとうどしぬべき者をば皆打ち失って、後には他国にせめられて、あるいは自殺し、あるいはいけどりにせられ、あるいはこう人となるべし。これひとえに、仏法をほろぼし、国をほろぼす故なり。

守護経に云わく「彼の釈迦牟尼如来のあらゆる教法は、一切の天魔・外道・悪人・五通の神仙、皆乃至少分をも破壊せず。しかるに、この名相の諸の悪沙門、みな毀滅して余り有ることなからしむ。須弥山は、たとい三千界の中の草木を尽くして薪となし長時に焚焼すとも、一毫も損ずることなきに、もし劫火起こって火内より生ぜば、須臾に焼滅して灰燼をも余すことなきがごとし」等云々。蓮華面経に云わく「仏、阿難に告げたまわく、譬えば、師子の命終せんに、もしは空、もしは地、もしは水、もしは陸のあらゆる衆生、あえて師子の身の肉を食らわず、ただ師子のみ自ら諸の虫を生じて、自ら師子の肉を食らうがごとし。阿難よ。我が仏法は余の能く壊るにあらず、これ我が法の中の諸の悪比丘、我が三大阿僧祇劫に行を積み勤苦し集むるところの仏法を破らん」等云々。

経文の心は、過去の迦葉仏、釈迦如来の末法のことを訖哩枳王にかたらせ給う。釈迦如来の仏法をばいかなるものかうしなうべき。大族王の五天の堂舎を焼き払い、十六大国の僧尼を殺せし、漢土の武宗皇帝の九国の寺塔四千六百余所を消滅せしめ、僧尼二十六万五百人を還俗せし等のごとくなる悪人等は、釈迦の仏法をば失うべからず。三衣を身にまとい、一鉢を頸にかけ、八万法蔵を胸にうかべ、十二部経を口にずうせん僧侶が、彼の仏法を失うべし。譬えば、須弥山は金の山なり、三千大千世界の草木をもって四天・六欲に充満してつみこめて、一年・二年・百千万億年が間やくとも、一分も損

ずべからず。しかるを、劫火起こらん時、須弥の根より豆ばかりの火いでて、須弥山を焼くのみならず、三千大千世界を焼き失うべし。

もし仏記のごとくならば、十宗・八宗、内典の僧等が仏教の須弥山をば焼き払うべきにや。小乗の倶舎・成実・律僧等が大乗をそねむ胸の瞋恚は炎なり。真言の善無畏等、禅宗の三階等、浄土宗の善導等は、仏教の師子の肉より出来せる蝗虫の比丘なり。伝教大師は三論・法相・華厳等の日本の碩徳等を六虫とかかせ給えり。日蓮は真言・禅宗・浄土等の元祖を三虫となづく。また天台宗の慈覚・安然・恵心等は、法華経・伝教大師の師子の身の中の三虫なり。

これらの大謗法の根源をただす日蓮にあだをなせば、天神もおしみ、地祇もいからせ給いて、災夭起こるなり。されば心うべし。一閻浮提第一の大事を申すゆえに、最第一の瑞相これおこれり。

あわれなるかなや、なげかしきかなや、日本国の人、皆無間大城に堕ちんことよ。悦ばしきかなや、楽しきかなや、不肖の身として今度心田に仏種をうえたる。

いまにしもみよ。大蒙古国、数万艘の兵船をうかべて日本国をせめば、上一人より下万民にいたるまで、一切の仏寺、一切の神寺をばなげすてて、各々声をつるべて「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱え、掌を合わせて「たすけ給え、日蓮の御房、日蓮の御房」とさけび候わんずるにや。

例せば、月支の大族王は幼日王に掌をあわせ、日本の宗盛はかじわらをうやまう。大慢のものは敵に随うという、このことわりなり。彼の軽毀大慢の比丘等は、始めには杖木をととのえて不軽菩薩

を打ちしかども、後には掌をあわせて失をくゆ。提婆達多は釈尊の御身に血をいだししかども、臨終の時には「南無」と唱えたりき。「仏」とだに申したりしかば地獄には堕つべからざりしを、業ふかくしてただ「南無」とのみとなえて「仏」とはいわず。今、日本国の高僧等も「南無日蓮聖人」と唱えんとすとも「南無」ばかりにてやあらんずらん。ふびん、ふびん。

外典に云わく「未萌をしるを聖人という」。内典に云わく「三世を知るを聖人という」。余に三度のこうみょうあり。

一には、去にし文応元年太歳庚申七月十六日に、立正安国論を最明寺殿に奏したてまつりし時、宿屋入道に向かって云わく「禅宗と念仏宗とを失い給うべしと申させ給え。このことを御用いなきならば、この一門より事おこりて他国にせめられさせ給うべし」。

二には、去にし文永八年九月十二日申時に、平左衛門尉に向かって云わく「日蓮は日本国の棟梁なり。予を失うは日本国の柱橦を倒すなり。只今に自界反逆難とてどしうちして、他国侵逼難とてこの国の人々他国に打ち殺さるるのみならず、多くいけどりにせらるべし。建長寺・寿福寺・極楽寺・大仏・長楽寺等の一切の念仏者・禅僧等が寺塔をばやきはらいて、彼らが頸をゆいのはまにて切らずば、日本国必ずほろぶべし」と申し候い了わんぬ。

第三には、去年文永十一年四月八日、左衛門尉に語って云わく「王地に生まれたれば身をば随えられたてまつるようなりとも、心をば随えられたてまつるべからず。念仏の無間獄、禅の天魔の所為なることは疑いなし。殊に真言宗がこの国土の大いなるわざわいにては候なり。大蒙古を調伏せんこ

と、真言師には仰せ付けらるべからず。もし大事を真言師調伏するならば、いよいよいそいでこの国ほろぶべし」と申せしかば、頼綱問うて云わく「いつごろか、よせ候べき」。予、言わく「経文には何時いつとはみえ候わねども、天の御けしきいかりすくなからず。急きゅうに見えて候。よも今年はすごし候わじ」と語りたりき。

この三つの大事は日蓮が申したるにはあらず。ただひとえに、釈迦如来の御神、我が身に入りかわらせ給いけるにや。我が身ながらも悦び身にあまる。法華経の一念三千と申す大事の法門はこれなり。経に云わく「いわゆる諸法の如是相」と申すは何事ぞ。十如是の始めの相如是が第一の大事にて候えば、仏は世にいでさせ給う。「智人は起をしる。蛇はみずから蛇をしる」とは、これなり。衆流あつまりて大海となる。微塵つもりて須弥山となれり。日蓮が法華経を信じ始めしは、日本国には一滴一微塵のごとし。法華経を二人・三人・十人・百千万億人唱え伝うるほどならば、妙覚の須弥山ともなり、大涅槃の大海ともなるべし。仏になる道は、これよりほかに、またもとむることなかれ。

問うて云わく、第二の文永八年九月十二日の御勘気の時は、いかにとして、我をそんぜば自他のいくさおこるべしとはしり給うや。

答う。大集経五十に云わく「もしまた、諸の刹利国王にして諸の非法を作し、世尊の声聞の弟子を悩乱し、もしはもって毀罵し、刀杖もて打斫し、および衣鉢・種々の資具を奪い、もしは他の給施に留難を作す者有らば、我らは彼をして自然に卒かに他方の怨敵を起こさしめ、および自界の国土に

もまた兵起・飢疫・飢饉・非時の風雨・闘諍言訟・譏謗あらしめ、またその王をして久しからずしてまた当に己が国を亡失すべからしむ」等云々。

夫れ、諸経に諸文多しといえども、この経文は身にあたり時にのぞんで殊に尊く覚撰出せんじいだす。この経文に「我ら」とは、梵王と帝釈と第六天の魔王と日月と四天等の三界の一切の天竜等なり。これらの上主、仏前に詣して誓って云わく「仏の滅後、正法・像法・末代の中に正法を行ぜん者を邪法の比丘等が国主にうったえば、王に近きもの、王に心よせなる者、我がたっとしとおもう者のいうことなれば、理不尽に是非を糾さず彼の智人をさんざんとはじにおよばせなんどせば、その故ともなく、その国ににわかに大兵乱出現し、後には他国にせめらるべし。その国主もうせ、その国もほろびなんず」ととかれて候。いたいとかゆきとは、これなり。

予が身には今生にはさせる失なし。ただ国をたすけんがため、生国の恩をほうぜんと申せしを、御用いなからんこそ本意にあらざるに、あまつさえ召し出だして、法華経の第五の巻を懐中せるをとりいだしてさんざんとさいなみ、結句はこうじをわたしなんどせしかば、申したりしなり。「日月、天に処し給いながら、日蓮が大難にあうを今度かわらせ給わずば、一つには、日蓮が法華経の行者ならざるか、たちまちに邪見をあらたむべし。もし日蓮、法華経の行者ならば、たちまちに国にしるしを見せ給え。もししからずば、今の日月等は釈迦・多宝・十方の仏をたぶらかし奉る大妄語の人なり。提婆が虚誑罪、倶伽利が大妄語にも百千万億倍すぎさせ給える大妄語の天なり」と声をあげて申せしかば、たちまちに出来せる自界反逆難なり。

されば、国土甚だいたく乱れみだれば、我が身は言いうにかいなき凡夫なれども、御経を持ちまいらせ候分斉は、当世には日本第一の大人なりと申すなり。

問うて云わく、慢煩悩は七慢・九慢・八慢あり。汝が大慢は、仏教に明かすところの大慢にも百千万億倍すぐれたり。彼の徳光論師は弥勒菩薩を礼せず。大慢婆羅門は四聖を座とせり。大天は凡夫にして阿羅漢となのる。無垢論師が五天第一といいし。これらは皆、阿鼻に堕ちぬ。無間の罪人なり。汝いかでか一閻浮提第一の智人となのる。地獄に堕ちざるべしや。おそろし、おそろし。

答えて云わく、汝は七慢・九慢・八慢等をばしれりや。大覚世尊は三界第一となのらせ給う。一切の外道が云わく「只今、天に罰せらるべし。大地われて入りなん」。日本国の七寺三百余人が云わく「最澄法師は大天が蘇生か、鉄腹が再誕か」等云々。しかりといえども、天も罰せず、かえって左右を守護し、地もわれず、金剛のごとし。伝教大師は叡山を立てて一切衆生の眼目となる。結句、七大寺は落ちて弟子となり、諸国は檀那となる。されば、現に勝れたるを勝れたりということは、慢にに似て大功徳となりけるか。

伝教大師云わく「天台法華宗の諸宗に勝るることは、宗とするところの経に拠るが故に、自讃毀他ならず」等云々。法華経第七に云わく「衆山の中に須弥山はこれ第一なり。この法華経もまたかくのごとく、諸経の中において、最もこれその上なり」等云々。この経文は、已説の華厳・般若・大日経等、今説の無量義経、当説の涅槃経等の五千・七千、月支・竜宮・四王天・忉利天・日月の中の一切経、尽十方界の諸経は、土山・黒山・小鉄囲山・大鉄囲山のごとし。日本国にわたらせ給える法華経は須弥

山のごとし。

また云わく「能くこの経典を受持することあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一なり」等云々。この経文をもって案ずるに、華厳経を持てる普賢菩薩・解脱月菩薩等・竜樹菩薩・馬鳴菩薩・法蔵大師・清涼国師・則天皇后・審祥大徳・良弁僧正・聖武天皇、深密・般若経を持てる勝義生菩薩・須菩提尊者・嘉祥大師・玄奘三蔵・太宗・高宗・観勒・道昭・孝徳天皇、真言宗の大日経を持てる金剛薩埵・竜猛菩薩・竜智菩薩・引生王・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵・玄宗・代宗・恵果・弘法大師・慈覚大師、涅槃経を持ちし迦葉童子菩薩・五十二類・曇無讖三蔵・光宅寺法雲・南三北七の十師等よりも、末代悪世の凡夫の、一戒も持たず、一闡提のごとくに人には思われたれども、経文のごとく已今当にすぐれて法華経より外は仏になる道なしと強盛に信じて、しかも一分の解なからん人々は、彼らの大聖には百千億倍のまさりなりと申す経文なり。

彼の人々は、あるいは彼の経々にしばらく人を入れて法華経へうつさんがためなる人もあり。あるいは彼の経に著をなして法華経へ入らぬ人もあり。あるいは彼の経々に留まるのみならず、彼の経々を深く執するゆえに、法華経を彼の経に劣るという人もあり。されば、今、法華経の行者は心うべし。「譬えば、一切の川流江河の諸水の中に、海はこれ第一なるがごとく、法華経を持つ者もまたかくのごとし。また衆の星の中に月天子は最もこれ第一なるがごとく、法華経を持つ者もまたかくのごとし」等と御心得あるべし。当世日本国の智人等は衆の星のごとし、日蓮は満月のごとし。

問うて云わく、古かくのごとくいえる人ありや。

答えて云わく、伝教大師の云わく「当に知るべし、他宗の依るところの経はいまだ最もこれ第一ならず。その能く経を持つ者もまたいまだ第一ならず。天台法華宗の持つところの経は最もこれ第一なるが故に、能く法華を持つ者もまた衆生の中に第一なり。すでに仏説に拠る。あに自歎ならんや」等云々。夫れ、驥の尾につけるだにの一日に千里を飛ぶといい、輪王に随える劣夫の須臾に四天下をめぐるというをば難ずべしや、疑うべしや。「あに自歎ならんや」の釈は肝にめいずるか。もししからば、法華経を経のごとくに持つ人は、梵王にもすぐれ、帝釈にもこえたり。修羅を随えば須弥山をもになないぬべし。竜を責使つかわば大海をもくみほしぬべし。

伝教大師云わく「讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」等云々。法華経に云わく「経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。教主釈尊の金言まことならば、多宝仏の証明たがわずば、十方の諸仏の舌相一定ならば、今、日本国の一切衆生無間地獄に堕ちんこと疑うべしや。法華経の八の巻に云わく「もし後の世においてこの経典を受持・読誦せば乃至願うところは虚しからじ。また現世において、その福報を得ん」。また云わく「もしこれを供養し讃歎することあらば、当に今世において現の果報を得べし」等云々。この二つの文の中に「亦於現世得其福報（また現世において、その福報を得ん）」の八字、「当於今世得現果報（当に今世において現の果報を得べし）」の八字、已上十六字の文むなしくして日蓮今生に大果報なくば、如来の金言は提婆が虚言に同じく、多宝の証明は倶伽利が妄語に異ならじ。謗法の一切衆生も阿鼻地獄に堕つべからず。三世の諸仏もましまさざるか。

されば我が弟子等、心みに法華経のごとく身命も惜しまず修行して、この度仏法を心みよ。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

そもそも、この法華経の文に「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」。涅槃経に云わく「譬えば、王使のよく談論して方便に巧みなるもの、命を他国に奉るに、むしろ身命を喪うとも、終に王の説くところの言教を匿さざるがごとく、智者もまたしかなり。凡夫の中において身命を惜しまず、かならず『大乗方等の如来秘蔵には、一切衆生に皆仏性有り』と宣説すべし」等云々。

いかようなることのあるゆえに、身命をすつるまでにてあるやらん。委細にうけたまわり候わん。答えて云わく、予が初心の時の存念は「伝教・弘法・慈覚・智証等の勅宣を給わって漢土にわたりしことの『我は身命を愛せず』にあたれるか。玄奘三蔵の漢土より月氏に入りしに、六生が間身命を滅ほろぼしし、これ等か。雪山童子の半偈のために身を投なげ、薬王菩薩の七万二千歳が間臂をやきしことか」なんどおもいしほどに、経文のごときんば、これらにはあらず。

経文に「我は身命を愛せず」と申すは、上に三類の敵人をあげて、彼らがのりせめ刀杖に及んで身命をうばうともとみえたり。また涅槃経の文に「むしろ身命を喪うとも」等ととかれて候は、次下の経文に云わく「一闡提有って、羅漢の像を作して空処に住し、方等経典を誹謗す。諸の凡夫人見已わって、皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩なり』と謂わん」等云々。彼の法華経の文に第三の敵人を説いて云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って乃至世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごときもの有らん」等云々。般泥洹経に云わく「羅漢に似たる一闡提にして悪業を行ず

るもの有らん」等云々。これらの経文は、正法の強敵と申すは、悪王・悪臣よりも、外道・魔王よりも、破戒の僧侶よりも、持戒・有智の大僧の中に大謗法の人あるべし。されば、妙楽大師かいて云わく「第三は最も甚だし。後々の者は転た識り難きをもっての故に」等云々。

法華経の第五の巻に云わく「この法華経は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸経の中において最もその上に在り」等云々。この経文に「最在其上（最もその上に在り）」の四字あり。されば、この経文のごときんば、法華経を一切経の頂にありと申すが、法華経の行者にてはあるべきか。

しかるをまた、国王に尊重せらるる人々あまたありて「法華経にまさりておわする経々ましま す」と申す人にせめあい候わん時、かの人は王臣等御帰依あり、法華経の行者は貧道なるゆえに国こぞってこれをいやしみ候わん時、不軽菩薩のごとく賢愛論師がごとく申しつおらば、身命に及ぶべし。これが第一の大事なるべしとみえて候。

このことは今の日蓮が身にあたれり。予が分斉として、弘法大師・慈覚大師・善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵なんどを「法華経の強敵なり。経文まことならば無間地獄は疑いなし」なんど申すは、裸形にして大火に入るはやすし、須弥山を手にとってなげんはやすし、大石を負って大海をわたらんはやすし、日本国にしてこの法門を立てんは大事なるべし云々。

霊山浄土の教主釈尊、宝浄世界の多宝仏、十方分身の諸仏、地涌千界の菩薩等、梵釈・日月・四天等、冥にかし顕に助け給わずば、一時一日も安穏なるべしや。

(010)

報恩抄

建治2年(’76)7月21日　55歳
浄顕房・義浄房

日蓮これを撰す。

夫れ、老狐は塚を後にせず、白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すら、かくのごとし。いおうや人倫をや。されば、古の賢者・予譲といいし者は剣をのみて智伯が恩にあて、こう演と申せし臣下は腹をさいて衛の懿公が肝を入れたり。いかにいおうや、仏教をならわん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。

この大恩をほうぜんには、必ず仏法をならいきわめ智者とならで叶うべきか。譬えば、衆盲をみちびかんには生盲の身にては橋河をわたしがたし、方・風を弁えざらん大舟は諸商を導いて宝山にいたるべしや。仏法を習い極めんとおもわば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらんとおもわば、父母・師匠・国主等に随っては叶うべからず。是非につけて、出離の道をわきまえざらんほどは、父母・師匠等の心に随うべからず。この義は、諸人おもわく、顕にもはずれ冥にも叶うまじとおもう。しかれども、外典の孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝人なるようもみえたり。内典の仏経に云わく「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」等云々。比干が王に随わずして賢人

のなをとり、悉達太子の浄飯大王に背きて三界第一の孝となりし、これなり。

かくのごとく存じて、父母・師匠等に随わずして仏法をうかがいしほどに、一代聖教をさとるべき明鏡十あり。いわゆる、倶舎・成実・律宗・法相・三論・真言・華厳・浄土・禅宗・天台法華宗なり。この十宗を明師として一切経の心をしるべし。世間の学者等おもえり、この十の鏡はみな正直に仏道の道を照らせりと。

小乗の三宗は、しばらくこれをおく。民の消息の、是非につけて他国へわたるに用なきがごとし。大乗の七鏡こそ生死の大海をわたりて浄土の岸につく大船なれば、これを習いほどいて我がみも助け、人をもみちびかんとおもいて習いみるほどに、大乗の七宗いずれもいずれも自讃あり。「我が宗こそ一代の心はえたれ、えたれ」等云々。いわゆる、華厳宗の杜順・智儼・法蔵・澄観等、法相宗の玄奘・慈恩・智周・智昭等、三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禅宗の達磨・慧可・慧能等、浄土宗の道綽・善導・懐感・源空等、これらの宗々、みな本経・本論によりて、我も我も、一切経をさとれり、仏意をきわめたりと云々。

彼の人々云わく「一切経の中には華厳経第一なり。法華経・大日経等は臣下のごとし」。真言宗云わく「一切経の中には大日経第一なり。余経は衆星のごとし」。禅宗が云わく「一切経の中には楞伽経第一なり」。乃至、余宗かくのごとし。しかも上に挙ぐる諸師は、世間の人々各々おもえり。諸天の帝釈をうやまい、衆星の日月に随うがごとし。

我ら凡夫は、いずれの師々なりとも信ずるならば不足あるべからず、仰いでこそ信ずべけれども、

日蓮が愚案はれがたし。世間をみるに、各々我も我もといえども、国主はただ一人なり。二人となれば国土おだやかならず。家に二りの主あれば、その家必ずやぶる。一切経もまた、かくのごとくやあるらん。いずれの経にてもおわせ、一経こそ一切経の大王にてはおわすらめ。しかるに、十宗・七宗まで各々諍論して随わず。国に七人・十人の大王ありては万民おだやかならじ。いかんがせんと疑うところに、一つの願を立つ。我、八宗・十宗に随わじ。天台大師の専ら経文を師として一代の勝劣をかんがえしがごとく一切経を開きみるに、涅槃経と申す経に云わく「法に依って人に依らざれ」等云々。「法に依って」と申すは一切経、「人に依らざれ」と申すは、仏を除き奉って外の普賢菩薩・文殊師利菩薩乃至上にあぐるところの諸の人師なり。この経にまた云わく「了義経に依って不了義経に依らざれ」等云々。この経に指すところ、「了義経」と申すは法華経、「不了義経」と申すは華厳経・大日経・涅槃経等の已今当の一切経なり。されば、仏の遺言を信ずるならば、専ら法華経を明鏡として一切経の心をばしるべきか。

したがって、法華経の文を開き奉れば、「この法華経は、諸経の中において最もその上に在り」等云々。この経文のごとくば、須弥山の頂に帝釈の居るがごとく、輪王の頂に如意宝珠のあるがごとく、衆木の頂に月のやどるがごとく、諸仏の頂上に肉髻の住せるがごとく、この法華経は華厳経・大日経・涅槃経等の一切経の頂上の如意宝珠なり。されば、専ら論師・人師をすてて経文に依るならば、大日経・華厳経等に法華経の勝れ給えることは、日輪の青天に出現せる時、眼あきらかなる者の天地を見るがごとく、高下宛然なり。

また大日経・華厳経等の一切経をみるに、この経文に相似の経文、一字一点もなし。あるいは小乗経に対して勝劣をとかれ、あるいは俗諦に対して真諦をとき、あるいは諸の空・仮に対して中道をほめたり。譬えば、小国の王が我が国の臣下に対して大王というがごとし。法華経は諸王に対して大王等と云々。

ただし、涅槃経ばかりこそ法華経に相似の経文は候え。されば、天台已前の南北の諸師は迷惑して、法華経は涅槃経に劣ると云々。されども、専ら経文を開き見るには、無量義経のごとく華厳・阿含・方等・般若等の四十余年の経々をあげて、涅槃経に対して、我がみ勝るといて、また法華経に対する時は「この経、世に出ずるは乃至法華の中の八千の声聞の記別を授かることを得て大菓実を成ずるがごとし。秋収冬蔵して、さらに所作無きがごとし」等と云々。我と涅槃経は法華経には劣るととけ る経文なり。こう経文は分明なれども、南北の大智の諸人の迷ってありし経文なれば、末代の学者能く能く眼をとどむべし。この経文は、ただ法華経・涅槃経の勝劣のみならず、十方世界の一切経の勝劣をもしりぬべし。しかるを、経文にこそ迷うとも、天台・妙楽・伝教大師の御りょうけんの後は、眼あらん人々はしりぬべきことぞかし。しかれども、天台宗の人たる慈覚・智証すら、なおこの経文にくらし。いおうや余宗の人々をや。

ある人疑って云わく、漢土・日本にわたりたる経々にこそ法華経に勝れたる経はおわせずとも、月氏・竜宮・四王・日月・忉利天・都率天なんどには恒河沙の経々ましますなれば、その中に法華経に勝れさせ給う御経やましますらん。

答えて云わく、一をもって万を察せよ。「庭戸を出でずして天下をしる」とは、これなり。癡人が疑って云わく「我らは南天を見て東西北の三空を見ず。彼の三方の空にこの日輪より別の日やましますらん。山を隔て煙の立つを見て火を見ざれば、煙は一定なれども火にてやなかるらん」。かくのごとくいわん者は一闡提の人としるべし。生盲にことならず。

法華経の法師品に、釈迦如来、金口の誠言をもって五十余年の一切経の勝劣を定めて云わく「我が説くところの経典は無量千万億にして、已に説き、今説き、当に説くべし。しかもその中において、この法華経は最もこれ難信難解なり」等云々。この経文は、ただ釈迦如来一仏の説なりとも、等覚已下は仰いで信ずべき上、多宝仏東方より来って「真実なり」と証明し、十方の諸仏集まって釈迦仏と同じく広長舌を梵天に付け給いて後、各々国々へ還らせ給いぬ。「已今当」の三字は、五十年ならび に十方三世の諸仏の御経一字一点ものこさず引き載せて法華経に対して説かせ給いて候なり。十方の諸仏この座にして御判形を加えさせ給い、各々また自国に還らせ給いて我が弟子等に向かわせ給いて「法華経に勝れたる御経あり」と説かせ給わば、その所化の弟子等信用すべしや。

また、我は見ざれば、月氏・竜宮・四天・日月等の宮殿の中に法華経に勝れさせ給いたる経やおわしますらんと疑いをなす。されば、梵釈・日月・四天・竜王は法華経の御座にはなかりけるか。もし、日月等の諸天、「法華経に勝れたる御経まします。汝はしらず」と仰せあるならば、大誑惑の日月なるべし。日蓮責めて云わく「日月は虚空に住し給えども、我らが大地に処するがごとくして堕落し給わざることは、上品の不妄語戒の力ぞかし。法華経に勝れたる御経ありと仰せある大妄語あるならば、

恐らくは、いまだ壊劫にいたらざるに大地の上にどうとおち候わんか。無間大城の最下の堅鉄にあらずばとどまりがたからんか。大妄語の人は須臾も空に処して四天下を廻り給うべからず」とせめたてまつるべし。

しかるを、華厳宗の澄観等、真言宗の善無畏・金剛智・不空、弘法・慈覚・智証等の大智の三蔵大師等、「華厳経・大日経等は法華経に勝れたり」と立て給うは、我らが分斉には及ばぬことなれども、大道理のおすところは、あに諸仏の大怨敵にあらずや。提婆・瞿伽梨もものならず。大天・大慢、外にもとむべからず。かの人々を信ずる輩は、おそろし、おそろし。

問うて云わく、華厳の澄観、三論の嘉祥、法相の慈恩、真言の善無畏乃至弘法・慈覚・智証等を仏の敵とのたもうか。

答えて云わく、これ大いなる難なり。仏法に入って第一の大事なり。愚眼をもって経文を見るには、法華経に勝れたる経ありといわん人は、たといいかなる人なりとも、謗法は免れじと見えて候。しかるを、経文のごとく申すならば、いかでかこの諸人仏敵たらざるべき。もしまた恐れをなして指し申さずば、一切経の勝劣空しかるべし。またこの人々を恐れて末の人々を仏敵といわんとすれば、彼の宗々の末の人々の云わく「法華経に大日経をまさりたりと申すは、我私の計らいにはあらず、祖師の御義なり。戒行の持破、智慧の勝劣、身の上下はありとも、学ぶところの法門はたがうことなし」と申せば、彼の人々にとがなし。また、日蓮これを知りながら人々を恐れて申さずば、「むしろ身命を喪うとも、教えを匿さざれ」の仏陀の諫暁を用いぬ者となりぬ。いかんがせん。いわんとすれば世

間おそろし、止めんとすれば仏の諫暁のがれがたし。進退ここに谷まれり。宜むべなるかなや、法華経の文に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。また云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」等云々。

釈迦仏を摩耶夫人はらませ給いたりければ、第六天の魔王、摩耶夫人の御腹をとおし見て、我らが大怨敵、法華経と申す利剣をはらみたり、事の成ぜぬ先にいかにしてか失うべき。第六天の魔王、大医と変じて浄飯王宮に入り、御産安穏の良薬を持ち候大医ありとののしりて、毒を后にまいらせつ。初生の時は石をふらし、乳に毒をまじえ、城を出でさせ給いしには黒き毒蛇と変じて道にふさがり、乃至提婆・瞿伽利・波瑠璃王・阿闍世王等の悪人の身に入って、あるいは大石をなげて仏の御身より血をいだし、あるいは釈子をころし、あるいは御弟子等を殺す。これらの大難は皆、遠くは法華経を仏世尊に説かせまいらせじとたばかりし「如来の現に在すすらなお怨嫉多し」の大難ぞかし。これらは遠き難なり。近き難には、舎利弗・目連・諸大菩薩等も四十余年が間は法華経の大怨敵の内ぞかし。

「いわんや滅度して後をや」と申して、未来の世にはまたこの大難よりもすぐれておそろしき大難あるべしととかれて候。仏だにも忍びがたかりける大難をば、凡夫はいかでか忍ぶべき。いおうや、在世より大いなる大難にてあるべかんなり。いかなる大難か、提婆が長三丈広さ一丈六尺の大石、阿闍世王の酔象にはすぐべきとはおもえども、彼にも過ぐるべく候なれば、小失なくとも大難に度々値う人をこそ滅後の法華経の行者とはしり候わめ。

付法蔵の人々は四依の菩薩、仏の御使いなり。提婆菩薩は外道に殺され、師子尊者は檀弥羅王に頭

を刎ねられ、仏陀密多・竜樹菩薩等は赤き幡を七年・十二年指通とおす。馬鳴菩薩は金銭三億がかわりとなり、如意論師はおもいじにに死す。これらは正法一千年の内なり。

像法に入って五百年、仏の滅後一千五百年と申せし時、漢土に一人の智人あり。始めは智顗、後には智者大師とごうす。法華経の義をありのままに弘通せんと思い給いしに、天台已前の百千万の智者しなじなに一代を判ぜしかども、詮じて十流となりぬ。いわゆる南三北七なり。十流ありしかども、一流をもって最とせり。いわゆる南三の中の第三の光宅寺の法雲法師これなり。

この人は一代の仏教を五つにわかつ。その五つの中に三経をえらびいだす。いわゆる華厳経・涅槃経・法華経なり。一切経の中には華厳経第一、大王のごとし。涅槃経第二、摂政・関白のごとし。第三法華経は公卿等のごとし。これより已下は万民のごとし。この人は本より智慧かしこき上、慧観・慧厳・僧柔・慧次なんど申せし大智者より習い伝え給えるのみならず、南北の諸師の義をせめやぶり、山林にまじわりて法華経・涅槃経・華厳経の功をつもりし上、梁の武帝召し出だして内裏の内に寺を立て、光宅寺となづけてこの法師をあがめ給う。

法華経をこうぜしかば、天より花ふること在世のごとし。天監五年に大旱魃ありしかば、この法雲法師を請じ奉って法華経を講ぜさせまいらせしに、薬草喩品の「其雨普等、四方倶下（その雨はあまねく等しくして、四方にともに下る）」と申す二句を講ぜさせ給いし時、天より甘雨下りたりしかば、天子、御感のあまりに現に僧正になしまいらせて、諸天の帝釈につかえ、万民の国王をおそるるがごとく我とつかえ給いし上、ある人夢みらく、この人は過去の灯明仏の時より法華経をこうぜる人なり。

法華経の疏四巻あり。この疏に云わく「この経いまだ頗然ならず」。また云わく「異の方便」等云々。正しく、法華経はいまだ仏理をきわめざる経と書かれて候。この人の御義、仏意に相叶い給いければこそ、天より花も下り雨もふり候いけらめ。かかるいみじきことにて候いしかば、漢土の人、さては法華経は華厳経・涅槃経には劣るにてこそあるなれと思いし上、新羅・百済・高麗・日本までこの疏ひろまりて、大体一同の義にて候いしに、法雲法師御死去ありていくばくならざるに、梁の末、陳の始めに智顗法師と申す小僧出来せり。

南岳大師と申せし人の御弟子なりしかども、師の義も不審にありけるかのゆえに、一切経蔵に入って度々御らんありしに、華厳経・涅槃経・法華経の三経に詮じいだし、この三経の中に殊に華厳経を講じ給いき。別して礼文を造って日々に功をなし給いしかば、世間の人おもわく、この人も華厳経を第一とおぼすかと見えしほどに、法雲法師が一切経の中に「華厳第一、涅槃第二、法華第三」と立てたるがあまりに不審なりける故に、ことに華厳経を御らんありけるなり。

かくて、一切経の中に「法華第一、涅槃第二、華厳第三」と見定めさせ給いてなげき給うようは、「如来の聖教は漢土にわたれども、人を利益することなし。かえりて一切衆生を悪道に導くこと、人師の誤りによれり。例せば、国の長とある人、東を西といい、天を地といいいだしぬれば、万民はかくのごとくに心うべし。後にいやしき者出来して、『汝等が西は東、汝等が天は地なり』といわば、もちうることなき上、我が長の心に叶わんがために、今の人をのりうちなんどすべし。いかんがせん」とはおぼせしかども、さてもだすべきにあらねば、「光宅寺の法雲法師は謗法によって地獄に堕

ちぬ」と旬のしらせ給う。その時、南北の諸師、蜂はちのごとく蜂起し、烏からすのごとく烏合せり。智顗法師をば、頭を破わるべきか国を追おうべきかなんど申せしほどに、陳主これをきこしめして、南北の数人に召し合わせて、我と列座してきかせ聞給いき。法雲法師が弟子等、慧栄・法歳・慧曠・慧暁なんど申せし僧正・僧都已上の人々百余人なり。各々悪口を先とし、眉をあげ眼をいからかし、手をあげ拍子をたたく。叩しかれども、智顗法師は末座に坐して、色を変ぜず言を誤らず、威儀しずかにして、諸僧の言を一々に牒をとり、言ごとにせめかえす。取返責おしかえして難じて云わく「そもそも法雲法師の御義に『第一華厳、第二涅槃、第三法華』と立てさせ給いける証文はいずれの経ぞ。慥かに明らかなる証文を出ださせ給え」とせめしかば、各々頭をうつぶせ、色を失って一言の返事なし。俯責重ねてせめて云わく「無量義経に正しく『次に方等十二部経・摩訶般若・華厳海空を説いて』等云々。仏、我と華厳経の名をよびあげて、呼上無量義経に対して『いまだ真実を顕さず』と打ち消し給う。法華経に劣って候無量義経に、華厳経はせめられて候。いかに心えさせ給いて華厳経をば一代第一とは候いけるぞ。各々御師の御かとうどせんとおぼさば、この経文をやぶりて、これに勝れたる経文を取り出だして、御師の御義を助け給え」とせめたり。人責思破

また、「涅槃経を法華経に勝ると候いけるは、いかなる経文ぞ。涅槃経の第十四には華厳・阿含・方等・般若を挙げて、涅槃経に対して勝劣は説かれて候えども、まったく法華経と涅槃経との勝劣はみえず。次上の第九の巻に法華経と涅槃経との勝劣分明なり。いわゆる、経文に云わく『この経、世に出ずるは乃至法華の中の八千の声聞の記別を受くることを得て大菓実を成ずるがごとし。秋収冬蔵し

て、さらに所作無きがごとし』等云々。経文明らかに諸経をば春夏と説かせ給い、涅槃経と法華経とをば菓実の位とは説かれて候えども、法華経をば秋収冬蔵の大菓実の位、涅槃経をば秋の末・冬の始めの捃拾の位と定め給いぬ。この経文、正しく法華経には我が身劣ると承伏し給いぬ。法華経の文には『已に説き、今説き、当に説くべし』と申して、この法華経は前と並びとの経々に勝れたるのみならず、後に説かん経々にも勝るべしと仏定め給う。すでに教主釈尊かく定め給いぬれば疑うべきにあらねども、我が滅後はいかんがと疑いおぼして東方宝浄世界の多宝仏を証人に立て給いしかば、多宝仏大地よりおどり出でて『妙法華経は、皆これ真実なり』と証し、十方分身の諸仏重ねてあつまらせ給い、広長舌を大梵天に付け、また教主釈尊も付け給う。しかして後、多宝仏は宝浄世界へかえり、十方の諸仏各々本土にかえらせ給いて後、多宝・分身の仏もおわせざらんに、教主釈尊涅槃経をといて『法華経に勝る』と仰せあらば、御弟子等は信ぜさせ給うべしや」とせめしかば、日月の大光明の修羅の眼を照らすがごとく、漢王の剣の諸侯の頸にかかりしがごとく、両眼をとじ、一頭を低れたり。天台大師の御気色は、師子王の狐兎の前に吼えたるがごとし。鷹・鷲の鳩・雉をせめたるにたり。

かくのごとくありしかば、さては法華経は華厳経・涅槃経にもすぐれてありけりと震旦一国に流布するのみならず、かえりて五天竺までも聞こえ、「月氏の大小の諸論も智者大師の御義には勝れず。教主釈尊両度出現しましますか。仏教二度顕れぬ」とほめられ給いしなり。

その後、天台大師も御入滅なりぬ。陳・隋の世も代わって唐の世となりぬ。章安大師も御入滅なりぬ。天台の仏法ようやく習い失せしほどに、唐の太宗の御宇に玄奘三蔵といいし人、貞観三年に始めぬ。

て月氏に入り同十九年にかえりしが、月氏の仏法尋ね尽くして法相宗と申す宗をわたす。この宗は天台宗と水火なり。しかるに、天台の御覧なかりし深密経・瑜伽論・唯識論等をわたして「法華経は一切経には勝れたれども、深密経には劣る」という。しかるを、天台は御覧なかりしかば、天台の末学等は智慧の薄きかのゆえに、さもやとおもう。また太宗、賢王なり。玄奘の御帰依あさからず。いうべきことありしかども、いつものことなれば、時の威をおそれて申す人なし。法華経を打ちかえして「三乗真実・一乗方便・五性各別」と申せしことは、心うかりしことなり。天竺よりはわたれども、月氏の外道が漢土にわたれるか。「法華経は方便、深密経は真実」といいしかば、釈迦・多宝・十方の諸仏の誠言もかえりて虚しくなり、玄奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

その後、則天皇后の御宇に、前に天台大師にせめられし華厳経にまた重ねて新訳の華厳経わたりしかば、さきのいきどおりをはたさんがために、新訳の華厳をもって天台にせめられし旧訳の華厳経を扶けて、華厳宗と申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ。この宗は、華厳経をば「根本法輪」、法華経を「枝末法輪」と申すなり。南北は「一華厳、二法華、三涅槃」等云々。

その後、玄宗皇帝の御宇に、天竺より善無畏三蔵、大日経・蘇悉地経をわたす。金剛智三蔵、金剛頂経をわたす。また金剛智三蔵の弟子あり、不空三蔵なり。この三人は、月氏の人、種姓も高貴なる上、人がらも漢土の僧にには似ず、法門もなにとはしらず後漢より今にいたるまでなかりし印と真言という事をあいそいてゆゆしかりしかば、天子こうべをかたぶけ、万民掌をあわす。

今の華厳宗は「一華厳、二法華、三涅槃」等云々。

この人々の義にいわく「華厳・深密・般若・涅槃・法華経等の勝劣は顕教の内、釈迦如来の説の分なり。今の大日経等は大日法王の勅言なり。彼の経々は民の万言、この経は天子の一言なり。華厳経・涅槃経等は大日経には梯を立てても及ばず、ただ法華経ばかりこそ大日経には相似の経なれ。されども、彼の経は釈迦如来の説、民の正言。この経は天子の正言なり。言は似たれども、人がら雲泥なり。譬えば、濁水の月と清水の月のごとし。月の影は同じけれども、水に清濁あり」なんど申しければ、この由尋ね顕す人もなし。諸宗皆落ち伏して真言宗にかたぶきぬ。善無畏・金剛智死去の後、不空三蔵また月氏にかえりて菩提心論と申す論をわたし、いよいよ真言宗盛りなりけり。

ただし、妙楽大師という人あり。天台大師よりは二百余年の後なれども、智慧かしこき人にて天台の所釈を見明らめてありしかば、「天台の釈の心は、後にわたれる深密経・法相宗、また始めて漢土に立てたる華厳宗、大日経・真言宗にも法華経は勝れさせ給いたりけるを、あるいは智のおよばざるか、あるいは人を畏るるか、あるいは時の王威をおずるかの故にいわざりけるか。こうてあるならば、天台の正義すでに失せなん。また陳・隋已前の南北が邪義にも勝れたり」とおぼして、三十巻の末文を造り給う。いわゆる弘決・釈籤・疏記これなり。この三十巻の文は、本書の重なれるをけずりよわきをたすくるのみならず、天台大師の御時なかりしかば御責めにものがれてあるようなる法相宗と華厳宗と真言宗とを、一時にとりひしがれたる書なり。

また日本国には、人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に、百済国より一切経・釈迦仏の像をわたす。また用明天皇の御宇に、聖徳太子、仏法をよみはじめ、和気妹子と申す臣下を漢土

につかわして、先生の所持の一巻の法華経をとりよせ給いて持経と定め、その後、人王第三十七代に孝徳天皇の御宇に三論宗・華厳宗・法相宗・倶舎宗・成実宗わたる。人王四十五代に聖武天皇の御宇に律宗わたる。已上六宗なり。孝徳より人王第五十代の桓武天皇にいたるまでは十四代一百二十余年が間は、天台・真言の二宗なし。

桓武の御宇に最澄と申す小僧あり。山階寺の行表僧正の御弟子なり。法相宗を始めとして六宗を習いきわめぬ。しかれども、仏法いまだ極めたりともおぼえざりしに、華厳宗の法蔵法師が造りたる起信論の疏を見給うに、天台大師の釈を引きのせたり。この疏こそ子細ありげなれ。この国に渡りたるか、またいまだわたらざるかと不審ありしほどに、ある人にといしかば、その人の云わく「大唐の揚州竜興寺の僧・鑑真和尚は、天台の末学、道邃律師の弟子。天宝の末に日本国にわたり給いて小乗の戒を弘通せさせ給いしかども、天台の御釈持ち来りながらひろめ給わず。人王第四十五代聖武天皇の御宇なり」とかたる。その書を見んと申されしかば、取り出だして見せまいらせしかば、一返御らんありて生死の酔いをさましつ。この書をもって六宗の心を尋ねあきらめしかば、一々に邪見なること顕あらわれぬ。たちまちに願を発して云わく「日本国の人、皆謗法の者の檀越たるか。天下一定乱れなんず」とおぼして六宗を難ぜられしかば、七大寺・六宗の碩学蜂起して、京中烏合し、天下みなさわぐ。七大寺・六宗の諸人等、悪心強盛なり。

しかるを、去ぬる延暦二十一年正月十九日に天皇高雄寺に行幸あって、七寺の碩徳十四人、善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・観敏等十有余人を召し合わ

す。華厳・三論・法相等の人々、各々我が宗の元祖が義にたがわず。最澄上人は六宗の人々の所立一々に牒を取って、本経・本論ならびに諸経・諸論に指し合わせてせめしかば、一言も答えず、口をして鼻のごとくになりぬ。天皇おどろき給いて委細に御たずねありて、重ねて勅宣を下して十四人を責せめ給いしかば、承伏の謝表を奉りたり。その書に云わく「七箇の大寺、六宗の学匠乃至初めて至極を悟る」等云々。また云わく「聖徳の弘化より以降、今に二百余年の間、講ずるところの経論その数多し。彼此、理を争えども、その疑いいまだ解けず。しかもこの最妙の円宗なおいまだ闡揚せず」等云々。また云わく「三論・法相の久年の諍い渙焉として氷のごとく解け、照然として既に明らかなること、なお雲霧を披いて三光を見るがごとし」云々。

最澄和尚、十四人が義を判じて云わく「各一軸を講ず。法鼓を深壑に振るうに、賓主は三乗の路に徘徊し、義旗を高峰に飛ばすに、長幼は三有の結を摧破す。なおいまだ歴劫の轍を改めず、白牛を門外に混ず。あに善く初発の位に昇り、阿荼を宅内に悟らんや」等云々。広世・真綱二人の臣下云わく「霊山の妙法を南岳に聞き、総持の妙悟を天台に闢く。一乗の権滞を慨み三諦の未顕を悲しむ」等云々。また十四人云わく「善議等、牽かれて休運に逢い、乃ち奇詞を閲す。深く期するにあらざるよりは、何ぞ聖世に託せんや」等云々。

この十四人は、華厳宗の法蔵・審祥、三論宗の嘉祥・観勒、法相宗の慈恩・道昭、律宗の道宣・鑑真等の漢土・日本の元祖等の法門、瓶はかわれども水は一なり。しかるに十四人、彼の邪義をすてて伝教の法華経に帰伏しぬる上は、誰の末代の人か「華厳・般若・深密経等は法華経に超過せり」と申す

べきや。小乗の三宗はまた彼の人々の所学なり。大乗の三宗破れぬる上は、沙汰のかぎりにあらず。しかるを、今に子細を知らざる者、六宗はいまだ破られずとおもえり。譬えば、盲人が天の日月を見ず、聾人が雷の音をきかざるがゆえに、天には日月なし、空に声なしとおもうがごとし。

真言宗と申すは、日本人王第四十四代と申せし元正天皇の御宇に、善無畏三蔵、大日経をわたして弘通せずして漢土へかえる。また玄昉等、大日経の義釈十四巻をわたす。また東大寺の得清大徳わたす。これらを伝教大師御らんありてありしかども、大日経・法華経の勝劣いかんがとおぼしけるほどに、かたがた不審ありし故、去ぬる延暦二十三年七月御入唐。西明寺の道邃和尚、仏隴寺の行満等に値い奉って止観円頓の大戒を伝受し、霊感寺の順暁和尚に値い奉って真言を相伝し、同じき延暦二十四年六月に帰朝して桓武天皇に御対面。宣旨を下して六宗の学匠に止観・真言を習わしめ、同じく七大寺におかれぬ。

真言・止観の二宗の勝劣は漢土に多くの子細あれども、また大日経の義釈には「理同事勝」とかき、たれども、伝教大師は「善無畏三蔵のあやまりなり。大日経は法華経には劣りたり」と知ろしめして、八宗とはせさせ給わず、真言宗の名をけずりて法華宗の内に入れ七宗となし、大日経をば法華天台宗の傍依の経となして、華厳・大品般若・涅槃等の例とせり。

しかれども、大事の円頓の大乗別受戒の大戒壇を我が国に立ちょう立てじの諍論がわずらわしきによってや、真言・天台二宗の勝劣は弟子にも分明におしえ給わざりけるか。ただし、依憑集と申す文に、正しく真言宗は法華天台宗の正義を偸みとりて大日経に入れて理同とせり。されば、彼の宗は天

台宗に落ちたる宗なり。況いおうや、不空三蔵は、善無畏・金剛智入滅の後、月氏に入ってありしに、竜智菩薩に値い奉りし時、「月氏には仏意をあきらめたる論釈なし。漢土に天台という人の釈こそ邪正をえらび偏円をあきらめたる文にては候なれ。あなかしこ、あなかしこ。月氏へ渡し給え」とね懇んごろにあつらえしことを、不空の弟子・含光といいし者が妙楽大師にかたれるを記の十の末に引き載せられて候を、この依憑集に取り載せて候。法華経に大日経は劣るとしろしめすこと、伝教大師の御心顕然なり。

されば、釈迦如来・天台大師・妙楽大師・伝教大師の御心は、一同に大日経等の一切経の中には法華経はすぐれたりということは分明なり。また真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心もかくのごとし。大智度論を能く能く尋ぬるならば、このこと分明なるべきを、不空があやまれる菩提心論に皆人ばかされて、このことに迷惑せるか。

また石淵の勤操僧正の御弟子に空海という人あり。後には弘法大師とごうす。去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐。漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子・恵果和尚といいし人に両界を伝受。大同二年十月二十二日に御帰朝。平城天皇の御宇なり。桓武天皇は御ほうぎょ。平城天皇に見参し御用いありて御帰依他にことなりしかども、平城ほどもなく嵯峨に世をとられさせ給いしかば、弘法ひき入れてありしほどに、伝教大師は嵯峨天皇の弘仁十三年六月四日御入滅。同じき弘仁十四年より弘法大師、王の御師となり、真言宗を立てて東寺を給わり、真言和尚とごうし、これより八宗始まる。

一代の勝劣を判じて云わく「第一真言・大日経、第二華厳、第三は法華・涅槃」等云々。「法華経は阿含・方等・般若等に対すれば真実の経なれども、華厳経・大日経に望むれば戯論の法なり。教主釈尊は仏なれども、大日如来に向かうれば無明の辺域と申して皇帝と俘囚とのごとし。天台大師は盗人なり。真言の醍醐を盗んで法華経を醍醐という」なんどかかれしかば、法華経はいみじとおもえども、弘法大師にあいぬれば物のかずにもあらず。

天竺の外道はさて置きぬ、漢土の南北が法華経は涅槃経に対すれば枝末教と申せしにもこえたり。例せば、華厳宗が法華経に対すれば邪見の経といいしにもすぐれ、大自在天・那羅延天・婆籔天・教主釈尊の四人を高座の足につくりて、その上にのぼって邪法を弘めしがごとし。伝教大師御存生ならば、一言は出だされべかりけることなり。また義真・円澄・慈覚・智証等も、いかに御不審はなかりけるやらん。天下第一の大凶なり。

慈覚大師は去ぬる承和五年に御入唐。漢土にして十年が間、天台・真言の二宗をならう。法華・大日経の勝劣を習いしに、法全・元政等の八人の真言師には、法華経と大日経は理同事勝等云々。天台宗の志遠・広修・維蠲等に習いしには、大日経は方等部の摂等云々。同じき承和十三年九月十日に御帰朝。嘉祥元年六月十四日、宣旨下る。法華・大日経等の勝劣は漢土にしてしりがたかりけるかのゆえに、金剛頂経の疏七巻・蘇悉地経の疏七巻、已上十四巻、この疏の心は、大日経・金剛頂経・蘇悉地経の義と法華経の義は、その所詮の理は一同なれども事相の印と真言とは真言の三部経すぐれたりと云々。これはひとえに善無畏・金剛智・不空の造りたる大日経の疏の心のごとし。

しかれども、我が心になお不審やのこりけん、また心にはとけてんげれども人の不審をはらさんとやおぼしけん、この十四巻の疏を御本尊の御前にさしおきて御祈請ありき。「かくは造って候えども、仏意計りがたし。大日の三部やすぐれたる、法華経の三部やまされる」と御祈念ありしかば、五日と申す五更にたちまちに夢想あり。青天に大日輪かかり給えり。矢をもってこれを射ければ、矢飛んで天にのぼり、日輪の中に立ちぬ。日輪動転してすでに地に落ちんとすとおもいてうちさめぬ。悦んで云わく「我吉夢あり。法華経に真言勝れたりと造りつるふみは、仏意に叶いけり」と悦ばせ給いて、宣旨を申し下し日本国に弘通あり。しかも宣旨の心に云わく「ついに知んぬ、天台の止観と真言の法とは、義理冥に符えり」等云々。祈請のごときんば、大日経に法華経は劣なるようなり。宣旨を申し下すには、法華経と大日経とは同じ等云々。

智証大師は本朝にしては義真和尚・円澄大師・別当・慈覚等の弟子なり。顕密の二道は大体この国にして学し給いけり。天台・真言の二宗の勝劣の御不審に漢土へは渡り給いけるか。去ぬる仁寿二年に御入唐。漢土にしては真言宗は法全・元政等にならわせ給い、大体大日経と法華経とは理同事勝、慈覚の義のごとし。天台宗は良諝和尚にならい給う。真言・天台の勝劣、大日経は華厳・法華等には及ばず等云々。七年が間漢土に経て、去ぬる貞観元年五月十七日御帰朝。大日経の指帰に云わく「法華すらなお及ばず。いわんや自余の教えをや」等云々。この釈は、法華経は大日経には劣る等云々。また授決集に云わく「真言・禅門乃至もし華厳・法華・涅槃等の経に望めば、これ摂引門なり」等云々。普賢経の記、論の記に云わく「同じ」等云々。貞観八年丙戌四月二十九日壬申、勅宣を申し下して云

わく「聞くならく、真言・止観両教の宗、同じく醍醐と号し、ともに深秘と称す」等云々。また六月三日の勅宣に云わく「先師既に両業を開いて、もって我が道となす。代々の座主相承して兼ね伝えざることなし。在後の輩あに旧迹に乖かんや。聞くならく、山上の僧等専ら先師の義に違いて偏執の心を成す。ほとんど余風を扇揚し旧業を興隆するを顧みざるに似たり。およそ、その師資の道、一つを闕いても不可なり。伝弘の勤め、いずくんぞ兼備せざらんや。今より以後、よろしく両教に通達するの人を延暦寺の座主となすをもって、立てて恒例となすべし」云々。

されば、慈覚・智証の二人は伝教・義真の御弟子。漢土にわたりてはまた天台・真言の明師に値ってありしかども、二宗の勝劣は思い定めざりけるか。あるいは真言はすぐれ、あるいは法華すぐれ、あるいは理同事勝等云々。宣旨を申し下すには、二宗の勝劣を論ぜん人は違勅の者といましめられたり。これらは皆、自語相違といいぬべし。他宗の人はよも用いじとみえて候。

ただし、「二宗斉等とは、先師・伝教大師の御義」と宣旨に引き載せられたり。そもそも伝教大師いずれの書にかかれて候ぞや。このことよくよく尋ぬべし。

慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事を不審申すは、親に値っての年あらそい、日天に値い奉っての目くらべにては候えども、慈覚・智証の御かとうどをせさせ給わん人々は、分明なる証文をかまえさせ給うべし。詮ずるところは信をとらんがためなり。玄奘三蔵は月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし。天竺にわたらざりし宝法師にせめられにき。法護三蔵は印度の法華経をば見たれども、嘱累の先後をば、漢土の人みねども誤りといいしぞかし。たとい、慈覚、伝教大師に値い奉って習い伝えた

りとも、智証、義真和尚に口決せりとも、伝教・義真の正文に相違せば、あに不審を加えざらん。

伝教大師の依憑集と申す文は、大師第一の秘書なり。彼の書の序に云わく「新来の真言家は則ち筆授の相承を泯ぼし、旧到の華厳家は則ち影響の軌範を隠す。沈空の三論宗は弾訶の屈恥を忘れて称心の酔を覆い、著有の法相は撲陽の帰依を非して青竜の判経を撥う」等。乃至「謹んで依憑集一巻を著して同我の後哲に贈る。その時、興ること日本の第五十二葉、弘仁の七丙申歳なり」云々。次下の正宗に云わく「天竺の名僧、大唐天台の教迹最も邪正を簡ぶに堪えたりと聞いて、渇仰して訪問す」云々。次下に云わく「あに中国に法を失ってこれを四維に求むるにあらずや。しかるに、この方に識ることある者少なし。魯人のごとし」等云々。この書は法相・三論・華厳・真言の四宗をせめて候文なり。天台・真言の二宗、同一味ならば、いかでかせめ候べき。しかも不空三蔵等をば「魯人のごとし」なんどかかれて候。善無畏・金剛智・不空の真言宗いみじくば、いかでか魯人と悪口あるべき。また天竺の真言が、天台宗に同じきも、また勝れたるならば、天竺の名僧いかでか不空にあつらえ、中国に正法なしとはいうべき。

それはいかにもあれ、慈覚・智証の二人は、言は伝教大師の御弟子とはなのらせ給えども、心は御弟子にあらず。その故は、この書に云わく「謹んで依憑集一巻を著して同我の後哲に贈る」等云々。「同我」の二字は、真言宗は天台宗に劣るとならいてこそ、同我にてはあるべけれ。我と申し下さる宣旨に云わく「専ら先師の義に違いて偏執の心を成す」等云々。また云わく「およそ、その師脅の

道、一つを闕いても不可なり」等云々。この宣旨のごとくならば、慈覚・智証こそ専ら先師にそむく人にては候え。

こうせめ候もおそれにては候えども、これをせめずば大日経・法華経の勝劣やぶれなんと存じて、いのちをまとにかけてせめ候なり。この二人の人々の弘法大師の邪義をせめ候わざりけるは、最も道理にて候いけるなり。

されば、粮米をつくし人をわずらわかして漢土へわたらせ給わんよりは、本師・伝教大師の御義をよくよくつくさせ給うべかりけるにや。されば、叡山の仏法は、ただ伝教大師・義真和尚・円澄大師三代ばかりにてやありけん。天台座主すでに真言座主にうつりぬ。名と所領とは天台山、そのぬしは真言師なり。されば、慈覚大師・智証大師は「已今当」の経文をやぶらせ給う人なり。「已今当」の経文をやぶらせ給うは、あに釈迦・多宝・十方の諸仏の怨敵にあらずや。

弘法大師こそ第一の謗法の人とおもうに、これはそれにはにるべくもなき僻事なり。その故は、水火・天地なることは、僻事なれども人用いることなければ、その僻事成ずることなし。弘法大師の御義はあまり僻事なれば、弟子等も用いることなし。事相ばかりはその門家なれども、その教相の法門は弘法の義いいにくきゆえに、善無畏・金剛智・不空・慈覚・智証の義にてあるなり。慈覚・智証の義こそ「真言と天台とは理同なり」なんど申せば、皆人さもやとおもう。こうおもうゆえに、事勝の印と真言とについて、天台宗の人々、画像・木像の開眼の仏事をねらわんがために、日本一同に真言宗におちて、天台宗は一人もなきなり。

例せば、法師と尼と、黒と青とはまがいぬべければ、眼くらき人はあやまつぞかし。僧と男と、白と赤とは目くらき人も迷わず。いおうや眼あきらかなる者をや。慈覚・智証の義は、法師と尼と、黒と青とがごとくなるゆえに、智人も迷い愚人もあやまり候いて、この四百余年が間は、叡山・園城・東寺・奈良、五畿七道、日本一州、皆謗法の者となりぬ。

そもそも法華経の第五に「文殊師利よ。この法華経は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸経の中において最もその上に在り」云々。この経文のごとくならば、法華経は大日経等の一切経の頂上に住し給う正法なり。さるにては、善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等は、この経文をばいかんが会通せさせ給うべき。法華経の第七に云わく「能くこの経典を受持することあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一なり」等云々。この経文のごとくならば、法華経の行者は、川流江河の中の大海、衆山の中の須弥山、衆星の中の月天、衆明の中の大日天、転輪王・帝釈・諸王の中の大梵王なり。

伝教大師の秀句と申す書に云わく「この経もまたかくのごとく乃至諸の経法の中に、最もこれ第一なり。能くこの経典を受持することあらん者もまたかくのごとく、一切衆生の中において、またこれ第一なり〈已上、経文なり〉」と引き入れさせ給いて、次下に云わく「天台、法華玄に云わく等云々〈已上、書玄の文〉」とかかせ給いて、上の心を釈して云わく「当に知るべし、他宗の依るところの経はいまだ最もこれ第一ならず。その能く経を持つ者もまたいまだ第一ならず。天台法華宗の持つところの法華経は最もこれ第一なるが故に、能く法華を持つ者もまた衆生の中に第一なり。すでに仏説に拠る。あに

自歎ならんや」等云々。次下に譲る釈に云わく「委曲の依憑、つぶさに別巻に有るなり」等云々。依憑集に云わく「今、吾が天台大師、法華経を説き法華経を釈すること、群に特秀し唐に独歩す。明らかに知んぬ、如来の使いなり。讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開く」等云々。

法華経・天台・妙楽・伝教の経釈の心のごとくならば、今、日本国には法華経の行者は一人もなきぞかし。月氏には教主釈尊、宝塔品にして一切の仏をあつめさせ給いて大地の上に居せしめ、大日如来ばかり宝塔の中の南の下座にすえ奉って、教主釈尊は北の上座につかせ給う。この大日如来は大日経の胎蔵界の大日、金剛頂経の金剛界の大日の主君なり。両部の大日如来を郎従等と定めたる多宝仏の上座に、教主釈尊居せさせ給う。これ即ち法華経の行者なり。天竺かくのごとし。漢土には陳帝の時、天台大師、南北にせめかちて、現身に大師となる。「群に特秀し唐に独歩す」という、これなり。日本国には伝教大師、六宗にせめかちて、日本の始め第一の根本大師となり給う。

月氏・漢土・日本にただ三人ばかりこそ「一切衆生の中において、またこれ第一」にては候え。されば、秀句に云わく「浅きは易く深きは難しとは、釈迦の所判なり。浅きを去って深きに就くは、丈夫の心なり。天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云々。

仏の滅後一千八百余年が間に法華経の行者、漢土に一人、日本に一人、已上二人、釈尊を加え奉って已上三人なり。外典に云わく、聖人は一千年に一たび出で、賢人は五百年に一たび出ず。黄河は清ければ、千年には半ば河すみ、千年には共に清むと申すは、一定にて候いけり。涇・渭流れをわけて、五百年には分明なり。

しかるに、日本国は、叡山ばかりに伝教大師の御時法華経の行者ましましけり。義真・円澄は第一・第二の座主なり。第一の義真ばかり伝教大師ににたり。第二の円澄は、半ばは伝教の御弟子、半ばは弘法の弟子なり。第三の慈覚大師は、始めは伝教大師の御弟子ににたり。御年四十にて漢土にわたりてより、名は伝教の御弟子、その跡をばつがせ給えども、法門は全く御弟子にはあらず。しかれども、円頓の戒ばかりはまた御弟子ににたり。蝙蝠鳥のごとし。鳥にもあらず、ねずみにもあらず。梟鳥禽、破鏡獣のごとし。法華経の父を食らい、持者の母をかめるなり。日をいるとゆめにみし、これなり。されば、死去の後は墓なくてやみぬ。

智証の門家・園城寺と慈覚の門家・叡山と、修羅と悪竜と、合戦ひまなし。園城寺をやき、叡山をやく。智証大師の本尊の慈氏菩薩もやけぬ。慈覚大師の本尊・大講堂もやけぬ。現身に無間地獄をかんぜり。ただ中堂ばかりのこれり。

弘法大師もまた跡なし。弘法大師云わく「東大寺の受戒せざらん者をば、東寺の長者とすべからず」等、御いましめの状あり。しかれども、寛平法王、仁和寺を建立して、東寺の法師をうつして、「我が寺には叡山の円頓戒を持たざらん者をば住せしむべからず」と宣旨分明なり。されば、今の東寺の法師は、鑑真が弟子にもあらず、弘法の弟子にもあらず。戒は伝教の御弟子なり。また伝教の御弟子にもあらず、伝教の法華経を破失す。

去ぬる承和二年三月二十一日に死去ありしかば、公家より遺体をはほらせ給う。その後、誑惑の弟子等集まって、「御入定」と云々。あるいは「かみをそりてまいらするぞ」といい、あるいは「三鈷

をかんどよりなげたり」といい、あるいは「日輪、夜中に出でたり」といい、あるいは「現身に大日如来となり給う」といい、あるいは「伝教大師に十八道をおしえまいらせたり」といいて、師の徳をあげて智慧にかえ、我が師の邪義を扶けて王臣を誑惑するなり。

また高野山に本寺・伝法院といいし二つの寺あり。本寺は弘法のたてたる大塔、大日如来なり。伝法院と申すは正覚房が立てたる金剛界の大日なり。この本末の二寺、昼夜に合戦あり。例せば叡山・園城のごとし。

誑惑のつもりて日本に二つの禍いの出現せるか。糞を集めて栴檀となせども、焼く時はただ糞のかなり。大妄語を集めて仏とごうすれども、ただ無間大城なり。尼犍が塔は数年が間利生広大なりしかども、馬鳴菩薩の礼をうけてたちまちにくずれぬ。鬼弁婆羅門がとばりは多年人をたぼらかせしかども、阿湿縛窶沙菩薩にせめられてやぶれぬ。物留外道は石となって八百年、陳那菩薩にせめられて水となりぬ。道士は漢土をたぼらかすこと数百年、摩騰・竺蘭にせめられて仙経もやけぬ。趙高が国をとりし、王莽が位をうばいしがごとく、法華経の位をとって大日経の所領とせり。法王すでに国に失せぬ。人王あに安穏ならんや。

日本国は慈覚・智証・弘法の流れなり。一人として謗法ならざる人はなし。ただし、事の心を案ずるに、大荘厳仏の末、一切明王仏の末法のごとし。威音王仏の末法には、改悔ありしすら、なお千劫阿鼻地獄に堕つ。いかにいおうや、日本国の真言師・禅宗・念仏者等は一分の廻心なし。「かくのごとく展転して、無数劫に至らん」、疑いなきものか。

かかる謗法の国なれば、天もすてぬ。天すつれば、古き守護の善神もほこらをやいて寂光の都へ帰かえり給いぬ。ただ日蓮ばかり留まり居て告げ示せば、国主これをあだみ、数百人の民に、あるいは罵詈、あるいは悪口、あるいは杖木、あるいは刀剣、あるいは宅々ごとにせき、あるいは家々ごとに追おう。それにかなわねば、我と手をくだして二度まで流罪あり。去ぬる文永八年九月の十二日には頸を切らんとす。

最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に、他方の怨賊来って、国人喪乱に遭わん」等云々。大集経に云わく「もしまた、諸の刹利国王にして諸の非法を作し、世尊の声聞の弟子を悩乱し、もしはもって毀罵し、刀杖もて打斫し、および衣鉢・種々の資具を奪い、もしは他の給施に留難を作す者有らば、我らは彼をして自然に卒かに他方の怨敵を起こさしめ、および自界の国土にもまた兵起・病疫・飢饉・非時の風雨・闘諍言訟あらしめ、またその王をして久しからずしてまた当に己が国を亡失すべからしむ」等云々。

これらの文のごときは、日蓮この国になくば、仏は大妄語の人、阿鼻地獄はいかで脱れ給うべき。去ぬる文永八年九月十二日、平左衛門ならびに数百人に向かって云わく「日蓮は日本国の柱なり。日蓮を失うほどならば、日本国のはしらをたおすになりぬ」等云々。この経文に、智人を国主等、もしは悪僧等がざんげんにより、もしは諸人の悪口によって失にあつるならば、にわかにいくさおこり、また大風ふかせ、他国よりせむべし等云々。去ぬる文永九年二月のどしいくさ、同じき十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古の来りしは、ひとえに日蓮がゆえにあらずや。いおうや前よりこ

れをかんがえたり。誰の人か疑うべき。

弘法・慈覚・智証の誤りならびに禅宗と念仏宗とのわざわいあいおこりて、逆風に大波おこり、大地震のかさなれるがごとし。されば、ようやく国おとろう。太政入道が国をおさえ、承久に王位つきはてて、世東にうつりしかども、ただ国中のみだれにて他国のせめはなかりき。

彼は謗法の者は国に充満せりといえどもささえ顕す智人なし。かるがゆえになのめなりき。譬えば、師子のねぶれるは手をつけざればほえず、はやき流れは櫓をささえざれば波たかからず、盗人はとめざればいからず、火は薪を加えざればさかんならず。謗法はあれども、あらわす人なければ、国もおだやかなるにたり。例せば、日本国に仏法わたりはじめて候いしに、始めはなに事もなかりしかども、守屋仏をやき僧をいましめ堂塔をやきしかば、天より火の雨ふり、国にほうそうおこり、兵乱つづきしがごとし。

これは、それにはにるべくもなし。謗法の人々も国に充満せり。日蓮が大義も強くせめかかる。修羅と帝釈と、仏と魔王との合戦にもおとるべからず。

金光明経に云わく「時に隣国の怨敵かくのごとき念いを興さん。『当に四兵を具して彼の国土を壊るべし』と」等云々。また云わく「時に王見已わって、即ち四兵を厳え彼の国に発向し、ために討罰せんと欲す。我らその時、当に眷属たる無量無辺の薬叉・諸神と、各形を隠してために護助を作し、彼の怨敵をして自然に降伏せしむべし」等云々。最勝王経の文またかくのごとし。大集経云々、仁王経云々。これらの経文のごときんば、正法を行ずるものを国主あだみ、邪法を行ずる者のかとうどせ

ば、大梵天王・帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入りかわりてその国をせむべしとみゆ。例せば、訖利多王を雪山下王のせめ、大族王を幼日王の失いしがごとし。訖利多王と大族王とは、月氏の仏法を失いし王ぞかし。漢土にも仏法をほろぼしし王、みな賢王にせめられぬ。

これは彼にはにるべくもなし。仏法のかとうどなるようにて仏法を失う法師のかとうどをするゆえに、愚者はすべてしらず、智者なんども常の智人はしりがたし。天も下劣の天人は知らずもやあるらん。されば、漢土・月氏のいにしえのみだれよりも大きなるべし。

法滅尽経に云わく「吾般泥洹して後、五逆濁世に魔道興盛し、魔は沙門と作って吾が道を壊乱せん乃至悪人転た多くして海中の沙のごとし。善者はなはだ少なくして、もしは一、もしは二ならん」云々。涅槃経に云わく「かくのごとき等の涅槃経典を信ずるものは、爪上の土のごとく乃至この経を信ぜざるものは、十方界のあらゆる地の土のごとし」等云々。この経文は予が肝に染みぬ。

当世日本国には「我も法華経を信じたり、信じたり」。諸人の語のごときんば、一人も謗法の者なし。この経文には「末法に謗法の者は十方の地の土、正法の者は爪上の土」等云々。経文と世間とは水火なり。世間の人云わく「日本国には日蓮一人ばかり謗法の者」等云々。また経文には天地せり。法滅尽経には「善者は一・二人ならん」、涅槃経には「信ずる者は爪上の土」等云々。経文のごとくならば、日本国はただ日蓮一人こそ「爪上の土」「一・二人」にては候え。経文をや用いるべき、世間をか用いるべき。

問うて云わく、涅槃経の文には「涅槃経の行者は爪上」等云々。汝が義には「法華経」等云々、い

かん。

答えて云わく、涅槃経に云わく「法華の中のごとし」等云々。妙楽大師云わく「大経自ら法華を指して極となす」等云々。大経と申すは涅槃経なり。涅槃経には法華経を極と指して候なり。しかるを、涅槃宗の人の涅槃経を法華経に勝ると申せしは、主を所従といい、下郎を上郎といいし人なり。涅槃経をよむと申すは、法華経をよむを申すなり。譬えば、賢人は、国主を重んずる者をば、我をさぐれども悦ぶなり。涅槃経は、法華経を下げて我をほむる人をば、あながちに敵とにくませ給う。

この例をもって知るべし。華厳経・観経・大日経等をよむ人も、法華経を劣るとよむは、彼々の経々の心にはそむくべし。これをもって知るべし。法華経をよむ人の、この経をば信ずるようなれども諸経にても得道なるとおもうは、この経をよまぬ人なり。

例せば、嘉祥大師は法華玄と申す文十巻造って法華経をほめしかども、妙楽かれをせめて云わく「毀りその中に在り。いかんぞ弘讃と成さん」等云々。法華経をやぶる人なり。されば、嘉祥は落ちて天台につかいて法華経をよまず。「我経をよむならば、悪道まぬかれがたし」とて、七年まで身を橋とし給いき。慈恩大師は玄賛と申して法華経をほむる文十巻あり。伝教大師せめて云わく「法華経を讃むといえども、還って法華の心を死す」等云々。これらをもっておもうに、法華経をよみ讃歎する人々の中に、無間地獄は多く有るなり。

嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗の人ぞかし。弘法・慈覚・智証、あに法華経蔑如の人にあらずや。嘉祥大師のごとく、講を廃し衆を散じて身を橋となせしも、なおや已前の法華経誹謗の罪やきえざ

るらん。不軽軽毀の者は不軽菩薩に信伏随従せしかども、重罪いまだのこりて千劫阿鼻に堕ちぬ。されば、弘法・慈覚・智証等は、たといひるがえす心ありとも、なお法華経をよむならば重罪きえがたし。況いおうや、ひるがえる心なし。また法華経を失い、真言教を昼夜に行い、朝暮に伝法せしをや。

世親菩薩・馬鳴菩薩は、小をもって大を破せる罪をば、舌を切らんとこそせしか。世親菩薩は仏説なれども阿含経をばたわぶれにも舌の上におかじとちかい、馬鳴菩薩は懺悔のために起信論をつくりて小乗をやぶり給いき。嘉祥大師は天台大師を請じ奉って、百余人の智者の前にして五体を地になげ、遍身に汗を流し、紅のなんだをながして、「今よりは弟子を見じ。法華経をこうぜじ。弟子の面をまぼり法華経をよみたてまつれば、我が力のこの経を知るににたり」とて、天台よりも高僧・老僧にておわせしが、わざと人のみるとき、おいまいらせて河をこえ、こうざにちかづきて、せなかにのせまいらせて高座にのぼせたてまつり、結句、御臨終の後には隋の皇帝にまいらせ給いて、小児が母におくれたるがごとくに足をすりてなき給いしなり。

嘉祥大師の法華玄を見るに、いとう法華経を謗じたる疏にはあらず。ただし、法華経と諸大乗経とは門は浅深あれども心は一つとかきてこそ候え。これが謗法の根本にて候か。華厳の澄観も真言の善無畏も、大日経と法華経とは理は一つとこそかかれて候え。嘉祥とがあらば、善無畏も脱れがたし。

されば、善無畏三蔵は中天の国主なり。位をすてて他国にいたり、殊勝・招提の二人にあいて法華経をうけ、百千の石の塔を立てしかば、法華経の行者とこそみえしか。しかれども、大日経を習いしよりこのかた、法華経を大日経に劣るとやおもいけん、始めはいとうその義もなかりけるが、漢土に

わたりて玄宗皇帝の師となりぬ。天台宗をそねみ思う心つき給いけるかのゆえに、たちまちに頓死して、二人の獄卒に鉄の縄七つつけられて閻魔王宮にいたりぬ。命いまだつきずといいてかえされしに、法華経謗法とやおもいけん、真言の観念・印・真言等をばなげすてて、法華経の「今この三界は」の文を唱えて、縄も切れ、かえされ給いぬ。また雨のいのりをおおせつけられたりしに、たちまちに雨は下りたりしかども、大風吹いて国をやぶる。結句死し給いてありしには、弟子等集まって臨終いみじきようをほめしかども、無間大城に堕ちにき。

問うて云わく、何をもってかこれをしる。

答えて云わく、彼の伝を見るに、云わく「今畏の遺形を観るに、漸く縮小を加え、黒皮隠々として骨それ露なり」等云々。彼の弟子等は死後に地獄の相の顕れたるをしらずして徳をあぐなどおもえども、かきあらわせる筆は畏が失をかけり。死してありければ、身ようやくつづまりちいさく、皮はくろし、骨あらわなり等云々。人死して後色の黒きは地獄の業と定むることは、仏陀の金言ぞかし。善無畏三蔵の地獄の業はなに事ぞ。幼少にして位をすてぬ。第一の道心なり。月氏五十余箇国を修行せり。慈悲の余りに漢土にわたれり。天竺・震旦・日本、一閻浮提の内に真言を伝え、鈴をふる。この人の徳にあらずや。いかにして地獄に堕ちけると、後生をおもわん人々は御尋ねあるべし。

また金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり。金剛頂経を漢土にわたす。その徳、善無畏のごとし。また互いに師となれり。しかるに、金剛智三蔵、勅宣によって雨の祈りありしかば、七日が中に雨下る。天子大いに悦ばせ給うほどに、たちまちに大風吹き来る。王臣等きょうさめ給いき。使いをつけ

て追わせ給いしかども、とこうのべ(述)て留まりしなり。結句は姫宮の御死去ありしに、いのり(祈)をなすべしとて、身の代に殿上の二りの女子七歳になりしを薪につみこめ(詰込)て焼き殺せしことこそ、無慙にはおぼゆれ。しかれども、姫宮もいきかえり(生返)給わず。

不空三蔵は金剛智と月支より御ともせり(御供)。これらのことを不審とやおもいけん(思)、畏と智と入滅の後、月氏に還って竜智に値い奉り、真言を習いなおし(直)天台宗に帰伏してありしが、心ばかりは帰れども、身はかえる(帰)ことなし。雨の御いのり(御祈)うけ(承)たまわりたりしが、三日と申すに雨下る。天子悦ばせ給いて、我と御布施ひかせ(引)給う。須臾ありしかば、大風落ち下って内裏をも吹きやぶり(破)、雲客月卿の宿所、一所もあるべしともみえ(見)ざりしかば、天子大いに驚いて宣旨なりて「風をとどめ(止)よ」。しばらくありてはまた吹き、また吹きせしほどに、数日が間やむ(止)ことなし。結句は使いをつけて追ってこそ風もやみてありしか。

この三人の悪風は、漢土・日本の一切の真言師の大風なり。さにてあるやらん、去ぬる文永十一年四月十二日の大風は、阿弥陀堂の加賀法印、東寺第一の智者の雨のいのり(祈)に吹きたりし逆風なり。善無畏・金剛智・不空の悪法をすこしもたがえ(違)ず伝えたりけるか。心にくし(憎)、心にくし。

弘法大師は、去ぬる天長元年の二月大旱魃のありしに、先には守敏祈雨して七日が内に雨を下らす。ただ京中にふりて田舎にそそがず。次に弘法承け取って一七日に雨気なし。二七日に雲なし。三七日と申せしに、天子より和気真綱を使者として御幣を神泉苑にまいらせ(進)たりしかば、雨下ること三日、これをば弘法大師ならびに弟子等この雨をうばいとり(奪取)、我が雨として今に四百余年、弘法の雨という。

慈覚大師の夢に日輪を射しと、弘法大師の大妄語に云わく「弘仁九年春、大疫を祈に大日輪出現せり」と云々。成劫より已来、住劫の第九の減、已上二十九劫が間に、日輪夜中に出ずということなし。

慈覚大師は夢に日輪を射るという。内典五千・七千、外典三千余巻に、日輪をいるとゆめにみるは吉夢ということ有りやいなや。修羅は帝釈をあだみて日天を射たてまつる。その矢かえりて我が眼に立つ。殷の紂王は日天を的にいて身を亡ぼす。日本の神武天皇の御時、度美長と五瀬命と合戦ありしに、命の手に矢たつ。命の云わく「我はこれ日天の子孫なり。日に向かい奉って弓をひくゆえに、日天のせめをこうぼれり」と云々。阿闍世王は仏に帰しまいらせて、内裏に返ってぎょしんなりしが、おどろいて諸臣に向かって云わく「日輪、天より地に落つとゆめにみる」。諸臣云わく「仏の御入滅か」云々。須跋陀羅がゆめ、またかくのごとし。

我が国は殊にいむべきゆめなり。神をば天照という。国をば日本という。また教主釈尊をば日種と申す。摩耶夫人、日をはらむとゆめにみて、もうけ給える太子なり。慈覚大師は大日如来を叡山に立てて釈迦仏をすて、真言の三部経をあがめて法華経の三部の敵となりしゆえに、この夢出現せり。例せば、漢土の善導が、始めは密州の明勝といいし者に値って法華経をよみたりしが、後には道綽に値って法華経をすて観経に依って疏をつくり、法華経をば「千の中に一りも無し」、念仏をば「十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」と定めて、この義を成ぜんがために阿弥陀仏の御前にして祈誓をなす、「仏意に叶うやいなや」。「毎夜、夢の中に常に一りの僧有って、来って指授す」と云々。乃至「一

ら経法のごとくせよ」。乃至「観念法門経」等云々。法華経には「もし法を聞くことあらば、一りとして成仏せざることなけん」。善導は「千の中に一りも無し」等云々。法華経と善導とは水火なり。善導は、観経をば「十は即ち十生じ、百は即ち百生ず」。無量義経に云わく、観経は「いまだ真実を顕さず」等云々。無量義経と楊柳房とは天地なり。これを阿弥陀仏の僧と成って来って「真なり」と証するは、あに真事ならんや。そもそも阿弥陀仏は法華経の座に来って舌をば出だし給わざりけるか。観音・勢至は法華経の座にはなかりけるか。

これをもっておもえ、慈覚大師の御夢はわざわいなり。

問うて云わく、弘法大師の心経秘鍵に云わく「時に弘仁九年春、天下大疫す。ここに皇帝自ら黄金を筆端に染め、紺紙を爪掌に握って、般若心経一巻を書写し奉りたもう。予、講読の撰に範り、経旨の宗を綴る。いまだ結願の詞を吐かざるに、蘇生の族途にイみ、夜変じて日光赫々たり。これ愚身の戒徳にあらず。金輪の御信力のなすところなり。ただ神舎に詣でん輩のみ、この秘鍵を誦し奉れ。昔、予、鷲峰説法の筵に陪して、親りその深文を聞きたてまつる。あにその義に達せざらんや」等云々。

また孔雀経音義に云わく「弘法大師帰朝の後、真言宗を立てんと欲す。諸宗朝庭に群集して即身成仏の義を疑う。大師、智拳印を結んで南方に向かうに、面門にわかに開いて金色の毘盧遮那と成る。即便ち本体に還帰す。入我・我入のこと、即身頓証の疑い、この日釈然たり。しかるに真言・瑜伽の宗、秘密曼荼羅の道、彼の時よりして建立す」。また云わく「この時に諸宗の学徒、大師に帰して始

めて真言を得て請益し習学す。三論の道昌、法相の源仁、華厳の道雄、天台の円澄等、皆その類いなり」。

弘法大師伝に云わく「帰朝泛舟の日、発願して云わく『我が学ぶところの教法、もし感応の地有らば、この三鈷その処に到るべし』。よって、日本の方に向かって三鈷を抛げ上ぐ。遥かに飛んで雲に入る。十月に帰朝す」云々。また云わく「高野山の下に入定の所を占む乃至彼の海上の三鈷、今新たにここに在り」等云々。

この大師の徳無量なり。その両・三を示す、かくのごとくの大徳あり。いかんがこの人を信ぜずして、かえって阿鼻地獄に堕つといわんや。

答えて云わく、予も仰いで信じ奉ること、かくのごとし。ただし、古の人々も不可思議の徳ありしかども、仏法の邪正はそれにはよらず。外道が、あるいは恒河を耳に十二年留め、あるいは大海を吸干すいほし、あるいは日月を手ににぎり握、あるいは釈子を牛羊となしなんどせしかども、いよいよ大慢を起おこして生死の業とこそなりしか。これをば、天台云わく「名利を邀め、見愛を増す」とこそ釈せられて候え。光宅がたちまちに雨を下らし、須臾に花を感ぜしをも、妙楽は「感応かくのごときも、なお理に称わず」とこそかかれて候え。されば、天台大師の法華経をよみて須臾に甘雨を下らせ、伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらしておわせしも、それをもって仏意に叶うとはおおせられず。弘法大師いかなる徳ましますとも、法華経を戯論の法と定め、釈迦仏を無明の辺域とかかせ給える御ふでは、智慧かしこからん人は用いるべからず。

いかにいおうや、上にあげられて候徳どもは不審あることなり。

「弘仁九年の春、天下大疫す」等云々。春は九十日、いずれの月、いずれの日ぞ〈これ一〉。また弘仁九年には大疫ありけるか〈これ二〉。また「夜変じて日光赫々たり」と云々。このこと第一の大事なり。弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり。左史・右史の記に載せたりや〈これ三〉。たとい載せたりとも、信じがたきことなり。成劫二十劫・住劫九劫、已上二十九劫が間に、いまだ無き天変なり。夜中に日輪の出現せることといかん。また如来一代の聖教にもみえず。未来に夜中に日輪出ずべしとは、三皇五帝、三墳五典にも載せず。仏経のごときんば、滅劫にこそ二つの日、三つの日、乃至七つの日は出ずべしとは見ゆれども、かれは昼のことぞかし。夜、日出現せば、東西北の三方はいかん。たとい内外の典に記せずとも、現に弘仁九年の春、いずれの月、いずれの日、いずれの夜の、いずれの時に日出ずという公家・諸家・叡山等の日記あるならば、すこし信ずるへんもや。次下に「昔、予、鷲峰説法の筵に陪して、親りその深文を聞きたてまつる」等云々。この筆を人に信ぜさせしめんがためにか構えだす大妄語か。されば、霊山にして「法華経は戯論、大日経は真実」と仏の説き給いけるを、阿難・文殊が誤って妙法華経をば真実とかけるか、いかん。いうにかいなき婬女、破戒の法師等が歌をよみて雨らす雨を三七日まで下らさざりし人は、かかる徳あるべしや〈これ四〉。

孔雀経音義に云わく「大師、智拳印を結んで南方に向かうに、面門にわかに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云々。これまたいずれの王、いずれの年時ぞ。漢土には建元を初めとし、日本には大宝を初めとして、綿素の日記、大事には必ず年号のあるか。これほどの大事に、いかでか王も臣も年号も

日時もなきや。

また次に云わく「三論の道昌、法相の源仁、華厳の道雄、天台の円澄」等云々。そもそも円澄は寂光大師、天台第二の座主なり。その時何ぞ第一の座主・義真、根本の伝教大師をば召さざりけるや。円澄は天台第二の座主、伝教大師の御弟子なれども、また弘法大師の弟子なり。弟子を召さんよりは、三論・法相・華厳よりは、天台の伝教・義真の二人を召すべかりけるか。しかもこの日記に云わく「真言・瑜伽の宗、秘密曼荼羅、彼の時よりして建立す」等云々。この筆は伝教・義真の御存生かとみゆ。弘法は平城天皇の大同二年より弘仁十三年までは盛んに真言をひろめし人なり。その時はこの二人現におわします。また義真は天長十年までおわせしかば、その時まで弘法の真言はひろまらざりけるか。かたがた不審あり。孔雀経の疏は、弘法の弟子・真済が自記なり。信じがたし。また邪見の者か。公家・諸家・円澄の記をひかるべきか。また道昌・源仁・道雄の記を尋ぬべし。

「面門にわかに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云々。面門とは口なり。口の開けたりけるか、眉間開くとかかんとしけるが、誤って面門とかけるか。ぼう書をつくるゆえに、かかるあやまりあるか。

「大師、智拳印を結んで南方に向かうに、面門にわかに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云々。涅槃経の五に云わく「迦葉、仏に白して言さく『世尊よ。我今この四種の人に依らず。何をもっての故に。瞿師羅経の中のごとし。仏、瞿師羅のために説きたまわく、もし天・魔・梵、破壊せんと欲するがために変じて仏の像となり、三十二相八十種好を具足し荘厳し、円光一尋にして面部円満なること、なお月の盛明なるがごとく、眉間の毫相白きこと珂雪に踰え乃至左の脇より水を出だし、右の脇より

火を出だす』と」等云々。また六の巻に云わく「仏、迦葉に告げたまわく『我般涅槃して乃至後、この魔波旬漸く当に我が正法を沮壊すべし乃至化して阿羅漢の身および仏の色身と作り、魔王この有漏の形をもって無漏の身と作し、我が正法を壊らん』と」等云々。

弘法大師は法華経を華厳経・大日経に対して「戯論」等云々。しかも仏身を現ず。これ涅槃経には「魔、有漏の形をもって仏となって、我が正法をやぶらん」と記し給う。涅槃経の「正法」は法華経なり。故に、経の次下の文に云わく「久しくすでに成仏す」。また云わく「法華の中のごとし」等云々。釈迦・多宝・十方の諸仏は、一切経に対して「法華経は真実、大日経等の一切経は不真実」等云々。弘法大師は仏身を現じて、華厳経・大日経に対して「法華経は戯論」等云々。仏説まことならば、弘法は天魔にあらずや。

また三鈷のこと、殊に不審なり。漢土の人の日本に来ってほりいだすとも信じがたし。已前に人をやつかわしてうずみけん。いおうや、弘法は日本の人。かかる誑乱その数多し。

これらをもって仏意に叶う人の証拠とはしりがたし。

されば、この真言・禅宗・念仏等ようやくこうなり来るほどに、人王第八十二代尊成・隠岐法皇、権大夫殿を失わんと年ごろはげませ給いけるゆえに、国主なれば、なにとなくとも師子王の兎を伏するがごとく、鷹の雉を取るようにこそあるべかりし上、叡山・東寺・園城・奈良七大寺・天照太神・正八幡・山王・賀茂・春日等に数年が間、あるいは調伏、あるいは神に申させ給いしに、二日三日だにもささえかねて、佐渡国・阿波国・隠岐国等にながし失せて、終にかくれさせ給いぬ。伏の上首・

御室は、ただ東寺をかえらるるのみならず、眼のごとくあいせさせ給いし第一の天童・勢多伽が頸切られたりしかば、調伏のしるし還著於本人のゆえとこそ見え候え。これはわずかのことなり。この後定めて、日本の国臣・万民一人もなく、乾ける草を積んで火を放つがごとく、大山のくずれて谷をうむるがごとく、我が国他国にせめらるること出来すべし。

このこと、日本国の中にただ日蓮一人ばかりしれり。いいいだすならば、殷の紂王の比干が胸をさきしがごとく、夏の桀王の竜逢が頸を切りしがごとく、檀弥羅王の師子尊者が頸を刎ねしがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法道三蔵のかなやきをやかれしがごとくならんずらんとは、かねて知りしかども、法華経には「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」ととかれ、涅槃経には「むしろ身命を喪うとも教えを匿さざれ」といさめ給えり。今度命をおしむならば、いつの世にか仏になるべき、またいかなる世にか父母・師匠をもすくい奉るべきと、ひとえにおもい切って申し始めしかば、案にたがわず、あるいは所をおい、あるいはのり、あるいはうたれ、あるいは疵をこうぶるほどに、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日に御勘気をこうぶりて伊豆国伊東にながされぬ。また同じき弘長三年癸亥二月二十二日にゆりぬ。

その後、いよいよ菩提心強盛にして申せば、いよいよ大難かさなること、大風に大波の起こるがごとし。昔の不軽菩薩の杖木のせめも我が身につみしられたり。覚徳比丘が歓喜仏の末の大難もこれには及ばじとおぼゆ。日本六十六箇国・島二つの中に、一日片時もいずれの所にすむべきようもなし。古は二百五十戒を持って忍辱なること羅云のごとくなる持戒の聖人も、富楼那のごとくなる智者も、

日蓮に値いぬれば悪口をはく。正直にして魏徴・忠仁公のごとくなる賢者等も、日蓮を見ては理をまげて非とおこなう。いおうや、世間の常の人々は、犬のさるをみたるがごとく、猟師が鹿をこめたるににたり。日本国の中に一人として「故こそあるらめ」という人なし。

道理なり。人ごとに念仏を申す。人に向かうごとに念仏は無間に堕つというゆえに。人ごとに真言を尊む。真言は国をほろぼす悪法という。国主は禅宗を尊む。日蓮は天魔の所為というゆえに。我と招けるわざわいなれば、人ののるをもとがめず。とがむとても一人ならず。打つをもいたまず。本より存ぜしがゆえに。こう、いよいよ身もおしまずせめしかば、禅僧数百人・念仏者数千人・真言師百千人、あるいは奉行につき、あるいはきり人につき、あるいはきり女房につき、あるいは後家尼御前等について無尽のざんげんをなせしほどに、最後には「天下第一の大事。日本国を失わんと呪そする法師なり。故最明寺殿・極楽寺殿を無間地獄に堕ちたりと申す法師なり。御尋ねあるまでもなし。ただ須臾に頸をめせ。弟子等をばまた、あるいは頸を切り、あるいは遠国につかわし、あるいは籠に入れよ」と、尼ごぜんたちいからせ給いしかば、そのままに行われけり。

去ぬる文永八年辛未九月十二日の夜は相模国たつの口にて切らるべかりしが、いかにしてやありけん、その夜はのびて依智というところへつきぬ。また十三日の夜はゆりたりとどめきしが、またいかにやありけん、さどの国までゆく。今日切る、あす切るといいしほどに、四箇年というに、結句はさどの国までゆく。去ぬる文永十一年太歳甲戌二月の十四日にゆりて、同じき三月二十六日に鎌倉へ入る。同じき四月の八日、平左衛門尉に見参して、ようようのこと申したりし中に、「今年は蒙古は一定よすべし」と申

しぬ。同じき五月の十二日にかまくらをいでてこの山に入れり。これはひとえに父母の恩・師匠の恩・三宝の恩・国の恩をほうぜんがために身をやぶり命をすつれども、破れざれば、さてこそ候え。また賢人の習い、「三度国をいさむるに、用いずば山林にまじわれ」ということは、定まれるれいなり。

この功徳は、定めて上は三宝より下は梵天・帝釈・日月までもしろしめしぬらん。父母も故道善房の聖霊も扶かり給うらん。ただし疑い念うことあり。目連尊者は扶けんとおもいしかども、母の青提女は餓鬼道に堕ちぬ。大覚世尊の御子なれども、善星比丘は阿鼻地獄へ堕ちぬ。これは力のまますくわんとおぼせども、自業自得果のへんはすくいがたし。

故道善房は、いとう弟子なれば日蓮をばにくしとはおぼせざりけるらめども、きわめて臆病なりし上、清澄をはなれじと執せし人なり。地頭景信がおそろしといい、提婆・瞿伽利にことならぬ円智・実城が上と下とに居ておどせしをあながちにおそれて、いとおしとおもうとしごろの弟子等をだにもすてられし人なれば、後生はいかんがと疑う。ただし、一つの冥加には、景信と円智・実城とがさきにゆきしこそ一つのたすかりとはおもえども、彼らは法華経の十羅刹のせめをかぶりてはやく失せぬ。後にすこし信ぜられてありしは、いさかいの後のちぎりきなり。ひるのともしびなにかせん。その上いかなることあれども、子・弟子なんどいう者は不便なる者ぞかし。力なき人にもあらざりしが、さどの国までゆきしに一度もとぶらわれざりしことは、信じたるにはあらぬぞかし。

それにつけてもあさましければ、彼の人の御死去ときくには、火にも入り水にも沈み、はしりたちてもゆいて御はかをもたたいて経をも一巻読誦せんとこそおもえども、賢人のならい、心には遁世と

はおもわねども、人は遁世とこそ思おもうらんに、ゆえもなくはしり出ずるならば、末もとおらずと人おもうべし。されば、いかにおもうとも、参まいるべきにあらず。ただし各々二人は日蓮が幼少の師匠にておわします。勤操僧正・行表僧正の伝教大師の御師たりしが、かえりて御弟子とならせ給いしがごとし。日蓮が景信にあだまれて清澄山を出でしに、追おいてしのび出でられたりしは、天下第一の法華経の奉公なり。後生は疑い思おぼすべからず。

問うて云わく、法華経一部八巻二十八品の中に、何物か肝心なる。

答えて云わく、華厳経の肝心は大方広仏華厳経、阿含経の肝心は仏説中阿含経、大集経の肝心は大方等大集経、般若経の肝心は摩訶般若波羅蜜経、双観経の肝心は仏説無量寿経、観経の肝心は仏説観無量寿経、阿弥陀経の肝心は仏説阿弥陀経、涅槃経の肝心は大般涅槃経。かくのごとくの一切経は皆、如是我聞の上の題目その経の肝心なり。大は大につけ、小は小につけて、題目をもって肝心とす。大日経・金剛頂経・蘇悉地経等も、またまたかくのごとし。仏もまたかくのごとし。大日如来・日月灯明仏・燃灯仏・大通仏・雲雷音王仏、これらもまた名の内にその仏の種々の徳をそなえたり。今の法華経も、またもってかくのごとし。如是我聞の上の妙法蓮華経の五字は、即ち一部八巻の肝心、またまた一切経の肝心、一切の諸の仏・菩薩・二乗・天・人・修羅・竜神等の頂上の正法なり。

問うて云わく、南無妙法蓮華経と心もしらぬ者の唱うると、南無大方広仏華厳経と心もしらぬ者の唱うると、斉等なりや、浅深の功徳差別せりや。

答えて云わく、浅深等あり。

疑って云わく、その心いかん。

答えて云わく、小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども、大河をおさめず。大河は露乃至小河を摂むれども、大海をおさめず。阿含経は井江等・露涓をおさめたる小河のごとし。方等経・阿弥陀経・大日経・華厳経等は小河をおさむる大河なり。法華経は露涓・井江・小河・大河・天雨等の一切の水を一滴ももらさぬ大海なり。譬えば、身の熱き者の大寒水の辺にいねつればすずしく小水の辺に臥しぬれば苦しきがごとし。五逆・謗法の大一闡提人、阿含・華厳・観経・大日経等の小水の辺にては大罪の大熱さんじがたし。法華経の大雪山の上に臥しぬれば、五逆・誹謗・一闡提等の大熱たちまちに散ずべし。されば、愚者は必ず法華経を信ずべし。各々経々の題目は易きこと同じといえども、愚者と愚者との唱うる功徳は天地雲泥なり。譬えば、大綱は大力も切りがたし、小力なれども小刀をもてばたやすくこれをきる。譬えば、堅石をば鈍刀をもてば大力も破りがたし、利剣をもてば小力も破りぬべし。譬えば、薬はしらねども服すれば病やみぬ、食は服すれども病やまず。譬えば、仙薬は命を延べ、凡薬は病をいやせども命をのべず。

疑って云わく、二十八品の中にいずれか肝心なる。

答えて云わく、あるいは云わく、品々皆事に随って肝心なり。あるいは云わく、方便品・寿量品肝心なり。あるいは云わく、方便品肝心なり。あるいは云わく、寿量品肝心なり。あるいは云わく、開示悟入肝心なり。あるいは云わく、実相肝心なり。

問うて云わく、汝が心いかん。

答う。南無妙法蓮華経肝心なり。

その証いかん。

答えて云わく、阿難・文殊等、「如是我聞」等云々。

問うて曰わく、心いかん。

答えて云わく、阿難と文殊とは、八年が間、この法華経の無量の義を一句一偈一字も残さず聴聞してありしが、仏の滅後に結集の時、九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしに、妙法蓮華経とかかせて、次に「如是我聞」と唱えさせ給いしは、妙法蓮華経の五字は一部八巻二十八品の肝心にあらずや。されば、過去の灯明仏の時より法華経をこうぜし光宅寺の法雲法師は、「『如是』とは、将に所聞を伝えんとす。前題に一部を挙ぐるなり」等云々。霊山にまのあたりききこしめしてありし天台大師は、「『如是』とは、所聞の法体なり」等云々。章安大師云わく「記者釈して曰わく、けだし、序王とは経の玄意を叙ぶ。玄意は文の心を述ぶ」等云々。この釈に「文の心」とは、題目は法華経の心なり。妙楽大師云わく「一代の教法を収め、法華の文の心を出だす」等云々。

天竺は七十箇国なり。総名は月氏国。日本は六十箇国、総名は日本国。月氏の名の内に七十箇国、乃至人畜・珍宝皆みなあり。日本と申す名の内に六十六箇国あり。出羽の羽も奥州の金も、乃至国の珍宝・人畜、乃至寺塔も神社も、みな日本と申す二字の名の内に摂まれり。天眼をもっては、日本と申す二字を見て六十六国乃至人畜等をみるべし。法眼をもっては、人畜等のここに死し、かしこに生まるをもみるべし。譬えば、人の声をきいて体をしり、跡をみて大小をしる。蓮をみて池の大小を計り、

雨をみて竜の分斉をかんがう。これはみな一に一切の有ることわりなり。

阿含経の題目には大旨一切はあるようなれども、ただ小釈迦一仏のみありて他仏なし。華厳経・観経・大日経等にはまた一切有るようなれども、二乗を仏になすようと久遠実成の釈迦仏なし。例せば、花さいて菓ならず、雷なって雨ふらず、鼓あって音なし、眼あって物をみず、女人あって子をうまず、人あって命なし、また神なし。大日の真言、薬師の真言、阿弥陀の真言、観音の真言等、またかくのごとし。彼の経々にしては大王・須弥山・日月・良薬・如意珠・利剣等のようなれども、法華経の題目に対すれば、雲泥の勝劣なるのみならず、皆各々当体の自用を失う。例せば、衆星の光の一つの日輪にうばわれ、諸の鉄の一つの磁石に値って利性のつき、大剣の小火に値って用を失い、牛乳・驢乳等の師子王の乳に値って水となり、衆狐が術一犬に値って失い、狗犬が小虎に値って色を変ずるがごとし。

南無妙法蓮華経と申せば、南無阿弥陀仏の用も、南無大日真言の用も、観世音菩薩の用も、一切の諸仏・諸経・諸菩薩の用、皆ことごとく妙法蓮華経の用に失わる。彼の経々は妙法蓮華経の用を借らずば、皆いたずらのものなるべし。当時眼前のことわりなり。日蓮が南無妙法蓮華経と弘むれば、南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひるがごとく、秋冬の草のかるるがごとく、氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

問うて云わく、この法実にいみじくば、など、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親・南岳・天台・妙楽・伝教等は、善導が南無阿弥陀仏とすすめて漢土に弘通せしがごとく、恵心・永観・法然が日本国

を皆阿弥陀仏になしたるがごとく、勧すすめ給わざりけるやらん。

答えて云わく、この難は古の難なり。今はじめたるにはあらず。馬鳴・竜樹菩薩等は仏の滅後六百年・七百年等の大論師なり。この人々世にいでて大乗経を弘通せしかば、諸々の小乗の者疑って云わく「迦葉・阿難等は、仏の滅後二十年・四十年住寿し給いて正法をひろめ給いしは、如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか。しかるに、この人々はただ苦・空・無常・無我の法門をこそ詮とし給いしに、今、馬鳴・竜樹等かしこしというとも、迦葉・阿難等にはすぐべからず〈これ一〉。迦葉は仏にあいまいらせて解りをえたる人なり。この人々は仏にあいたてまつらず〈これ二〉。外道は常・楽・我・浄と立てしを、仏世に出でさせ給いて苦・空・無常・無我と説かせ給いき。このものどもは常・楽・我・浄といえり。されば、仏も御入滅なりぬ。迦葉等もかくれさせ給いぬれば、第六天の魔王がこのものどもが身に入りかわりて仏法をやぶり外道の法となさんとするなり。されば、仏法のあだをば、頭をわれ、頸をきれ、命をたて、食を止めよ、国を追え」と諸の小乗の人々申せしかども、馬鳴・竜樹等はただ一・二人なり。昼夜に悪口の声をきき、朝暮に杖木をこうぶりしなり。しかれども、この二人は仏の御使いぞかし。正しく摩耶経には六百年に馬鳴出でて、七百年に竜樹出でんと説かれて候。その上、楞伽経等にも記せられたり。また付法蔵経には申すにおよばず。されども諸の小乗のものどもは用いず。ただ、理不尽にせめしなり。「如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」の経文は、この時にあたりて少しつみしられけり。提婆菩薩の外道にころされ、師子尊者の頸をきられし。このことをもっておもいやらせ給え。

また仏の滅後一千五百余年にあたりて、月氏よりは東に漢土という国あり。陳・隋の代に天台大師出世す。この人の云わく「如来の聖教に大あり小あり、顕あり密あり、権あり実あり。迦葉・阿難等は一向に小を弘め、馬鳴・竜樹・無著・天親等は権大乗を弘めて、実大乗の法華経をば、あるいはただ指をさして義をかくし、あるいは経の面をのべて始中終をのべず。あるいは迹門をのべて本門をあらわさず。あるいは本迹あって観心なし」といいしかば、南三北七の十流が末数千万人、時をつくり、どっとわらう。「世の末になるままに不思議の法師も出現せり。時にあたりて我らを偏執する者はありとも、後漢の永平十年丁卯歳より今陳・隋にいたるまでの三蔵・人師二百六十余人を、『ものもしらず』と申す上、『謗法の者なり、悪道に堕つ』という者出来せり。あまりのものぐるわしさに、法華経を持て来り給える羅什三蔵をも、ものしらぬ者と申すなり。漢土はさてもおけ、月氏の大論師の竜樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給わずというなり。これをころしたらん人は、鷹をころしたるものなり。鬼をころすにもすぐべし」とののしりき。

また妙楽大師の時、月氏より法相・真言わたり、漢土に華厳宗の始まりたりしをとかくせめしかば、これもまたさわぎしなり。

日本国には、伝教大師、仏の滅後一千八百年にあたりていでさせ給い、天台の御釈を見て、欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給いしかば、「仏の滅後一千八百年が間、月氏・漢土・日本になかりし円頓の大戒を立てん」というのみならず、「西国の観音寺の戒壇、東国下野の小野寺の戒壇、中国大和国の東大寺の戒壇は、同じく小

乗臭糞の戒なり。瓦石のごとし。それを持つ法師等は、野干・猿猴等のごとし」とありしかば、「あら不思議や、法師ににたる大蝗虫、国に出現せり。仏教の苗一時にうせなん。殷の紂・夏の桀、法師となりて日本に生まれたり。後周の宇文・唐の武宗、二たび世に出現せり。仏法もただ今失せぬべし、国もほろびなん」と。「大乗・小乗の二類の法師出現せば、修羅と帝釈と、項羽と高祖と一国に並べるなるべし」と、諸人手をたたき、舌をふるう。「在世には仏と提婆が二つの戒壇ありて、そこばくの人々死にき。されば、『他宗にはそむくべし。我が師・天台大師の立て給わざる円頓の戒壇を立つべし』という不思議さよ。あらおそろし、あらおそろし」とののしりあえりき。されども経文分明にありしかば、叡山の大乗戒壇すでに立てさせ給いぬ。されば、内証は同じけれども、法の流布は、迦葉・阿難よりも馬鳴・竜樹等はすぐれ、馬鳴等よりも天台はすぐれ、天台よりも伝教は超えさせ給いたり。世末になれば、人の智はあさく仏教は深くなることなり。例せば、軽病には凡薬、重病には仙薬、弱き人には強きかとうど有って扶くる、これなり。

問うて云わく、天台・伝教の弘通し給わざる正法ありや。

答えて云わく、有り。

求めて云わく、何物ぞや。

答えて云わく、三つあり。

末法のために仏留め置き給う。迦葉・阿難等、馬鳴・竜樹等、天台・伝教等の弘通せさせ給わざる正法なり。

求めて云わく、その形貌いかん。

答えて云わく、一には、日本乃至一閻浮提一同に、本門の教主釈尊を本尊とすべし。いわゆる宝塔の内の釈迦・多宝、外の諸仏ならびに上行等の四菩薩、脇士となるべし。二には、本門の戒壇。三には、日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智をきらわず一同に他事を捨てて南無妙法蓮華経と唱うべし。このこといまだ広ひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまず唱うるなり。

例せば、風に随って波の大小あり、薪によって火の高下あり、池に随って蓮の大小あり、雨の大小は竜による。根ふかければ枝しげし、源遠ければ流れながしという、これなり。周の代の七百年は文王の礼孝による。秦の世ほどもなし、始皇の左道なり。

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華経は万年の外未来までもながるべし。日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり。無間地獄の道をふさぎぬ。この功徳は、伝教・天台にも超え、竜樹・迦葉にもすぐれたり。極楽百年の修行は穢土の一日の功に及ばず。正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか。これひとえに、日蓮が智のかしこきにはあらず、時のしからしむるにあらずや。

夏はあたたかに、冬はつめたし。時のしからしむるにあらずや。春は花さき、秋は菓なる。

「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃荼等にその便りを得しむることなかれ」等云々。この経文もしむなしくなるならば、舎利弗は華光如来とならじ、迦葉尊者は光明如来とならじ、目犍は多摩羅跋栴檀香仏とならじ、阿難は山海慧自

在通王仏とならじ、摩訶波闍波提比丘尼は一切衆生喜見仏とならじ、耶輸陀羅は具足千万光相仏とならじ。三千塵点も戯論、五百塵点も妄語となりて、恐らくは教主釈尊は無間地獄に堕ち、多宝仏は阿鼻の炎にむせび、十方の諸仏は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は一百三十六の苦をうくべし。いかでか、その義あるべき。その義なくば、日本国は一同の南無妙法蓮華経なり。されば、花は根にかえり、真味は土にとどまる。この功徳は故道善房の聖霊の御身にあつまるべし。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。

建治二年太歳丙子七月二十一日、これを記す。

甲州波木井郷蓑歩岳より安房国東条郡清澄山、浄顕房・義城房の本に送り奉る。

(011) 報恩抄送文

建治2年('76)7月26日　55歳
浄顕房

御状給び候い畢わんぬ。

親疎となく、法門と申すは、心に入れぬ人にはいわぬことにて候ぞ。御心得候え。

御本尊図して進らせ候。この法華経は、仏の在世よりも仏の滅後、正法よりも像法、像法よりも末法の初めには、次第に怨敵強くなるべき由をだにも御心えあるならば、日本国にこれより外に法華経の行者なし。これを皆人存じ候いぬべし。

道善御房の御死去の由、去ぬる月ほぼ承り候。自身早々と参上し、この御房をもやがてつかわすべきにて候いしが、自身は内心は存せずといえども、人目には遁世のように見えて候えば、なにとなくこの山を出でず候。この御房は、また内々人の申し候いしは、「宗論やあらんずらん」と申せしゆえに、十方にわかちて経論等を尋ねしゆえに、国々の寺々へ人をあまたつかわして候に、この御房は駿河分するがの国へつかわして当時こそ来って候え。

またこの文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ。詮なからん人々にきかせなば、悪しかりぬべく候。また、たといさなくとも、あまたになり候わば、ほかざまにもきこえ候いなば、御ため、またこのため、安穏ならず候わんか。

御まえと義城房と二人、この御房をよみてとして、嵩がもりの頂にて二・三遍、また故道善御房の御はかにて一遍よませさせ給いては、この御房にあずけさせ給いて、つねに御聴聞候え。たびたびになり候ならば、心づかせ給うこと候いなん。恐々謹言。

七月二十六日

日蓮　花押

清澄御房

(012)

四信五品抄

建治3年(77)4月10日　56歳
富木常忍

青鳧一結、送り給び候い了わんぬ。

今来の学者一同の御存知に云わく「在世・滅後異なりといえども、法華を修行するには必ず三学を具す。一つを欠いても成ぜず」云々。

余また年来この義を存するところ、一代聖教はしばらくこれを置く、法華経に入ってこの義を見聞するに、序・正の二段はしばらくこれを置く、流通の一段は末法の明鏡なり、もっとも依用となすべし。しかして、流通において二つ有り。一には、いわゆる迹門の中の法師等の五品なり。二には、いわゆる本門の中の分別功徳の半品より経を終わるまで十一品半なり。この十一品半と五品と合わせて十六品半、この中に末法に入って法華を修行する相貌分明なり。これになお事行かずんば、普賢経・涅槃経等を引き来ってこれを糾明せんに、その隠れなきか。

その中に、分別功徳品の四信と五品とは、法華を修行するの大要、在世・滅後の亀鏡なり。荊渓云わく「一念信解とは、即ちこれ本門立行の首なり」云々。その中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の初随喜と、この二処は一同に百界千如・一念三千の宝篋、十方三世の諸仏の出ずる

門なり。

天台・妙楽の二りの聖賢、この二処の位を定むるに、三つの釈有り。いわゆる、あるいは相似・十信・鉄輪の位、あるいは観行五品の初品の位にして未断見思、あるいは名字即の位なり。止観にその不定を会して云わく「仏意知り難し。機に赴いて異説す。これを借りて開解せば、何ぞ労わしく苦ろに諍わん」云々等。

予が意に云わく、三つの釈の中、名字即は経文に叶うか。滅後の五品の初めの一品を説いて云わく「しかも毀呰せずして、随喜の心を起こす」。もしこの文、相似・五品に渡らば、「しかも毀呰せずして」の言は便ならざるか。なかんずく寿量品の「失心、不失心」等は、皆、名字即なり。涅槃経に「もしは信ずるも、もしは信ぜざるも乃至熙連」とあり。これを勘えよ。また「一念信解」の四字の中の「信」の一字は四信の初めに居し、「解」の一字は後に奪わるるが故なり。もししからば、無解有信は四信の初位に当たる。経に第二信を説いて云わく「略解言趣」云々。記の九に云わく「ただ初信のみを除く。初めは解無きが故に」。したがって、次下の随喜品に至って、上の初随喜を重ねてこれを分明にす。五十人これ皆展転して劣るなり。第五十人に至って二つの釈有り。一には、謂わく「第五十人は初随喜の外なり」というは名字即なり。「教いよいよ実なれば位いよいよ下し」という釈は、この意なり。四味三教よりも円教は機を摂め、爾前の円教よりも法華経は機を摂め、迹門よりも本門は機を尽くすなり。「教弥実位弥下（教いよいよ実なれば位いよいよ下し）」の六字、心を留めて案ずべし。

問う。末法に入って初心の行者、必ず円の三学を具するや不や。

答えて曰わく、この義大事たるが故に、経文を勘え出だして貴辺に送付す。いわゆる五品の初・二・三品には、仏正しく戒・定の二法を制止して、一向に慧の一分に限る。慧また堪えざれば、信をもって慧に代え、信の一字を詮となす。不信は一闡提・謗法の因、信は慧の因、名字即の位なり。天台云わく「もし相似の益ならば、生を隔つるも忘れず。名字・観行の益ならば、生を隔つれば即ち忘れ、あるいは忘れざるも有り。忘るる者も、もし知識に値わば宿善還って生ず、もし悪友に値わば則ち本心を失う」云々。恐らくは、中古の天台宗の慈覚・智証の両大師も、天台・伝教の善知識に違背して、心は無畏・不空等の悪友に遷れり。末代の学者、恵心の往生要集の序に狂惑せられて、法華の本心を失い、弥陀の権門に入る。退大取小の者なり。過去をもってこれを惟うに、未来無数劫を経るも、三悪道に処せん。「もし悪友に値わば則ち本心を失う」とは、これなり。

問うて曰わく、その証いかん。

答えて曰わく、止観の第六に云わく「前教にその位を高くする所以は、方便の説なればなり。円教の位下きは、真実の説なればなり」。弘決に云わく「『前教』より下は、正しく権実を判ず。教いよいよ実なれば位いよいよ下く、教いよいよ権なれば位いよいよ高きが故に」。また記の九に云わく「位を判ずとは、観境いよいよ深く実位いよいよ下きを顕す」云々。他宗はしばらくこれを置く、天台一門の学者等、何ぞ「実位いよいよ下し」の釈を閣いて恵心僧都の筆を用いるや。畏・智・空と覚・証とのことは、追ってこれを習え。大事なり、大事なり、一閻浮提第一の大事なり。心有らん人は聞い

て後に我を外め。

問うて云わく、末代初心の行者に、何物をか制止するや。

答えて曰わく、檀・戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華経と称えしむるを、一念信解・初随喜の気分となすなり。これ則ちこの経の本意なり。

疑って云わく、この義いまだ見聞せず。心を驚かし、耳を迷わす。明らかに証文を引いて、請う、苦ろにこれを示せ。

答えて曰わく、経に云わく「我がためにまた塔寺を起て、および僧坊を作り、四事をもって衆僧を供養することを須いず」。この経文、明らかに初心の行者に檀・戒等の五度を制止する文なり。

疑って云わく、汝が引くところの経文は、ただ寺塔と衆僧とばかりを制止して、いまだ諸の戒等に及ばざるか。

答えて曰わく、初めを挙げて後を略す。

問うて曰わく、何をもってこれを知らん。

答えて曰わく、次下の第四品の経文に云わく「いわんや、また人有って、能くこの経を持ち、兼ねて布施・持戒等を行ぜんをや」云々。経文分明に初・二・三品の人には檀・戒等の五度を制止し、第四品に至って始めてこれを許す。後に許すをもって知んぬ、初めは制することを。

問うて曰わく、経文、一往、相似たり。はたまた疏釈有りや。

答えて曰わく、汝が尋ぬるところの釈とは、月氏の四依の論か、はたまた漢土・日本の人師の書か。

本を捨てて末を尋ね、体を離れて影を求め、源を忘れて流れを貫ぶ。分明なる経文を閣いて、論釈を請い尋ぬ。本経に相違する末釈有らば、本経を捨てて末釈に付くべきか。

しかりといえども、好みに随ってこれを示さん。文句の九に云わく「初心は縁に紛動せられて正業を修するを妨げんことを畏る。直ちに専らこの経を持つは、即ち上供養なり。事を廃して理を存するは、益するところ弘多なり」。この釈に「縁」と云うは、五度なり。初心の者兼ねて五度を行ずれば、正業の信を妨ぐるなり。譬えば、小船に財を積んで海を渡るに、財とともに没するがごとし。「直ちに専らこの経を持つ」と云うは、一経に亘るにあらず。専ら題目を持って余文を雑えず。なお一経の読誦をも許さず。いかにいわんや五度をや。「事を廃して理を存す」と云うは、戒等の事を捨てて、題目の理を専らにす云々。「益するところ弘多なり」とは、初心の者、諸行と題目とを並び行ずれば、益するところ全く失う云々。

文句に云わく「問う。もししからば、経を持つは即ちこれ第一義戒なり。何が故ぞまた能く戒を持つ者と言うや。答う。これは初品を明かす。応に後をもって難を作すべからず」等云々。当世の学者、この釈を見ずして、末代の愚人をもって南岳・天台の二聖に同ず。誤りの中の誤りなり。

妙楽重ねてこれを明かして云わく「『問う。もししからば』とは、もし事の塔および色身の骨を須いずんば、また応に事の戒を持つことを須いず、乃至事の僧を供養することを須いざるべしやとなり」等云々。伝教大師云わく「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」。ただ教大師一人のみに限るにあらず、鑑真の弟子の如宝・道忠ならびに七大寺等一同に捨て了わんぬ。また、教大師、未来を

誡めて云わく「末法の中に持戒の者有らば、これ怪異なり。市に虎有るがごとし。これ誰か信ずべき」云々。

問う。汝、何ぞ、一念三千の観門を勧進せず、ただ題目ばかりを唱えしむるや。

答えて曰わく、日本の二字に六十六国を摂め尽くして、人・畜・財一つも残らず。月氏の両字にあに七十箇国無からんや。妙楽云わく「略して経題を挙ぐるに、玄に一部を収む」。また云わく「略して界・如を挙ぐるに、つぶさに三千を摂む」。文殊師利菩薩・阿難尊者、三会八年の間の仏語、これを挙げて妙法蓮華経と題し、次下に領解して云わく「かくのごときを我聞きき」云々。

問う。その義を知らざる人、ただ南無妙法蓮華経とのみ唱うるに、義を解する功徳を具うや不や。

答う。小児、乳を含むに、その味を知らざれども自然に身を益す。耆婆が妙薬、誰か弁えてこれを服せん。水心無けれども火を消す。火物を焼くに、あに覚り有らんや。竜樹・天台皆この意なり。重ねて示すべし。

問う。何が故ぞ題目に万法を含むや。

答う。章安云わく「けだし、序王とは経の玄意を叙ぶ。経の玄意は文の心を述ぶ。文の心は迹本に過ぎたるはなし」。妙楽云わく「法華の文の心を出だして諸教の所以を弁ず」云々。濁水心無けれども、月を得て自ずから清めり。草木雨を得るに、あに覚り有って花かんや。妙法蓮華経の五字は、経文にあらず、その義にあらず、ただ一部の意なるのみ。初心の行者、その心を知らざれども、しかもこれを行ずるに、自然に意に当たるなり。

問う。汝が弟子、一分の解無くして、ただ一口南無妙法蓮華経と称うるものは、その位いかん。

答う。この人は、ただ四味三教の極位ならびに爾前の円人に超過するのみにあらず、はたまた真言等の諸宗の元祖、畏・儼・恩・蔵・宣・摩・導等に勝出すること百千万億倍なり。

請う、国中の諸人、我が末弟等を軽んずることなかれ。進んで過去を尋ぬれば、八十万億劫供養せし大菩薩なり。あに熙連一恒の者にあらずや。退いて未来を論ずれば、八十年の布施に超過して五十の功徳を備うべし。天子の襁褓に纏われ、大竜の始めて生ずるがごとし。蔑如することなかれ、蔑如することなかれ。

妙楽云わく「もし悩乱する者は頭七分に破れ、供養することあらん者は福十号に過ぐ」。優陀延王は賓豆盧尊者を蔑如して七年の内に身を喪失し、相州は日蓮を流罪して百日の内に兵乱に遇えり。経に云わく「もしまたこの経典を受持せん者を見て、その過悪を出ださば、もしは実にもあれ、もしは不実にもあれ、この人は現世に白癩の病を得ん乃至諸の悪重病あるべし」。また云わく「当に世々に眼無かるべし」等云々。明心と円智とは現に白癩を得、道阿弥は無眼の者と成りぬ。国中の疫病は「頭七分に破る」なり。罰をもって徳を惟うに、我が門人等は「福十号に過ぐ」疑いなきものなり。

夫れ、人王三十代欽明の御宇に始めて仏法渡りしより以来、桓武の御宇に至るまで、二十代二百余年の間、六宗有りといえども、仏法いまだ定まらず。ここに、延暦年中に一りの聖人有って、この国に出現せり。いわゆる伝教大師これなり。この人、先より弘通せる六宗を糾明して七寺を弟子となし、ついに叡山を建てて本寺となし、諸寺を取って末寺となす。日本の仏法ただ一門のみなり。王法も二

つにあらず。法定まり国清めり。その功を論ぜば、源、「已今当」の文より出でたり。その後、弘法・慈覚・智証の三大師、事を漢土に寄せて「大日の三部は法華経に勝る」と謂い、あまつさえ教大師の削るところの真言宗の宗の一字、これを副えて八宗と云々。三人一同に勅宣を申し下して日本に弘通し、寺ごとに法華経の義を破る。これひとえに、「已今当」の文を破らんとして、釈迦・多宝・十方の諸仏の大怨敵と成りぬ。しかる後、仏法漸く廃れ、王法次第に衰え、天照太神・正八幡等の久住の守護神は力を失い、梵帝・四天は国を去って、すでに亡国と成らんとす。情有らん人、誰か傷み嗟かざらんや。詮ずるところ、三大師の邪法の興る所は、いわゆる東寺と叡山の総持院と園城寺との三所なり。禁止せずんば、国土の滅亡と衆生の悪道と疑いなきものか。予ほぼこの旨を勘え国主に示すといえども、あえて叙用無し。悲しむべし、悲しむべし。

(013)

下山御消息

建治3年('77)6月　56歳
下山光基

「例時においては、もっとも阿弥陀経を読まるべきか」等云々。

このことは、仰せ候わぬ已前より、親父の代官といい、私の計らいと申し、この四・五年が間は退転なく例時には阿弥陀経を読み奉り候いしが、去年の春の末夏の始めより、阿弥陀経を止めて、一向に法華経の内、自我偈読誦し候。また同じくは一部を読み奉らんとはげみ候。これまたひとえに現当の御祈禱のためなり。

ただし、阿弥陀経・念仏を止めて候ことは、この日比、日本国に聞こえさせ給う日蓮聖人、去ぬる文永十一年の夏の比、同じき甲州飯野御牧の波木井郷の内、身延の嶺と申す深山に御隠居させ給い候えば、さるべき人々御法門承るべきの由候えども、御制止ありて入れられず。おぼろけの強縁ならではかないがたく候いしに、ある人見参の候と申し候いしかば、信じまいらせ候わんりょうには参り候わず、ものの様をも見候わんために、閑所より忍んで参り、御庵室の後ろに隠れ、人々の御不審について、あらあら御法門とかせ給い候いき。

法華経と大日経・華厳・般若・深密・楞伽・阿弥陀経等の経々の勝劣・浅深等を先として説き給い、

を承り候えば、法華経と阿弥陀経等の勝劣は、一重二重のみならず、天地雲泥に候いけり。譬えば、帝釈と猿猴と、鳳凰と烏鵲と、大山と微塵と、日月と蛍炬等の高下・勝劣なり。彼々の経文と法華経とを引き合わせて、比たくらべさせ給いしかば、愚人も弁えつべし。白々なり、赤々なり。されば、この法門は大体人も知れり。始めてお驚どろくべきにあらず。

また、仏法を修行する法は、必ず経々の大小・権実・顕密を弁うべき上、よくよく時を知り機を鑑みて申すべきことなり。しかるに、当世日本国は、人ごとに、阿弥陀経ならびに弥陀の名号等を本として、法華経を忽諸し奉る。世間に智者と仰がるる人々、我も我も時機を知れり時機を知れりと存ぜられげに候えども、小善をもって大善を打ち奉り、権経をもって実経を失うとがは、小善還って大悪となる、薬変じて毒となる、親族還って怨敵と成るがごとし。難治の次第なり。

また、仏法には賢げなるようなる人なれども、時により機により国により先後の弘通によることを弁えざれば、身心を苦しめて修行すれども験なきことなり。たとい一向に小乗流布の国には大乗をば弘通することはあれども、一向大乗の国には小乗経をあながちにいむことなり。しいてこれを弘通すれば、国もわずらい、人も悪道まぬかれがたし。

また、初心の人には二法を並べて修行せしむることをゆるさず。月氏の習いには、一向小乗の寺の者は王路を行かず、一向大乗の僧は左右の路をふむことなし。井の水、河の水、同じく飲むことなし。いかにいわんや一房に栖みなんや。されば、法華経に、初心の一向大乗の寺を仏説き給うに「ただ楽って大乗経典を受持するのみにして、乃至、余経の一偈をも受けざれ」。また云わく「また声聞を求

むる比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に親近せざれ」。また云わく「また問訊せざれ」等云々。たとい親父たれども、一向小乗の寺に住する比丘・比丘尼をば、一向大乗の寺の子息これを礼拝せず親近せず。いかにいわんや、その法を修行せんや。大小兼行の寺は、後心の菩薩なり。

今、日本国は、最初に仏法の渡って候いし比は大小雑行にて候いしが、人王四十五代聖武天皇の御宇に、唐の揚州竜興寺の鑑真和尚と申せし人、漢土より我が朝に法華経・天台宗を渡し給いてありしが、円機未熟とやおぼしけん、この法門をば己心に収めて口にも出だし給わず、大唐の終南山の豊徳寺の道宣律師の小乗戒を日本国の三所に建立せり。これひとえに法華宗の流布すべき方便なり。大乗出現の後には肩を並べて行ぜよとにはあらず。例せば、儒家の本師たる孔子・老子等の三聖は、仏の御使いとして漢土に遣わされて、内典の初門に礼楽文を諸人に教えたりき。止観に経を引いて云わく「我、三聖を遣わして、彼の震旦を化す」等云々。妙楽大師云わく「礼楽前に馳せて、真道後に啓く」と云々。仏は大乗の初門にしばらく小乗戒を説き給いしかども、時すぎぬれば禁めて云わく、涅槃経に云わく「もし人有って如来は無常なりと言わん。いかんぞ、この人、舌堕落せざらん」等云々。

その後、人王第五十代桓武天皇の御宇に、伝教大師と申せし聖人出現せり。始めには華厳・三論・法相・倶舎・成実・律の六宗を習い極め給うのみならず、達磨宗の淵底を探り究め給い、あまつさえ、いまだ日本国に弘通せざる天台・真言の二宗をも尋ね顕して、浅深・勝劣を心中に究竟し給えり。去ぬる延暦二十一年正月十九日に、桓武皇帝、高雄寺に行幸なり給い、南都七大寺の長者の善議・勤操等の十四人を教大師に召し合わせて、六宗と法華宗との勝劣を糾明せられしに、六宗の碩学、宗々ご

とに、「我が宗は一代超過」の由各々に立て申されしかども、教大師の一言に万事破れ畢わんぬ。その後、皇帝重ねて口宣す。和気広世を御使いとして諫責せられしかば、七大寺・六宗の碩学一同に謝表を奉り畢わんぬ。一十四人の表に云わく「この界の含霊、今より後、ことごとく妙円の船に載り、早く彼岸に済ることを得」云々。教大師云わく「二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ」云々。また云わく「正像やや過ぎ已わって、末法はなはだ近きに有り」。また云わく「一乗の家にはすべて用いず」。また云わく「穢食をもって宝器に置くことなかれ」。また云わく「仏世の大羅漢すでにこの呵責を被れり。滅後の小蚊虻何ぞこれに随わざらん」云々。

これまた私の責めにはあらず。法華経には「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」云々。涅槃経には「邪見の人」等云々。「邪見」「方便」と申すは、華厳・大日経・般若経・阿弥陀経等の四十余年の経々なり。「捨てて」とは、天台云わく「廃つるなり」。また云わく「謗とは背くなり」。「正直」の初心の行者の法華経を修行する法は、上に挙ぐるところの経々・宗々を抛って、一向に法華経を行ずるが真の正直の行者にては候なり。しかるを、初心の行者、深位の菩薩のように彼々の経々と法華経とを並べて行ずれば、不正直の者となる。世間の法にも、賢人は二君に仕えず、貞女は両夫に嫁がずと申す、これなり。

また私に異義を申すべきにあらず。如来は未来を鑑みさせ給いて、我が滅後正法一千年・像法一千年・末法一万年が間、我が法門を弘通すべき人々ならびに経々を、一々に切り当てられて候。しかるに、これを背く人世に出来せば、たとい智者・賢王なりとも用いるべからず。いわゆる「我が滅

後の次の日より正法五百年の間は、一向小乗経を弘通すべし。迦葉・阿難、乃至富那奢等の十余人なり。後の五百年には権大乗経の内華厳・方等・深密・般若・大日経・観経・阿弥陀経等を、弥勒菩薩・文殊師利菩薩・馬鳴菩薩・竜樹菩薩・無著菩薩・天親菩薩等の四依の大菩薩等の大論師弘通すべし」と云々。これらの大論師は、法華経の深義を知ろしめさざるにあらず。しかれども、法華経流布の時も来らざる上、釈尊よりも仰せ付けられざる大法なれば、心には存して口に宣べ給わず。ある時は、ほぼ口に嚙るようなれども、実義をば一向に隠して演べ給わず。

像法一千年の内に入りぬれば、月氏の仏法漸く漢土・日本に渡り来る。世尊、眼前に薬王菩薩等の迹化・他方の大菩薩に、法華経の半分、迹門十四品を譲り給う。これはまた、地涌の大菩薩、末法の初めに出現せさせ給いて、本門寿量品の肝心たる南無妙法蓮華経の五字を、一閻浮提の一切衆生に唱えさせ給うべき先序のためなり。いわゆる迹門弘通の衆は、南岳・天台・妙楽・伝教等これなり。

今の時は、世すでに上行菩薩等の御出現の時剋に相当たれり。しかるに、余、愚眼をもってこれを見るに、先相すでにあらわれたるか。

しかるに、諸宗の依るところの華厳・大日・阿みだ経等は、その流布の時を論ずれば、正法一千年の内、後の五百年、乃至像法の始めの諍論の経々なり。しかるに、人師等、経々の浅深・勝劣等に迷惑するのみならず、仏の譲り状をもわすれ、時機をも勘えず、みだりに宗々を構え、像・末の行となせり。例せば、白蔵に種を下ろして玄冬に穀をもとめ、下弦に満月を期し、夜中に日輪を尋ぬるがごとし。

いかにいわんや、律宗なんど申す宗は一向小乗なり。月氏には正法一千年の前の五百年の小法、また日本国にては、像法の中比、法華経・天台宗の流布すべき前に、しばらく機を調養せんがためなり。例せば、日出でんとて明星前に立ち、雨下らんとて雲まず起こるがごとし。日出で雨下って後の星・雲はなにかせん。しかるに、今は時過ぎぬ。また末法に入ってこれを修行せば、重病に軽薬を授け、大石を小船に載するがごとし。修行せば、身は苦しく、暇は入って験なく、花のみ開いて菓なからん。故に、教大師、像法の末に出現して、法華経の迹門の戒・定・慧の三つが内、その中の円頓の戒壇を叡山に建立し給いし時、二百五十戒たちまちに捨て畢わんぬ。したがって、また鑑真の末の南都七大寺の一十四人・三百余人も加判して大乗の人となり、一国挙って小律儀を捨て畢わんぬ。その授戒の書を見るべし。分明なり。

しかるを、今、邪智の持斎の法師等、昔捨てし小乗経を取り出だして、一戒もたもたぬ名ばかりなる二百五十戒の法師原有って、公家・武家を誑惑して国師とののしる。あまつさえ、我慢を発して大乗戒の人を破戒・無戒とあなずる。例せば、狗犬が師子を吠え、猿猴が帝釈をあなずるがごとし。今の律宗の法師原は、世間の人々には持戒・実語の者のようには見ゆれども、その実を論ずれば、天下第一の大不実の者なり。その故は、彼らが本文とする四分律・十誦律等の文は、大小乗の中には一向小乗、小乗の中にも最下の小律なり。在世には十二年の後、方等大乗へうつるほどのしばらくのやすめことば、滅後には正法の前の五百年は一向大乗の寺なり。これまた一向大乗の寺の毀謗となさんがためなり。されば、日本国には像法の半ばに鑑真和尚、大乗の手習いとし給う。教大師、彼の宗を破

し給いて、人をば天台宗へとりこし、宗をば失うべしといえども、後に事の由を知らしめんがために、我が大乗の弟子を遣わしてたすけおき給う。しかるに、今の学者等はこの由を知らずして、六宗は本より破れずしてありとおもえり。はかなし、はかなし。

また一類の者等、天台の才学をもって見れば我が律宗は幼弱なる故に、漸々に梵網経へうつりぬ。結句は、法華経の大戒を我が小律に盗み入れて、還って円頓の行者を破戒・無戒と咲えば、国主は当時の形貌の貴げなる気色にたぼらかされ給いて、天台宗の寺に寄せたる田畠等を奪い取って彼らにあたえ、万民はまた一向大乗の寺の帰依を抛って彼の寺にうつる。手ずから火をつけざれども日本一国の大乗の寺を焼き失い、抜目鳥にあらざれども一切衆生の眼を抜きぬ。仏の記し給う「阿羅漢に似たる闡提」とは、これなり。

涅槃経に云わく「我涅槃して後、無量百歳、四道の聖人ことごとくまた涅槃せん。正法滅して後、像法の中において、当に比丘有るべし。律を持つに似像せて少しく経を読誦し、飲食を貪嗜してその身を長養す乃至袈裟を服るといえども、なお猟師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く。唖法を受けたる婆羅門等のごとし。実には沙門にあらずして沙門の像を現じ、邪見熾盛にして正法を誹謗せん」等云々。この経文に世尊未来を記し置き給う。

そもそも、釈尊は、我らがためには賢父たる上、明師なり、聖主なり。一身に三徳を備え給える仏の、仏眼をもって未来悪世を鑑み給いて記し置き給う記文に云わく「我涅槃して後、無量百歳」云々。

仏の滅後二千年已後と見えぬ。また「四道の聖人ことごとくまた涅槃せん」云々。付法蔵の二十四人を指すか。「正法滅して後」等云々。像末の世と聞こえたり。

「当に比丘有るべし。律を持つに似像せて」等云々。今、末法の代に比丘の似像を撰び出ださば、日本国には誰の人をか引き出だして、大覚世尊をば不妄語の人とし奉るべき。俗男・俗女・比丘尼をば、この経文に載せたることなし。ただ比丘ばかりなり。比丘は日本国に数を知らず。しかれども、その中に三衣一鉢を身に帯せねば、似像と定めがたし。ただ持斎の法師ばかり相似たり。一切の持斎の中には、次下の文に「律を持つ」ととけり。律宗より外はまた脱れぬ。次下の文に「少しく経を読誦し」云々。相州鎌倉の極楽寺の良観房にあらずば、誰を指し出だして経文をたすけ奉るべき。

次下の文に「なお猟師の細めに視て徐かに行くがごとく、猫の鼠を伺うがごとし。外には賢善を現じ、内には貪嫉を懐く」等云々。両火房にあらずば、誰をか三衣一鉢の猟師・伺猫として仏説を信ずべき。哀れなるかな、当時の俗男・俗女・比丘尼等・檀那等が、山の鹿・家の鼠となりて、猟師・猫に似たる両火房に伺われ、たぼらかされて、今生には守護国土の天照太神・正八幡等にすてられ、他国の兵軍にやぶられて、猫の鼠を捺さえ取るがごとく、猟師の鹿を射死すがごとし。俗男・武士等は射伏せ切り伏せられ、俗女は捺さえ取られて他国へおもむかん。王昭君・楊貴妃がごとくになりて、後生には無間大城に一人もなく趣くべし。

しかるを、余このことを見る故に、彼が檀那等が大悪心をおそれず強盛にせむる故に、両火房、内々諸方に讒言を企てて余が口を塞がんとはげみしなり。

また経に云わく「汝を供養せば、三悪道に堕つ」等云々。在世の阿羅漢を供養せし人、なお三悪道免まぬかれがたし。いかにいわんや、滅後の狂惑の小律の法師原をや。小戒の大科をば、これをもって知んぬべし。あるいはまた驢乳にも譬えたり、還って糞となる。あるいは狗犬にも譬えたり、大乗の人の糞を食す。あるいは猿猴、あるいは瓦礫と云々。しかれば、時を弁えず機を知らずして小乗戒を持てば、大乗の障りとなる。破れば、また必ず悪果を招く。その上、今の人々、小律の者どもは、大乗戒を小乗戒に盗み入れ、驢乳に牛乳を入れて大乗の人をあざむく大偸盗の者、大謗法の者。そのとがを論ずれば、提婆達多も肩を並べがたく、瞿伽利尊者が足も及ばざる閻浮第一の大悪人なり。帰依せん国土、安穏なるべしや。

余このことを見るに、自身だにも弁えなばさてこそあるべきに、日本国に智者とおぼしき人々一人も知らず、国すでにやぶれなんとす。その上、仏の諫暁を重んずる上、一分の慈悲にもよおされて、国に代わって身命を捨てて申せども、国主等彼にたぼらかされて、用いる人一人もなし。譬えば、熱鉄に冷水を投げ、睡眠の師子に手を触るるがごとし。

ここに両火房と申す法師あり。身には三衣を皮のごとくはなつことなし。一鉢は両眼をまぼるがごとし。二百五十戒堅く持ち、三千の威儀をととのえたり。世間の無智の道俗、国主よりはじめて万民に至るまで、地蔵尊者の伽羅陀山より出現せるか、迦葉尊者の霊山より下来するかと疑う。余、法華経の第五の巻の勧持品を拝見したてまつれば、末代に入って法華経の大怨敵三類有るべし、その第三の強敵はこの者かと見畢わんぬ。便宜あらば、国敵をせめて、彼が大慢を倒して仏法の威験をあら

わさんと思うところに、両火房常に高座にして歎いて云わく「日本国の僧尼には二百五十戒・五百戒、男女には五戒・八斎戒等を一同に持たせんと思うに、日蓮がこの願の障りとなる」と云々。

余、案じて云わく「現証に付いて事を切らん」と思うところに、彼常に雨を心に任せて下らす由、披露あり。古もまた雨をもって得失をあらわす例これ多し。いわゆる伝教大師と護命と、守敏と弘法と等なり。ここに「両火房、上より祈雨の御いのりを仰せ付けられたり」と云々。ここに、両火房祈雨あり。去ぬる文永八年六月十八日より二十四日なり。ここに、使いを極楽寺へ遣わす。「年来の御歎きこれなり。七日が間にもし一雨も下らば、御弟子となりて二百五十戒つぶさに持たん上に、『念仏無間地獄と申すこと、僻読ひがよみなりけり』と申すべし。余だにも帰伏し奉らば、我が弟子等をはじめて日本国大体かたぶき候いなん」と云々。七日が間に三度の使いをつかわす。しかれども、いかんがしたりけん、一雨も下らざるの上、頽風・颪風・旋風・暴風等の八風、十二時にやむことなし。あまつさえ、二七日まで一雨も下らず、風もやむことなし。されば、このことは何事ぞ。和泉式部といいし色好み、能因法師と申せし無戒の者、これは彼の両火房がいむところの三十一字ぞかし。彼の月氏の大盗賊、「南無仏」と称せしかば、天頭を得たり。彼の両火房ならびに諸僧等の二百五十戒、真言・法華の小法・大法の数百人の仏法の霊験、いかなれば、婬女等の誑言、大盗人が称仏には劣るらんとあやしきことなり。これをもって彼らが大科をばしらるべきに、さはなくして、還って讒言を用もちいらるるは、実とはおぼえず。詮ずるところは、日本国亡国となるべき期来るか。

また祈雨のことは、たとい雨を下らせりとも、雨の形貌をもって祈る者の賢・不賢を知ることあり。

雨種々なり。あるいは天の雨、あるいは竜の雨、あるいは修羅の雨、あるいは飛雨、あるいは甘雨、あるいは雷雨等あり。今の祈雨はすべて一雨も下らざる上、二七日が間、前よりはるかに超過せる大旱魃・大悪風、十二時に止まることなし。両火房真の人ならば、たちまちに邪見をもひるがえし、跡をも山林にかくすべきに、その義なくして、面を弟子檀那等にさらす上、あまつさえ、讒言を企て日蓮が頸をきらせまいらせんと申す上、あずかる人の国まで状を申し下して種をたたんとする大悪人なり。しかるを、無智の檀那等は恃怙して、現世には国をやぶり、後生には無間地獄に堕ちなんことの不便さよ。

起世経に云わく「諸の衆生有って放逸をなし、清浄の行を汚すが故に、天、雨を下らさず」。また云わく「不如法あり。慳貪・嫉妬・邪見・顛倒なるが故に、天則ち雨を下らさず」。また経律異相に云わく「五事有って雨無し。一・二・三、〈これを略す〉四には雨師婬乱、五には国王理治めず、雨師瞋るが故に、雨らず」云々。これらの経文の亀鏡をもって両火房が身に指し当てて見よ。少しもくもりなからん。一には名は持戒ときこゆれども実には放逸なるか、二には慳貪なるか、三には嫉妬なるか、四には邪見なるか、五には婬乱なるか。この五つにはすぐべからず。

また、この経は両火房一人には限るべからず。昔をかがみ、今をもしれ。弘法大師の祈雨の時、二七日の間、一雨も下らざりしもあやしきことなり。しかるを、誑惑の心強盛なりし人なれば、天子の御祈雨の雨を盗み取って「我が雨」と云々。善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵の祈雨の時も、小雨は下りたりしかども、三師ともに大風連々と吹いて、勅使をつけておわれしあさましさと、天台大師・

伝教大師の須臾と三日が間に帝釈雨を下らして小風も吹かざりしも、たっとくぞおぼゆる。

法華経に云わく「あるいは阿練若に納衣にして空閑に在って乃至利養に貪著するが故に、白衣のために法を説いて、世の恭敬するところとなること、六通の羅漢のごときもの有らん」。また云わく「常に大衆の中に在って我らを毀らんと欲するが故に、国王・大臣・婆羅門・居士および余の比丘衆に向かって、誹謗して我が悪を説いて乃至悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん」。また云わく「濁世の悪比丘は、仏の方便、宜しきに随って説きたもうところの法を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出せられん」等云々。涅槃経に云わく「一闡提有って、羅漢の像を作して空処に住し、方等大乗経典を誹謗す。諸の凡夫人見已わって、皆『真の阿羅漢にして、これ大菩薩なり』と謂わん」等云々。

今、予、法華経と涅槃経との仏鏡をもって、当時の日本国を浮かべてその影をみるに、誰の僧か国主に六通の羅漢のごとくたっとまれて、しかも、法華経の行者を讒言して頸をきらせんとせし。また、いずれの僧か万民に大菩薩とあおがれたる。誰の智者か、法華経の故に度々処々を追われ、頸をきられ、弟子を殺され、両度まで流罪せられて最後に頸に及ばんとせし。眼無く耳無きの人は除く。眼有り耳有らん人は経文を見聞せよ。今の人々は、人ごとに経文を「我もよむ、我も信じたり」という。ただにくむところは日蓮ばかりなり。経文を信ずるならば、たしかにのせたる強敵を取り出だして、経文を信じてよむしるしとせよ。もししからずんば、経文のごとく読誦する日蓮をいかれるは、経文

をいかれるにあらずや。仏の使いをか軽しむるなり。

今の代の両火房が法華経の第三の強敵とならずば、釈尊は大妄語の仏、多宝・十方の諸仏は不実の証明なり。また経文まことならば、御帰依の国主は、現在には守護の善神にすてられ、国は他の有となり、後生には阿鼻地獄疑いなし。しかるに、彼らが大悪法を尊ばるる故に、理不尽の政道出来す。彼の国主の僻見の心を推するに、「日蓮は阿弥陀仏の怨敵、父母の建立の堂塔の讐敵なれば、たとい政道をまげたりとも、仏意には背かじ。天神もゆるし給うべし」とおもわるるか。はかなし、はかなし。委細にかたるべけれども、これは小事なれば申さず。心有らん者は、推して知んぬべし。

上に書き挙ぐるより雲泥大事なる日本第一の大科、この国に出来して年久しくなるあいだ、この国既に梵釈・日月・四天大王等の諸天にも捨てられ、守護の諸大善神も還って大怨敵となり、法華経守護の梵帝等、隣国の聖人に仰せ付けて日本国を治罰し、仏前の誓状を遂げんとおぼしめすことあり。

夫れ、正像の古は、世濁世に入るといえども、始めなりしかば、国土さしも乱れず、聖賢も間々出現し、福徳の王臣も絶えざりしかば、政道も曲がることなし。万民も直しかりし故に、小科を対治せんがために、三皇・五帝・三王・三聖等出現して墳典を作って代を治す。世しばらく治まりたりしかども、漸々にすえになるままに、聖賢も出現せず、福徳の人も少くなければ、三災は多大にして七難先代に超過せしかば、外典及びがたし。その時、治を代えて内典を用いて世を治す。したがって、世しばらくはおさまる。されども、また世末になるままに、人の悪は日々に増長し政道は月々に衰減するかの故に、また三災七難先よりいよいよ増長して、小乗戒等の力験なかりしかば、その時治をか代

えて小乗の戒等を止めて大乗を用ゆ。大乗また叶わねば、法華経の円頓の大戒壇を叡山に建立して代を治めたり。いわゆる、伝教大師、日本三所の小乗戒ならびに華厳・三論・法相の三大乗を破失せし、これなり。

この大師は、六宗をせめ落とさせ給うのみならず、禅宗をも習い極め、あまつさえ、日本国にいまだ広ひろまらざりし法華宗・真言宗をも勘え出だして勝劣鏡をかけ、顕密の差別、黒白なり。しかれども、世間の疑いを散じがたかりしかば、去ぬる延暦年中に御入唐。漢土の人々も他事には賢かりしかども、法華経・大日経、天台・真言の二宗の勝劣・浅深は分明に知らせ給わざりしかば、御帰朝の後、本の御存知のごとく、妙楽大師の記の十の不空三蔵の改悔の言を含光がかたりしを引き載せて、天台勝れ真言劣るなる明証を依憑集に定め給う。

あまつさえ、真言宗の宗の一字を削り給う。その故は、善無畏・金剛智・不空の三人、一行阿闍梨をたばかりて、本はなき大日経に天台の己証の一念三千の法門を盗み入れて、人の珍宝を我が有とせる大狂惑の者なりと心得給えり、例せば、澄観法師が天台大師の十法成乗の観法を華厳経に盗み入れて、還って天台宗を末教と下せしがごとしと御存知あって、宗の一字を削って「叡山はただ七宗たるべし」と云々。

しかるを、弘法大師と申せし天下第一の自讃毀他の大妄語の人、教大師御入滅の後、対論なくして公家をかすめたてまつりて八宗と申し立てぬ。しかれども、本師の跡を紹継する人々は叡山はただ七宗にてこそあるべきに、教大師の第三の弟子・慈覚大師と、叡山第一の座主義真和尚の末弟子・智証

大師と、この二人は漢土に渡り給いし時、日本国にて一国の大事と諍論せしことなれば、天台・真言の碩学等に値い給うごとに勝劣・浅深を尋ね給う。しかるに、その時の明匠等も、あるいは真言宗勝れ、あるいは天台宗勝れ、あるいは二宗斉等、あるいは「理は同じく事は異なり」といえども、ともに慥かの証文をば出ださず。二宗の学者等、しかしながら胸臆の言なり。しかるに、慈覚大師は学極めずして帰朝して疏十四巻を作れり。いわゆる金剛頂経の疏七巻・蘇悉地経の疏七巻なり。この疏の為体は、「法華経と大日経等の三部経とは、理は同じく事は異なり」等云々。この疏の心は、大日経の疏と義釈との心を出だすか。なお不審あきらめがたかりけるかの故に、本尊の御前に疏を指し置いて「この疏、仏意に叶えりやいなや」と祈せいせしところに、夢に日輪を射ると云々。うちおどろきて「吉夢なり。真言勝れたること疑いなし」とおもいて、宣旨を申し下す。日本国に弘通せんとし給いしが、ほどなく疫病やみて四箇月と申せしかば、跡もなくうせ給いぬ。

しかるに、智証大師は慈覚の御ためにも御弟子なりしかば、遺言に任せて宣旨を申し下し給う。いわゆる、「真言・法華斉等なり。譬えば、鳥の二つの翼、人の両目のごとし」、また「叡山も八宗なるべし」と云々。この両人は、身は叡山の雲の上に臥すといえども、心は東寺里中の塵にまじわる。本師の遺跡を紹継するようにて、還って聖人の正義を忽諸し給えり。法華経の「諸経の中において最も第一なり」の「上」の字をうちかえして大日経の下に置き、まず大師の怨敵となるのみならず、その上に在り」の「上」の字をうちかえして大日経の下に置き、まず大師の怨敵となるのみならず、存外に釈迦・多宝・十方分身・大日如来等の諸仏の讐敵となり給う。されば、慈覚大師の夢に日輪を射ると見しはこれなり。仏法の大科これよりはじまる。日本国亡国となるべき先兆なり。

棟梁たる法華経、既に大日経の椽桷となりぬ。王法も下剋上して王位も臣下に随うべかりしを、その時また一類の学者有って堅くこの法門を諍論せし上、座主も両方を兼ねて、事いまだきれざりしかば、世もたちまちにほろびずありけるか。例せば、外典に云わく「大国には諍臣七人、中国には五人、小国には三人諍論すれば、たとい政道に謬誤出来すれども国破れず乃至家に諫むる子あれば、不義におちず」と申すがごとし。仏家もまたかくのごとし。天台・真言の勝劣・浅深事きれざりしかば、少々の災難は出来せしかども、青天にも捨てられず黄地にも犯されず、一国の内のことにてありしほどに、人王七十七代後白河の法皇の御宇に当たって、天台座主・明雲、伝教大師の止観院の法華経の三部を捨てて、慈覚大師の総持院の大日経の三部に付き給う。天台山は名ばかりにて、真言の山になり、法華経の所領は大日経の地となる。天台と真言と、座主と大衆と、敵対あるべき序なり。国また王と臣と諍論して、王は臣に随うべき序なり。一国乱れて他国に破らるべき序なり。しかれば、明雲は義仲に殺されて、院も清盛にしたがいられ給う。

しかれども、公家も叡山も共にこの故としらずして世静かならずすぐるほどに、災難次第に増長して、人王八十二代隠岐法皇の御宇に至って、一災起これば二災起こると申して、禅宗・念仏宗起こりぬ。善導房は、法華経は末代には「千の中に一りも無し」とかき、法然は「捨閉閣抛」と云々。合いぬ。

禅宗は、法華経を失わんがために、「教外に別伝し、文字を立てず」とののしる。この三つの大悪法、鼻を並べて一国に出現せしが故に、この国すでに梵釈二天・日月・四王に捨てられ奉り、守護の善神も還って大怨敵とならせ給う。しかれば、相伝の所従に責め随えられて、主上・上皇共に夷島に放た

れ給い、御返りなくしてむなしき島の塵となり給う。

詮ずるところは、実経の所領を奪い取って権経たる真言の知行となせし上、日本国の万民等、禅宗・念仏宗の悪法を用いし故に、天下第一、先代未聞の下剋上出来せり。しかるに、相州は、謗法の人ならぬ上、文武きわめ尽くせし人なれば、天許し国主となす。したがって、世しばらく静かなりき。しかれども、また、先に王法を失いし真言、漸く関東に落ち下る。存外に崇重せらるる故に、鎌倉また還って大謗法・一闡提の官僧・禅僧・念仏僧の檀那と成って、新寺を建立して旧寺を捨つる故に、天神は眼を瞋らしてこの国を睨め、地神は憤りを含んで身を震う。長星は一天に覆い、地震は四海を動かす。

余これらの災夭に驚いて、ほぼ内典五千・七千、外典三千等を引き見るに、先代にも希なる天変地夭なり。しかれども、儒者の家には記せざれば知ることなし。仏法は自迷なれば心得ず。この災夭は、常の政道の相違と世間の謬誤より出来せるにあらず、定めて仏法より事起こるかと勘えなしぬ。

まず、大地震に付いて去ぬる正嘉元年に書を一巻注したりしを、故最明寺入道殿に奉る。御尋ねもなく、御用いもなかりしかば、「国主の御用いなき法師なれば、あやまちたりとも科あらじ」とや思いけん、念仏者ならびに檀那等、また、さるべき人々も同意したるとぞ聞こえし。夜中に日蓮が小庵に数千人押し寄せて殺害せんとせしかども、いかんがしたりけん、その夜の害もまぬかれぬ。しかれども、心を合わせたることなれば寄せたる者も科なくて、大事の政道を破る。「日蓮が生きたる、不思議なり」とて、伊豆国へ流しぬ。

されば、人のあまりににくきには、我がほろぶべきとがをもかえりみざるか、御式目をも破らるるか。御起請文を見るに、梵釈・四天・天照太神・正八幡等を書きのせたてまつる。余、存外の法門を申さば、子細を弁えられずば、日本国の御帰依の僧等に召し合わせられて、それになお事ゆかずば、漢土・月氏までも尋ねらるべし。それに叶わずば、子細ありなんとて、しばらくまたるべし。子細も弁えぬ人々が、身のほろぶべきを指しおきて、大事の起請を破らるること、心えられず。

自讃には似たれども、本文に任せて申す。余は、日本国の人々には上は天子より下は万民にいたるまで三つの故あり。一には父母なり、二には師匠なり、三には主君の御使いなり。経に云わく「即ち如来の使いなり」。また云わく「眼目なり」。また云わく「日月なり」。章安大師云わく「彼がために悪を除くは、則ちこれ彼が親なり」等云々。しかるに、謗法・一闡提の国敵の法師原が讒言を用いて、その義を弁えず、左右なく国の大事たる政道を曲げらるるは、わざとわざわいをまねかるるか。はかなし、はかなし。しかるに、事しずまりぬれば、科なきことは恥ずかしきかの故に、ほどなく召し返されしかども、故最明寺入道殿もまた早くかくれさせ給いぬ。

当御時に成って、あるいは身に疵をかぶり、あるいは弟子を殺され、あるいは所々を追い、あるいはやどをせめしかば、一日片時も地上に栖むべき便りなし。これにつけても、仏は「一切世間に怨多くして信じ難し」と説き置き給う。諸の菩薩は「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」と誓えり。「刀杖瓦石を加う」「しばしば擯出せられん」の文に任せて、流罪せられ、刀のさきにかかりなば、法華経一部よみまいらせたるにこそとおもいきりて、わざと不軽菩薩のごとく、覚徳比丘のよ

うに、竜樹菩薩・提婆菩薩・仏陀密多・師子尊者のごとく、いよいよ強盛に申しはる。

今度、法華経の大怨敵を見て、経文のごとく、父母・師匠・朝敵・宿世の敵のごとく散々に責むるならば、定めて万人もいかり、国主も讒言を収めて、流罪し、頸にも及ばんずらん。その時、仏前にして誓状せし梵釈・日月・四天の願をもはたさせたてまつり、「法華経の行者をあだまんものを須臾も逃のがさじ」と起請せしを、身にあてて心みん。釈尊・多宝・十方分身の諸仏の、あるいは共に宿し、あるいは衣を覆われ、あるいは守護せんとねんごろに説かせ給いしをも、実か虚言かと知って信心を増長せんと退転なくはげみしほどに、案にたがわず、去ぬる文永八年九月十二日、すべて一分の科もなくして佐土国へ流罪せらる。外には遠流と聞こえしかども、内には頸を切ると定めぬ。

余、また、兼ねてこのことを推せし故に、弟子に向かって云わく「我が願、既に遂げぬ。悦び身に余れり。人身は受けがたくして破れやすし。過去遠々劫より由なきことには身をば失いしかども、法華経のために命をすてたることはなし。我、頸を刎ねられて、師子尊者が絶えたる跡を継ぎ、天台・伝教の功にも超え、付法蔵の二十五人に一りを加えて二十六人となり、不軽菩薩の行にも越えて釈迦・多宝・十方の諸仏にいかがせんとなげかせまいらせん」と思いし故に、言をもおしまず、已前にありしこと、後にあるべきことの様を平金吾に申し含めぬ。この語しげければ、委細にはかかず。

そもそも、日本国の国主となりて、万事を心に任せ給えり。何事も両方を召し合わせてこそ勝負を決し御成敗をなす人の、いかなれば、日蓮一人に限って、諸僧等に召し合わせずして大科に行わるるらん。これひとえに、ただ事にあらず。たとい日蓮は大科の者なりとも、国は安穏なるべからず。御

式目を見るに、五十一箇条を立てて、終わりに起請文を書き載せたり。第一・第二は神事・仏事、乃至五十一等云々。神事・仏事の肝要たる法華経を手ににぎれる者を、讒人等に召し合わせられずして、彼らが申すままに頸に及ぶ。しかれば、他事の中にもこの起請文に相違する政道は有るらめども、これは第一の大事なり。日蓮がにくさに国をかえ身を失わんとせらるるか。

魯の哀公が忘るることの第一なることを記せらるるには、「移宅に妻をわする」と云々。孔子云わく「身をわするる者あり。国主と成って政道を曲ぐる、これなり」云々。はたまた国主はこのことを委細には知らせ給わざるか。いかに知らせ給わずとのべらるるとも、法華経の大怨敵と成り給いぬる重科は脱るべしや。

多宝・十方の諸仏の御前にして、教主釈尊の申し口として末代当世のことを説かせ給いしかば、諸の菩薩記して云わく「悪鬼はその身に入って、我を罵詈・毀辱せん乃至しばしば擯出せられん」等云々。また四仏・釈尊の説くところの最勝王経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に乃至他方の怨賊来って、国人喪乱に遭わん」等云々。たとい日蓮をば軽賤せさせ給うとも、教主釈尊の金言、多宝・十方の諸仏の証明は空しかるべからず。一切の真言師・禅宗・念仏者等の謗法の悪比丘をば前より御帰依ありしかども、その大科を知らせ給わねば、少し天も許し善神もすてざりけるにや。しかるを、日蓮が出現して、一切の人を恐れず、身命を捨てて指し申さば、賢なる国主ならば子細を聞き給うべきに、聞きもせず用いられざるだにも不思議なるに、あまつさえ頸に及ばんとせしことは存外の次第なり。

しかれば、大悪人を用いる大科、正法の大善人を恥辱する大罪、二悪鼻を並べてこの国に出現せり。譬えば、修羅を恭敬し日天を射奉るがごとし。故に、前代未聞の大事この国に起こるなり。これまた先例なきにあらず。夏の桀王は竜逢が頭を刎ね、殷の紂王は比干が胸をさき、二世王は李斯を殺し、優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し、檀弥羅王は師子尊者の頸をきる。武王は慧遠法師と諍論し、憲宗王は白居易を遠流し、徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす。これらは皆、諫暁を用いざるのみならず、還って怨を成せし人々、現世には国を亡ぼし身を失い、後生には悪道に堕つ。これまた人をあなずり、讒言を納れて理を尽くさざりし故なり。

しかるに、去ぬる文永十一年二月に佐土国より召し返されて、同四月の八日に平金吾に対面してありし時、理不尽の御勘気の由、委細に申し含めぬ。また「恨むらくは、この国すでに他国に破れんことのあさましさよ」と歎き申せしかば、金吾が云わく「いずれの比か大蒙古は寄せ候べき」と問いしかば、「経文には分明に年月を指したることはなけれども、天の御気色を拝見し奉るに、もっての外にこの国を睨みさせ給うか。今年は一定寄せぬと覚う。もし寄するならば、一人も面を向かう者あるべからず。これまた天の責めなり。日蓮をばわどのばらが用いぬものなれば、力及ばず。あなかしこ、あなかしこ。真言師等に調伏行わせ給うべからず。もし行わするほどならば、いよいよ悪しかるべき」由、申し付けて、さて帰ってありしに、上下共に先のごとく用いざりげにある上、本より存知せり、「国恩を報ぜんがために三度までは諫暁すべし。用いずば、山林に身を隠さん」とおもいしなり。また上古の本文にも「三度のいさめ用いずば去れ」という。本文に任せて、しばらく山中に罷り

入りぬ。その上は、国主の用い給わざらんに、それ已下に法門申して何かせん。申したりとも、国も助たすかるまじ。人もまた仏になるべしともおぼえず。

また「念仏無間地獄、阿弥陀経を読むべからず」と申すことも、私の言にはあらず。夫れ、弥陀念仏と申すは、源、釈迦如来の五十余年の説法の内、前四十余年の内の阿弥陀経等の三部経より出来せり。しかれども、「如来の金言なれば、定めて真実にてこそあるらめ」と信ずるところに、後八年の法華経の序分たる無量義経に、仏、法華経を説かせ給わんために、まず四十余年の経々ならびに年紀等をつぶさに数えあげて、「いまだ真実を顕さず乃至終に無上菩提を成ずることを得ず」と、そこばくの経々ならびに法門をただ一言に打ち消し給うこと、譬えば、大水の小火をけし、大風の衆の草木の露を落とすがごとし。しかる後に、正宗の法華経の第一巻に至って、「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」、また云わく「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」と説き給う。譬えば、闇夜に大月輪の出現し、大塔を立てて後、足代を切り捨つるがごとし。

しかる後、実義を定めて云わく「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす。また教詔すといえども、信受せず乃至経を読誦し書持することあらん者を見て、軽賤憎嫉して、結恨を懐かん。その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。経文の次第、普通の性相の法には似ず。常には五逆・七逆の罪人こそ阿鼻地獄とは定めて候に、これはさにては候わず。在世・滅後の一切衆生、阿弥陀経等の四十余年の経々を堅く執して法華経へうつらざらんと、たとい法華経へ入るとも本執を捨て

ずして彼々の経々を法華経に並べて修行せん人と、また自執の経々を法華経に勝れたりといわん人と、法華経を法のごとく修行すとも法華経の行者を恥辱せん者と、これらの諸人を指しつめて、「その人は命終して、阿鼻獄に入らん」と定めさせ給いしなり。

このことは、ただ釈迦一仏の仰せなりとも、外道にあらずば疑うべきにてはあらねども、已今当の諸経の説に色をかえて重きことをあらわさんがために、宝浄世界の多宝如来は、自らはるばる来給いて証人とならせ給う。釈迦如来の先判たる大日経・阿弥陀経・念仏等を堅く執して後の法華経へ入らざらん人々は入阿鼻獄は一定なりと証明し、また阿弥陀仏等の十方の諸仏は、各々の国々を捨てて霊山・虚空会に詣で給い、宝樹下に坐して広長舌を出だし大梵天に付け給うこと、無量無辺の虹の虚空に立ちたらんがごとし。

心は、四十余年の中の観経・阿弥陀経・悲華経等に、法蔵比丘等の諸の菩薩、四十八願等を発して凡夫を九品の浄土へ来迎せんと説くことは、しばらく法華経已前のやすめ言なり。実には、彼々の経々の文のごとく十方西方への来迎はあるべからず。実とおもうことなかれ。釈迦仏の今説き給うがごとし。実には、釈迦・多宝・十方の諸仏、寿量品の肝要たる南無妙法蓮華経の五字を信ぜしめんがためなりと出だし給う広長舌なり。我らと釈迦仏とは同じ程の仏なり。釈迦仏は天月のごとし、我らは水中の影の月なり。釈迦仏の本土は実には娑婆世界なり。天月動き給わずば、我らもうつるべからず。この土に居住して法華経の行者を守護せんこと、臣下が主上を仰ぎ奉らんがごとく、父母の一子を愛するがごとくならんと出だし給う舌なり。

その時、阿弥陀仏の一・二の弟子、観音・勢至等は、阿弥陀仏の塩梅なり、双翼なり、左右の臣なり、両目のごとし。しかるに、極楽世界よりはるばると御供し奉りたりしが、無量義経の時、仏の阿弥陀経等の四十八願等は「いまだ真実を顕さず」、乃至法華経にて「一に阿弥陀と名づく」と名をあげて、これらの法門は真実ならずと説き給いしかば、実とも覚えざりしに、阿弥陀仏正しく来って合点し給いしをうち見て、「さては、我らが念仏者等を九品の浄土へ来迎の蓮台と合掌の印とは、虚しかりけり」と聞き定めて、「さては、我らも本土に還って何かせん」とて、八万・二万の菩薩のうちに入り、あるいは観音品に「娑婆世界に遊ぶ」と申して、「この土の法華経の行者を守護せん」とねんごろに申せしかば、日本国より近き一閻浮提の内、南方補陀落山と申す小所を、釈迦仏より給わって宿所と定め給う。

阿弥陀仏は左右の臣下たる観音・勢至に捨てられて西方世界へは還り給わず、「この世界に留まって法華経の行者を守護せん」とありしかば、この世界の内、欲界第四の兜率天、弥勒菩薩の所領の内、四十九院の一院を給わって、阿弥陀院と額を打っておわすとこそうけたまわれ。

その上、阿弥陀経には、仏、舎利弗に対して凡夫の往生すべきようを説き給う。「舎利弗、舎利弗」また「舎利弗、舎利弗」と、二十余所までいくばくもなき経によび給いしは、かまびすしかりしことぞかし。しかれども、四紙一巻が内、すべて舎利弗等の諸声聞の往生・成仏を許さず、法華経に来ってこそ始めて華光如来・光明如来とは記せられ給いしか。一閻浮提第一の大智者たる舎利弗すら、浄土の三部経にて往生・成仏の跡をけずる。まして末代の牛羊のごとくなる男女、彼々の経々にて生死

を離れなんや。

この由を弁えざる末代の学者等、ならびに法華経を修行する初心の人々、かたじけなく阿弥陀経を読み念仏を申して、あるいは法華経に鼻を並べ、あるいは後にこれを読んで法華経の肝心とし、功徳を阿弥陀経等にあつらえて西方へ回向し往生せんと思うは、譬えば、飛竜が驢馬を乗り物とし、師子が野干をたのみたるか。はたまた、日輪出現の後の衆星の光、大雨の盛んなる時の小露なり。故に、教大師云わく「白牛を賜う朝には、三車を用いず。家業を得る夕べには、何ぞ除糞を須いん。故に、経に云わく『正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ』と」。また云わく「日出でぬれば星隠れ、巧みを見て拙きを知る」云々。

法華経出現の後は、已今当の諸経の捨てらるることは勿論なり。たとい修行すとも、法華経の所従にてこそあるべきに、今の日本国の人々、道綽が「いまだ一人も得る者有らず」、善導が「千の中に一りも無し」、恵心が往生要集の序、永観が十因、法然が捨閉閣抛等を堅く信じて、あるいは法華経を抛って一向に念仏を申す者もあり、あるいは念仏を本として助けに法華経を持つ者もあり、あるいは弥陀念仏と法華経とを鼻を並べて左右に念じて二行と行ずる者もあり、あるいは念仏と法華経とは一法の二名なりと思って行ずる者もあり。

これらは、皆、教主釈尊の御屋敷の内に居して、師主をば指し置き奉って、阿弥陀堂を釈迦如来の御所領の内に国ごとに郷ごとに家々ごとに並べ立て、あるいは一万二万、あるいは七万返、あるいは一生の間一向に修行して、主師親をわすれたるだに不思議なるに、あまつさえ、親父たる教主釈尊

の御誕生・御入滅の両日を奪い取って、十五日は阿弥陀仏の日、八日は薬師仏の日等云々。一仏誕入の両日を、東西二仏の死生の日となせり。これあに不孝の者にあらずや、逆路・七逆の者にあらずや。人ごとにこの重科有って、しかも人ごとに我が身は科なしとおもえり。無慙無愧の一闡提人なり。

法華経の第二の巻に主と親と師との三つの大事を説き給えり。一経の肝心ぞかし。その経文に云わく「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす」等云々。またこの経に背く者を文に説いて云わく「また教詔すといえども、信受せず乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん」等云々。

されば、念仏者が本師の導公は「その中の衆生」の外か。「ただ我一人のみ」の経文を破って、「千の中に一りも無し」といいし故に、現身に狂人と成って楊柳に登って身を投げ、堅土に落ちて死にかねて、十四日より二十七日まで十四日が間、顚倒し狂死し畢わんぬ。また真言宗の元祖、善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵等は、親父を兼ねたる教主釈尊法王を立て下して大日他仏をあがめし故に、善無畏三蔵は閻魔王のせめにあずかるのみならず、また無間地獄に堕ちぬ。汝等このこと疑いあらば、眼前に閻魔堂の画を見よ。金剛智・不空のことはしげければかかず。また禅宗の三階信行禅師は法華経等の一代聖教をば別教と下す。我が作れる経をば普経と崇重せし故に、四依の大士のごとくなりしかども、法華経の持者の優婆夷にせめられてこえを失い、現身に大蛇となり、数十人の弟子を呑み食らう。

今、日本国の人々は、たとい法華経を持ち釈尊を釈尊と崇重し奉るとも、真言宗・禅宗・念仏者を

崇あがむるならば、無間地獄はまぬかれがたし。免いかにいわんや、三宗の者どもを日月のごとく渇仰し、我が身にも念仏を事とせん者をや。心あらん人々は、念仏・阿弥陀経等をば、父母・師・君の宿世の敵よりもいむべきものなり。例せば、逆臣が旗をば官兵は指すことなし。寒食の祭には火をいむぞかし。されば、古の論師・天親菩薩は小乗経を舌の上に置かじと誓い、賢者たりし吉蔵大師は法華経をだに読み給わず。これらは、もと小乗経をもって大乗経を破失し、法華経をもって天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を消滅せんがためなり。今、日本国の人々は、一人もなく、不軽軽毀のごとく、苦岸・勝意等のごとく、一国万人、皆無間地獄に堕つべき人々ぞかし。仏の涅槃経に記して「末法には、法華経誹謗の者は大地微塵よりもお多おかるべし」と記し給いし、これなり。

しかるに、今、法華経の行者出現せば、一国万人、皆、法華経の読誦を止めて吉蔵大師の天台大師に随うがごとく身を肉橋となし、不軽軽毀の還って不軽菩薩に信伏随従せしがごとく仕うるとも、一日二日、一月二月、一年二年、一生が間には法華経誹謗の重罪はなおし滅しがたかるべきに、その義はなくして、当世の人々は四衆ともに一慢をおこせり。いわゆる「念仏者は法華経をすてて念仏を申す。日蓮は、法華経を持つといえども念仏を持まず。我らは、念仏をも持ち法華経をも信ず。戒をも持ち一切の善を行ず」等云々。これらは、野兎が跡を隠し、金鳥が頭を穴に入れ、魯人が孔子をあ侮ざむずり、善星が仏をおどせしに異ことならず。鹿・馬迷いやすく、鷹・鳩変じがたきものなり。はかなし、はかなし。

当時は予が古申せしことの漸く合うかの故に、心中には「いかんせん」とは思うらめども、年来

あまりに法にすぎてそしり悪口せしことがたちまちに翻りがたくて信ずる由をせず。しかも、蒙古はつよりゆく。いかんせんと宗盛・義朝がようになげくなり。あわれ、人は心はあるべきものかな。孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度にぎり、食する時は三度吐き給う。賢人はかくのごとく用意をなすなり。世間の法にも「ほうにすぎばあやしめ」というぞかし。国を治する人なんどが、人の申せばとて、委細にも尋ねずして左右なく科に行われしは、あわれくやしかるらんに、夏の桀王が湯王に責められ、呉王が越王に生けどりにせられし時は、賢者の諫暁を用いざりしことを悔い、阿闍世王が悪瘡身に出で他国に襲われし時は、提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓い、乃至宗盛がいくさにまけ義経に生けどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は、東大寺を焼き払わせ山王の御輿を射奉りしことを歎きしなり。

今の世もまた一分もたがうべからず。日蓮を賤しみ、諸僧を貴び給う故に、自然に法華経の強敵と成り給うことを弁えず。政道に背いて行わるるあいだ、梵釈・日月・四天・竜王等の大怨敵と成り給う。法華経守護の釈迦・多宝・十方分身の諸仏、地涌千界、迹化他方、二聖二天、十羅刹女・鬼子母神、他国の賢王の身に入り易わって国主を罰し国を亡ぜんとするを知らず。真の天のせめにてだにもあるならば、たとい鉄囲山を日本国に引き回らし、須弥山を蓋いとして十方世界の四天王を集めて波際に立て並べてふせがするとも、法華経の敵となり、教主釈尊より大事なる行者を、法華経の第五の巻をもって日蓮が頭を打ち、十巻共に引き散らして散々に踏みたりし大禍は、現当二世にのがれがたくこそ候わんずらめ。日本守護の天照太神・正八幡等も、いかでか、かかる国をばたすけ給うべき。

急いそぎいそぎ治罰を加えて自らの科を脱れんとこそはげみ給うらめ。遅おそく科に行うあいだ、日本国の諸神ども四天大王にいましめられてやあるらん。知り難きことなり。

教大師云わく「ひそかに以んみれば、菩薩は国の宝なること法華経に載す。大乗の利他は摩訶衍の説なり。弥天の七難は、大乗経にあらずんば、何をもってか除くとせん。未然の大災は、菩薩僧にあらずんば、あに冥滅することを得んや」等云々。しかるを、今、大蒙古国を調伏する公家・武家の日記を見るに、あるいは五大尊、あるいは七仏薬師、あるいは仏眼、あるいは金輪等云々。これらの小法は大災を消すべしや。「還って本人に著きなん」と成って、国たちまちに亡びなんとす。

あるいは日吉の社にして法華の護摩を行うといえども、不空三蔵が誤れる法を本として行うあいだ、祈禱の儀にあらず。また今の高僧等は、あるいは東寺の真言、あるいは天台の真言なり。東寺は弘法大師、天台は慈覚・智証なり。この三人は上に申すがごとく大謗法の人々なり。それより已外の諸僧等は、あるいは東大寺の戒壇の小乗の者なり。叡山の円頓戒は、また慈覚の謗法に曲げられぬ。彼の円戒も、迹門の大戒なれば、今の時の機にあらず。かたがた叶うべきことにはあらず。只今、国土やぶれなん。後悔先立たじ。不便、不便と語り給いしを、千万が一を書き付けて参らせ候。ただし、身も下賤に生まれ、心も愚かに候えば、このことは道理かとは承り候えども、国主も御用いなきかの故に、鎌倉にてはいかんが候いけん、不審に覚え候。返す返すも愚意に存じ候は、こ解れ程の国の大事をば、いかに御尋ねもなくして両度の御勘気には行われけるやらんと聞こしめしほどかせ給わぬ人々の、あるいは道理とも、あるいは僻事とも仰せあるべきこととは覚え候わず。また、

この身に阿弥陀経を読み候わぬも、しかしながら、御ため、また父母のためにて候。ただ理不尽に読むべき由を仰せを蒙り候わば、その時重ねて申すべく候。いかにも聞こしめさずしてうしろの推義をなさん人々の仰せをば、たとい身は随うように候えども、心は一向に用いまいらせ候まじ。後

また恐れにて候えども、兼ねてつみしらせまいらせ候。この御房はただ一人おわします。もしやの御事の候わん時は、御後悔や候わんずらん。「世間の人々の用いねば」とは、一旦のおろかのことなり。上の御用いあらん時は、誰人か用いざるべきや。その時はまた用いたりとも何かせん。人を信じて法を信ぜず。

抓知

また世間の人々の思って候は、親には子は是非に随うべしと。君臣・師弟もかくのごとし。これらは、外典をも弁えず内典をも知らぬ人々の邪推なり。外典の孝経には、子父・臣君諍うべき段もあり。内典には「恩を棄てて無為に入るは、真実に恩を報ずる者なり」と仏定め給いぬ。悉達太子は閻浮第一の孝子なり。父の王の命を背いてこそ、父母をば引導し給いしか。比干が親父・紂王を諫暁して胸をほられてこそ、賢人の名をば流せしか。賤しみ給うとも、小法師が諫暁を用い給わずば、現当の御歎きなるべし。これは親のために読みまいらせ候わぬ阿弥陀経にて候えば、いかにも当時は叶うべしとはおぼえ候わず。恐々、申し上げ候。

掘

覚

建治三年六月　日　　僧日永

下山兵庫五郎殿御返事

(014)

本尊問答抄

弘安元年('78)9月　57歳
浄顕房

問うて云わく、末代悪世の凡夫は何物をもって本尊とすべし。

答えて云わく、法華経の題目をもって本尊とすべし。

問うて云わく、いずれの経文、いずれの人師の釈にか出でたるや。

答う。法華経の第四の法師品に云わく「薬王よ。いたるところにて、もしは説き、もしは読み、もしは誦し、もしは書き、もしは経巻の住するところの処には、皆応に七宝の塔を起て、極めて高広厳飾ならしむべし。また舎利を安んずることを須いず。所以はいかん。この中には、すでに如来の全身有せばなり」等云々。涅槃経の第四の如来性品に云わく「また次に、迦葉よ、諸仏の師とするところは、いわゆる法なり。この故に、如来は恭敬・供養す。法常なるをもっての故に、諸仏もまた常なり」云々。

天台大師、法華三昧に云わく「道場の中においては、好き高座を敷き、法華経一部を安置せよ。またいまだ必ずしも形像・舎利ならびに余の経典を安んずることを須いず。ただ法華経一部のみを置け」等云々。

疑って云わく、天台大師の摩訶止観の第二の四種三昧の御本尊は阿弥陀仏なり。不空三蔵の法華経の観智の儀軌は、釈迦・多宝をもって法華経の本尊とせり。汝、何ぞこれらの義に相違するや。

答えて云わく、これ私の義にあらず。上に出だすところの経文ならびに天台大師の御釈なり。ただし、摩訶止観の四種三昧の本尊は阿弥陀仏とは、彼は常坐・常行・非行非坐の三種の本尊は阿弥陀仏なり。文殊問経・般舟三昧経・請観音経等による。これは爾前の諸経の内、未顕真実の経なり。半行半坐三昧には二つあり。一には方等経の七仏・八菩薩等を本尊とす。彼の経による。二には法華経の釈迦・多宝等を引き奉れども、法華三昧をもって案ずるに、法華経を本尊とすべし。不空三蔵の法華儀軌は、宝塔品の文によれり。これは法華経の教主を本尊とす。法華経の正意にはあらず。上に挙ぐるところの本尊は、釈迦・多宝・十方の諸仏の御本尊、法華経の行者の正意なり。

問うて云わく、日本国に十宗あり。いわゆる倶舎・成実・律・法相・三論・華厳・真言・浄土・禅・法華宗なり。この宗は、皆本尊まちまちなり。いわゆる倶舎・成実・律の三宗は劣応身の小釈迦なり。法相・三論の二宗は大釈迦仏を本尊とす。華厳宗は台上のるさな報身の釈迦如来。真言宗は大日如来。浄土宗は阿弥陀仏。禅宗にも釈迦を用いたり。何ぞ天台宗に独り法華経を本尊とするや。

答う。彼らは仏を本尊とするに、これは経を本尊とす。その義あるべし。

問う。その義、いかん。仏と経といずれか勝れたるや。

答えて云わく、本尊とは勝れたるを用いるべし。例せば儒家には三皇五帝を用いて本尊とするがごとく、仏家にもまた釈迦をもって本尊とすべし。

問うて云わく、しからば、汝、いかんぞ、釈迦をもって本尊とせずして、法華経の題目を本尊とするや。

答う。上に挙ぐるところの経釈を見給え。私の義にはあらず。釈尊と天台とは、法華経を本尊と定め給えり。末代今の日蓮も、仏と天台とのごとく、法華経をもって本尊とするなり。その故は、法華経は釈尊の父母、諸仏の眼目なり。釈迦・大日、総じて十方の諸仏は、法華経より出生し給えり。故に今、能生をもって本尊とするなり。

問う。その証拠、いかん。

答う。普賢経に云わく「この大乗経典は、諸仏の宝蔵なり。十方三世の諸仏の眼目なり。三世の諸の如来を出生する種なり」等云々。また云わく「この方等経は、これ諸仏の眼なり。諸仏はこれに因って五眼を具することを得たまえり。仏の三種の身は、方等より生ず。これ大法印なり。涅槃海を印す。かくのごとき海中より能く三種の仏の清浄の身を生ず。この三種の身は、人天の福田、応供の中の最なり」等云々。これらの経文は、仏は所生、法華経は能生。仏は身なり、法華経は神なり。しからば則ち木像・画像の開眼供養はただ法華経にかぎるべし。しかるに、今、木画の二像をもうけて、大日仏眼の印と真言とをもって開眼供養をなすは、もっとも逆なり。

問うて云わく、法華経を本尊とすると、大日如来を本尊とすると、いずれか勝るるや。

答う。弘法大師・慈覚大師・智証大師の御義のごとくならば、大日如来はすぐれ、法華経は劣るなり。

問う。その義、いかん。

答う。弘法大師の秘蔵宝鑰の十住心に云わく「第八法華、第九華厳、第十大日経」等云々。これは浅きより深きに入る。慈覚大師の金剛頂経の疏、蘇悉地経の疏、智証大師の大日経指帰等に云わく「大日経第一、法華経第二」等云々。

問う。汝が意、いかん。

答う。釈迦如来・多宝仏、総じて十方の諸仏の御評定に云わく「已今当の一切経の中に法華は最もこれ第一なり」云々。

問う。今、日本国中の天台・真言等の諸僧ならびに王臣・万民疑って云わく「日蓮法師めは弘法・慈覚・智証大師等に勝るべきか」。いかん。

答う。日蓮、反詰して云わく、弘法・慈覚・智証大師等は、釈迦・多宝・十方の諸仏に勝るべきか〈これ一〉。

今、日本国の王より民までも、教主釈尊の御子なり。釈尊の最後の御遺言に云わく「法に依って人に依らざれ」等云々。「法華は最も第一なり」と申すは法に依るなり。しかるに、三大師等に勝るべしやとのたもう諸僧・王臣・万民乃至所従、牛馬等にいたるまで、不孝の子にあらずや〈これ二〉。

問う。弘法大師は法華経を見給わずや。

答う。弘法大師、一切経を読み給えり。その中に法華経・華厳経・大日経の浅深・勝劣を読み給うに、法華経を読み給う様に云わく「文殊師利よ。この法華経は、諸仏如来の秘密の蔵にして、諸経の中において最もその下に在り」。また読み給う様に云わく「薬王よ。今汝に告ぐ。我が説くところの

諸経、しかもこの経の中において、法華は最も第三なり」云々。また慈覚・智証大師の読み給う様に云わく「諸経の中において最もその中に在り」。また「最もこれ第二なり」等云々。釈迦如来・多宝仏・大日如来・一切の諸仏、法華経を一切経に相対して説いてのたまわく「法華は最も第一なり」。また説いて云わく「法華は最もその上に在り」云々。詮ずるところ、釈迦・十方の諸仏と、慈覚・弘法等の三大師と、いずれを本とすべきや。ただ、事を日蓮によせて、釈迦・十方の諸仏には永く背いて三大師を本とすべきか、いかん。

問う。弘法大師は讃岐国の人、勤操僧正の弟子なり。三論・法相の六宗を極む。去ぬる延暦二十三年五月、桓武天皇の勅宣を帯びて漢土に入り、順宗皇帝の勅によって青竜寺に入って、恵果和尚に真言の大法を相承し給えり。恵果和尚は、大日如来よりは七代になり給う。人はかわれども、法門はおなじ。譬えば、瓶の水をなお瓶にうつすがごとし。大日如来と金剛薩埵・竜猛・竜智・金剛智・不空・恵果・弘法との瓶は異なれども、伝うるところの智水は同じき真言なり。

この大師、彼の真言を習って、三千の波濤をわたりて日本国に付き給うに、平城・嵯峨・淳和の三帝にさずけ奉る。去ぬる弘仁十四年正月十九日に東寺を建立すべき勅を給わって、真言の秘法を弘通し給う。しかれば、五畿七道、六十六箇国・二つの島にいたるまでも、鈴をとり杵をにぎる人、たれかこの人の末流にあらざるや。

また、慈覚大師は、下野国の人、広智菩薩の弟子なり。大同三年、御歳十五にして伝教大師の御弟子となりて、叡山に登って十五年の間、六宗を習い、法華・真言の二宗を習い伝う。承和五年御入

唐、漢土の会昌天子の御宇なり。法全・元政・義真・法月・宗叡・志遠等の天台・真言の碩学に値い奉って、顕密の二道を習い極め給う。その上、殊に真言の秘教は十年の間、功を尽くし給う。大日如来よりは九代なり。嘉祥元年、仁明天皇の御師なり。仁寿・斉衡に金剛頂経・蘇悉地経の二経の疏を造り、叡山に総持院を建立して第三の座主となり給う。天台の真言、これよりはじまる。

また智証大師は、讃岐国の人、天長四年、御年十四、叡山に登り、義真和尚の御弟子となり給う。日本国にては義真・慈覚・円澄・別当等の諸徳に八宗を習い伝え、去ぬる仁寿元年に文徳天皇の勅を給わって漢土に入り、宣宗皇帝の大中年中に、法全・良諝和尚等の諸大師に七年の間顕密の二教習い極め給いて、去ぬる天安二年に御帰朝。文徳・清和等の皇帝の御師なり。いずれも、現のため当のため、月のごとく日のごとく、代々の明主、時々の臣民、信仰余り有り、帰依怠りなし。故に、愚癡の一切、ひとえに信ずるばかりなり。

誠に、「法に依って人に依らざれ」の金言を背かざるの外は、いかでか、仏によらずして弘法等の人によるべきや。詮ずるところ、その心いかん。

答う。夫れ、教主釈尊の御入滅一千年の間、月氏に仏法の弘通せし次第は、先の五百年は小乗、後の五百年は大乗。小大・権実の諍いはありしかども、顕密の定めはかすかなりき。像法に入って十五年と申せしに、漢土に仏法渡る。始めは儒道と釈教と諍論して定めがたかりき。漸されども、仏法ようやく弘通せしかば、小大・権実の諍論いできたる。されども、いたくの相違もなかりしに、漢土に仏法渡って六百年、玄宗皇帝の御宇、善無畏・金剛智・不空の三三蔵、月氏より入

り給いて後、真言宗を立てしかば、華厳・法華等の諸宗はもっての外にくだされき。上一人より下万民に至るまで、「真言には法華経は雲泥なり」と思いしなり。その後、徳宗皇帝の御宇に、妙楽大師と申す人、「真言は法華経にあながちに劣りたり」とおぼしめししかども、甚だしくは立つることもなかりしかば、法華・真言の勝劣を弁える人なし。

日本国は人王三十代欽明の御時、百済国より仏法始めて渡りたりしかども、始めは神と仏との諍論こわくして三十余年はすぎにき。

三十四代推古天皇の御宇に、聖徳太子始めて仏法を弘通し給う。恵灌・観勒の二りの上人、百済国よりわたりて三論宗を弘め、孝徳の御宇に、道昭、禅宗をわたす。天武の御宇に、新羅国の智鳳、法相宗をわたす。第四十四代元正天皇の御宇に、善無畏三蔵、大日経をわたす。しかれども弘めず。聖武の御宇に、審祥大徳・良弁僧正等、華厳宗をわたす。人王四十六代孝謙天皇の御宇に、唐代の鑑真和尚、律宗と法華宗をわたす。律をば弘めず、法華をば弘めず。

第五十代桓武天皇の御宇に、延暦二十三年七月、伝教大師、勅を給わって漢土に渡り、妙楽大師の御弟子道邃・行満に値い奉って法華宗の定・慧を伝え、道宣律師に菩薩戒を伝え、順暁和尚と申せし人に真言の秘教を習い伝えて、日本国に帰り給いて「真言・法華の勝劣は、漢土の師のおしえによっては定め難し」と思しめしければ、ここにして、大日経と法華経と、彼の釈とこの釈とを引き並べて勝劣を判じ給いしに、「大日経は法華経に劣りたるのみならず、大日経の疏は天台の心をとりて我が宗に入れたりけり」と勘え給えり。

その後、弘法大師、真言経を下されけることを遺恨とや思しめしけん、真言宗を立てんとたばかりて、「法華経は大日経に劣るのみならず、華厳経に劣れり」と云々。あわれ、慈覚・智証、叡山・園城にこの義をゆるさずば、弘法大師の僻見は日本国にひろまらざらまし。彼の両大師、華厳・法華の勝劣をばゆるさねど、法華・真言の勝劣をば永く弘法大師に同心せしかば、存外に本の伝教大師の大怨敵となる。

その後、日本国の諸碩徳等、各智慧高くあるなれども、彼の三大師にこえざれば、今に四百余年の間、日本一同に「真言は法華経に勝れけり」と定め畢わんぬ。たまたま天台宗を習える人々も、真言は法華に及ばざるの由存せども、天台の座主・御室等の高貴におそれて申すことなし。あるはまた、その義をもわきまえぬかのゆえに、辛くして同の義をいえば、一向真言師は、「さること、おもいもよらず」とわらうなり。

しかれば、日本国中に数十万の寺社あり。皆、真言宗なり。たまたま法華宗を並ぶとも、真言は主のごとく、法華は所従のごとくなり。もしは兼学の人も、心中は一同に真言なり。座主・長吏・検校・別当、一向に真言たるうえ、上に好むところ下皆したがうことなれば、一人ももれず真言師なり。されば、日本国、あるいは口には法華経最第一とはよめども、心は最第二・最第三なり。あるいは身・口・意共に最第二・三なり。三業相応して最第一と読める法華経の行者は、四百余年が間一人もなし。まして「能持此経」の行者は、あるべしともおぼえず。「如来現在・猶多怨嫉・況滅度後」の衆生は、上一人より下万民にいたるまで法華経の大怨敵なり。

しかるに、日蓮は東海道十五箇国の内、第十二に相当たる安房国長狭郡東条郷片海の海人が子なり。生年十二、同じき郷の内、清澄寺と申す山にまかり登り住しき。遠国なるうえ、寺とはなづけて候えども、修学の人なし。しかるに、随分諸国を修行して学問し候いしほどに、我が身は不肖なり、人はおしえず。十宗の元起・勝劣たやすくわきまえがたきところに、たまたま仏菩薩に祈請して、一切の経論を勘えて十宗に合わせたるに、倶舎宗は、浅近なれども一分は小乗経に相当するに似たり。成実宗は、大小兼雑して謬誤あり。律宗は、本は小乗、中比は大乗、今は一向に大乗宗とおもえり。また伝教大師の律宗あり。別に習うことなり。

法相宗は、源、権大乗経の中の浅近の法門にてありけるが、次第に増長して権実と並び、結句は彼の宗々を打ち破らんと存ぜり。譬えば、日本国の将軍、将門・純友等のごとし。下に居て上を破る。三論宗もまた権大乗の空の一分なり。これも「我は実大乗」とおもえり。

華厳宗は、また権大乗と云いながら余宗にまされり。譬えば、摂政・関白のごとし。しかれども、法華経を敵となして立つる宗なる故に、臣下の身をもって大王に順ぜんとするがごとし。

浄土宗と申すも、権大乗の一分なれども、善導・法然がたばかりかしこくして、諸経をば上げ観経をば下し、正像の機をば上げ末法の機をば下して、末法の機に相叶える念仏を取り出だして機をもって経を打ち、一代の聖教を失って念仏の一門を立てたり。譬えば、心かしこくして身は卑しき者が、身を上げて心はかなきものを敬って、賢人をうしなうがごとし。

禅宗と申すは、「一代聖教の外に真実の法有り」と云々。譬えば、おやを殺して子を

せる所従の、しかもその位に即けるがごとし。

真言宗と申すは、一向に大妄語にて候が、深くその根源を隠かくして候えば、浅機の人顕わしがたし。一向に誑惑せられて数年を経て候。まず天竺に真言宗と申す宗なし。しかるに「有り」と云々。その証拠を尋ぬべきなり。詮ずるところ、大日経ここにわたれり。法華経に引き向かえてその勝劣これを見るところに、大日経は法華経より七重下劣の経なり。証拠は、彼の経、この経に分明なり〈ここにこれを引かず〉。しかるを、あるいは云わく「法華経に三重の主君」、あるいは「二重の主君なり」と云々。もっての外の大僻見なり。譬えば、劉聡が下劣の身として愍帝に馬の口をとらせ、趙高が民の身として横しまに帝位につきしがごとし。また彼の天竺の大慢婆羅門が釈尊を床として坐せしがごとし。漢土にも知る人なく、日本にも、あやしめずして、すでに四百余年をおくれり。

かくのごとく仏法の邪正乱れしかば、王法も漸く尽きぬ。結句は、この国、他国にやぶられて亡国となるべきなり。このこと日蓮独り勘え知れる故に、仏法のため、王法のため、諸経の要文を集めて一巻の書を造る。よって故最明寺入道殿に奉る。立正安国論と名づけき。その書にくわしく申したれども、愚人は知り難し。詮ずるところ、現証を引いて申すべし。

そもそも人王八十二代隠岐法皇と申す王有しき。去ぬる承久三年太歳辛巳五月十五日、伊賀太郎判官光季を打ち捕りまします。鎌倉の義時をうち給わんとての門出なり。やがて五畿七道の兵を召して、相州鎌倉の権大夫義時を打ち給わんとし給うところに、還って義時にまけ給いぬ。結句、我が身は隠岐国に流ながされ、太子二人は佐渡国・阿波国にながされ給う。公卿七人はたちまちに頸をはねら

れてき。これはいかにとしてまけ給いけるぞ。国王の身として民のごとくなる義時を打ち給わんは、鷹の雉をとり、猫の鼠を食むにてこそあるべけれ。これは猫のねずみにくらわれ、鷹の雉にとられたるようなり。

しかのみならず、調伏、力を尽くせり。いわゆる、天台座主・慈円僧正、真言の長者、仁和寺の御室、園城寺の長吏、総じて七大寺・十五大寺、智慧・戒行は日月のごとく、秘法は弘法・慈覚等の三大師の心中の深密の大法、十五壇の秘法なり。五月十九日より六月の十四日にいたるまで、あせをながし、なずきをくだきて行いき。

最後には、御室、紫宸殿にして、日本国にわたりていまだ三度までも行わぬ大法、六月八日始めてこれを行うほどに、同じき十四日に、関東の兵軍、宇治・勢多をおしわたして洛陽に打ち入って、三院を生け取り奉って、九重に火を放って一時に焼失す。三院をば三国へ流罪し奉りぬ。また公卿七人は、たちまちに頸をきる。しかのみならず、御室の御所に押し入って、最愛の弟子の小児・勢多伽と申せしをせめいだして、終に頸をきりにき。御室堪えずして思い死に給い畢わんぬ。母も死に、童も死ぬ。すべてこのいのりをたのみし人、いく千万ということをしらず死ににき。たまたまいきたるもかいなし。御室、祈りを始め給いし六月八日より、同じき十四日まで、なかをかぞうれば、七日に満じける日なり。

この十五壇の法と申すは、一字金輪・四天王・不動・大威徳・転法輪・如意輪・愛染王・仏眼・六字・金剛童子・尊星王・太元・守護経等の大法なり。この法の詮は、国敵・王敵となる者を降伏して、命を

召し取って、その魂を密厳浄土へつかわすという法なり。その行者の人々もまた軽からず。天台座主・慈円、東寺、御室、三井の常住院の僧正等の四十一人、ならびに伴僧等三百余人なり云々。

法といい、行者といい、また代も上代なり。いかにとしてまけ給いけるぞ。たといかつことこそなくとも、即時にまけおわりて、かかるはじにあいたりけること、いかなるゆえということを、余人いまだしらず。国主として民を討たんこと、鷹の鳥をとらんがごとし。たといまけ給うとも、一年二年、十年二十年もささうべきぞかし。五月十五日におこりて六月十四日にまけ給いぬ。わずかに三十余日なり。権大夫殿はこのこと兼ねてしらねば、祈禱もなし、かまえもなし。

しかるに、日蓮、小智をもって勘えたるに、その故あり。いわゆる彼の真言の邪法の故なり。僻事は、一人なれども万国のわずらいなり。一人として行ずとも、一国二国やぶれぬべし。いわんや三百余人をや。国主とともに法華経の大怨敵となりぬ。いかでかほろびざらん。かかる大悪法、としをへて、ようやく関東におち下って、諸堂の別当・供僧となり、連々と行ぜり。本より辺域の武士なれば、教法の邪正をば知らず。ただ三宝をばあがむべきこととばかり思うゆえに、自然としてこれを用いきたりて、ようやく年数を経るほどに、今他国のせめをこうむって、この国すでにほろびなんとす。関東八箇国のみならず、叡山・東寺・園城・七寺等の座主・別当、皆、関東の御はからいとなりぬるゆえに、隠岐法皇のごとく、大悪法の檀那と成り定まり給いぬるなり。

国主となることは、大小、皆、梵王・帝釈・日月・四天の御はからいなり。法華経の怨敵となり定まり給わば、たちまちに治罰すべきよしを誓い給えり。したがって、人王八十一代安徳天皇に太政入

道の一門与力して、兵衛佐頼朝を調伏せんがために、叡山を氏寺と定め、山王を氏神とたのみしかども、安徳は西海に沈み、明雲は義仲に殺さる。一門皆一時にほろび畢わんぬ。第二度なり。今度は第三度にあたるなり。

日蓮がいさめを御用いなくて、真言の悪法をもって大蒙古を調伏せられれば、日本国還って調伏せられなん。「還って本人に著きなん」と説けりと申すなり。しからば則ち、罰をもって利生を思うに、法華経にすぎたる仏になる大道はなかるべきなり。現世の祈禱は、兵衛佐殿、法華経を読誦する現証なり。

この道理を存ぜることは、父母と師匠との御恩なれば、父母はすでに過去し給い畢わんぬ。故道善御房は師匠にておわしましかども、法華経の故に地頭におそれ給いて、心中には不便とおぼしつらめども、外にはかたきのようににくみ給いぬ。後にはすこし信じ給いたるようにきこえしかども、臨終にはいかにやおわしけん、おぼつかなし。地獄までは、よもおわせじ。また生死をはなるることはあるべしともおぼえず。中有にやただよいますらんとなげかし。

貴辺は、地頭のいかりし時、義城房とともに清澄寺を出でておわせし人なれば、何となくとも、これを法華経の御奉公とおぼしめして、生死をはなれさせ給うべし。

この御本尊は、世尊説きおかせ給いて後、二千二百三十余年が間、一閻浮提の内にいまだひろめたる人候わず。漢土の天台、日本の伝教、ほぼしろしめして、いささかひろめさせ給わず。当時こそひろまらせ給うべき時にあたりて候え。経には上行・無辺行等こそ出でてひろめさせ給うべしと見えて

候えども、いまだ見えさせ給わず。日蓮はその人に候わねども、ほぼ心得て候えば、地涌の菩薩の出でさせ給うまでの口ずさみにあらあら申して、況滅度後のほこさきに当たり候なり。願わくは、この功徳をもって、父母と師匠と一切衆生に回向し奉らんと祈請仕り候。

その旨をしらせまいらせんがために、御不審を書きおくりまいらせ候に、他事をすてて、この御本尊の御前にして、一向に後世をもいのらせ給い候え。またこれより申さんと存じ候。いかにも御房たち、はからい申させ給え。

日蓮　花押